

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第237集

都城市所在

お お と し

大 年 遺 跡

県道飯野松山都城線(都城志布志道路)道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

2 0 1 6

宮崎県埋蔵文化財センター

都城市所在

大年遺跡

県道飯野松山都城線(都城志布志道路)梅北工区道路整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 1



2016

宮崎県埋蔵文化財センター



1 調査地上空から望む霧島連山（南東から）



1 金御岳山頂からみた都城盆地と大年遺跡



2 大年遺跡南部調査区下層確認トレンチ掘削状況及び土層堆積状況



1 大年遺跡北部調査区（第1次調査区）全景（写真上が北）



1 大牟遺跡南部調査区（第2次調査区）全景（モザイク合成写真、写真上が北）



1 鬼界アカホヤ火山灰下位の土層堆積状況（遺跡北部）



2 遺跡北部4層上面での遺構検出状況（番号は竪穴建物跡の番号。南から）



1 竪穴建物跡2埋土上層(基本土層3層)の遺物出土状況(西から)



2 竪穴建物跡5北西部遺物出土状況(北から)



1 駐状遺構1土層堆積状況(南から)



2 道路状遺構1の土層堆積状況(南から)



1 高坏 (図 79-364) 脚部の焼成後スリップの状況 (スリップが乗って黒斑が薄くなっている。)



2 竪穴建物跡9出土台石 (図 97-621) の鉄錆付着状況

序

宮崎県教育委員会では、県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴い、都城市梅北町に所在する大年遺跡の発掘調査を平成24・25年度に実施しました。本書は、その発掘調査の記録を掲載した報告書です。

今回報告する大年遺跡では、弥生時代から古墳時代の集落跡のほか、文明3（1471）年に桜島が噴火した際に噴出し降り積もった火山灰の下から、道や畠跡等多くの遺構が見つかりました。また、旧石器時代以降の多様な遺物が出土しており、およそ15,000年以上前から断続的にこの周辺で人々が活動していたことも明らかとなりました。その中で、道は古代から使用されていた可能性が考えられており、遺跡のあった場所が1,000年以上にわたって道として使用されていたことが考えられるなど、多くの調査成果を得ることができました。

今回の調査で得られたこのような多くの成果は、今後、当地域の歴史を解明する上で、非常に貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたって、御協力いただいた地元および関係諸機関の方々へ心より厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 岩切隆志

例 言

- 1 本書は県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎県都城市梅北町に所在する大年遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施し、第1次調査を平成24（2012）年9月12日から平成25（2013）年3月22日まで、第2次調査を平成25（2013）年5月7日から平成26（2014）年1月29日まで行った。
- 3 発掘調査は加藤徹、宗廣睦子、津曲健、竹下昭彦が担当した。現地調査における図面作成および写真撮影は調査担当者が分担して行った。
- 4 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については、整理作業員の協力を得て行った。
- 5 空中写真撮影業務は有限会社フジタ、有限会社スカイサーベイ九州に、基準点測量等の測量業務は株式会社平和総合技研、株式会社旭総合コンサルタントに、自然科学分析は古環境研究所にそれぞれ委託した。
- 6 実測で使用した測量基準は、国土座標平面直角座標系第Ⅱ系（世界測地系）および東京湾海抜（T.P.）で、方位は座標北を指す。また、国土地理院発行地形図は真北を指す。
- 7 本書で使用した土層・土器等の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳（2008年度版）』によるが、色調記号の記載がない場合はその限りではない。
- 8 石器石材については当センター赤崎広志主幹に、陶磁器については宮崎県立図書館福田泰典主幹に助言をいただいたが、誤りがあればそれは担当者の不学によるものである。
- 8 調査時の名称と報告書での名称等の対応は、附表の対応表に記載している。
- 9 実測時の遺構・遺物の形状等を浄図した図により細かく反映させる目的で、トレース時の線端が実測線に対応するように浄図を行った。なお、実測線とトレース線の対応は下図の通りである。ただし、附図については縮尺の都合上、下図の限りではない部分もある。



- 10 本書の執筆および編集は加藤が行った。
- 11 出土遺物およびその他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

序 凡例 目次

第1章	調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	調査の経過	3
第2章	遺跡の立地と歴史的環境	5
第1節	遺跡の地理的環境	5
第2節	遺跡周辺の歴史的環境	7
第3章	調査の成果	11
第1節	調査の方法と層序	11
第2節	検出遺構	14
第3節	出土遺物	66
第4章	遺構と遺物の検討	107
第1節	旧石器時代～縄文時代早期の遺物について	107
第2節	縄文時代後期～晩期の遺構・遺物について	109
第3節	弥生時代～古墳時代の遺構・遺物について	114
第4節	古代～中世の遺構について	123
第5章	総括	131
附編	自然科学分析結果	133
第1節	自然科学分析について	133
第2節	植物珪酸体分析	133
第3節	花粉分析	137
第4節	炭化種実同定	141
第5節	放射性炭素年代測定	142
第6節	蛍光X線分析（黒曜石の産地推定）	144
第7節	溝状遺構底面に堆積した鉱物粒についての観察	146

挿図目次

図1	大年遺跡調査地と周辺地形	6
図2	大年遺跡周辺の主要遺跡分布図	8
図3	大年遺跡グリッドおよび鬼界アカホヤ火山灰下層確認トレンチ設定状況	11
図4	大年遺跡基本層序概略図	13
図5	大年遺跡南部調査区土層断面図	14
図6	土坑1・2平面・断面図	15
図7	竪穴建物跡1平面・土層断面図	16
図8	竪穴建物跡1出土遺物	16
図9	竪穴建物跡2平面・土層断面図	17
図10	竪穴建物跡2出土遺物	18
図11	竪穴建物跡3平面・土層断面図	19
図12	竪穴建物跡3出土遺物	19
図13	竪穴建物跡4平面・土層断面図	20
図14	竪穴建物跡5平面・土層断面図	21
図15	竪穴建物跡5出土遺物	21
図16	竪穴建物跡6・竪穴状遺構2平面・土層断面図	22
図17	竪穴建物跡6土層断面図	23
図18	竪穴建物跡6出土遺物	24
図19	竪穴建物跡7平面・土層断面図	25
図20	竪穴建物跡7出土遺物	26
図21	竪穴建物跡8出土遺物	26
図22	竪穴建物跡8平面・土層断面図	26
図23	竪穴建物跡9平面・土層断面図	27
図24	竪穴建物跡9出土遺物	28
図25	竪穴建物跡10平面・土層断面図	29
図26	竪穴建物跡10出土遺物	29
図27	竪穴状遺構1平面・断面図	30
図28	竪穴状遺構1出土遺物	30
図29	土坑3平面・断面図	31
図30	土坑4・5平面・断面図	32
図31	北部調査区4層内炭化種実出土状況1	33
図32	北部調査区4層内炭化種実出土状況2	34
図33	掘立柱建物跡1平面・断面図	35
図34	炭集中土坑平面・土層断面図	36
図35	北部調査区1層下面桜島3テフラ残存状況	37
図36	北部調査区1下面付近土層断面図	38

図 37	小溝状遺構平面・断面図 1	39
図 38	小溝状遺構平面・断面図 2	40
図 39	畦状遺構 1 平面図 1	42
図 40	畦状遺構 1 平面図 2	43
図 41	畦状遺構 1 平面図 3	44
図 42	畦状遺構 1 断面図	45
図 43	畦状遺構 2 平面図	46
図 44	畦状遺構 3 平面図	47
図 45	畦状遺構 2・3 断面図	48
図 46	道路状遺構平面図 1 (桜島 3 テフラ除去段階 1)	50
図 47	道路状遺構平面図 2 (桜島 3 テフラ除去段階 2)	51
図 48	道路状遺構平面図 3 (桜島 3 テフラ除去段階 3)	52
図 49	道路状遺構平面図 4 (桜島 3 テフラ除去段階 4)	53
図 50	道路状遺構平面図 5 (完掘段階 1)	55
図 51	道路状遺構平面図 6 (完掘段階 2)	56
図 52	道路状遺構平面図 7 (完掘段階 3)	57
図 53	道路状遺構土層断面図 1	58
図 54	道路状遺構土層断面図 2	59
図 55	道路状遺構の変化	60
図 56	溝状遺構平面図 1	61
図 57	溝状遺構平面図 2	62
図 58	溝状遺構平面図 3	63
図 59	溝状遺構土層断面図	64
図 60	掘立柱建物跡 2 平面・土層断面図	65
図 61	土器実測図 1 (縄文土器 1)	67
図 62	土器実測図 2 (縄文土器 2)	68
図 63	土器実測図 3 (縄文土器 3)	69
図 64	土器実測図 4 (縄文土器 4)	70
図 65	土器実測図 5 (縄文土器 5)	71
図 66	土器実測図 6 (縄文土器 6)	72
図 67	土器実測図 7 (弥生土器 1)	73
図 68	土器実測図 8 (弥生土器 2)	74
図 69	土器実測図 9 (弥生土器 3)	75
図 70	土器実測図 10 (弥生土器 4)	76
図 71	土器実測図 11 (土師器 1)	77
図 72	土器実測図 12 (土師器 2)	78
図 73	土器実測図 13 (土師器 3)	79
図 74	土器実測図 14 (土師器 4)	80
図 75	土器実測図 15 (土師器 5)	81

図 76	土器実測図 16 (弥生土器・土師器底部 1).....	83
図 77	土器実測図 17 (弥生土器・土師器底部 2).....	84
図 78	土器実測図 18 (土師器 6).....	85
図 79	土器実測図 19 (土師器 7).....	86
図 80	土器実測図 20 (土師器 8).....	87
図 81	土器実測図 21 (土師器 9).....	88
図 82	土器実測図 22 (土師器 10).....	88
図 83	土器ミニチュア品・土製品実測図.....	89
図 84	土製勾玉実測図.....	90
図 85	土師質土器・磁器実測図.....	91
図 86	石器実測図 1 (旧石器).....	92
図 87	石器実測図 2 (打製石鏃・小型石器).....	93
図 88	石器実測図 3 (磨製石鏃・磨製石器片).....	94
図 89	石器実測図 4 (打製石斧).....	95
図 90	石器実測図 5 (磨製石斧・横刃型石器).....	96
図 91	石器実測図 6 (磨石・蔽石等 1).....	97
図 92	石器実測図 7 (磨石・蔽石等 2).....	98
図 93	石器実測図 8 (磨石・蔽石等 3).....	99
図 94	石器実測図 9 (台石・大型礮等 1).....	100
図 95	石器実測図 10 (台石・大型礮等 2).....	101
図 96	石器実測図 11 (台石・大型礮等 3).....	102
図 97	石器実測図 12 (台石・大型礮等 4).....	103
図 98	石器実測図 15 (石製品).....	104
図 99	石器実測図 14 (砥石).....	105
図 100	石器実測図 15 (石製品).....	105
図 101	鉄器実測図.....	106
図 102	グリッド別にみた黒曜石剥片類の出土状況.....	111
図 103	Renfrew による交易モデル.....	113
図 104	大岩田上村遺跡の竪穴建物跡.....	114
図 105	平峰遺跡・大年遺跡の土器からみた土師器諸要素の変遷想定図.....	117
図 106	熊野原遺跡の間仕切付建物跡.....	119
図 107	大年遺跡の竪穴建物跡における埋土堆積状況模式図.....	120
図 108	身部に凹みをもつ磨製石鏃の諸例.....	122
図 109	桜島 3 テフラが堆積する溝状遺構等の諸例 1.....	124
図 110	桜島 3 テフラが堆積する溝状遺構等の諸例 2.....	125
図 111	植物珪酸体ダイアグラム.....	135
図 112	花粉ダイアグラム.....	139
図 113	暦年校正結果.....	144
図 114	黒曜石産地推定判別図.....	145

写真目次

写真1	調査地からみた桜島の噴煙	5
写真2	植物珪酸体写真	149
写真3	花粉写真	150
写真4	炭化種実同定試料写真	151
写真5	道路状遺構底面堆積物サンプル写真	151

表目次

表1	都城市内の旧石器時代～縄文時代早期の主な遺跡	109
表2	小林市教育委員会による黒曜石産地分析の結果	113
表3	都城市内の縄文時代後期・晩期の竪穴建物跡の諸例	114
表4	身部に凹みを有する磨製石鐮の諸例	122
表5	桜島3テフラが堆積した溝状遺構等の諸例	126
表6	植物珪酸体分析結果	134
表7	花粉分析結果	138
表8	種実同定結果	141
表9	放射性炭素年代測定分析試料一覧	143
表10	放射性炭素年代測定分析結果	143
表11	黒曜石蛍光X線分析結果一覧	145
表12	溝状遺構底面堆積物の顕微鏡観察結果	146
表13	テフラ略号一覧	147
附表1	報告書掲載名称と注記略号等の対応表	153
附表2	観察表凡例	154
附表3	縄文土器注記および取上番号一覧	154
附表4	土師器・弥生土器観察表	155
附表5	土製品注記および取上番号一覧	162
附表6	石器観察表	162
附表7	鉄器観察表	164
附表8	掲載遺物に関する取り上げ座標一覧	165

図版目次

- 巻頭図版 1 調査地上空から望む霧島連山
- 巻頭図版 2 1 金御岳山頂からみた都城盆地と大年遺跡
2 大年遺跡南部調査区下層確認トレンチ掘削状況および土層堆積状況
- 巻頭図版 3 大年遺跡北部調査区（第1次調査区）全景
- 巻頭図版 4 大年遺跡南部調査区（第2次調査区）全景
- 巻頭図版 5 1 鬼界アカホヤ火山灰下位の土層堆積状況
2 遺跡北部4層上面での遺構検出状況
- 巻頭図版 6 1 竪穴建物跡2埋土上層（基本土層3層）内の遺物出土状況
2 竪穴建物5北西部遺物出土状況
- 巻頭図版 7 1 畦状遺構1土層堆積状況
2 道路状遺構1の土層堆積状況
- 巻頭図版 8 1 高坏脚部（図79-364）の焼成後スリップの状況
2 竪穴建物9出土台石（図97-621）の鉄銹付着状況
- 写真図版 1 1 旧石器剥片出土状況
2 竪穴建物跡1検出状況
3 竪穴建物跡1床面検出状況
- 写真図版 2 1 竪穴建物跡2床面検出状況
2 竪穴建物跡3床面検出状況
3 竪穴建物跡4床面検出状況
- 写真図版 3 1 竪穴建物跡5床面検出状況
2 竪穴建物跡6床面検出状況
3 竪穴建物跡7床面検出状況
- 写真図版 4 1 竪穴建物跡8床面検出状況
2 竪穴建物跡9床面検出状況
3 竪穴建物跡10床面検出状況
- 写真図版 5 1 竪穴状遺構1床面検出状況
2 竪穴建物跡2床面検出状況
3 土坑2内壺出土状況
- 写真図版 6 1 土坑1完掘状況
2 竪穴建物跡1突出壁内遺物出土状況
3 竪穴建物跡1ピット上礫出土状況
4 竪穴建物跡1完掘状況
5 竪穴建物跡2完掘状況
6 竪穴建物跡3遺物出土状況
7 竪穴建物跡4完掘状況
8 竪穴建物跡5遺物出土状況
- 写真図版 7 1 竪穴建物跡5北西部遺物出土状況
2 竪穴建物跡5完掘状況
3 竪穴建物跡6東側灰状物質堆積状況
4 竪穴建物跡6遺物出土状況
5 竪穴建物跡6灰色粘土検出状況
6 竪穴建物跡6完掘状況
7 竪穴建物跡8遺物出土状況
8 竪穴建物跡8完掘状況
- 写真図版 8 1 竪穴建物跡9完掘状況
2 竪穴建物跡10埋土中遺物出土状況
3 竪穴建物跡10完掘状況
4 竪穴状遺構1遺物出土状況
5 竪穴状遺構1完掘状況
6 竪穴状遺構2完掘状況
7 土坑3内壺（190）出土状況
8 土坑3完掘状況

写真図版 9	1 遺跡北部調査区桜島3テフラ検出状況	
	2 掘立柱建物跡1柱穴完掘状況	3 畦状遺構1北端部掘削状況
写真図版 10	1 道路状遺構1底面および畦状遺構2検出状況	
	2 道路上遺構1内白磁(491)出土状況	
	3 道路状遺構1底面の「波板状凹凸面」完掘状況	
写真図版 11	1 炭集中土坑検出状況	2 炭集中土坑土層断面
	3 掘立柱建物跡1炉跡断面	4 掘立柱建物跡1柱穴断面
	5 畦状遺構1調査風景	6 溝状遺構5完掘状況
写真図版 12	1 小溝列完掘状況	2 道路状遺構1北西部の土端状部掘削状況
	3 道路状遺構1硬化面検出状況	4 「波板状凹凸面」検出状況
	5 道路状遺構1検出状況	6 道路状遺構1完掘状況
写真図版 13	1 縄文土器1	2 縄文土器2
	3 縄文土器3	
写真図版 14	1 縄文土器4	2 縄文土器5
	3 縄文土器6	
写真図版 15	1 縄文土器7	2 縄文土器8
	3 縄文土器9	
写真図版 16	1 縄文土器10	2 縄文土器11
	3 縄文土器12	
写真図版 17	1 縄文土器13	2 縄文土器14
	3 縄文土器15	
写真図版 18	1 弥生土器1	2 弥生土器2
	3 弥生土器3	
写真図版 19	1 弥生土器4	2 弥生土器5
	3 弥生土器6	
写真図版 20	1 弥生土器7	2 弥生土器8
	3 弥生土器9	
写真図版 21	縄文土器16・弥生土器10	
写真図版 22	弥生土器11・土師器1	
写真図版 23	土師器2	
写真図版 24	土師器3	
写真図版 25	土師器4	
写真図版 26	土師器5	
写真図版 27	土師器6	
写真図版 28	土師器7	
写真図版 29	土師器8	
写真図版 30	土師器9	
写真図版 31	1 土師器10	2 土師器11
	3 土師器12	

写真図版 32	1 土師器 13 3 土師器 15	2 土師器 14
写真図版 33	1 土師器 16 3 土師器 18	2 土師器 17
写真図版 34	1 土師器 19 3 土師器 21	2 土師器 20
写真図版 35	1 弥生土器・土師器底部 1 3 弥生土器・土師器底部 3	2 弥生土器・土師器底部 2
写真図版 36	1 弥生土器・土師器底部 4 3 土師器 22	2 弥生土器土師器底部 5
写真図版 37	1 土師器 23 3 土師器 25	2 土師器 24
写真図版 38	1 土師器 26 3 土師器 28	2 土師器 27
写真図版 39	1 土師器 29 3 土師質土器	2 ミニチュア土器・土製品
写真図版 40	1 白磁 1 (内面) 3 青磁・青花	2 白磁 2 (外面)
写真図版 41	1 石器 1 3 石器 3	2 石器 2
写真図版 42	1 石器 4 3 石器 6	2 石器 5
写真図版 43	1 石器 7 3 石器 9	2 石器 8
写真図版 44	1 石器 10 3 青銅器・鉄器	2 石器 11
写真図版 45	石器 12	
写真図版 46	石器 13	

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

都城志布志道路は九州縦貫自動車道宮崎線の都城 I.C. を起点として、鹿児島県曽於市を經由して同県志布志市へと至る、総延長およそ 40km として計画されている地域高規格道路である。志布志港は九州唯一の中核国際港湾であるとともに、港での取り扱い貨物量は年々増加している。道路の建設により、このような港湾と九州縦貫道宮崎線を接続する広域流通ネットワークとして、日本の中でも屈指の農畜産業が盛んである都市や曽於市への飼料や生産物等の物流における高速化および効率化が期待されている。また、このような経済的要因だけでなく、災害時に強いことや、救急医療サービスの拡充の効果も期待されているなど、都城・大隅地域にとって重要な道路として位置づけられており早期の開通が地元住民からも期待されている。

都城志布志道路の建設は、平成 6 年 12 月に路線の計画が始まり、平成 9 年から埋蔵文化財の分布状況の紹介が行われた。都城志布志道路は、五十町 I.C. を境として、北側を国土交通省宮崎河川国道事務所が、南側を宮崎県が整備を行う区間となっており、両事務所とそれぞれの工区に応じて協議を行ってきた。その協議に基づいた文化財課の確認調査などを経て、路線内ではこれまでに平田遺跡（平成 15～16 年度）、筆無遺跡（平成 15～17 年度）、諸麦遺跡（平成 17 年度）、梅北針谷遺跡（平成 20 年）、働女木遺跡（平成 20～21 年）、平峰遺跡（平成 19～21 年）などの遺跡の発掘調査が行われ、記録保存の処置が施されるとともに、報告書の刊行まで終了している。

今回発掘調査が行われた大年遺跡は、都城志布志道路の梅北 I.C. から金御岳 I.C. を結ぶ梅北工区に位置している。梅北工区は総延長およそ 2.5km で、埋蔵文化財の分布状況についての照会が行われた結果、工区内の大部分に周知の埋蔵文化財包蔵地（6 遺跡）が含まれていることが明らかとなった。その後、用地買収済みの面積が約 8 割を上回ってきたことを受けて、平成 24 年 4 月から現地を確認しながらの協議を都城土木事務所と行ってきた。協議の結果、工事によりもともと広範囲に影響を受けると考えられ、かつ用地買収の進捗が著しい大年遺跡について、他の遺跡に先行して確認調査を実施した。大年遺跡の確認調査は遺跡の範囲とされている台地上の畑地および近接する浸食谷内の水田を対象とし、平成 24 年 5 月～7 月に断続的に実施した。確認調査の結果、水田部分では遺構・遺物は確認されなかったが、台地上において堅穴建物跡や溝状遺構と考えられる遺構や、多くの遺物が確認された。これらの遺構・遺物が確認された台地上の 7,400 m²について発掘調査を実施し、記録保存処置を講ずることとなった。

以上のような確認調査の結果を受けて、都城土木事務所からの発掘調査依頼により、宮崎県教育委員会が主体となって、埋蔵文化財センターが大年遺跡の発掘調査を行った。調査は、第 1 次調査として平成 24 年 9 月～平成 25 年 3 月に遺跡の北部 3,000 m²を、第 2 次調査として平成 25 年 5 月～平成 26 年 1 月に遺跡南部 4,400 m²を対象として行った。

第2節 調査の組織

平成 24 年度 発掘調査

所長	北郷泰道
副所長	佐々木真司

総務課長		坂上恒俊
総務課総務担当リーダー	副主幹	高園寿恵
調査第二課長		永友良典
調査第二課調査第三担当リーダー	副主幹	吉本正典
調査第二課調査第三担当	主事	加藤 徹 (調査担当)
調査第二課調査第三担当	主事	宗廣睦子 (調査担当)
調査第二課調査第四担当	主査	津曲 健 (調査担当)

(発掘作業員)

有村三雄、伊鹿倉康子、今村フミ子、岩切由紀子、上野博、柴留利盛、太山義治、上坂春雄、川口廣實、川崎カズ子、川崎文夫、河野露子、坂口米藏、庄司邦芳、庄司紀子、平良廣、高尾和子、高野正文、谷口清二、中条道安、原口昭一、平川俊充、平川洋子、蛭幸田勇、福岡咲子、福重光夫、前畑篤子、宮田エイ子、脇田節子、渡司裕美子、和田義仁

平成 25 年度 発掘調査・整理作業

所 長		向井大藏
副所長		長津宗重
総務課長		坂上恒俊
総務課総務担当リーダー	副主幹	高園寿恵
調査第二課長		菅付和樹
調査第二課調査第三担当リーダー	副主幹	吉本正典
調査第二課調査第三担当	主事	加藤 徹 (調査・整理作業担当)
調査第二課調査第三担当	主査	竹下昭彦 (調査担当)

(発掘作業員)

飯干英子、伊地知照造、岩切由紀子、岩松りき子、岩本泉、大草廣美、大峯シゲ子、岡留一良、押川純久、尾上善則、金田八郎、鎌田義勝、上坂月夫、上森勲、亀石幸枝、川崎文夫、木上清二、久保幸一、久美田勇一、黒木みどり、境山茂男、坂留保一、佐田健治、下野俊輔、庄司邦芳、竹之下幹雄、田中政和、段秀敏、鶴田真司、鶴田洋司、寺師真一、寺師康博、富山善明、豊丸友紀、中尾康幸、中条道安、長友祐子、中村貴史、西村東、西広志、野崎憲一、栢和人、畑中由美子、羽根田拓洋、浜田正則、日高愛子、平川俊光、平川美奈子、福岡咲子、藤元涼、船越幸一、松崎金廣、松崎順子、松崎昇司、丸山幹雄、溝添節男、安摩圭一郎、山口護、山田スミ子、山田利恵子、山田芳治

(整理作業員)

河野早苗、小松陽子、菅原尚子、高山シノブ、手銭富佐江、橋口ゆり子、松岡れい子

平成 26 年度 整理作業・報告書作成

所 長		岩切隆志
副所長兼総務課長		長津宗重
総務課総務担当リーダー	副主幹	安藤忠洋
調査課長		菅付和樹

調査課調査第一担当リーダー	副主幹	松林豊樹
調査課調査第一担当	主任主事	加藤 徹 (整理作業担当)

(整理作業員)

小松陽子、武野美智子、田村広子、西田久美子、畑中美穂、久嶋利香、福田理恵子、馬竈直美、松岡れい子、吉住由美子

平成 27 年度 整理作業・報告書作成

所 長		岩切隆志
副所長兼調査課長		菅付和樹
総務課長		上谷政隆
総務課総務担当リーダー	副主幹	安藤忠洋
調査課調査第一担当リーダー	主幹	松林豊樹
調査課調査第一担当	主任主事	加藤 徹 (報告書担当)

(整理作業員)

高野良文、高山千代美、松岡れい子

事業調整

平成 24 ～ 25 年度	宮崎県教育庁文化財課	主査	堀田孝博
平成 26 年度	宮崎県教育庁文化財課	主査	二宮満夫
平成 27 年度	宮崎県教育庁文化財課	主査	松本 茂

第 3 節 調査の経過

(1) 発掘調査等の経過

第 1 次調査

平成 24 年 9 月 12 日～14 日まで、重機により表土および客土と考えられる 1 層の除去を行った。その後、9 月 21 日より発掘作業員を雇用し人力による掘削を行う。

桜島 3 テフラを検出した後、10 月 2 日に第 1 回目の空中写真撮影を行い、桜島 3 テフラ層以下の掘削を開始する。10 月 26 日から一部基本土層 4 層で検出した竪穴建物跡などの掘削を開始する。

12 月 18 日に竪穴建物等の状況を撮影するために、第 2 回目の空中写真撮影を行う。

平成 25 年 2 月 3 日に、現地説明会を行い 181 名の参加があった。

鬼界アカホヤ火山灰下層の確認を目的とした下層確認を行うために、平成 25 年 2 月 5 日～8 日に、基本土層 6 層（霧島御池軽石層）～基本土層 8 層（鬼界アカホヤ火山灰層）までの無遺物層について部分的に重機で掘削を行う。その後 2 月 13 日より、これまでの調査と平行して、基本土層 9 層以下のトレンチ掘削を行い、3 月 15 日まで調査区の掘り下げ等を行う。

3 月 18 日～22 日まで、安全のために重機による埋め戻しを行って、第 1 次調査を終了した。

第 2 次調査

工事の工程による都合上、東西周辺部と中央部の 2 区に調査区を分け、周辺部の調査を先に行うこととなった。周辺部の調査は、平成 25 年 5 月 7 日～9 日まで、重機による掘削を行い、5 月 13

日より作業員を雇用して人力による掘削を開始する。6月5日に中世面の撮影を目的として第1回目の空中写真撮影を行う。掘り下げを行った後、8月13日に第2回目の空中写真撮影を行う。周辺部については、8月18日まで掘削等を行った後、19日～23日まで中央部の表土掘削と平行して埋め戻しを行う。

中央部については、重機による表土掘削の後、8月27日より人力による掘削を開始した。その後、中世面の撮影を目的として第3回目の空中写真撮影を行った。包含層および遺構の掘り下げを行った後、第4回目の空中写真撮影を行った。

その後、鬼界アカホヤ火山灰層下層の確認を目的とした調査を行うために、12月10日～13日まで、基本土層6層（霧島御池軽石層）～基本土層8層（鬼界アカホヤ火山灰層）の無遺物層の掘削を重機で行い、12月16日から人力による下層の掘削を開始した。掘削を進めた後、平成26年1月23日に、トレンチの掘削状況撮影のため第5回目の空中写真撮影を行い、24日に掘削作業を終える。安全のため、1月27日～29日まで重機による埋め戻しを行い調査を終了した。

なお、第2次調査では業務委託として、植物珪酸体分析および花粉分析を行った。

(2) 整理作業等の経過

平成25年10月～平成26年3月まで、第1次調査の遺物を中心として水洗および注記を行った。

平成26年4月～5月に第2次調査の遺物を中心とした遺物の水洗・注記を行う。5月～9月まで土器の接合作業を行った後、10月～3月まで実測を行った。このほか、業務委託として、炭化種実同定・放射性炭素年代測定・黒曜石原産地推定のための蛍光X線分析を行った。

平成27年8月は石器の実測等を行い、9月は収蔵前の整理作業等を行った。なお、平成27年4月～7月までは作業員を雇用せず、担当者のみで報告書作成作業を行った。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の地理的環境

大年遺跡は県境に近い都城市南部の梅北町に所在し、標高約163mの台地北端部に位置している。東側には金御岳（標高472m）から天ヶ峯（標高352m）に連なる山塊を望み、山塊が途切れた南側には鹿児島県首が市へとぬけている。北側には台地や段丘などの低地が広がっており、遠方には高千穂峰を頂とする霧島火山群を望むことができる。西方には低丘陵が広がっているが、遠くに桜島の噴煙をみることができる。桜島の噴火の際には遠雷のような轟音を耳にすることもあり、調査中はそれにより噴火に気づく場合が多く、その時には既に噴煙が上空まで上がっている（写真1）。

大年遺跡の周辺には小さな谷が入り組んでいるが、区画整理などによる削平や埋没が進んでおり、現在では平坦な畑地が一带に広がっている。そのため、本来の地形に由来する起伏を正確に反映しているとは言い難い。台地の北側では、西からきた床丸川と、東から北流してきた梅北川が合流している。この二つの河川によって形成された低地部には現在水田が営まれている。しかし、水はけは悪いようで、調査中には降雨後もしばらくは水が貯まった状態をみることができた。文化財課が行った確認調査でも、地表下1mほどで湧水が確認されている。確認調査で遺構等は認められなかったが、弥生時代早期や前期など、谷部にある自然の湧水を利用した水田稲作には適しているように思われる環境である。

大年遺跡が位置する都城市は、平成23（2011）年の新燃岳噴火の際には、日中にもかかわらず市内が真っ暗になった事は記憶に新しい。このように、都城盆地に住む人々の活動は霧島火山群および桜島の火山活動に大きく影響を受けてきており、精神的な面への影響も大きかったと思われる。大年遺跡は台地の縁辺部に立地しているが、この台地もおおよそ26,000～29,000年前⁽¹⁾の始良カルデラの火山活動による入戸火砕流の堆積物(A-Ito)によって形成されたものである。発掘調査により、現地地表下およそ3mの深さで入戸火砕流の二次堆積物（いわゆる「二次シラス」）（大年遺跡基本土層15層、以下「大年遺跡」は略）を確認している。この基本土層15層は、断面ではラミナ状の堆積や、鉄分の沈着による赤化した層がいくつもみられることから水成堆積であると考えられる。層の中には30cm程度の軽石も含んでいる。基本土層15層は水分を多く含むためか、この軽石の硬度は低く、繊維状で簡単に崩れる。低地部の確認調査では、現水田下にもシラスの堆積が認められることから、この層は5m以上堆積しているものと考えられる。

この二次シラスの上部には、灰白色粘土層（基本土層14層）の堆積が10cm前後みられる。粘土層は一般的に流れが停滞した水場で形成される。また、都城盆地は入戸火砕流によ



写真1 調査地からみた桜島の噴煙

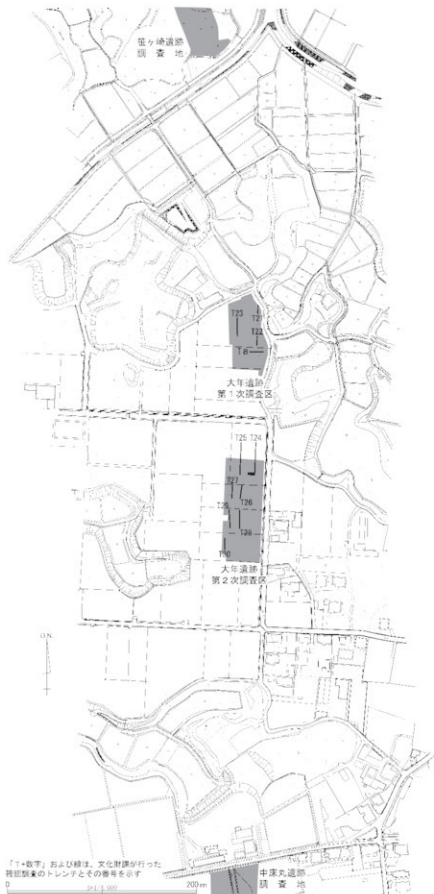


図1 大牟田遺跡調査地と周辺地形

て南流していた河川が堰き止められて、一時湖を形成したと考えられており、その際に堆積した層であると考えられる。この灰色粘土層の上には、厚さ10cm程度の風化礫に似た岩石の固結した砂礫層(基本土層13層)がみられる。この砂礫層は岩塊状に分散してみられ、その間に下の灰色粘土層などが入り込んでおり、堆積は安定していない。また、その堆積要因は明らかではない。基本土層13層の上部には、厚さ60～70cmの明褐色～暗褐色のシルト層(基本土層12層)が堆積している。この層は厚いこともあり、下部は明褐色、上部は暗褐色を呈するが、肉眼観察において層に含まれる砂屑物の構成に変化が観察できないことから同一の層として扱った。このシルト層は、その上位層に約12,800年前の桜島薩摩火山灰(Sz-S)と考えられる細粒火山灰を含む層(基本土層11層)が堆積しているため、最終氷期のピークを迎える、およそ29,000～13,000年前の寒冷期に堆積した層で

あると考えられる。上の層に比べて黒ボク土化がみられない背景には、寒冷気候において草原環境を形成できない植生であったことが考えられる。本層に対応すると考えられる層の土壌学的な分析からは、この12層が堆積する間に次第に乾燥した気候へと変化したことが想定されている(井上ほか2001)。なお、桜島薩摩火山灰は、二次堆積と思われるが、他の火山灰のような水平な堆積ではなく、ブロック状の塊をなしている。

これまでの都城盆地周辺における植物珪酸体や花粉の分析では、およそ8,000年前に降下した桜島11テフラ(Sz-11)直下からは照葉樹の植物珪酸体は検出されておらず、黒ボク質土壌が確認されている(杉山1999, 杉山ほか2002)。しかし、遺跡内の土層では、褐色のシルト層(基本土層12層)～鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)(基本土層8層)下までは、土色は褐色を呈しており、典型的な黒ボク土は発達していない。そのため、大年遺跡周辺では、鬼界アカホヤ火山灰降下前まで、典型的な黒ボク土を形成するような環境にはなかったと考えられる。ところで、桜島11テフラは下部がやや密度が高くなる傾向にあるが、基本土層9層中全体に分散している。その堆積要因は明らかでない。

およそ7,300年前の鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)の降下によって、一時的であるものの植生に大きな変化が起こったことが想像される。しかし、植物珪酸体分析からは、幸屋火砕流(K-Ky)が及んだ薩摩半島南部と大隅半島南部では照葉樹林の衰退がみられるものの、その他の地域では鬼界アカホヤ火山灰直下層と大きな変化はみられないことが指摘されている(杉山1999)。一方、遺跡内の土層からは、鬼界アカホヤ火山灰を挟んだ上下の層では大きな違いがみられ、上層では、黒ボク土の発達が著しい。さらに、約4,600年前に降った露島御池軽石層(Kr-M)よりも上の層でも黒ボク土の発達がみられ、その上部に黒色が弱い土層(基本土層4層)を挟んで、黒ボク土層は桜島3テフラ(Sz-3)(AD1471年)直下層までみられる。黒ボク土層間にみられる基本土層4層は、植生の変化、近隣の火山や大陸からのレス(黄土)の混入、あるいは人の活動などに起因する堆積速度の変化によって、有機物の濃集が弱まった時期と考えられる。基本土層3層は、黒ボク土であるが、上面には畠を検出している。この層は平坦にならされている可能性もあり、下位の基本土層4層とは逆に畑作などを含めた人間の活動によって黒ボク土化が促された可能性も考えられる。

桜島3テフラ降下以降については、後世の耕作により削平されており、その後の環境については不明である。桜島3テフラより上層が削平された状況は、近隣の多くの遺跡でみられる状況である。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

旧石器時代

都城盆地では、旧石器時代から人々の生活の痕跡は少ないながらも確認されているが、梅北町内では当該期の遺跡の調査事例はない。市内をみれば、現在のところ、当該期の遺跡として大岩田上村遺跡(大岩田町)・雀ヶ野遺跡(高城町)・王子山遺跡(高城町)・平松遺跡(高崎町)・池増遺跡(山田町)(宮崎県埋蔵文化財センター2003, 高城町教育委員会2005, 都城市教育委員会2012・2013a, 都城市2006)などが知られている。これらの遺跡の多くは旧石器時代の終わり頃の細石刃文化期のもので、桜島薩摩火山灰(Sz-S, P14)直下でみつかっている点で共通している。

縄文時代

続く縄文時代草創期の遺跡も非常に少ないが、梅北町内では川原谷出水遺跡(都城市教育委員会2014)が知られており、梅北町内でも古い時期から生活の痕跡を確認することができる。早期にな

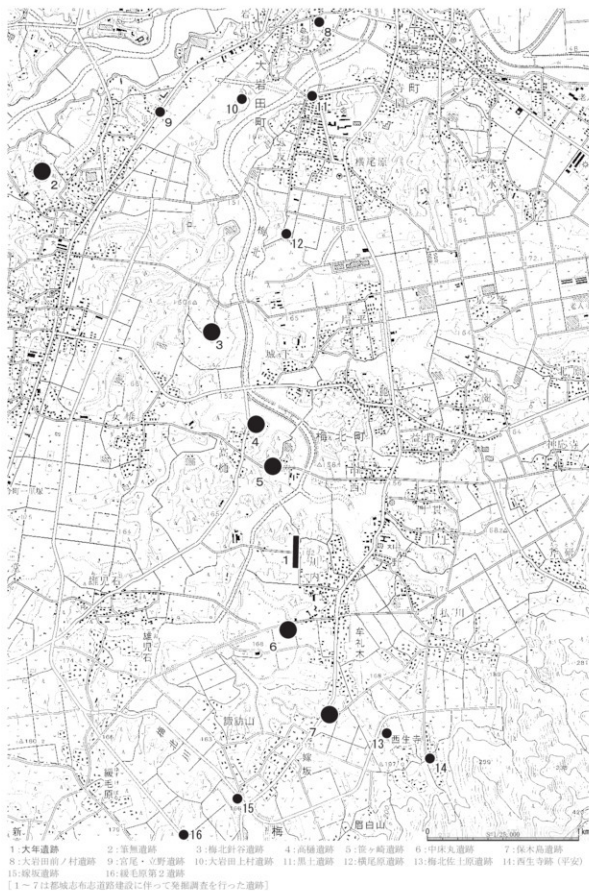


図2 大年遺跡周辺の主要遺跡分布図

ると、梅北町や東に隣接する安久町において遺跡が多く確認されている。梅北町内だけでも、梅北北原遺跡・梅北佐土原遺跡・川原谷出水遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2001、都城市教育委員会 2007a・b、2014b）などの遺跡がある。これらの遺跡では、土器などの遺物だけでなく、陥穴や土坑、集石などの遺構もみつまっている。

前期～中期の遺跡は少ないが、梅北町内でも緩毛原第2遺跡（都城市教育委員会 1987）で前期の土器が出土しており、鬼界アカホヤ火山灰降下後にも人々が生活を行っていたことをうかがうことができる。一方、後期～晩期は遺跡の数は多い。ただし、多くの遺跡でこの時期の遺物を確認できるものの、遺構は土坑などが中心で、住居と思われる堅穴建物跡は少ない。その中で、安久町の野添遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2004）では、後期後半～晩期前半の堅穴建物跡が7軒みつまっている。

弥生時代

都城盆地では、坂元A遺跡（南横市町）（都城市教育委員会 2006）にみるように縄文時代晩期末頃の水田跡および石廂丁等が出土しており、弥生時代早期の設定が可能である。ただし、この頃の遺跡は全体的に少なく、横市川周辺において確認されているなど偏りがみられる。また、早期～前期の遺物自体も少なく、その生活様式には不明な点が多い。その中で、大年遺跡に比較的近い黒土遺跡（大岩田町）（都城市教育委員会 1994）では弥生時代早期と位置付けられる遺物が出土している。

遺跡が増加するのは中期以降で、多くの遺跡で土器などの遺物がみつまっている。大年遺跡と同じく都城志布志道路の建設に伴って調査が行われた働女木遺跡（五十町）（宮崎県埋蔵文化財センター 2011b）では中期後半～後期にかけての集落がみつかっており、南部九州地域の特色である「花弁状住居」も含まれる。大年遺跡が位置する梅北町では、弥生時代の集落等のまとまった遺構が調査された例はまだないが、少し南に行った大浦遺跡において弥生時代中期の堅穴建物跡がみつまっている（都城市教育委員会 1997）。

古墳時代

続く古墳時代の遺跡は比較的多いが、古墳時代前期～中期の遺跡は少ない。この中で平峰遺跡（平塚町）（宮崎県埋蔵文化財センター 2012a・b）で中期～後期の、鶴喰遺跡（横市町）（都城市教育委員会 2004）で後期の大規模な集落がみつまっている。一方、梅北町周辺ではそのような古墳時代の集落は確認されていない。しかし、大年遺跡を含めて都城志布志道路建設に伴う調査において、古墳時代の堅穴建物跡がみつかっており、今後の調査でもみつかる可能性がある。

上記のように集落遺跡は散見されるが、埋葬遺構に関する調査事例は非常に少ない。弥生時代以前も墓の調査事例は少ないが、通常、古墳時代はその象徴である古墳によって調査がなくてもわかっていることが多い。市内では、都城盆地北部で古墳や地下式横穴墓が知られている程度である。土器様式からすれば、えびの盆地などの内陸部と共通した墓制と想定される。

古代・中世

古墳時代までは文化における独自性が強かった都城地域でも、律令制度に組み込まれて以降はその独自性も弱まっていく。その中であって、万寿年間（1024～1028年）には、太宰府の大監であった平季基によって、無主の荒地の開発と、時の関白藤原頼道への寄進が行われており、その後日本最大の荘園となる契機となったことはよく知られている。桜島3テフラ降下前の古代～中世の遺跡では、調査された多くの遺跡で溝状遺構や道路状遺構が掘削されている状況を確認することができ、上記のような土地の変更を伴う開発がこの時期に活発に行われていた様子の一端をうかがうこ

とができる。また、真米田遺跡（高城町）（都城市教育委員会 2014a）や国指定史跡である大島島田遺跡（金田町）（宮崎県埋蔵文化財センター 2008）では、有力者の居館跡と考えられる遺構がみついている。梅北町内で調査された遺跡は少ないが、古代の遺跡として梅北針谷遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2011a）があり、活発な鍛冶作業を行っていた様子をうかがうことができる。

註

(1) 各テフラの年代については、『新編 火山灰アトラス』（町田・新井 2003）を参照している。

引用・参考文献

- 井上 弦・米山忠克・杉山真二・岡田英樹・長友由隆 2001「都城盆地の累積性黒ボク土における炭素・窒素安定同位体自然存在比の変遷」『第四紀研究』第 40 巻第 4 号、第四紀研究会、307～308 頁
- 奥野 充 2002「南九州に分布する最近約 3 万年間のテフラの年代学的研究」『第四紀研究』第 41 巻第 4 号、pp. 225-236
- 杉山真二 1999「植物珪酸体分析からみた最終氷期以降の九州南部における照葉樹林発達史」『第四紀研究』第 38 巻第 2 号、第四紀研究会、109～123 頁
- 杉山真二 2002「鬼界アカホヤ噴火が南九州の植生に与えた影響-植物珪酸体分析による検討-」『第四紀研究』第 41 巻第 4 号、第四紀研究会、311～316 頁
- 杉山真二・渡邊眞紀子・山元希里 2002「最終氷期以降の九州南部における黒ボク土発達史」『第四紀研究』第 41 巻第 5 号、第四紀研究会、361～373 頁
- 高城町教育委員会 2005『雀ヶ野遺跡』高城町文化財調査報告書第 18 集
- 町田 洋・新井房夫 2003『新編 火山灰アトラス』、東京大学出版会
- 都城市 2006『都城市史』資料編 考古
- 都城市教育委員会 1994『黒土遺跡』都城市文化財調査報告書第 28 集
- 都城市教育委員会 1987『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内南部）』都城市文化財調査報告書第 6 集
- 都城市教育委員会 1997『大浦遺跡』都城市文化財調査報告書第 37 集
- 都城市教育委員会 2004『鶴喰遺跡（古墳時代編）』都城市文化財調査報告書第 61 集
- 都城市教育委員会 2006『坂元 A 遺跡 坂元 B 遺跡』都城市文化財調査報告書第 71 集
- 都城市教育委員会 2007a『梅北佐土原遺跡』都城市文化財調査報告書第 76 集
- 都城市教育委員会 2007b『梅北北原遺跡』都城市文化財調査報告書第 83 集
- 都城市教育委員会 2012『王子山遺跡』都城市文化財調査報告書第 107 集
- 都城市教育委員会 2013a『平松遺跡』都城市文化財調査報告書第 108 集
- 都城市教育委員会 2013b『都城市内遺跡 6』都城市文化財調査報告書第 110 集
- 都城市教育委員会 2014a『真米田遺跡 七日市前遺跡』都城市文化財調査報告書第 111 集
- 都城市教育委員会 2014b『川原谷出水遺跡』都城市文化財調査報告書第 112 集
- 都城市教育委員会
- 宮崎県地質研究会編 2013『宮崎県の地質フィールドガイド』、コロナ社
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001『梅北佐土原遺跡 中尾遺跡 養原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 42 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『大岩田上村遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 77 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『豊満大谷遺跡 野添遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 83 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『大島島田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 178 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011a『梅北針谷遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 204 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011b『備女木遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 205 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012a『平峰遺跡（1 次・2 次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 211 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012b『平峰遺跡（3 次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 219 集
- 宮崎県編 1998『宮崎県史』通史編 古代 2

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法と層序

(1) 調査の方法

工事および調査の工程上、遺跡北部を第1次調査、遺跡南部を第2次調査に分けて調査を行っている(図1)が、遺跡地図上では一つの遺跡として記載されている。そのため、グリッド名や遺構名、遺物の取り上げ番号などが両調査区で混在しないように、図3に示すように1次・2次の調査を通して、遺跡全体に1辺10mのメッシュをかけてグリッドの設定を行った。同様に、遺構番号および遺物番号も、第1次調査と第2次調査を通して連番でつけている。なお、遺構の実測は世界測地系に基づいた方位座標を基準としており、人の手による実測とトータルステーションの測点を図化する実測方法を併用している。実測時の縮尺は平面図・断面図ともに1/20を基本とし、遺構の種類に応じて1/30～1/50で行っている。ところで、遺跡北部調査区(第1次調査区)では、堅穴建物跡を多数検出しているが、遺構掘削面よりも上位と考えられるレベルで遺構を検出している。最終的な埋土である黒色土(基本土層3層)が円形を呈していたことや出土している土器から、弥生

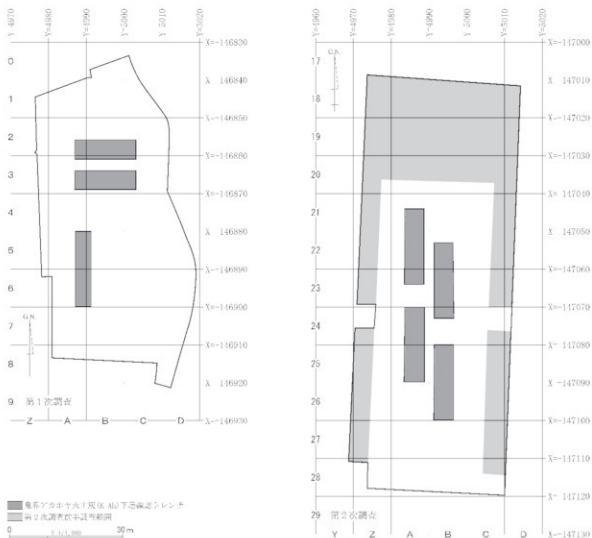


図3 大年遺跡グリッドおよび鬼形アカホヤ火山灰下層確認トレンチ設定状況

時代の中期以前にみられる平面円形の竪穴建物跡を想定し、東西南北の軸を基本とした土層観察用のベルトを設定した。しかし、想定と異なり、実際には弥生時代後期～古墳時代の竪穴建物跡であり、遺構の平面形状は方形であるものが多かった。そのため、結果的に土層観察ベルトは主軸に対して斜行してしまったものがある。また、竪穴建物は霧島御池軽石（Kr-M）層（基本土層6層）あるいはその下の黒色土（基本土層7層）まで掘り込んで作られているが、霧島御池軽石層の上に堆積する霧島御池軽石混じりの黒色土（基本土層5層）の土と建物跡埋土は類似しており、両者の区別が非常に困難な状態であった。そのため、遺構上部での平面形の把握を試みたものの、最終的には想定される遺構の範囲よりも若干外側の範囲について、霧島御池軽石層付近（基本土層5b層）まで掘り下げて平面形の確認を行った。

本調査に先立って行われた文化財課による確認調査では、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）層（基本土層8層）までトレンチを入れて遺構・遺物の確認を行っており、それよりも下位については掘削深度等の安全面の問題から確認を行っていない。しかし、近年の調査では縄文時代早期以前の遺跡の類例も増加してきていることと、一定の安全を確保しつつ下層を掘削できる広さの調査面積であることから、鬼界アカホヤ火山灰から入戸火砕流（A-Ito）二次堆積層上面（いわゆる二次シラス）について部分的に調査を行った。当センターでは格子状に掘削する方法が多いが、調査の工程や掘削方法などの諸事情から、トレンチ状の掘削方法（図3）をとった。

遺物の取り上げは、遺構埋土および遺構周辺の遺物については、トータルステーションによる3次元の点座標データを基本として、建物跡の床面付近の遺物など必要と判断したものについては実測により図化を行った。包含層内の遺物については、一定程度の大きさのものや特徴的な遺物について3次元の点座標データで記録し、そのほかの土器小片などの遺物については、グリッド毎にまとめて取り上げを行った。

発掘調査時の写真撮影は、遺構の検出段階、土層堆積状況、床面あるいは底面の検出状況、完塚状況の各段階で行っている。撮影機材はNIKON F3、ZENZA BRONICAを使用し、それぞれモノクロフィルムとリバーサルフィルムを使用した。空中写真撮影は、遺構の検出段階あるいは床面検出段階など、遺跡・遺構の性格に合わせて行った。また、その際に空中写真撮影でしか行うことができない、周辺地形を含めた遺跡の立地環境や都城志布志道路の路線把握を目的とした撮影も行った。このほか、報告書掲載の遺物写真の撮影にはNikon D800を使用した。

自然科学分析は、発掘調査時に植物珪酸体分析と花粉分析を、整理作業時に炭化種実同定、放射性炭素年代測定および蛍光X線分析による業務委託で行った。花粉分析・植物珪酸体分析は、遺跡北部で畦状遺構を検出し、遺跡南部でも予想されたため、作物や当時の環境を復元する目的で計画した。しかし、遺跡南部では、畦状遺構の遺存状況が悪く十分な成果が得られないことが予想されたため、桜島3テフラ（Sz-S）降下前の環境復元を試みる目的を含めて、基本土層3～4層、道路状遺構の埋土について分析を行った。炭化種実同定は、遺跡北部で出土したイチイガシと予想された炭化種実等の種類を確認するために行った。放射性炭素年代測定は、各遺構の年代について参考および確認を行うことを主な目的とした。その中で、遺跡北部で出土した炭化種実については、弥生時代から古墳時代の生活面と予想していた基本土層4層の時期の確認も目的の一つとした。なお、現状の放射性炭素年代測定法では、結果として放射性炭素年代のみしか記載されないことが多いが、それは“測定値”ではないため、科学的客観性を確保する意味で“測定値”の記載も行った。最後に、蛍光X線分析による黒曜石の産地同定は、黒曜石の剥片が目立ったことと、肉眼観察により複

数の原産地が想定されたため、それ確認を確認する目的で行った。

なお、当センターでは、建物内の埋土についてフローテーションやフルイを用いた微細な炭化物等の選別作業を行うことが多い。しかし、大年遺跡の調査において、調査時に目立った炭化物等が認められなかったため、今回は行っていない。

ところで、遺構の名称については、調査中は「S○」のように略号を使用しており、調査時作成の実測図および整理事業時の注記もこの略号で行っている。ただし、報告書では理解しやすいように各遺構に番号を振って「竪穴建物跡○」等のように表記している。そのため、本文中で両者を記すとともに、附表において報告書名と調査時および注記略号の対応関係を記載している。また、調査時において、遺構略号の番号・土層番号・遺物の点上げ番号は、それぞれ通し番号（遺構：S1～、土層：1層～、遺物：No.1～）で行っている。土層については、遺構略号と同じく、報告書の土層番号と調査時の土層番号の対応関係を附表の対応表に記載している。このように通し番号をつけるのは一般的な手法ではない。しかし、調査段階および整理事業段階において、遺構の種類と番号の変更等に伴う混乱を防ぐことが可能であることと、各番号が重複しないことによって、単独の番号のみでも個々の遺構・土層・遺物等を特定することが可能であることから、この方法を採用している。

(2) 地形と層序

前節でも述べたが、調査区内の基本土層は次の通りであるが、ここで示す色調は肉眼観察によるもので、土色帳に依ったものではない。また、テフラ以外の土は基本的にシルト質である。

- 1層：表土（客土）層
- 2層：桜島3テフラ（Sz-3）層
- 3層：黒色土層
- 4層：暗褐色土層
- 5層：霧島御池軽石を含む黒色土層
- 6層：霧島御池軽石（Kr-M）層
- 7層：黒色土層
- 8層：鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）層
- 9層：桜島11テフラ（Sz-11）を含む暗褐色土層
- 10層：明褐色土層
- 11層：桜島薩摩テフラ（Sz-S）を含む褐色土層
- 12層：明褐色～褐色土層
- 13層：淡青灰色砂礫層
- 14層：灰白色粘土層
- 15層：入戸火砕流（A-Ito）二次堆積層

調査区内の層序は、遺跡南部と北部は同じで、また、これまでの調査で確認された周辺の遺跡でみられる基本的な堆積とも大きな違いはない。遺跡北部は北側と東側が谷へと落ちる地形であるが、調査区内の土層堆積状況に大きな変化はなく、地形の変化

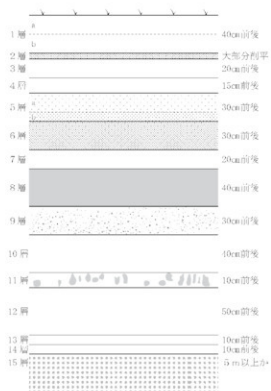


図4 大年遺跡基本層序概略図

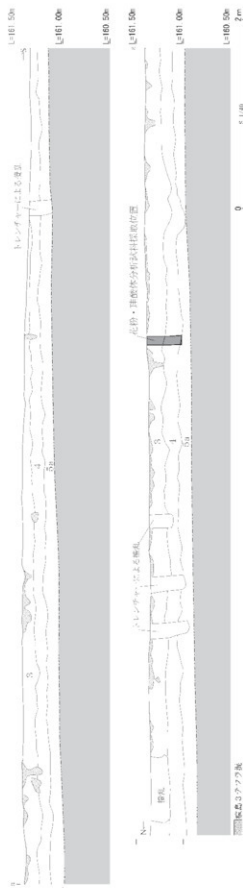


図5 大年遺跡南部調査区土層断面図

は小さい。遺跡南部も同様に地形の変化は少ないが（巻頭図版2-2、図5）、表土直下では北側に若干厚く基本土層3～4層が堆積しているため、現在道路が通っている遺跡の中央付近には浅い谷が入っていた可能性がある。遺跡南部南側では西側から谷が入っていた可能性を考慮したが、調査区内ではそのような地形による土層の変化はみられなかった。むしろ、南側では1層下に基本土層4～5層がみられたため、若干地形的に高かったようである。

このほか、遺物包含層である基本土層4層は、上下のいわゆる黒ボク層とは異なり、暗褐色を呈する層である。遺物の出土状況からすると、この基本土層4層が堅穴建物を作って人々が生活を営んでいた生活面であったと考えられる。これまで調査が行われた弥生時代～古墳時代の遺構が検出されている付近の遺跡でも、大年遺跡のこの4層に対応すると考えられる層が存在している。このような状況から、基本土層4層が黒ボク化していない背景には、人々草原を切り開いて一定期間生活を営んでいたことが影響している可能性も考えられる。ただし、当該時期の遺物・遺構が検出されていない遺跡ではどのような状況であるのかということも今後確認していく必要がある。

第2節 検出遺構

(1) 旧石器時代

約12,800年前に降下した桜島薩摩火山灰層より下位の基本土層12層が旧石器時代の層に該当する。それ以下については、入戸火砕流二次堆積物が厚く堆積しているため、調査を行うことは困難である。ここでは明確な遺構は検出できなかった。遺跡南部調査区・北部調査区ともに土層中に拳大程度の礫がわずかにみられたが、礫群や散礫を構成するほどの量ではない。基本土層12層はローム層でこのような礫は基本的にほとんど含まれないことから、人為的に持ち込まれた可能性がある。しかし、礫に人為的と考えられる加工や、被熱による変色は確認できなかったため遺構としては認定していない。前章でみたように、この基本土層12層は、土壌学的な研究において湿地性の植物珪酸体等が見つかった土層に対応すると考えられるため、下部になるほど住環

境としては適していなかった可能性がある。ただし、遺物の次第でのべるように、上部で割片が出土しているため、基本土層 12 層上部に対応する層では今後遺構が見つかる可能性は十分に考えられる。

(2) 縄文時代

縄文時代の包含層は、桜島薩摩火山灰層から鬼界アカホヤ火山灰層に挟まれた草創期～早期に該当する層と、霧島御池軽石層上位の後期～晩期に該当する層の大きく二つに分けることができる。

下部の草創期～早期に該当する基本土層 9～11 層では、旧石器時代と同様に、遺構は検出できなかったものの、押型文土器(図 61-1)や、図化していないが黒曜石の割片がわずかながら出土している。全体的に西側から出土している印象があり、西側調査区外に当該時期の集落等が存在する可能性がある。

上部の霧島御池軽石層上位の基本土層 4～5 層では、該当する時期の遺物は多く出土しているものの、草創期～早期と同様に、遺物に対応するような明確な遺構は検出していない。晩期の黒川式土器を中心として多くの土器が出土しており、また、この時期のものと思われる石器も多く出土しているため、やはり付近に集落があったと考えられる。調査時においても、遺物の出土量などから、竪穴建物跡が存在している可能性を考え、その点を意識して精査を行ったが遺構の検出はできなかった。このような中、明確な時期比定の根拠に乏しいが、検出した層位などから当該時期のものと思われる土坑 2 基(土坑 1・2)を検出している。

土坑 1 (図 6)

南部調査区 25 C グリッドの、溝状遺構 6 の底面で検出した土坑である。規模は径 0.8～0.9 m で、深さは約 0.4 m である。ちょうど溝の幅に対応したような位置にあるため、溝の掘削に関係するようにもみえるが、他の箇所ではみられないことから溝掘削以前のもと考えられる。上部は溝によって削られていると思われる。西壁寄りにピットがみられるが、本土坑に伴うものかは明らかでない。遺物は出土していないため、時期は不明である。

調査時の略号はつけ忘れのため該当する略号はない。

土坑 2 (図 6)

21 B グリッドの基本土層 5 b 層で検出した土坑で、幅約 1.0 m、長さ約 1.1 m で深さは約 0.2 m である。掘削自体は 5 a 層など、より上位の層から行われていると考えられる。遺物は出土していないため、時期は不明である。

調査時および注記の略号は「S 43」である。

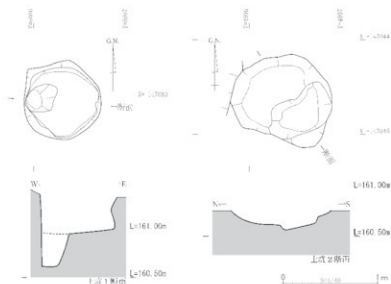


図 6 土坑 1・2 平面・断面図

(3) 弥生時代～古墳時代

本遺跡が形成された主要

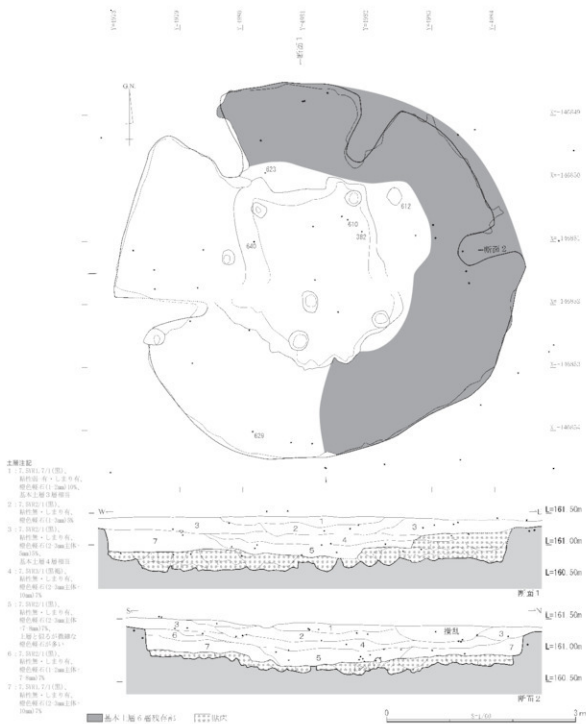


図7 竪穴建物跡1(S7)平面・土層断面図

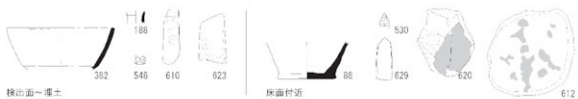
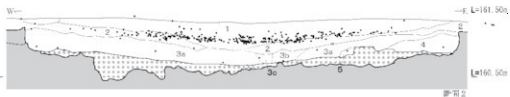
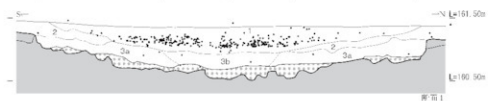
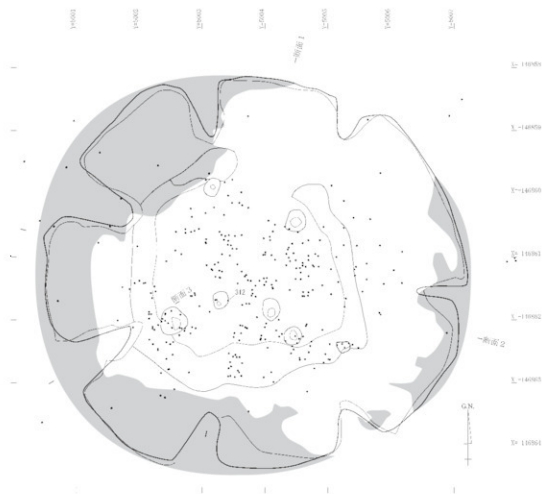


図8 竪穴建物跡1(S7)出土遺物(縮尺不同)



土層注記

- 1 黒色シロト堆、粘性質・しまり粉・赤、褐色粘土 (Ca₂L 77%)、下部に土層中包含、基本土層3層相当
- 2 黒褐色シロト堆、粘性質・しまり粉・赤、褐色粘土 (Ca₂L 77%)、基本土層4層相当
- 3 黒色シロト堆、粘性質・しまり粉、褐色粘土 (Ca₂L 75-76%)、a層→b層へ層の厚で部が狭くなる。
- 4 黒色シロト堆、粘性質・しまり粉、褐色粘土 (Ca₂L 75-76%)、a層→b層へ層の厚で部が狭くなる。
- 5 黒色シロト堆、粘性質・しまり粉、褐色粘土 (Ca₂L 75-76%)、a層→b層へ層の厚で部が狭くなる。

※土層順による色調は任意に記す。

*** 土層 黒色シロト堆



図9 竪穴建物跡2 (S9) 平面・土層断面図

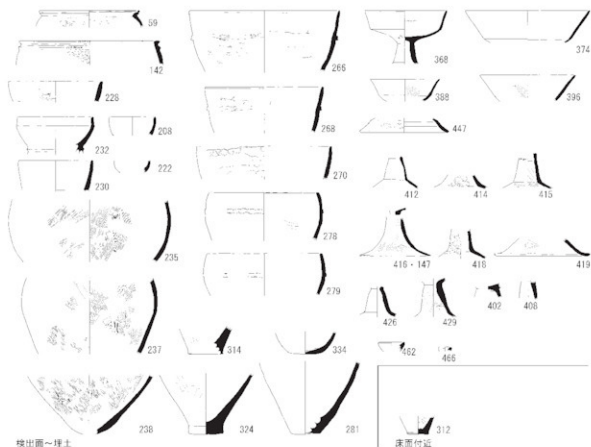


図 10 竪穴建物跡 2 (S9) 出土遺物 (縮尺不同)

な時期の一つであり、竪穴建物跡、竪穴状遺構、土坑等を検出している。遺構は台地端部の遺跡北部でみつかり、遺跡南部では当該時期の遺構はほとんどみられない。

a 竪穴建物跡

遺跡北部の調査では、当初、基本土層 4 層上面において円形を呈する黒色土（基本土層 3 層）の埋土がみられたため、弥生時代中期以前の竪穴建物跡と予想した。そのため、円形の竪穴建物跡を想定して、東西南北を基準とした土層観察用のベルトおよびトレンチを設定して遺構の形状の確認を行った。確認を行った結果、遺構は想定に反して平面円形ではなく、多くは方形を基調としたものであった。これらの中で、竪穴建物跡 2・3・9 については、霧島御池軽石層下の基本土層 7 層までの掘り込みが少ないといった構造上の特徴から、他の建物跡に比べると遺構の形状把握が難しかった。また、遺構は埋土の上層に基本土層 4 層と考えられる土層が入るため、基本土層 4 層下部～5 a 層の間で掘り込まれていると考えられる。しかし、遺構の埋土はこれらの基本土層と類似しており、特に基本土層 5 a 層との区別は非常に困難である。そのため、最終的には霧島御池軽石が多い基本土層 5 b～6 層付近まで掘り下げなければ平面形の確認はできなかった⁽¹⁾。したがって、遺構上部の壁面も検出できておらず、建物跡の深さは土層断面からの推定となる。

なお、遺物が出土していない建物跡の時期比定に関する検討は次章で行っているため、ここでは省略している。

竪穴建物跡 1 (図 7・8)

2 B グリッド南東部を中心にして検出した、平面円形を基調とする間仕切付の竪穴建物跡であ

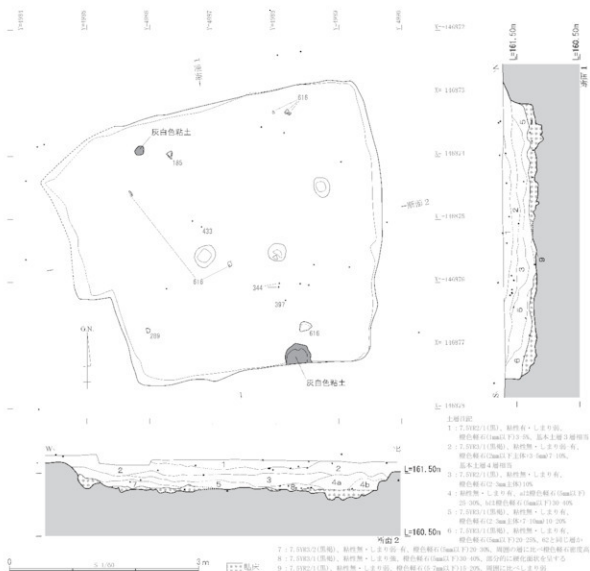


図11 竪穴建物跡3 (S11) 平面・土層断面図

る。床面での径は5.9～6.2m(南北軸約5.9m・東西軸約6.2m, 床面積約26.6㎡)で東西軸が若干広がっている。土層断面から推定される深さは0.4～0.5mである。

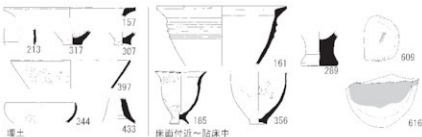


図12 竪穴建物跡3 (S11) 出土遺物(縮尺不同)

間仕切りは中央から北側にほぼ等間隔に4か所設けられているが、南側には存在しない。この間仕切りは部分的に、霧島御池軽石を含む明るい色調の盛土によってつくられている。間仕切りに該当する部分は、検出面からの掘り下げ途中には確認できていないため、高さはそれほど高くなかったものと考えられる。建物の中央付近は、東西約2.7m、南北約2.8mの不整形の範囲で一段低くなっており、南西部はやや外側に広がっている。この一段凹んだ部分の四隅に柱穴と思われるピットを検出している。ピットの深さは0.8～0.9mある。なお、建物の掘方は基本土層7層に達し

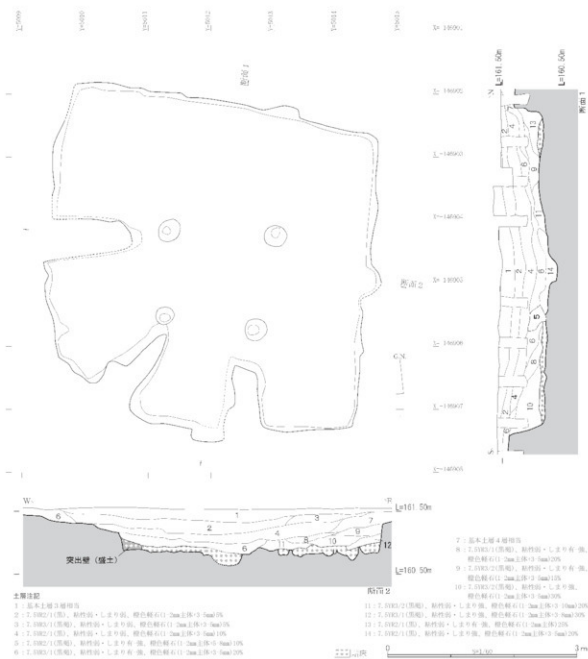


図13 竪穴建物跡4 (S16) 平面・土層断面図

ているが、部分的に霧島御池軽石層を掘り残している。床面には厚さ10～30cmの貼床を施している。

遺物は全体的に少ないが、床面付近から鉄鏝と考えられる鉄器片(図101-640)が出土している。ところで、西側の間仕切り中から比較的大きな縄文土器の底部片が出土しているが、意図的に埋めたものかは明らかでない。時期は建物の形状等から、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃のものであると考えられる。

調査時および注記の略号は「S7」である。

竪穴建物跡2 (図9・10)

2～3Cグリッドで検出した平面円形を基調とする間仕切り付の竪穴建物跡である。一部を除き、ほぼ等間隔で7箇所の間仕切りを作り出している。大きさは径約6.5m(床面積約29.4㎡)、土層断面から推定される深さは0.4～0.5mである。竪穴建物跡1と同様に中央付近は長さ約3.6mの

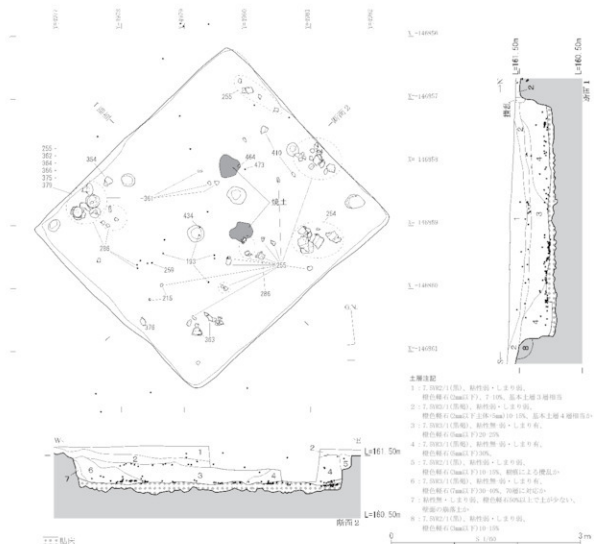


図14 竪穴建物跡5 (S13) 平面・土層断面図

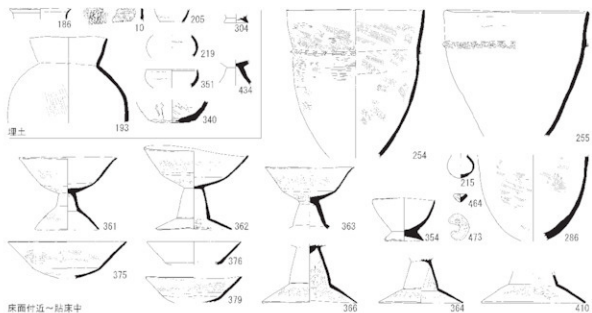


図15 竪穴建物跡5 (S13) 出土遺物 (縮尺不同)

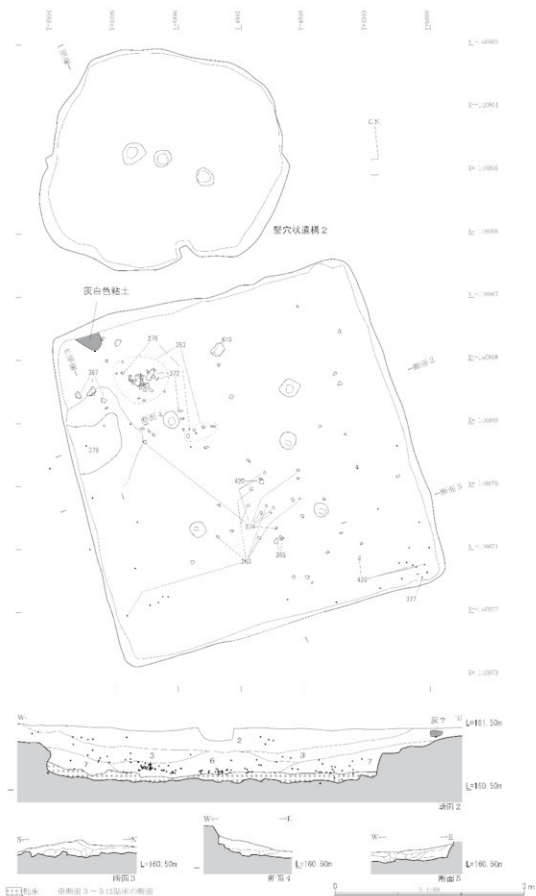


圖 16 豎穴建物跡 6 (S10)・豎穴狀遺構 2 平面・土層断面圖



図 17 堅穴建物跡 6 (S10) 土層断面図

部付近から上や底部付近などへの強いイタナデによる整形痕が確認できることから、新しくなる可能性もある。このほか、埋土中および床面付近から灰色の粘土状の塊が出土しているが性格は不明である。遺構の時期は出土した甕 (185) から、弥生時代後期後半頃の時期と考えられる。

調査時および注記の略号は「S 11」である。

なお、本建物跡の床面から出土した炭について、放射性炭素年代測定を行った結果、測定値である pMC が $78.65 \pm 0.19\%$ 、年代は 2σ の範囲で cal AD 48 ~ 125 (87.4%) の値がでている。

堅穴建物跡 4 (図 13)

7 D グリッドを中心として検出した堅穴建物跡で、方形を基調とした間仕切付の建物跡である。

略方形に一段低くなっているとともに、その部分に柱穴と思われるピットを検出している。ピットは主柱と思われるのが周囲に 4 基あり、南側 2 基の間にさらに 2 基のピットを検出している。ピットの深さは主柱と思われる 4 本が約 0.9 m、支柱となる 2 本が約 0.6 m である。

遺物 (図 10) は、埋土上層の基本土層 3 層中から小片が非常に多く出土している。これらの出土遺物は、弥生土器の甕がわずかにみられるほかは、ほとんどが土師器と思われる破片である。また、土師器甕の形状は口縁部がやや直線的にのびるものから、内湾する新しいものまで幅があり、一定していない。基本土層 3 層は新しい土層であることから、流れ込みあるいは、3 層形成時の投げ入れなどが考えられ、本建物跡に伴う遺物ではないと考えられる。遺構の時期は、建物跡の形状から弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃のものであると考えられる。

調査時および注記の略号は「S 9」である。

堅穴建物跡 3 (図 11・12)

4 A グリッドで検出した方形基調の堅穴建物跡で、北西隅部が西側にやや広がっている。堅穴建物跡 6 に隣接している。建物跡の大きさは南北約 4.2 m、東西約 3.7 ~ 4.9 m (床面積約 18.8 m²) で、北西部の拡張部は約 2.2 × 0.5 m、土層断面から推定される深さは 0.3 ~ 0.5 m である。柱穴と思われるピットは北西部を除いて 3 基検出しているが、恐らく 4 本柱であったと考えられる。ピットの深さは 0.4 ~ 0.5 m である。

遺物は、埋土中と床面付近から出土している。埋土中からは、弥生土器・土師器などが出土しており、床面からは弥生土器が出土している。床面付近の弥生土器では、161 や 185 などの甕が出土しているが、両者には時期差がある。185 はほぼ完存していることから、この土器が建物跡の時期を示していると考えられ、形態的には弥生時代後期後半頃のものと考えられる。ただし、古墳時代に入ってからよくみられる頭

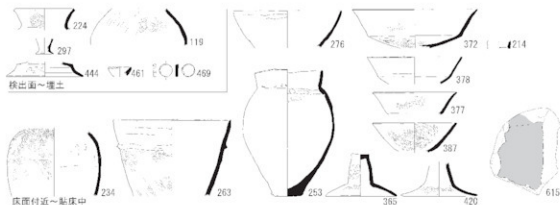


図18 竪穴建物跡6 (S10) 出土遺物 (縮尺不同)

他の建物跡とやや離れた場所に位置している。建物跡の大きさは、南北・東西約5.0m (床面積約21.3㎡)で、土層断面から推定される深さは約0.4mである。柱穴と考えられるピットを4基検出している。ピットの深さは約0.7mである。このピットは、北東部のものを除いて、それぞれ間仕切りの前にあり、特に南西部の1期は間仕切りに非常に近い位置にある。なお、床面には厚さ10～15cmの貼床を施している。また、この貼床内からは炭が多く出土している点で特徴的である。

埋土および床面から出土した遺物はほとんどないため、建物跡の時期は不明である。建物の形状から、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃のものと考えられる。

調査時および注記の略号は「S16」である。

なお、本遺構の貼床内から出土した炭について、放射性炭素年代測定を行った結果、測定値であるpMCが $79.17 \pm 0.20\%$ で、年代は 2σ の範囲でcal AD 76～215 (94%)、 1σ の範囲でcal AD 80～138 (65.8%)の値が出ている。年代測定値では、竪穴建物跡3とほぼ同じか若干新しい時期となっている。

竪穴建物跡5 (図14・15)

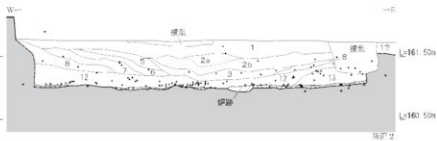
3Z-Aグリッド南部を中心として検出した方形の竪穴建物跡で、主軸は他の竪穴建物跡に比べると大きく傾いている。大きさは北西-南東軸長3.6～3.7m、北東-南西長約4.1m (床面積約15.0㎡)で、土層断面から推定される深さは0.4～0.5mである。柱穴と考えられるピットを建物中心付近で2基検出しており、2本柱であったと考えられる。ピットの深さは約0.5mである。なお、床面中央付近で、炉跡と考えられる焼土を2箇所検出している。

遺物は床面で多く出土しており、これらについてはほぼ一括遺物と考えて良いと思われる。北壁付近では高坏の坏部と脚部を意図的に分離させて遺棄している (巻頭図版6-2) が、脚と坏が接合しないものもある。建物跡中央付近では、土製勾玉やミニチュア土器が出土している。また、甕2点 (図74-254・255) が割れた状態で出土しているが、いずれも底部付近のみ見つからない。このように、他の建物跡の遺物の出土状況とは大きく異なり、やや特殊である。弥生時代後期後半頃は竪穴建物跡の床面に土器を多くの残すものがみられるので、その名残であるのかもしれない。時期は、床面の出土遺物から、古墳時代前期後半頃と考えられる。

調査時および注記の略号は「S13」である。

竪穴建物跡6 (図16～18)

3-4Bグリッドで検出した方形の竪穴建物跡である。大きさは南北約5.2m、東西4.9～5.1m (床面積約26.2㎡)で、床面までの深さは0.5～0.6mである。北側には竪穴状遺構2が位置



土層誌記

1. 1.00K2/2(黑砂), 黏性弱・土呈灰色, 棕色礫石(1.2m)7~10%, 基本土層4層(3m)2
2. 基本土層3層(3m), a(12.5)3K2/3(黑), 黏性弱・土呈灰色, 棕色礫石(1.2m)7~10%
3. 12.5(10K2/2)(黑砂), 黏性弱・土呈灰色, 棕色礫石(1.2m)7~10%
4. 10K2/2(黑砂), 黏性弱・土呈灰色, 棕色礫石(1.2m)7~10%
5. 10K2/2(黑砂), 黏性弱・土呈灰色, 棕色礫石(1.2m)7~10%
6. 10K2/2(黑砂), 黏性弱・土呈灰色, 棕色礫石(1.2m)7~10%
7. 10K2/2(黑砂), 黏性弱・土呈灰色, 棕色礫石(1.2m)7~10%
8. 1.00K2/2(黑砂), 黏性弱・土呈灰色, 棕色礫石(1.2m)7~10%
9. 1.00K2/2(黑砂), 黏性弱・土呈灰色, 棕色礫石(1.2m)7~10%
10. 1.00K2/2(黑砂), 黏性弱・土呈灰色, 棕色礫石(1.2m)7~10%
11. 1.00K2/2(黑砂), 黏性弱・土呈灰色, 棕色礫石(1.2m)7~10%
12. 1.00K2/2(黑砂), 黏性弱・土呈灰色, 棕色礫石(1.2m)7~10%
13. 1.00K2/2(黑砂), 黏性弱・土呈灰色, 棕色礫石(1.2m)7~10%

比例尺

图 19 竖穴建物跡 7 (S12) 平面・土層断面圖

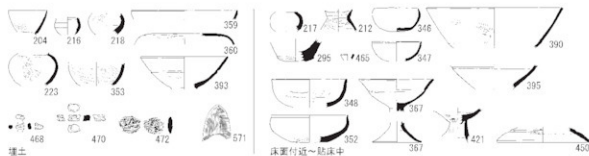


图 20 竪穴建物跡 7 (S12) 出土遺物 (縮尺不同)

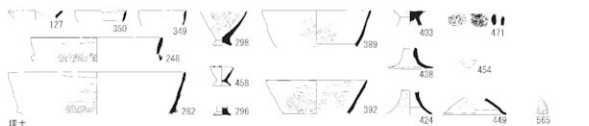


图 21 竪穴建物跡 8 (S14) 出土遺物 (縮尺不同)

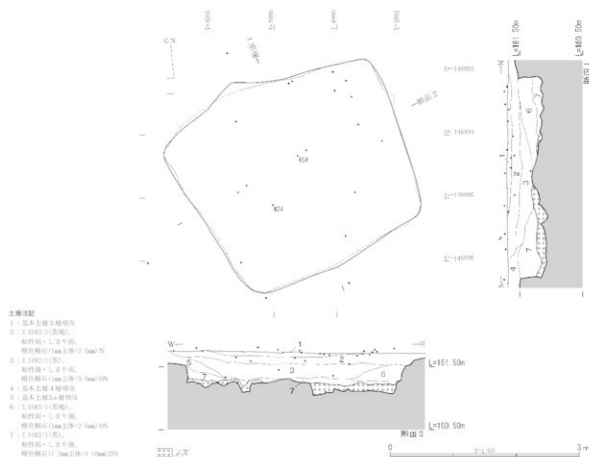
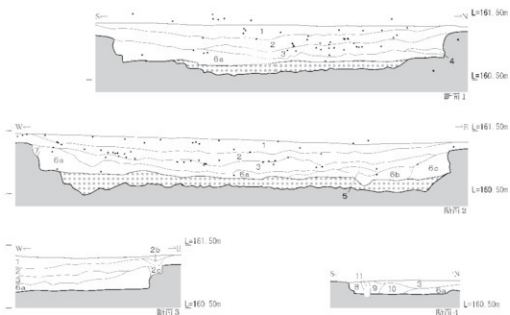


图 22 竪穴建物跡 8 (S14) 平面・土層断面图



土層注記

1. 2.000(1)層, 粘性土・L土中層, 褐色粘土(Chaco2)F130-10%, 基本土層(4層)地質
2. 2.000(2)層, 2.000(3)層, 粘性土・L土中層, 褐色粘土(Chaco2)F土層(Chaco)10-15%
遺構中心付近に中層のみを穿つ。基本土層(4層)地質, 細砂を埋む若干層のみを穿つ。
3. 2.000(1)層, 粘性土・L土中層, 褐色粘土(Chaco2)F115%, 砂質土(中層)。
4. 2.000(1)層, 粘性土・L土中層, 褐色粘土(Chaco2)F120-20%
5. 2.000(1)層, 粘性土・L土中層, 褐色粘土(Chaco2)F120-20%
6. 2.000(1)層, 粘性土・L土中層, 褐色粘土(Chaco2)F土層(Chaco)20-25%,
R125-20%中層(砂質土)を穿つ。R125褐色粘土(Chaco2)F130-10%

7. 2.000(1)層, 粘性土・L土中層, 褐色粘土(Chaco2)F130-10%, 砂質土(中層)。
8. 2.000(2)層, 粘性土・L土中層, 褐色粘土(Chaco2)F120-20%
9. 2.000(2)層, 粘性土・L土中層, 褐色粘土(Chaco2)F120-20%
10. 2.000(1)層, 粘性土・L土中層, 褐色粘土(Chaco2)F土層(Chaco)10-15%
11. 2.000(1)層, 粘性土・L土中層, 褐色粘土(Chaco2)F130-10%, 砂質土(中層)。

□□□□ 土水 ■■■ 土水(土層)層地質

0 1.50 3m

図23 竪穴建物跡9(S15)平面・土層断面図

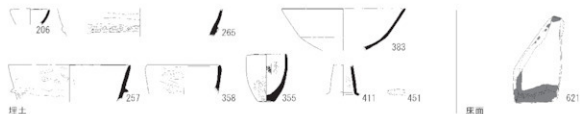


図 24 堅穴建物跡 9 (S15) 出土遺物 (縮尺不同)

しているが、床面は堅穴建物跡 6 の床面よりかなり高い位置にある。土層の堆積状況からすると同時期か、堅穴状遺構 2 よりも古い時期のものと考えられる。柱穴と考えられるピットは 5 基検出しているが、おそらく 6 本柱であったものと思われる。また、中央寄りのピットについては、主柱と考えられる 4 本のピットを結んだ辺よりも 10 cm 程浅いため、主柱 4 本 + 支柱 2 本の可能性が考えられる。ピットの深さは 0.5 ~ 0.7 m である。床面には貼床を施しており、貼床の厚さは約 15 cm である。北西部は周囲よりも若干傾斜がついて段状に高くなっている (断面 3・4)。また、北西部ほどではないが、南東部においても若干壁面側が高くなっている (断面 5)。

遺物は堅穴建物跡 5 と同様に床面付近から出土しているが、建物跡 5 に比べると散漫であり破片が多い。北壁の西側床面付近で、灰色の粘土状物質の塊が出土している。堅穴建物跡 3 で出土しているものに似ている。また、建物跡の外側になるが、灰状の物質が堆積しているのを確認している。この灰状物質は、土層断面の観察から、掘り込み面かそれよりも若干上位のレベルに位置するものと考えられる。遺構の時期は、出土している土器から古墳時代前期後半～中期前葉頃と考えられ、堅穴建物跡 5 よりも新しいと考えられる。

調査時および注記の略号は「S 10」である。

堅穴建物跡 7 (図 19・20)

3 Z ~ A グリッド南部を中心として検出した方形の堅穴建物跡で、北東隅は調査区外に広がっている。大きさは南北約 5.6 m、東西約 5.3 m (床面積約 28.7 m²)、で土層断面から推定される深さは 0.5 ~ 0.6 m である。床面には貼床を施しているが、部分的である。そして、他の堅穴建物跡が基本土層 6 層下の黒色土まで全体を掘り込んで貼床をしているのに対して、堅穴建物跡 7 は、床の半分近い部分の黒色土を掘り残してそのまま床としている。床面で 6 基のピットを検出しているが、その位置から 4 本柱であったと考えられる。ピットの深さは 0.6 ~ 0.7 m である。

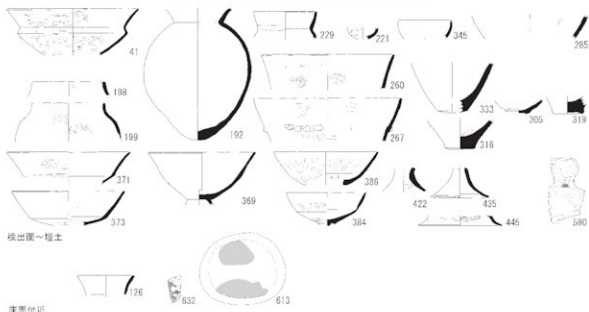
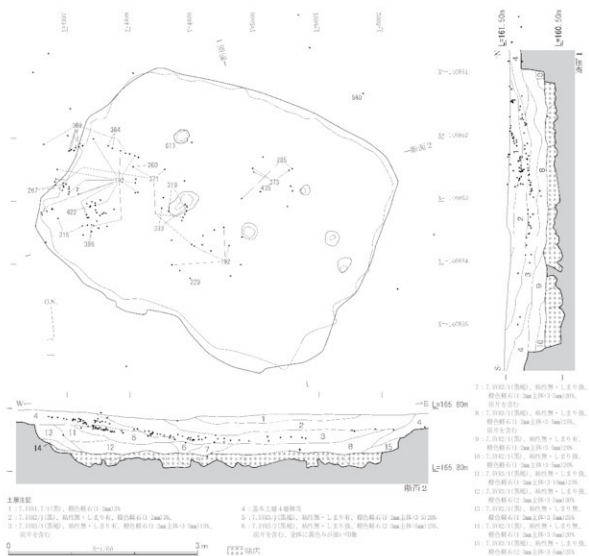
遺物は、埋土と床面付近から出土している。この中で、埋土中からは、形態が特徴的な磨製石鏃 (図 88-571) や、須恵器を模倣した坯の可能性があり、調整が須恵器坯蓋に類似している土器 (図 78-360) などが出土している。一方、床面付近出土遺物は他の建物跡とは異なり、鉢が多くなっていく点に特徴がある。また、床面から炭が広い範囲に散布した状態で出土している。遺構の時期は、床面出土の遺物から古墳時代後期前半 (6 世紀前半頃) と考えられる。

調査時および注記の略号は「S 12」である。

なお、本遺構床面から出土した炭化材について、放射性炭素による年代測定を行った結果、測定値である pMC で 82.22 ± 0.24%、年代は 2σ の範囲で cal AD 422 ~ 543 (95.4%) の値が出ている。分析結果でみると、建物跡 3・4 とは 300 ~ 400 年程度の時間的な差があることとなる。

堅穴建物跡 8 (図 21・22)

5 A ~ B グリッドで検出した、平面方形を呈する小型の堅穴建物跡である。大きさは南北 2.7 ~ 3.1 m、東西 3.0 ~ 3.6 m (床面積約 9.9 m²) で、貼床は部分的である。深さは約 0.3 m と推定さ



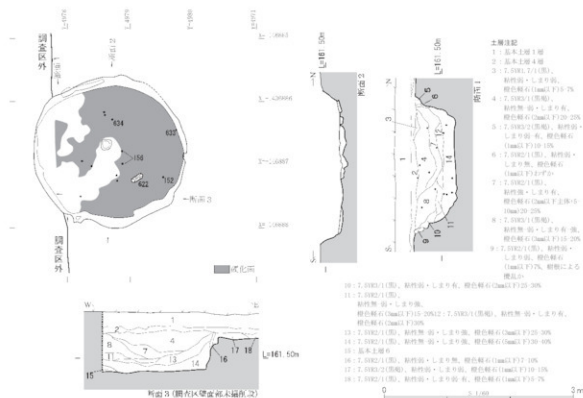


図 27 竪穴状遺構 1 平面・断面図

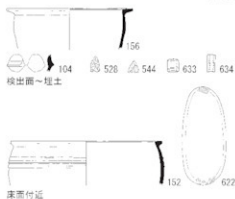


図 28 竪穴状遺構 1 出土遺物 (縮尺不同)

れる。柱穴と考えられるピットは検出できなかった。遺物は、埋土中からの出土であり、床面付近から出土した遺物はほとんどない。遺構の時期は、床面出土遺物が無いため明らかでないが、埋土の堆積状況の検討から弥生時代後期頃のものと思われる。調査時および注記の略号は「S 14」である。

竪穴建物跡 9 (図 23・24)

5C～Dグリッド北部を中心にして検出した竪穴建物跡で、若干離れた場所に位置している。平面形は不整形で、北西壁の中央付近と北東壁の北側に、不明瞭ながら突出壁状の箇所がみられる。掘方は基本土層 6 層を深く掘削しておらず、周辺に基本土層 6 層の露島御池軽石層が残っているため、平面形の把握が難しい部分が多かった。このように、6 層を掘り残すものは、竪穴建物跡 1 や 2 など、間仕切付建物跡にみられるため、間仕切付建物跡が崩れた形態である可能性もある。ピットは直線的に並んだ 5 基とその列から離れた北東部の 1 基を検出しているが、中央付近の 2 本が主柱になると考えられる。他の間仕切付建物跡と異なり、4 本柱ではないようである。ピットの深さは 0.6～0.7 m である。

遺物は、主に埋土中から出土しており、床面出土の土器はみられず、台石状の石器 (図 97-621) が出土しているのみである。埋土掘削中に鍛造剥片と思われるような微細な遺物は検出していないが、台石状の石器には全体的に鉄錆が付着するだけでなく、1 面には厚く付着している (巻頭図版 8-2) ため、金床石と考えられる。強く被熱した鍛冶炉本体はみつからないが、鍛冶作業を行っていた可能性が考えられる。建物跡の時期は、床面出土の土器がないため明らかでないが、建



図 29 土坑 3 平面・断面図 (190 は断面軸に反映)

物跡の構造や埋土の堆積状況から、古墳時代前期前半頃の時期と考えられる。この時期が妥当であるとすれば、中期にみられる高坏脚部を転用する鍛冶の前身的な位置付けを与えることができる。

調査時および注記の略号は「S 15」である。

堅穴建物跡 10 (図 25・26)

2 B～C グリッドで検出した平面形が不整形を呈する堅穴建物跡である。建物の主軸が 45° 近く傾いているため、土層観察用のベルトは対角線上に近い位置になってしまった。大きさは南北約

4.9 m、東西 3.5～3.9 m (床面積 16.9 m²) と南側の方がやや幅が広い。土層断面から推定される深さは約 0.4 m である。柱穴と考えられるピットは検出できなかった。なお、平面形や貼床の様子から切り合っている可能性、あるいは拡張している可能性があるが、調査時の観察で区別できなかったため、1 軒の建物跡として記録を行った。基本的に建物跡の切りあいがないことから、あるとすれば拡張の可能性が高いと考えられる。

遺物は、埋土中からの出土が多く、床面付近出土の遺物は限られる。また、埋土中の遺物は、堅穴建物跡 2 と同様に基本土層 3 層下部付近から多く出土している。遺構の時期は、床面出土の土器がないため明らかでないが、埋土の堆積状況の検討から、堅穴建物跡 7 に近い時期が考えられるため古墳時代後期頃のものとして推定される。

調査時および注記の略号は「S 8」である。

b 堅穴状遺構

上記の堅穴建物跡のほか、小型の堅穴状遺構を 2 基 (堅穴状遺構 1・2) 検出している。

堅穴状遺構 1 (図 27・28)

5 Z グリッドで検出した平面円形を呈する小型の堅穴状遺構である。大きさは径 2.0～2.2 m (床面積約 3.8 m²) で、土層断面から推定される深さは約 0.7 m である。柱穴の可能性のあるピットを中央で 1 基検出している。貼床は部分的で、東側を中心に硬化している。

遺物は、埋土中から弥生土器、管玉等が出土しており、床面からも弥生土器片が出土している。遺構の時期は、弥生土器のみの出土であることや、基本土層 4 層の堆積状況から他の堅穴建物跡よりも一段階古い時期が考えられるため、弥生時代中期前半頃と考えられる。

調査時および注記の略号は「S 17」である。

堅穴状遺構 2 (図 16・17)

3 B グリッド中央付近、堅穴建物跡 6 の北側に位置する、平面隅丸方形を呈する小型の堅穴状遺構である。大きさは南北約 3.5 m、東西約 3.4 (床面積約 9.8 m²) である。土層断面から推定される深さは約 0.5 m で、床面には貼床を施す。床面のレベルは他の遺構に比べるとやや高い。本遺構



图 30 土坑 4·5 平面·断面图

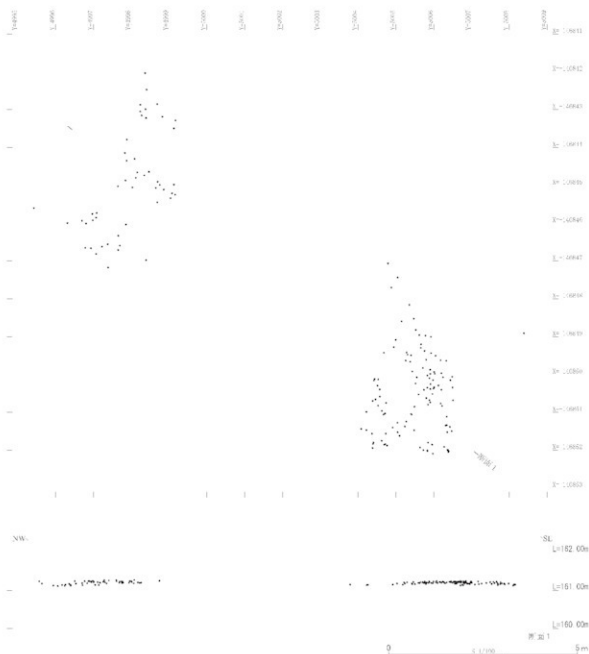


図 31 北部調査区 4 層内炭化種実出土状況 1

の上部において、基本土層 4 層中に 5 a 層に類似した黒色土（埋土 1）が平面的に検出されたため、遺構の存在を想定して、精査を繰り返すとともに、土層観察のベルトを残していた。しかし、結果的に遺構の検出ができたのは基本土層 5 b 層付近であった。埋土の堆積状況から、埋土 1 は、新しい時期の遺構を掘削した際の土であるのかもしれない。

本遺構に伴う遺物は出土していないため時期は明らかでない。埋土の堆積状況から竪穴建物跡 6 と同じかそれよりもやや新しい時期のものと考えられるので、古墳時代中期頃のものであろうか。調査時および注記の略号は「S 21」である。

c 土坑

当該時期の土坑は 3 基（土坑 3～5）検出しているが、土坑 4・5 は遺構ではない可能性がある。
土坑 3（図 29）

2 B グリッド北側、堅穴建物跡 8 の西側で検出した土坑である。頸部以下がほぼ完存する壺(図 71-190)が底面からやや浮いた状態で出土している。この壺の出土から、土坑などの存在を考えトレンチなどを設定したが、トレンチの長さが短かったことと、埋土の区別が難しかったことから、壺が出土した段階では土坑を認識することができなかった。土坑の存在が否定できなかったため、壺を取りあげた後、その部分をベルト状に残したまま周囲を掘り下げていったところ、基本土層 5 層内で土坑の輪郭を確認することができた。土坑の大きさは長さ約 1.9 m、幅約 1.6 m である。時期は出土した土器から古墳時代初頭頃の時期と考えられる。なお、壺内の基本土層 5 a 層に類似した土を水洗した後、含まれる鉱物類の観察を当センターの赤崎主幹に依頼したところ、Sz-4 降下以降の土である可能性が指摘されているため、後世に埋め直した可能性も否定できない。

調査時および注記の略号は「S 25」である。

土坑 4 (図 30)

1～2 A グリッド、堅穴建物跡 1 の東側で検出した土坑である。不整形であり、床面のレベルも一定していない。人為的なものでない可能性がある。遺物は出土していない。

調査時および注記の略号は「S 6」である

土坑 5 (図 30)

2 A グリッド南側、堅穴建物跡 7 の東側で検出した土坑である。底面は東西軸では比較的安定しているが、南北軸では起伏が大きい。土坑 2 と同様に人為的な遺構ではない可能性がある。目立った遺物は出土していない。

調査時および注記の略号は「S 24」である

d その他

以上の遺構のほか、イチイガシを中心とする炭化した種実がまとまって出土している箇所が 2 箇所確認された。炭化種実集中部 1 (図 31) では、炭化種実が 1 B グリッド東側～2 C グリッド北側にかけての範囲において、南東部を起点として北西方向へ扇状に散布している。図化した炭化種実は 71 点分である。途中、1 C グリッド西側において、炭化種実の分布がみられない部分がある。分布状況からすると、なんらかの影響によって炭化種実が消失したものと考えられる。上層からの掘り込みなどは確認できなかったが、出土状況から土坑などの遺構にともなう可能性は低いと思わ

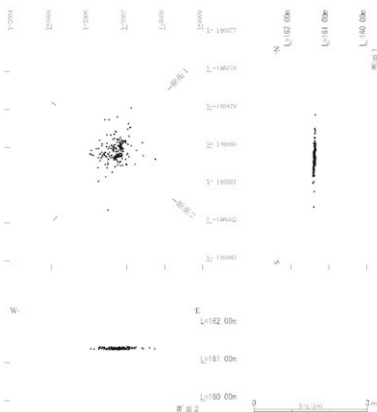


図 32 北部調査区 4 層内炭化種実出土状況 2

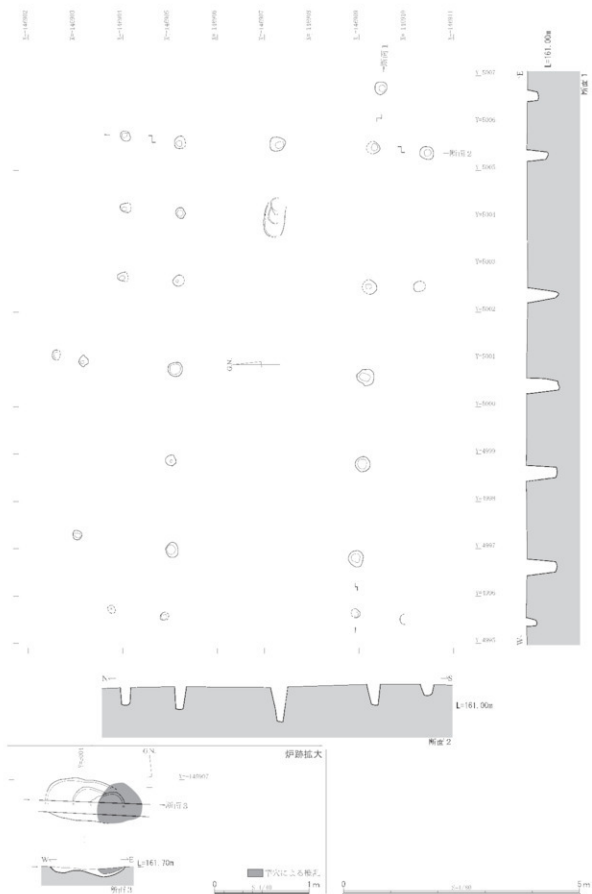


图 33 据立柱建物迹平面·断面图

れる。出土層位から集落が営まれた弥生時代～古墳時代の頃のものと考えられる。なお、1Bグリッドと2Bグリッド出土の炭化種実では出土レベルには大きな差はみられない。このほか、炭化種実集中部1は、南東部に

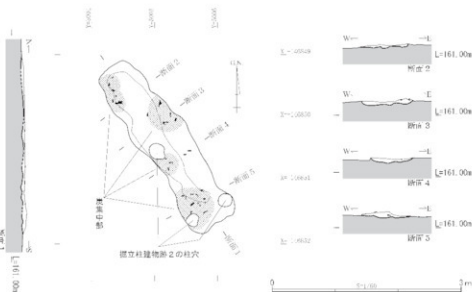


図34 炭集中土坑平面・土層断面図

において一部、後述する炭化物集中土坑と重なっている。

一方、炭化種実集中部2（図32）は集中部1とは異なり、4C・5Cグリッドの境界付近の直径2m程度の範囲に集中している。図化した炭化種実は190点である。調査時にも集中している出土状況を認識していたため、土坑など何らかの遺構底部に堆積した状況を想定して精査を行ったが、遺構は検出できなかった。取りあげた種実の出土レベルをみても、上下で大きな差がないため、特に掘り込みはなかったと考えられる。

ところで、散布図として図化した炭化種実は、ある程度個体のカウントが可能な形状が残っているものについて点上げを行った分である。個数の計数には使用できない半分に分かれたものや、炭化種実集中部として認識する以前にとり挙げたものもあるため、本来の数はさらに多かったと考えられる。いずれの集中部も基本土層4層を中心に出土している。

出土したこれらの炭化種実について集中部1の1点のみであるが、放射性炭素年代測定を行った結果、測定値であるpMCで $79.09 \pm 0.19\%$ 、年代は 2σ の範囲でcal AD 69～174（91.1%）の値が出ている。他の炭化物の放射性炭素年代測定の結果と比較すると、およそ竪穴建物跡3・4と同じ時期に該当している。建物跡の時期などから弥生時代後期後半頃～古墳時代初頭頃のものと考えられる。また、これによって、基本土層4層が竪穴建物跡を建て、人々が生活していた生活面であるという可能性が一段と高くなったといえることができる。

（4）古代～中世

本遺跡が形成されたもう一つの主要な時期として、桜島3テフラ降下前の15世紀中頃の時期をあげることができる。削平されている部分も多いが、遺跡全体にわたって当該時期の生活の痕跡を認めることができる。遺構としては、畦状遺構や道路状遺構・溝状遺構などを検出している。また、それよりも古い、基本土層4層上面でも掘立柱建物跡や炭が集中する土坑などを検出しており、これらは古代に遡る可能性が考えられる。また、道路状遺構の最初の掘削時期も、次章での検討から8世紀頃まで遡る可能性があり、ここではこれらの基本土層4層上面～桜島3テフラの間で検出された遺構について、古代～中世の遺構として報告を行うこととする。

a 掘立柱建物跡 (図 33)

7 B～Cグリッドを中心として検出した、2間×5間で東側を除く三面に底をもつと考えられる掘立柱建物跡である。建物跡は4層上面で検出しているが、中央東寄りに炉跡状の灰を含む土坑がみられる。検出面や炉跡の位置から、この掘立柱建物跡に伴うものと考えられる。また、炉跡の検出から、この検出面が生活面に近いレベルと考えられる。柱穴と考えられるピットは直径20～40cmで、外側に底部と考えられる一回り小さい柱穴を伴っている。ピットの深さは60～70cmである。

なお、炉跡と考えられる遺構内の炭について、放射性炭素年代測定を行った結果、現代のものであるという結果がでており、また、炭化材は竹材とされている。試料の採取には細心の注意をはらったつもりであるが、現代のゴボウの耕作にともなうトレンチャーや芋の貯蔵穴に切られていることから、現代のものが混入した可能性が考えられる。遺構に伴う遺物がないため、時期は明らかでないが、基本土層4層上面での検出あることから、古代頃のものである可能性がある。

調査時および注記略号は「S18」である。

b 炭集中土坑 (図 34)

1～2 Cグリッドの基本土層4層上面付近で検出した炭化物が集中した遺構である。炭化物が集中している状況は、4層に近い3層下部から確認でき、4層上面でそ

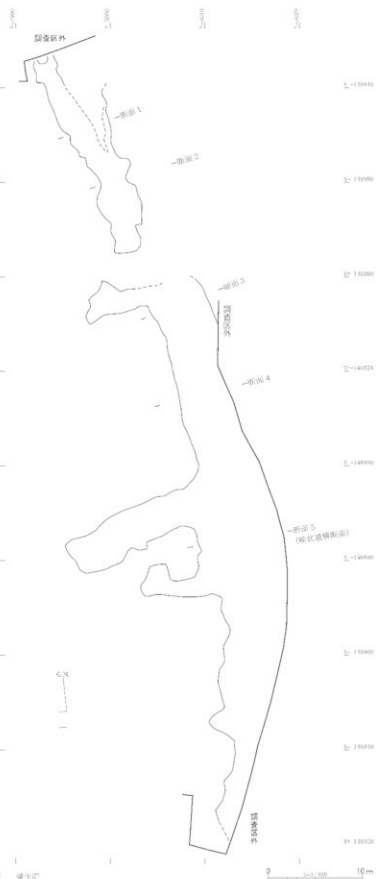


図 35 北部調査区1層下面桜島3テフラ残存状況



図 36 北部調査区 1 層下面付近土層断面図 (位置は図 35 に対応)

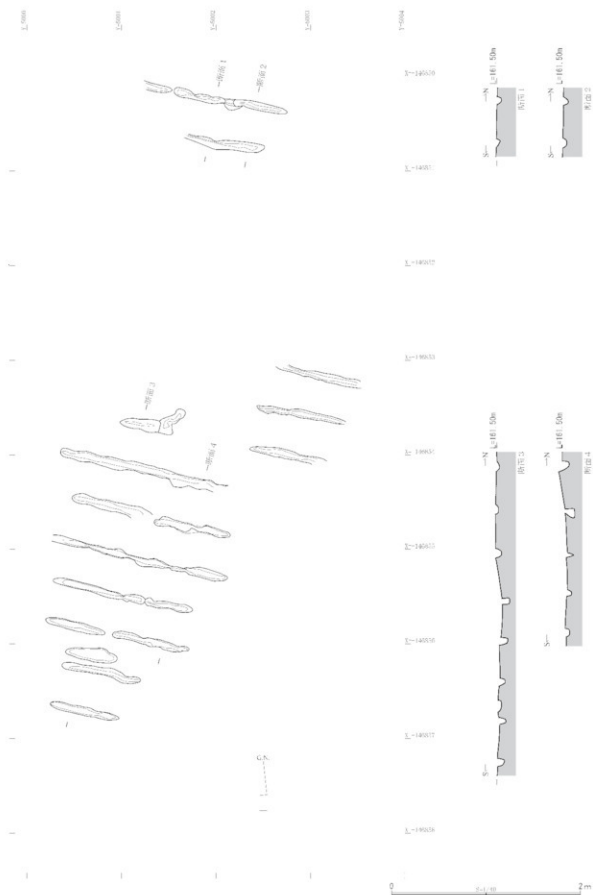


图 37 小沟状遗构平面·断面图 1

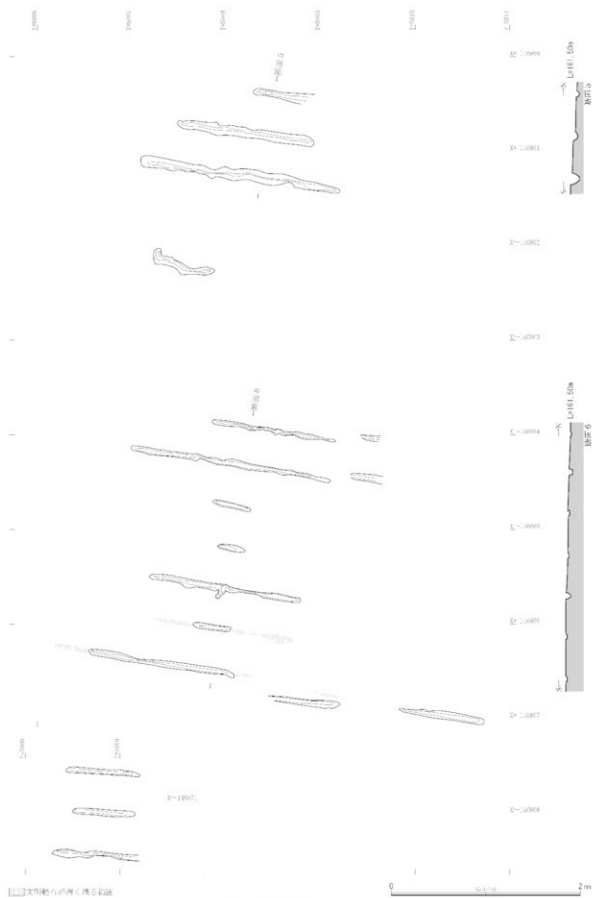


图 38 小溝状遺構平面・断面图 2

の輪郭を把握することができた。長さ約3.0m、幅0.7～0.9mで、深さは0.1mと浅く、掘り込み自体は本来それほど深くないと考えられる。土坑内の4箇所特に炭が集中している状況が確認できた。放射性炭素年代測定に出していないが、各箇所での炭サンプルの採取は行っている。土坑の性格については不明である。なお、炭化種実集中部1の種実も本土坑に混じって多く出土している。

出土遺物は付近から壺破片(図72-227)が出土している程度であり、時期は明らかではない。3層下部から4層上面で検出しているため、古代～中世の遺構であると考えられる。

調査時および注記の略号は「S20」である。

c 小溝列(図37・38)

2Cグリッド西側と3Cグリッド東側の桜島3テフラ直下で検出した、細い溝状の掘り込み列である。この遺構は、長さ1.5～2.0m、幅0.1m程度の細い溝状の回みが、幅0.3～0.4m程の間隔で並んでいる。形状や溝の間隔が類似することから、畦状遺構と同様に、複数の溝は一体の遺構であると考えられる。溝の埋土は桜島3テフラが充填しているものが多いが、中には基本土層3層に類似する黒色土を挟んで、底面に薄く桜島3テフラが堆積している箇所がある。このような状況から桜島3テフラ降下後の遺構である可能性もあるが、ほとんどは軽石が底面まで詰まった状態であるため、桜島3テフラ降下前のものと考えている。底面付近でみられる桜島3テフラについては、その堆積要因は明らかでない。畦状遺構の上部付近にも桜島3テフラが混じった部分がみられるため、定説と異なるが、1471年とされる大規模な噴火の少し前にも、類似するテフラを供給する小規模な噴火があったのではないかと考えている。

この小溝列については、その性格は明らかでない。根拠が乏しいが畑作に関係するものではないかと考えられる。南側で検出している畦状遺構とは異なる構造であるため、異なる作物を対象としたものと推定される。なお、名称については、既往の調査で「小溝状遺構」という名称が使用され、定着しているため、混乱を避けるために「小溝列」とした。名称は似ているが、形状は全く異なる点に注意が必要である。

調査時および注記の略号は「S2」である。

d 畦状遺構

今回の調査では桜島3テフラの直下において、畦状遺構を3基検出しているが、後世の耕作などにより失われている部分も多い。ただし、遺跡北部では桜島3テフラ層が南北に帯状に残存している状況(図35、写真図版9-1)を確認しており、この部分では遺存状況が良好である。この桜島3テフラ堆積部分については、当初、溝状遺構の可能性を考えたが、その後、後世の耕作の影響を受けていない範囲であり、桜島3テフラが残っていない範囲は耕作により消失していることがわかった。溝状遺構1では上層の堆積土(桜島3テフラが混じった灰色がかった土)の混入や、基本土層3層の上層への顕著な移動がみられない。また、畦状遺構1では道路の溝が平行していることから、これらの畦状遺構は復旧痕ではなく桜島3テフラ降下以前の畠の状況を反映していると考えられる。

なお、畦状遺構2からやや離れた場所であるが、桜島3テフラ直下層内からは、少量であるがイネやムギ類の珪酸体が検出されており、付近でこれらの植物の栽培が想定されている。これらの植物が畦状遺構で作られていた可能性がある。

遺構の時期は、いずれも桜島3テフラの直下であるため、15世紀中頃である。

畦状遺構1(図39～42)

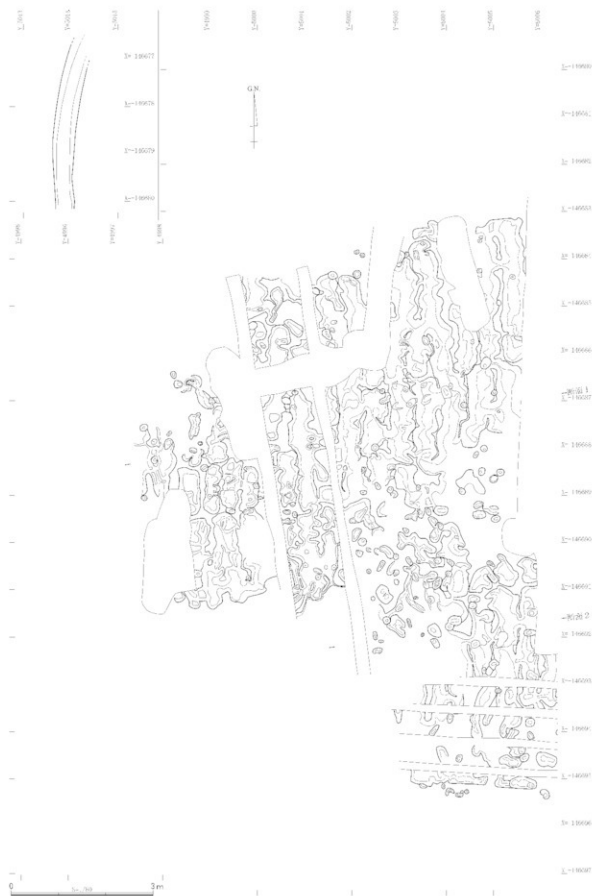


图 39 桩状遺構 1 平面图 1

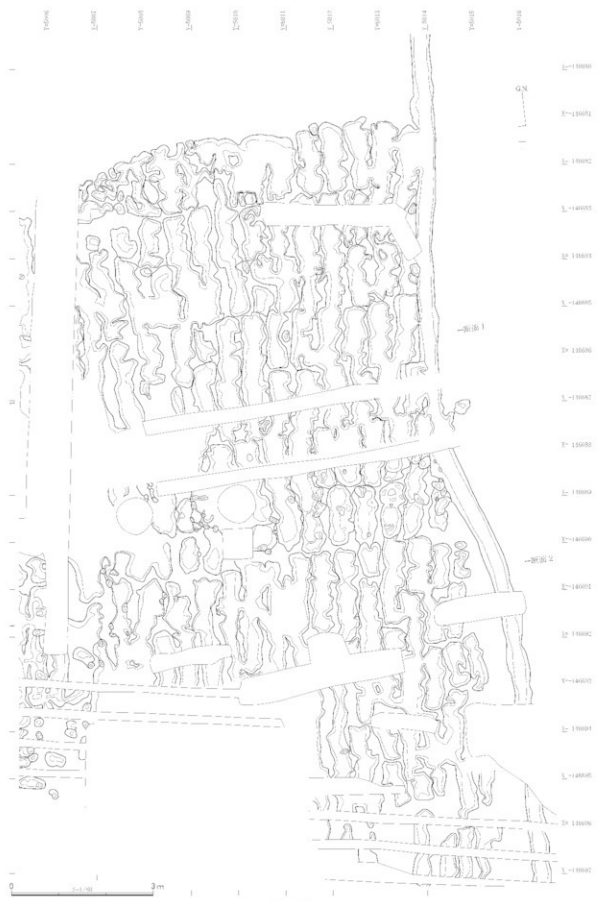


图 40 鞋状遺構 1 平面図 2

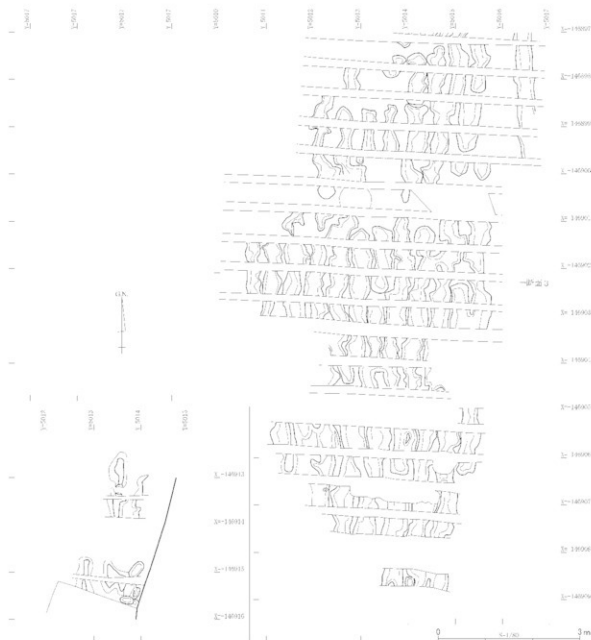


図41 畦状遺構1平面図3

遺跡北部調査区の東側を中心に検出している。上記のように、桜島3テフラが残存している範囲における遺構の残存状態は比較的良好である。畦状遺構を形成する基本土層3層の黒色土表面付近では、桜島3テフラと混じった部分が存在している。そのため、桜島3テフラを丁寧に取り除いたところ、畦に該当する盛り上がりは非常に幅が狭くなってしまった。実際には、図36の断面にみるように、上部に若干桜島3テフラが入る土層までが、畦の範囲であったと考えられる。

畦状遺構1の特徴としては、島の東端を通る道と思われる凹みを検出している点と、島の端とを思われるラインを検出している点にある。島の東端を通る道は、南北に伸びており、遺存状態のよい北側は調査区外まで伸びている状況を確認することができた。この道を境に東側はほぼ平坦な状況で、畦状遺構はみられない。巻頭図版7-1にみるように、この道状の凹みは桜島3テフラで完全に埋没しており、畦状遺構が道を境にして西側に作られている状況からも、この畦状遺構が復

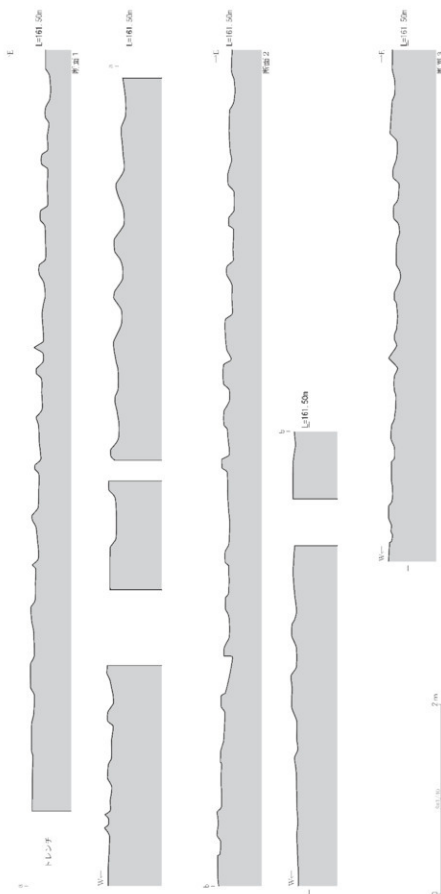


図 42 畦状遺構 1 断面図

旧痕ではないことを示している。このように考えると、畦状遺構の表面にある桜島3テフラ混じりの黒色土の形成要因が気になるところである。小溝列の箇所ですべたように、桜島3テフラに黒色土が挟まれている部分があり、そのような状況を考えると、基本土層2層を形成するような大規模な噴火の前に、少量の軽石を供給するような噴火があったのではないかと推測される。その小規模噴火後の人々の活動によって、遺構の中に桜島3テフラ類似の軽石が混じることになったのではないだろうか。

一方、島の端については北側で確認することができた。特に道に近い北東部では畠が形成されていない場所を明瞭に確認することができる。南側および西側については、そのような端部を確認することは難しいため、さらに広がっていた可能性もある。したがって、畠の範囲は南北30m以上、東西16m以上の範囲になる。畦状遺構をさらに細かくみる



图 43 畦状道横 2 平面图

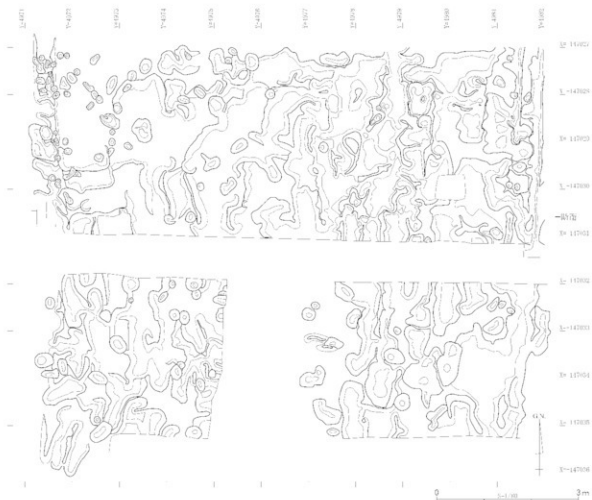


図 44 畦状遺構 3 平面図

と、構造として、畦に該当する部分は南北の長さ 1.3～1.5 m 程度を単位として位置を若干東西にずらして並んでいる状況を確認できる。ただし、南側では後世の耕作に伴うトレンチャーの影響もあって不明瞭であり、同じ列が続いているようにも見える。また、西側では畦状の盛り上がりの列が乱れており、不明瞭になっている。

調査時および注記の略号は「S3」である。

畦状遺構 2 (図 43・45)

遺跡南部の北東部付近、18 D～20 C グリッドで検出している畦状遺構である。検出した範囲は一部であり、さらに東側の調査区外へと広がっていると考えられる。遺跡北部と比べると基本土層 2 層である板島 3 テフラの遺存状況は不良で、調査区壁面寄りの部分では、後世の耕作による影響が大きい。畦状遺構 1 と同様に、およそ長さ 1.3 m 単位の畦状の盛り上がりを単位としてみとめることができる。

また、畦状遺構の残存状況から、島の南西端付近にあたると思われる、西側と南側には畦状遺構の凹凸は広がっていない。さらに、西端部は道路状遺構の上端から 1.5 m 前後の距離があり、道路状遺構に平行している。畦状遺構と道路状遺構の間は比較的平坦となっている。このような道路状遺構との位置的な関係から、畦状遺構 2 も復旧痕ではなく、板島 3 テフラ降下以前の島の痕跡であると考えられる。一方、南端部については、西辺とはほぼ直交する位置であるが、分岐して西側に延びた道路状遺構のラインとは若干ずれている。この南端部の南側には、この畠を区画するような

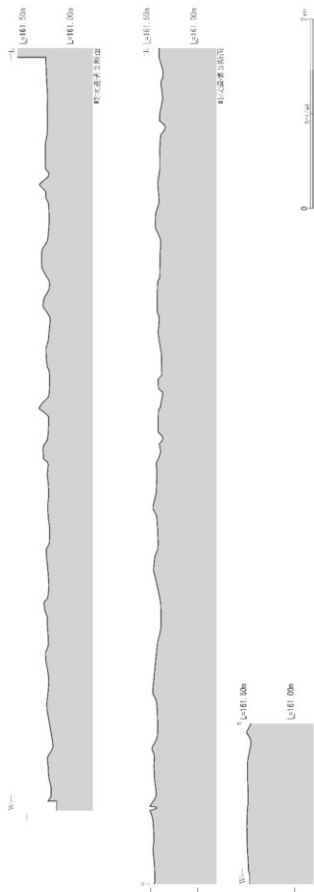


図45 畦状遺構2・3断面図

溝などの遺構は検出していない。

なお、さらに南側にもわずかに桜島3テフラが堆積した部分があり、別の畦状遺構が存在した可能性もあるが、ほとんど削平されており明らかではない。

畦状遺構を構成する黒色土の上部において、青磁片(図85-497)や滑石製石鍋の再加工品(図100-635)が出土している。

調査時および注記の略号は「S 29」である。

畦状遺構3(図44・45)

畦状遺構2から道路状遺構を挟んで西側の、19～20 Aグリッドを中心として検出した畦状遺構である。後世の耕作の影響により、桜島3テフラの残存状況が非常に悪い。検出時には、桜島3テフラのわずかな残存状況から、畦状遺構が残存している可能性を考えたが、図のようにほとんど畦列を確認できなかった。ただし、北端部については、図の北側にさらに広がっている様子はみられないため、およその範囲を示していると考えられる。この部分については、溝状遺構2と同様に、道路状遺構の上端から約1.5 mの位置にあり、道路状遺構に平行している。このほか、溝状遺構1に挟まれた位置にあるため、その関係が注目されるが、溝状遺構に近い南側の形状は明らかできなかった。

調査時および注記の略号は「S 30」である。

● 道路状遺構(図46～55)

遺跡南部の北側、18～24グリッド列にかけて検出した遺構で、南部調査区の中程の23 Bグリッドで東方向へと向きを変えている。また、北側の19 B～Cグリッド付近で分岐して西側へと伸びている。南北に直線的に延びた部分の長さはおよそ60 mである。この道路状遺構は、直線的に延びた部分と、西側へ分岐した部分は埋土の上部に桜島3テフラが厚く堆積している。しかし、23 Bグリッド付近から東側へと方向を変えてい

る部分では、直交する溝状遺構4に堆積したものを除いては、桜島3テフラの堆積はほとんど確認できていない。ただし、24 Cグリッド付近では、わずかに桜島3テフラの堆積を確認しているが、東側に広がっているかは不明である。そのため、調査範囲部分に限られるが、桜島3テフラ降下前にはこの東へ延びる道路部分はほとんど埋没していたと考えられる。

道路状遺構の桜島3テフラ下位の埋土は、大きく上下二層に分けることができる。上層は基本土層3層に類似した黒色シルト層で、霧島御池軽石をほとんど含まない、あるいは含んでもわずかである。また、層のしまりもそれほど強くはない。一方、下層はしまりがあるほか、霧島御池軽石を含み、基本土層5 a層に類似している。そのため、遺跡南部の前半期の調査では、道路状遺構の最初の掘方は検出できていない。前半期の調査でもトレンチなどで土層の確認を行ったが、桜島3テフラの下層では基本土層5 aとの区別ができなかったため、テフラ降下前に掘削されたものと判断した。ただし、土層断面において、桜島3テフラ下面よりも下位のレベルで、硬化面でみられるような鉄分の沈着によると思われる赤化したライン（図53-断面4・6・7の点線）を確認している。調査時は分層が困難であったため、道路底面よりも下層に何らかの理由で鉄分が沈着したものと解釈した。しかし、調査の全体を通してみると、この部分に掘方底面あるいは上層埋土の底面が位置している可能性が高い。ただし、この北端部付近では基本土層5 b層においても掘り込みは確認できなかったため、遺構底面までの深さ自体が浅かったものと考えられる。

道路状遺構の主な使用面を各掘削段階と仮定すると、使用面は掘方底面と、上層埋土底面の2つが存在する。ただし、桜島3テフラ層上面にも硬化面が形成されていることや、桜島3テフラ層下面の状態などから、掘削段階にかかわらず恒常的に使用されていたものと考えられる。このような状況から、以下では、削平により不明瞭な桜島3テフラ上面を除き、桜島3テフラ下面、上層埋土下面、掘方底面の各段階についてその様相をみている。上層埋土下面の掘削面は、遺構全体を通しては検出することはできていないが、図55にみるように、土層観察ベルトとして残しておいた極狭い範囲については、上層埋土下面の検出に注意しながら掘り下げを行った。なお、このような上層埋土と下層埋土における霧島御池軽石の含み方の違いが大きいことから、両者の時間的な間隔が大きいと考えられる。

このほか、道路状遺構の土層断面箇所からサンプルを採取して、当時の環境を復元する目的で、植物珪酸体分析と花粉分析をおこなった。その結果、日当たりの良い草原的な環境で、周辺に照葉樹林を初めとする樹木が存在していた環境が想定されている。その中で、桜島3テフラ直下では、数量は少ないながらもイネやイネの籾殻に由来すると思われる珪酸体が検出されている。分析の所見では、稲藁にともなう珪酸体と推定されており、様々な利用方法が考えられている。道路という性格上、低地の水田から稲等を運んでいた可能性も考えられる。あるいは、基本土層3層からもイネ、ムギ類の珪酸体も検出されているため、周辺で栽培されていた作物を示している可能性もある。

調査時および注記の略号は「S 27」であるが、遺構の範囲が広いいため、出土遺物等の細分には遺構略号とともにグリッド名を付けて区別を行っている。

桜島3テフラ層下面

桜島3テフラ降下直前に使用されていたと考えられる面で、「上層埋土上面」ということもできるが、上層埋土が桜島3テフラ硬化前に掘削されている可能性があるため、「桜島3テフラ下面」としておく。規模は、南北の長さ約60 m、幅は上端で1.4～2.4 m、底面で0.5～1.7 m、検出面からの深さは0.5～0.8 mである。19 B～Cグリッドで西側へと分岐しているが、西へ延びる

道路状遺構は上端で幅1.3～1.5m、底面で0.6～0.7mとやや狭くなっている。また、19B～Cグリッド南部付近の分岐点は一端狭くなったのち、再び広がってさらに南側へと延びている。この狭くなっている箇所は何らかの施設が存在する可能性が考えられたため、精査を行いながら掘り下げたが、ピットなどの遺構は確認できなかった。そのため、この狭くなっている部分の意味は明らかでない。この分岐点よりも若干北寄り、19Cグリッド西側中央付近には、道から上がるスロープ状の細い道が分かっている。また、19Aグリッド西側にも、西へ延びる道を横断する土橋状の高まり（写真図版12-2）が形成されている。これらのスロープや土橋状の高まりの存在から、道路状遺構で囲まれた調査区の北西部分（18・19A～C区）に、建物跡などの何らかの遺構が存在する可能性を考えて精査を行ったが、屋敷跡やピットなどの明確な遺構は検出できなかった。

19B～Cグリッドの分岐点より北側では、西側から来た道と、南側から来た道の凹みが、そのまま平行して続いている。途中で一端途切れるものの、やや離れた位置から再び北側へ続いており、18～19C区で「Y」字状に大きく2本の道に分かれている。この内、「Y」字状の道の東側部分はそのまま北に延びている。それに対して、西側の道の底部にはさらに細かい凹みを確認することができる。この「Y」字状に分岐する西側の道は、調査区端付近ではさらに3本程度に分岐するとともに、深さが次第に浅くなり、調査区壁面に近い部分で消失している。表面には薄いものの板島3テフラが堆積しているため、スロープ状に浅くなっていったと考えられる。

一方、19B～Cグリッドの分岐点より南側では、ほぼ同じ幅で変わらず南へ延びて、23Bグリッド付近で次第に浅くなって消失している。底面には浅い凹みが形成されており、北寄りでは2本、中央から南では1本の浅い凹みが確認できる。南端部ではこの凹んだ部分を中央にして3本の細い

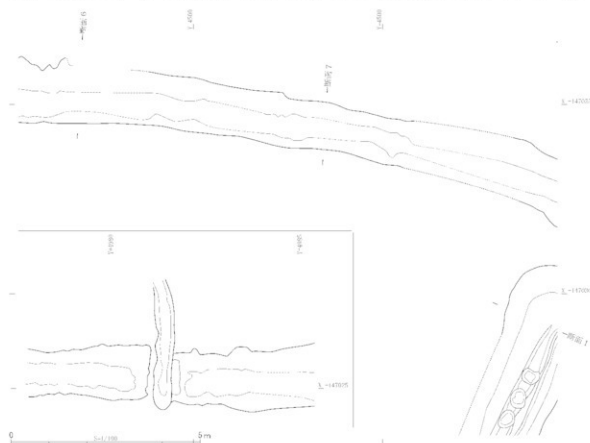


図46 道路状遺構平面図1（板島3テフラ除去段階1）



図47 道路状道構平面図2 (桜島3テフラ除去段階2)

道に分岐している。また、部分的に不明瞭ながら20 B区では「波板状凹凸面」状の凹みがみられるが、硬化面は形成していない。下層の「波板状凹凸面」が埋没する途中の状況を示しているのかもしれない。

この面の時期は、桜島3テフラにより覆われているため、1471年という定点を与えることができる。ただし、土層断面の観察から、上層埋土の厚さにバラツキがみられる。すなわち、23 Bグリッドから東へのびる部分はこの段階では完全に埋没している程度の厚さに対して、南北に直線的に延びる部分の上層埋土は薄い。そのため、桜島3テフラ降下前にも掘り直されている可能性が高いが、上層埋土内における掘削面の分層はできなかった。

上層埋土下面

基本土層3層に類似した上層埋土の底面にあたる。下層埋土の上部はこの時点

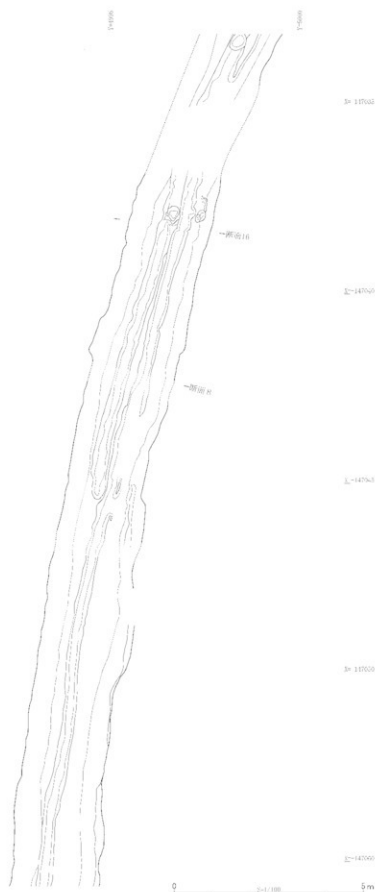


図48 道路状遺構平面図3 (桜島3テフラ除去段階3)

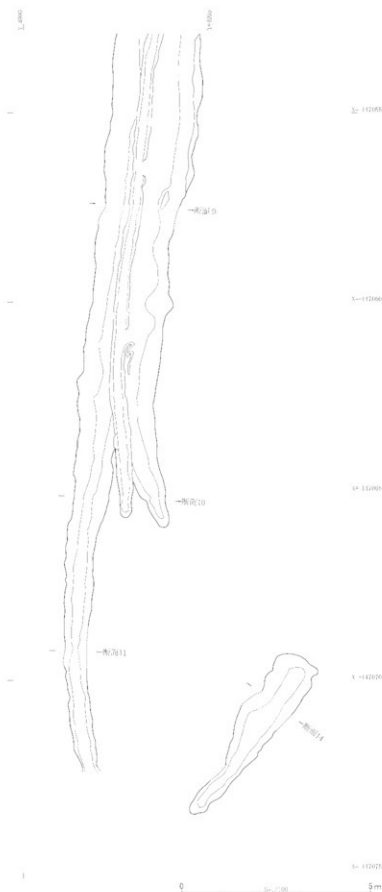


図49 道路状遺構平面図4 (桜島3テフラ除去段階4)

では掘削されて消失していると考えられることから、「下層埋土上面」ではなく「上層埋土下面」と表現している。上層埋土と下層埋土は霧島御池軽石と思われる橙色軽石の含み方で区分ができるものの、平面的な掘削では両層ともに黒色シルト層が基本となるため、境界面の区別が難しい。しかし、部分的であるものの上層埋土下面に鉄分が沈着して赤化した部分があり、そこはやや硬化した面を形成しているため区別が可能である。ただし、硬化の程度は下層に比べると弱い。なお、20 B グリッド半ばから北側では、既述のように黒色土中の赤化面としてしか確認できていないため、形状は不明である。

写真図版 22-3 にみるように、硬化面はある程度の幅をもった筋状に延びており、間に硬化していない部分が存在している。また、写真図版や図 53 断面 9 にみるように、硬化面は一段高い平坦面とほぼ同じレベルとなる箇所がみられるため、この範囲が上層埋土下面の掘削面になると考えられる。ただし、各土層観察用のベルトで観察する限り形状は異なっており、また、全体に硬化面を検出しているわけではない。

この上層埋土下面の掘削面は、掘方と同様に 23 B グリッドから東側へへのびる部分でも確認することができ、23 B グリッドから南側へのびる道よりも幅が広い。そのため、東へ延びる道の方が主要な道であったと考えられる。また、

東へ延びる部分は、下層埋土自体のしまりが硬化面状に強く、往來が多かった可能性を示している。

この掘削面の時期は、赤化した弱い硬化面上付近で白磁Ⅳ類が出土していることや、南東部では桜島3テフラ降下前に埋設しきっていることから、12～13世紀頃の時期が考えられる。

掘方底面

本道路状遺構が最初に掘削された段階である。上層埋土下面と同様に、20 Bグリッドの半ばから北では検出できていない。この段階では、底面の硬化が強く、部分的に「波板状凹凸面」が形成されている。上層埋土下面と同様に、南東部の硬化が著しい。この掘方底面では、道路の東側が一段低く掘削されている。図上では、西側に一段高い面ができていたが、これは上層埋土下面の掘削面に対応しているため、この段階ではこの平坦面は存在していない可能性が高い。このように考えると、最初の段階では、23 Bグリッドから南へ延びる道に相当する凹みはなかった可能性がある。図51にみるように、底面の「波板状凹凸面」の凹みの中には、両方の道をまたぐような状態のものがみられるため、最初の掘削と上層埋土下面の掘削時期の間に道が変化していったのかもしれない。このように考えると、土層断面では確認できないが、上層埋土下面の掘削以前にも何度かの掘削が行われていた可能性がある。

既述のように、掘方底面には「波板状凹凸面」が形成されている部分がみられる。この「波板状凹凸面」は主に21 Bグリッドと23 Bグリッドから東へと延びる部分にみられ、特に東へ延びる部分は連続している様子を確認できる。また、両者はおおよそ横方向に長い楕円形状を呈している点で類似しているが、詳細な形状では差がみられる。21 B区付近の凹みは、切り合ったような形状を呈しており、形状が一定していない。一方の23 Bグリッド以東では、中央が一段低く、両端が高くになっている形状のものが多く、底面の硬化も、南東部の23 Bグリッドの凹みの方が強い。「波板状凹凸面」の埋土は、21 Bグリッドでは硬化の程度は弱いが、23 Bグリッド以東の「波板状凹凸面」では、充填している下層埋土全体が硬化している。そのため、調査時において、南東部の「波板状凹凸面」掘削の際には、下層埋土の掘削に力はいはるものの、「波板状凹凸面」の硬化面で埋土が剥がれるように取れるため容易に検出することができた。さらに、21 Bグリッド以東では、「波板状凹凸面」の間隔が不規則な部分や、凹みが重なったような部分がみられるため、形成時期は一時期ではなく、長い期間にわたっていると考えられる。

はじめにみた埋土の差異だけでなく、以上のような状況を考えると、最初の掘削から上層埋土底面の掘削までには、かなりの時間的な差があると考えられる。なお、掘方底面付近で、極僅かながら黒色シルト層の埋土とは明らかに異なる砂状の堆積物を検出している。この砂状堆積物の観察の結果では、8世紀後半頃の桜島や霧島火山群の噴火に由来する可能性がある軽石を多く含んでいることが確認されている。掘削時期の年代について、他に判断する根拠に乏しいことから、8世紀後半以降に掘削された可能性を考えておきたい。

f 溝状遺構 (図56～59)

遺跡南部調査区において7条の溝状遺構を検出しているが、遺跡北部では溝状遺構は検出していない。全体的にみると、道路状遺構の部分で途切れているものが多いが、東西方向へ延びるものが5条、南北方向へ延びるものが2条である。東西方向、南北方向へ延びる溝は、いずれもおおよそ平行関係にあり、南北方向と東西方向の溝では直交する位置関係にある。埋土は南端の溝状遺構7を除き、基本的に黒色土で共通している。溝状遺構7のみは、褐色土や黒色土がブロック状に混在しており、様相が異なる。土層の観察からは人為的に埋め戻されている可能性が考えられる。溝状

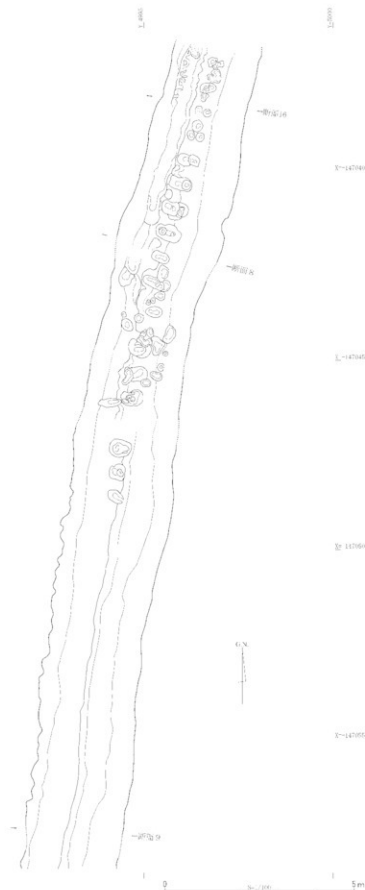


図50 道路状遺構平面図5 (完掘段階1)

遺構7は他の溝状遺構と比べて幅が広く、形状が若干異なることから、遺構の性格も異なる可能性がある。なお、道路状遺構2・4・5は途中で途切れているが、その位置はほぼ共通している。溝状遺構4・5の途切れている位置は道路状遺構が南へ延びている部分の延長にあたるため、この途切れた部分は道部分に該当する可能性が考えられる。この途切れ方と、各道路状遺構の位置、および道路状遺構の掘削時期の対応を考えると、これらの溝状遺構は同時期ではなく、時期差が存在することが考えられる。

なお、各遺構ともに長く、複数のグリッドにわたっているため、道路状遺物の出土位置の細分には、遺構略号の後にグリッド名をつけて区別を行っている。また、前半期の調査では、東西両端の溝が同一のものかの判断ができなかったため、結果的に同じ遺構でも複数の遺構略号がついてしまうこととなった。しかし、遺構略号の変更は後々混乱を招くことと、同一遺構と理解していれば、遺物の細分も可能であることから注記にはそのまま



图 51 道路状遺構平面図 6 (完相段附 2)

の略号を用いている。

以下の7条の溝のほか、溝状遺構7を切る、南北方向に延びる時期が不明な浅い溝状遺構（「S42」）を1条検出している。この溝状遺構の埋土は、桜島3テフラが混じった砂質土であり、桜島3テフラ降下以降のものである。また、この埋土は基本土層1b層に近い土質であり、時間的にはかなり新しい遺構と考えられるため、本報告書内では図示していない。なお、附図には参考として本溝状遺構を加えている。

溝状遺構1

主に21グリッド列に位置する、東西方向へと延びる溝状遺構で、道路状遺構の手前で途切れており、道路状遺構を意識していると考えられる。検出した範囲では、長さ約21.2m、幅0.9mである。上部は削平されていると考えられ、実際にはもっと深さがあったものと思われる。他の溝状遺構との関係は不明である。

調査および注記の略号は「S41」である。

溝状遺構2

24グリッド列の西部に位置する溝状遺構で東西方向へと延びている。検出範囲で長さ約24.6m、幅0.8～0.9mである。道路状遺構の手前で途切れており、道路状遺構を意識したものと考えられる。道路状遺構と切り合う形で本溝状遺構の続きの可能性がある凹みを検出しているが、東側へと延

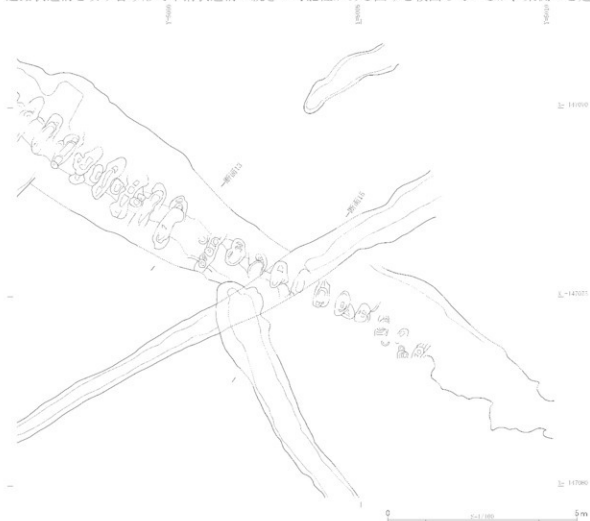


図52 道路状遺構平面図7（完掘段階3）

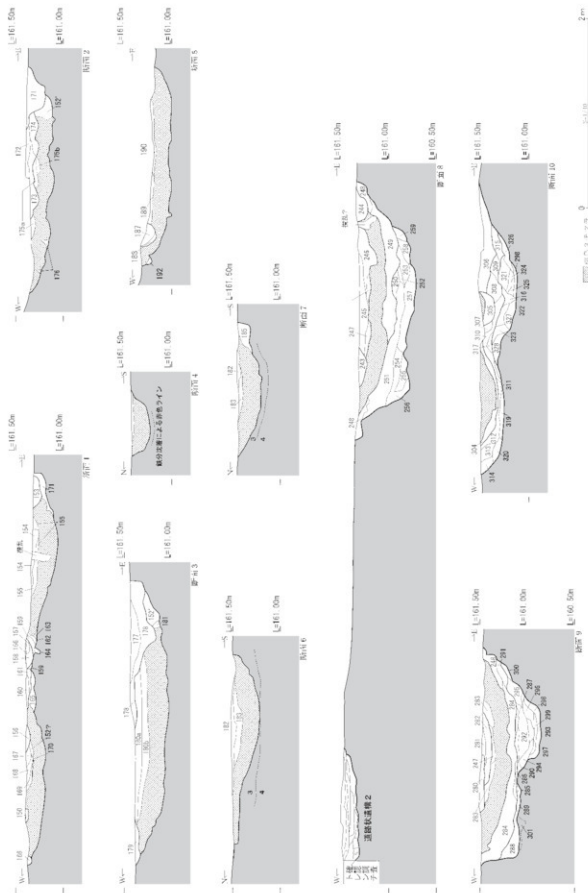


図53 道路状遺構土層断面図1

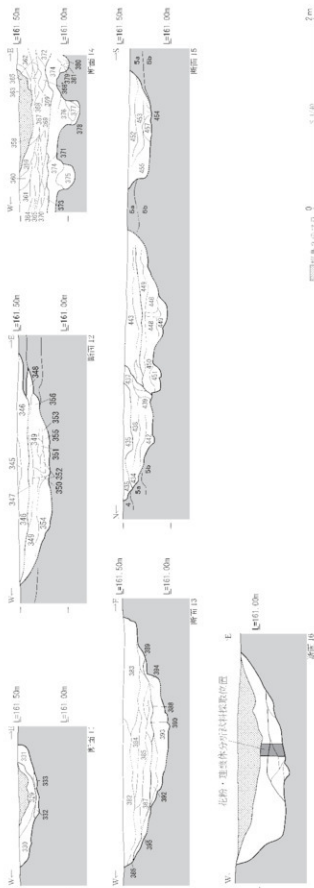


図54 道路状遺構土層断面図2

びておらず、一連のものかどうかはあきらかでない。また、切り合う両者の埋土の区別が困難であるため、道路状遺構との前後関係は不明である。また、調査区西端部に溝状遺構3と切り合っているが、埋土による先後関係は明確でないものの、道路状遺構位置関係などから、溝状遺構4・5よりも古い可能性が考えられる。

調査時略号および注記名は「S 37」である。

溝状遺構3

23～24 Zグリッドに位置する南北方向へと延びる溝状遺構であり、大部分は調査区外に位置していると思われる。検出範囲で長さ約8.8m、幅約1.0mである。溝状遺構2と切り合っており、明瞭な区分は難しいが、土層の観察から本遺構の方が古いと考えられる。

調査時および注記略号は「S 36」である。

溝状遺構4

25 Z～23 Cグリッドに位置する溝状遺構で、間で二箇所途切れている。途切れた中央部分は、東西の溝とは若干方向が異なり、方向としては溝状遺構5の延長のようにも見える。しかし、溝状遺構5の埋土に桜島3テフラが含まれないこと、溝状遺構4西側部分の埋土に桜島3テフラがみられることから、溝状遺構4で一体として機能していたと考えられる。検出範囲で長さ約48.3mで、途切れている範囲は西側で約3.7、東側で約7.5mである。

西側部分の一部と、中央部分において桜島3テフラが埋土に含まれているため、近接する3本の溝状遺構の中では最も新しい時期に位置付けることができる。

調査時および注記略号は、「S 33」・「S40」である。

溝状遺構5

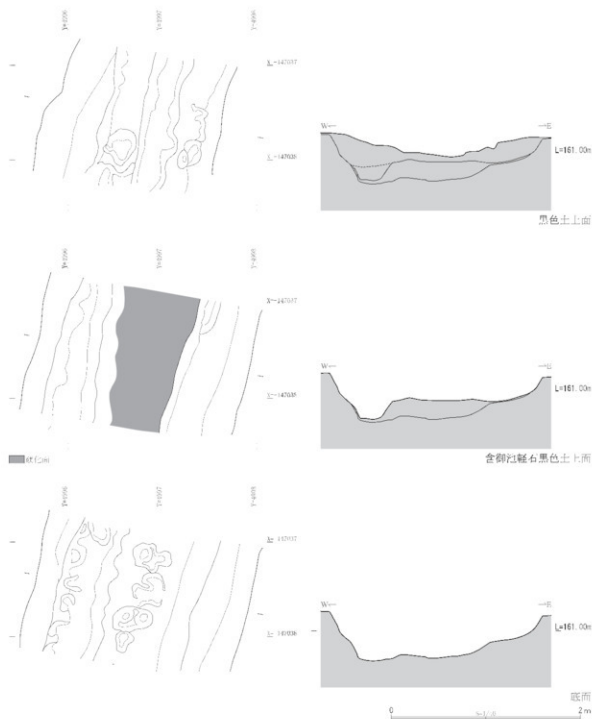


図 55 道路状遺構の変化

26 Z～24 C グリッドに位置する溝状遺構で、途中一箇所で途切れている。しかし、その範囲は他の溝状遺構に比べると狭く、道路状遺構をあまり意識していない様子をうかがうことができる。検出範囲で長さ約 48.0 m、幅 1.0 m である。

掘削状況などから、本溝状遺構は道路状遺構を切っており、また、土層では不明瞭であるが溝状遺構 6 も切っていると考えられる。溝状遺構 6 が道路状遺構の上層埋土を切っていることから、それよりも新しい時期のものと考えられる。道路状遺構との位置関係などを含めると、溝状遺構 2→溝状遺構 5→溝状遺構 4 の順で掘削されたのではないかと考えられる。



图 56 滑状构造平面图 1

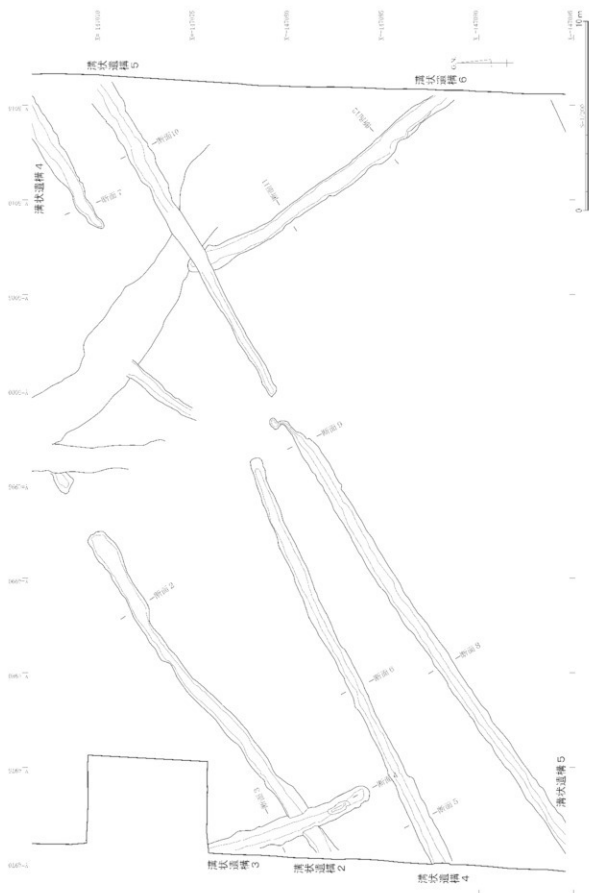


图 57 溝状遺構平面図 2

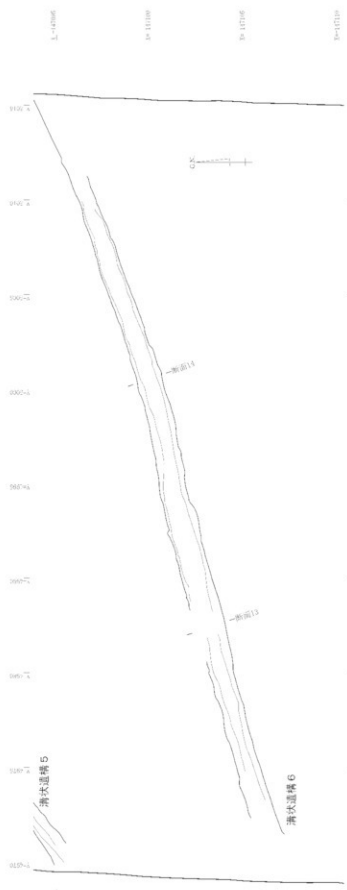


図 58 溝状遺構平面図 3

調査時および注記略号は「S 38」である。

溝状遺構 6

24～25 C グリッドに位置する溝状遺構で、南北方向へと延びており、さらに東側調査区外へと続いている。検出範囲で長さ約 16.8 m、幅 0.8～1.2 m である。

土層の観察から、道路状遺構の上層埋土を切っており、それよりも新しく位置付けることができる。溝状遺構 5 との前後関係は土層でははっきりしないが、掘削状況から溝状遺構 6 が古いと考えられる。

なお、25 C グリッドでは、溝底面で土坑 1 を検出している。位置的には、底面の範囲に収まっていることから、溝に伴う可能性もあるが、他の溝状遺構では同様な掘り込みはみられないことや機能的な面から、縄文時代の遺構と考えた方が良くであろう。

調査時および注記略号は「S34」である。

溝状遺構 7

南部調査区の最も南側、27 Z～26 C グリッドに位置している溝状遺構である。検出範囲の長さ約 41.0 m、幅 1.3～1.6 m であるが、後世の耕作による攪乱が著しく、断片的に確認した部分が多く、図示した形状も不確実である。最初に述べたが、他の溝状遺構よりも幅が広く、埋土も黒色土だけではなく、褐色土のブロックが混じっている。自然堆積というよりも埋めもどしたような堆積という印象を受ける。底面も比較的平坦であることから、溝というよりも道路としての機能があっただろう。



図 60 掘立柱建物跡 2 平面・土層断面図

で9間以上の規模と考えられる。

現在の道路の向きに対応しているため、比較的新しい時期のものと思われるが明らかではない。

調査に参加した作業員の話では、昔寺が建っていたという話を聞いたことがあるということであり、その寺院の跡であるのかもしれないが、時期は不明である。

道路状遺構 2・3 (付図2、巻頭図版4)

近世以降の道路状遺構を、古代～中世の道路状遺構に平行して検出している。この近世以降の道路状遺構については、2時期のものを検出している。道路状遺構2は、掘方内に砂質土を敷き固めたやや幅が狭いもの(付図2の20B区以北)である。この上面を道路とした可能性がある。道路状遺構3は、幅が広く、長方形の掘方内に拳大から長さ20cm程度の礫を敷き詰めたものが一定の間隔で並んだもの(付図2の20B区以南)である。おそらく、さらにその上に道路本体に相当するなんらかの構造物が存在したのと考えられる。この2つの道路状遺構は、道路状遺構3が道路状遺構2を切っている。時期は近世～近・現代の道路状遺構と考えられる。これらの道路の存在から、大年遺跡では、古代以降道路としての機能が1,000年以上ほとんど変わることなく機能していたことが明らかとなった。

調査時および注記の略号は、「S 28」である。

第3節 出土遺物

(1) 土器・土製品

出土遺物も遺構と同様に、時代別に報告すべきであるが、石器については包含層出土のものが多く、明確に帰属時期を示すことが難しいため、本節では遺物の種類ごとにおいて報告を行う事とした。

縄文土器 (図61～図66)

縄文土器は、晩期のものを中心として出土しており、その他に早期土器(図61-1)がわずかと、後期土器が若干出土している。

1は押型土器で、3A区の10層から出土している。文様は山形と思われるが、山の凹凸は弱く不明瞭である。早期の土器については、図示した押型土器以外に、無文土器の破片が数点出土しているが、細片のため図化していない。なお、基本土層10層は、桜島11テフラを含む基本土層9層と、桜島薩摩火山灰を含む基本土層11層に挟まれているため、およそ12,800～8,000年前の時期に相当する。

2～15は後期土器と考えられる土器の破片である。2は口縁外面に長さ6mm程度の刺突文を連続して廻らせ、その下に斜行の連続した沈線を施したものである。刺突文はわずかに凹凸が認められ、貝殻腹縁によるものと思われる。また、沈線間には横方向にのびる凹が若干間隔を空けて数条みられ、縦断面では凹凸をなしている。縄文を意識したのと考えられる。3は指宿式系と考えられる土器であり、列点とその周囲に凹線が廻っている。4～16は市来式系と考えられる土器で、条痕地に二枚貝復縁による刺突文や短沈線などが施されている。4～6は長さ2cm程度の貝殻腹縁による刺突文を廻らせており原体は類似している。4・5は刺突文が2段であるが、5については口縁部側の刺突文は全周していないことから、波状口縁になる可能性がある。また、5は内面にコゲ状の付着物が若干みとめられる。7も長さ2cm程度の貝殻腹縁による刺突文を廻らせるほか、刺突文の下部に列点文と思われる凹みが確認できる。刺突文の原体は4～6と異なっているようであ

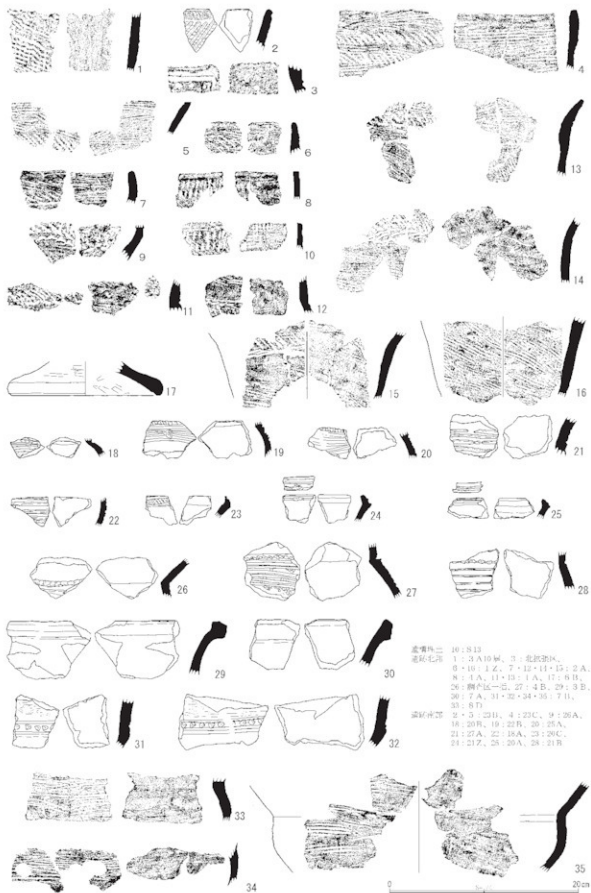


图61 土器实测图1 (绳文土器1)

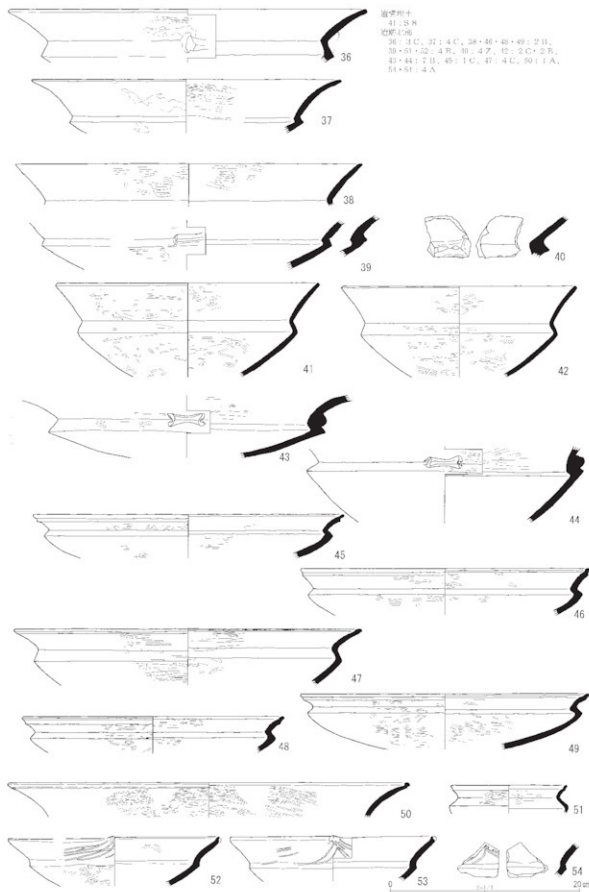


图 62 土器実測図 2 (縄文土器 2)

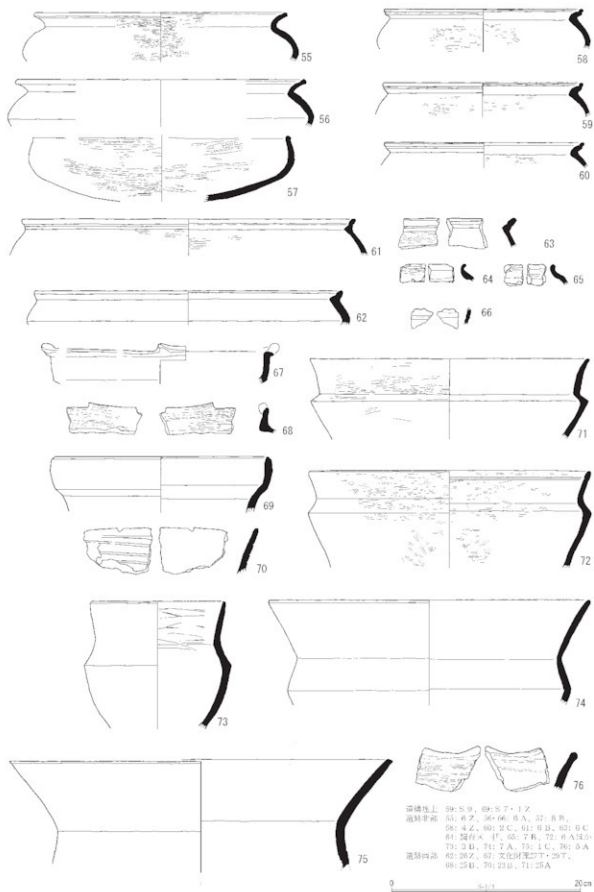


图 63 土器実測図 3 (縄文土器 3)

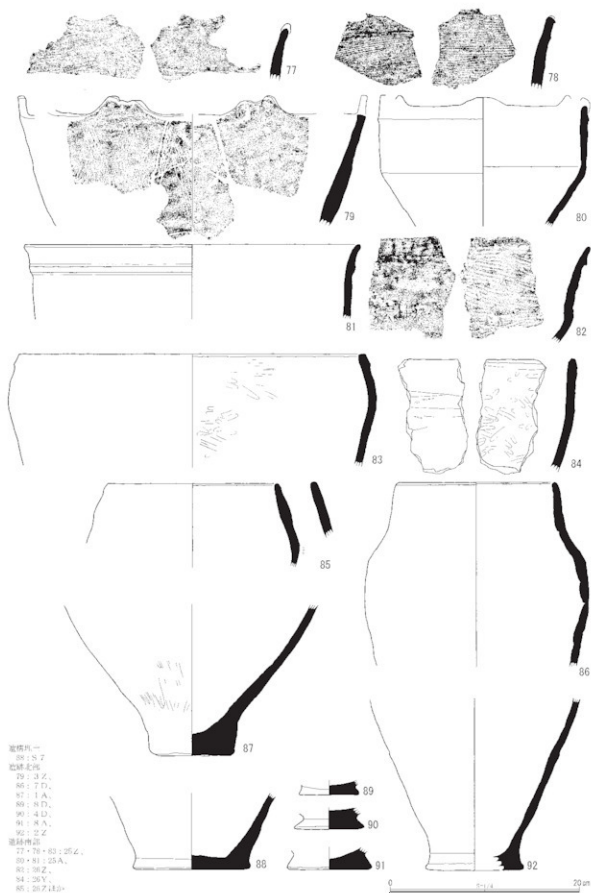


图 64 土器实测图 4 (縄文土器 4)

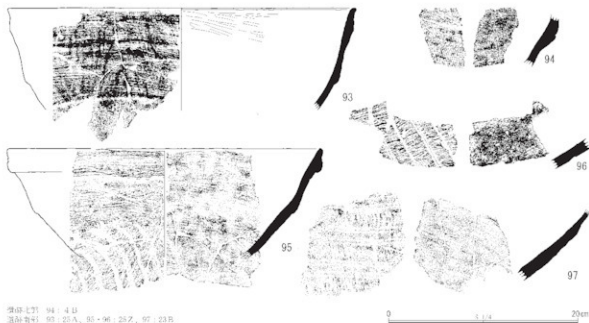


図 65 土器実測図 5 (縄文土器 5)

る。8は長さ0.8cm程度の貝殻腹縁によると思われる短い刺突文を2段廻らせている。9は長さ2.5cmほどの貝殻腹縁による刺突文を廻らせるが、不規則でやや粗い。7と同様に、刺突文の下部に押しきり状の列点文を施す。10は、8に類似した個体で、幅1.0cm程度の短い貝殻腹縁による刺突文を2段廻らせている。11・13は幅2.0cm程度の貝殻腹縁による刺突文と、その下に同じく貝殻腹縁による列点文状の刺突を廻らせているが、上段の刺突に比べると長さが1.5cm程とやや短い。12は、貝殻腹縁による連続した刺突文の下部に2条の連続した短沈線、あるいは押しきり刺突文を廻らせている。14・15も貝殻腹縁による刺突文の下部に2条の短沈線を施している。12に類似しているが、短沈線の施文の仕方が異なる。11～14は、胎土や色調などの雰囲気は似ている。16は、14・15と同一個体の可能性がある胴部片で内外面に条痕調整を行っている。17は市来式系の台付鉢の破片と考えられるが、文様などは施していない。市来式系の土器については、大年遺跡から南に数百m離れた中床丸遺跡において多量に出土しており、その関係性が注目される。

18～22は磨消縄文系の土器と考えられる破片である。18は列点文の下部に沈線状の凹みがめぐる。細片のため文様構成は明らかでない。19・20は列点文の下部に5条の沈線をめぐる。19は中央の3本は破片中程で交わっているほか、20も破片右端で沈線が収束しつつある。なお、両者ともに列点間が高くなっており、突帯上を呈している。21～22は複数の沈線をめぐる。21はほかの破片に比べると沈線は幅広である。

23～28は西平式系と考えられる破片である。23～25は、いずれも内面上部方向に屈曲した口唇部を文様帯としている。23は上下端に沈線をめぐる。その間を縄文で充填している。屈曲部内面は浅く「U」字状に湾曲している。24・25は2条あるいは3条の沈線を廻らせているが、24の沈線は破片中央付近で刺突状を呈している。26～28は、頸部付近の破片で、屈曲部に列点文を施し、その下部に沈線を複数状めぐる点で共通しているが、細部は異なる。26は列点文を施した後下部の沈線をめぐる。破片の上下が間違っていないとすれば、列点の刺突方向が他のものとは逆であり、左利きの人間による可能性がある。27は太めの沈線を引いた後、その部分に刺突文に近い列点文をめぐる。沈線および列点の際に押し出された粘土が下

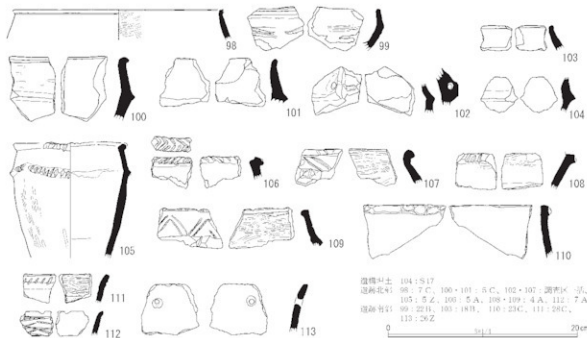


図 66 土器実測図 6 (陶文土器 6)

辺において突帯状に突出している。28 は 27 と同様に沈線を引いた後に列点を施しており、沈線が切られているが、列点部の沈線は浅く細い。また、下部の沈線もほかの個体と比べると浅く細い。28 は胎土に雲母を多く含んでおり、大隅地域からもたらされた可能性がある。

29 ~ 32 は中岳Ⅱ式系と考えられる破片である。29・30 は肥厚した口縁部を有するが、29 が凹線状の浅い凹みを 2 条めぐらせるのに対して、30 は明瞭な文様をもたない。また、29 が肥厚部の内面を浅い「U」字状に凹ませるのに対して、30 は大きな変化をみせないなどの違いがある。31・32 は屈曲部の上部に列点文を施しており、その上下には沈線がめぐる。いずれも沈線を施した後、列点文をめぐらせているが、29 はやや逆「C」字状、30 は「D」字状を呈する。

33 から 35 は、条痕調整を施した無文土器である。条痕や器形などから、後期の土器と考えられる。

36 から 113 は晩期の土器片である。36 ~ 68 は黒川式系の浅鉢と考えられる破片であるが、図示した以外にも、口縁部を中心とする破片が多く出土している。36 ~ 44 は、胴部と頭部の屈曲が強く、口縁部が長くのびる一群で、36・37・39 は頭部の屈曲も強い。41・42 は同一個体の可能性がある。逆に 41 ~ 44 は頭部の屈曲が弱い。36・39・40・43・44 には屈曲部にリボン状突起が付くが、36 は他の個体と異なり、両端が上にのびて正面視で「凹」字状を呈する。また、45・44 は頭部付近に独立して付けられているのに対して、39・40 は胴部の屈曲部と一体化している。また、45・44 の左右両端には刺突文状に凹んでいるのに対して、39・40 は浅く「U」字状に緩く凹んでいる程度である。突起の形状からすれば、古い方から 36 → 43・44 → 39・40 と位置付けることができる。なお、36・37 は口縁部に、41・43 は胴部にコゲあるいはスス状物質が付着しているが、36・37 は付着が顕著である。

45 ~ 51 は口縁部がやや短めで、口唇部の内外に段を有する一群である。外面の段は沈線状に近いものもある。この中で、47・50・51 は内面の段が他のものよりも顕著である。また、50 は他の個体と比べると著しく口縁部が長い。

52 ~ 54 は口縁部に沈線文を施したもので、波頂状に突出した部分を中心として放射状に沈線が

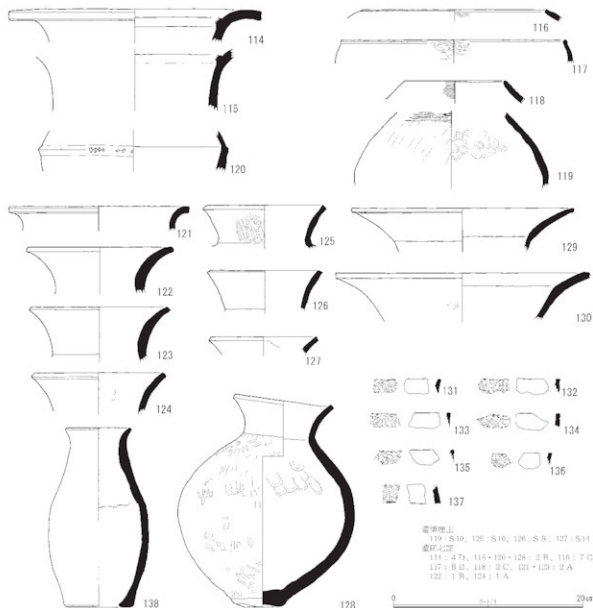


図 67 土器実測図 7 (弥生土器 1)

広がっている。いずれも似るが、形状が若干異なるため別個体として報告しておく。

55～57 は、胴部の屈曲が弱く断面が緩い「S」字状を呈するものである。口縁部が残る 55・56 は口唇部外面に沈線を廻らせているが、内面はヘラミガキによって削り出し状の稜を作り出している。58～63 は、口縁部が著しく短い一群である。58～60 は同一個体の可能性がある資料で、口唇部は屈曲している。61・62 は、口唇部内面の段は明瞭であるが、外面は浅く不明瞭な沈線をめぐらせる程度で形状の変化は不明瞭であるが、62 については外面の沈線はみられない。64～65 は口唇部がわずかに外反する資料である。

66～68 は口縁端に突起が付く一群である。66 は突起下部に沈線がめぐっている。

69～86 は深鉢と考えられる破片である。69 は口縁部が壺状に内湾する形状で、黒川式よりも古くなる可能性がある。70 は全体の形状が不明であるが、4 条の沈線が確認できる。71～75 は浅鉢と同じく、胴部と頸部が屈曲した一群である。71・72 は形状・調整技法ともに浅鉢に類似する個体であり、浅鉢の可能性もある。72 は口唇部の外面の一部がわずかに肥厚するほか、内面にはへ

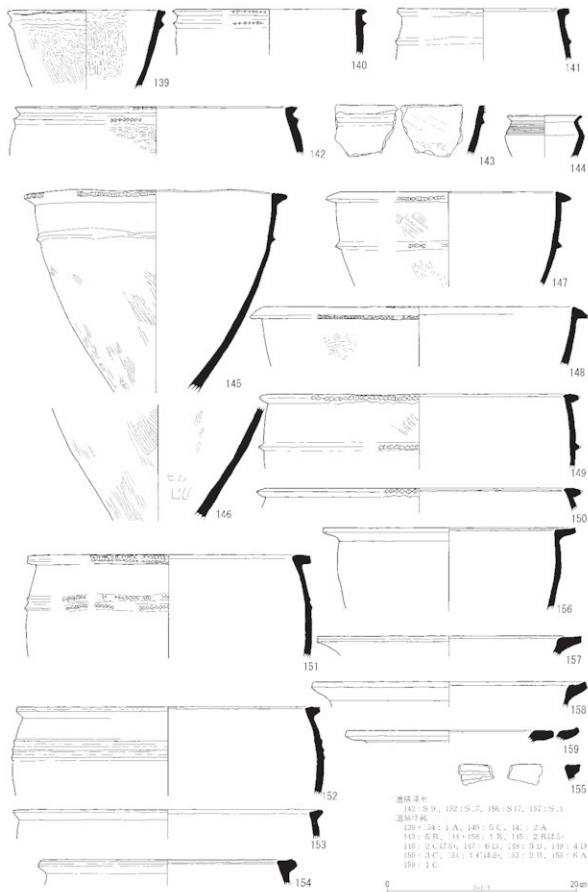


图 68 土器実測图 8 (弥生土器 2)

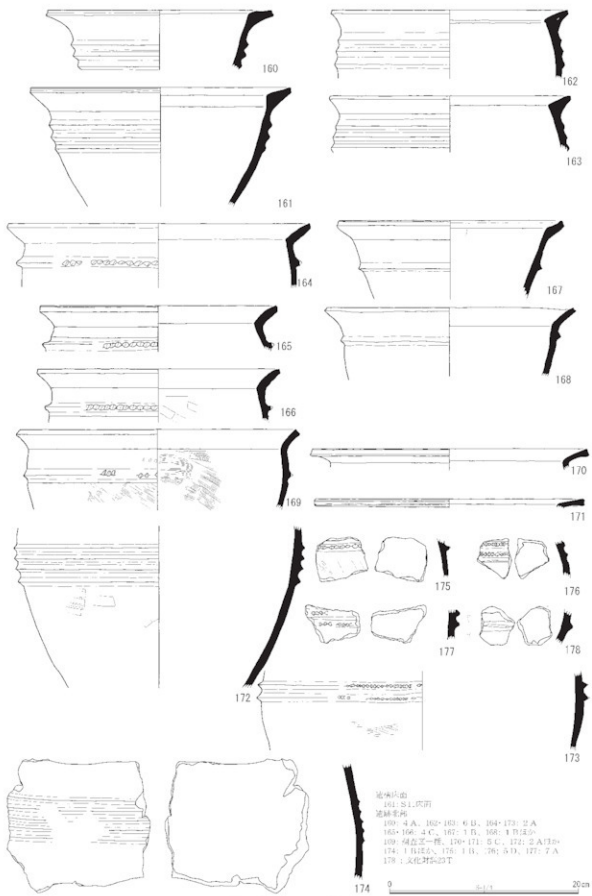


图 69 土器实测图 9 (弥生土器 3)

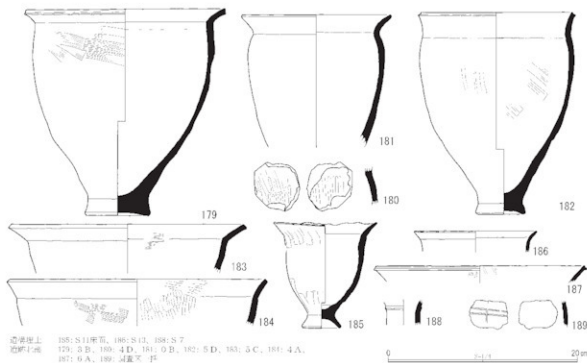


図 70 土器実測図 10 (弥生土器 4)

ラミガキによる段を作りだしている。73 は小型、75 は大型の個体である。

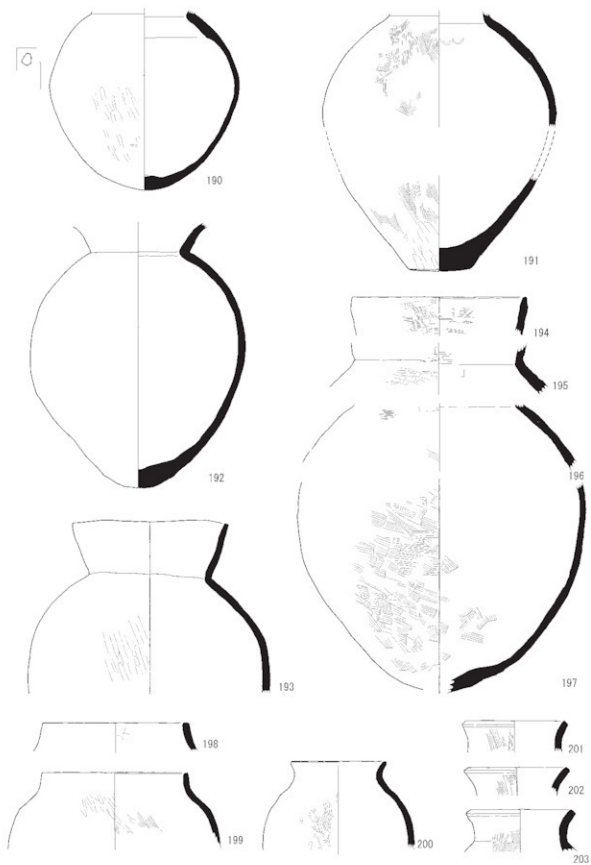
76～80 は口縁部に上方への突起部を有する一群である。この中で 79 は後期・晩期には類例をほとんどみない、斜格子状の文様および 5 条線の沈線列を施した個体である。文様はヘラ描きによっている。原体の相違はあるが、文様の雰囲気は早期の塞ノ神式土器に似ている。今回の調査では他に出土していないが、中期末～後期初頭頃にさかのぼる可能性がある。81～85 は口唇部を若干肥厚させたものであるが、不明瞭なものが多い。87～92 は底部であるが、詳細な時期は不明である。

93～97 は組織痕を有する破片であるが、図示した以外にも小片が出土している。

98～111 は晩期末頃と考えられる土器である。98・99 は壺形と考えられる土器片であるが、小片であり形状は明らかでないが、99 は屈曲部の下に 2 条の沈線を廻らせているほか、赤色顔料が塗布してある。100～104 は刻目を持たない突帯文土器と考えられる破片であるが、やはり小片のため詳細は不明である。102 には耳状に孔を有する突起がついているほか、これらの土器片には赤色顔料が塗布されている。105～111 は刻目を有する突帯文土器と考えられる破片である。105 は小型であるが、形状を知ることができ、内面の突帯に対応する位置には、粘土紐の接合痕跡が確認できる。106 は口唇部の突帯上面内外に刻目を入れている。107・109 は突帯間にヘラ描きの沈線による山形の沈線文を施しているほか、小片のため細部は不明であるが、口唇部の刻みは数条毎に向きを変えているようである。110 は幅広の刻みを施している。111 の突帯は高さが低い。112・113 は詳細な時期は不明であるが 112 は赤色顔料を塗布しており、他の時期ではそのような破片はみられなかったため、突帯文期のもつと推定した。113 は穿孔を施す。なお、今回の大年遺跡の調査では水田に関する遺物・遺構はみつかっていないため、弥生時代早期ではなく、縄文時代晩期として報告を行った。

弥生土器・土師器

114～137 は弥生土器の壺と考えられる破片であるが、後述する壺の破片に比べて数は少ない。



盘钵类十 190、192、193、198、199；S 8、193、S 13
 钵类二 191、200；I 13、36；195、2、11、196；197、1、11、201—203；I C

图 71 土器实测图 II (土师器 1)



通体纹: 204・212・216~218・223・512, 206・215・219・513, 206・515,
208・222・228・230・232・236・237・238: S D, 213: S 11.

214: S 16, 221・229: S 2, 234: S 16 局部

纹样分布: 207: 1 B, 206・210・225: 5 B, 211: T・13, 229: S C, 221・226: 6 B

227: 2 B, 231・233: 2 B, 236: 5 C

图 72 土器实测图 12 (土师器 2)



通背片一 239 : S1C, 240 : S2B
 通背片二 239 : 1B, 240 + 241 + 245 + 246 : 3A, 242 : 1A, 243 : 2C, 244 : 8C
 通背片三 247 : 1B, 249 + 251 : 1C, 252 : 2A
 通背片四 249 : 2B

图 73 土器実測図 13 (土師器 3)



图例九一
 254・255：S13断面，257：S15，259：S8，262：S14，263：S16断面
 256・258：3H，259：7A，261：3D

图 74 土器実測图 14 (土師器 4)

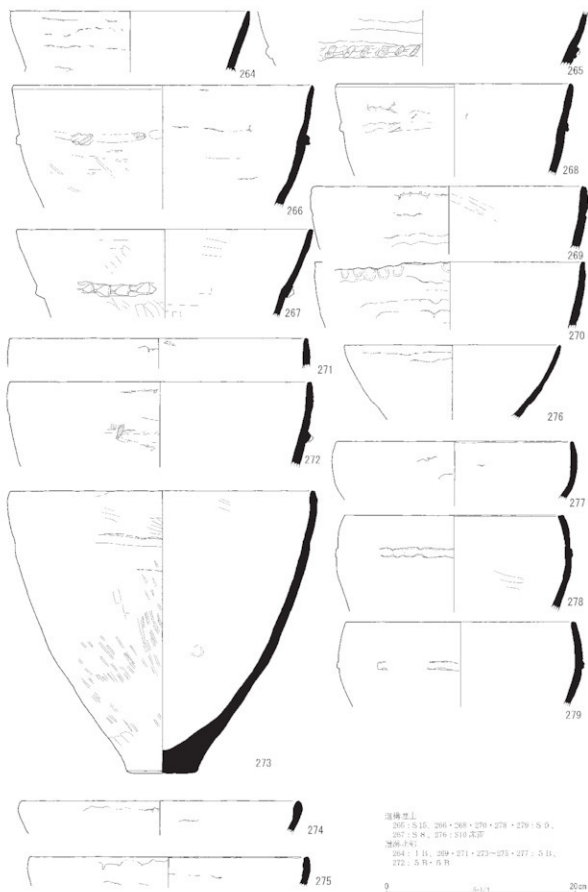


图 75 土器実測图 15 (土師器 5)

114・115は、外側へ大きく開く口縁部の内面に突帯をめぐらせたもので、前期末～中期初頭頃の外来系土器と考えられる。116・117は無頭壺と考えられる破片であるが、細片のため明らかでない。118・119は同一個体と考えられる資料で、多条のヘラ描沈線をめぐらせている。県内では沈線文が一般的ではなく、また描帯化しないが、114・115と同じ頃のものと考えられる。118は、全形が明らかでないが、胴部刻みの形状等から弥生時代の壺と判断した。

121～128は広口壺の口縁部と考えられるものである。128は全形をうかがうことができる資料である。口縁部はやや直線的に開き、胴部の最大系は中程にあつて、張り気味である。胴上部付近から口縁部にかけてやや傾いている。弥生時代後期後半頃のものと思われる。そのほかの個体については、詳細な時期は明らかでなく、121のように口縁部の湾曲が強い古手の形状を含んでいるが、比較的まっすぐに開く形態から弥生時代後期を中心とする時期と思われる。129・130も同様に広口壺の口縁部と考えられるが、大型で外側への開きが大きい。

131～137は二重口縁壺の口縁部と考えられる破片で、描帯による波状文を施している。出土位置は137を除くといずれも5B区の出土であり、同一個体の可能性が高いが、波状文の雰囲気は若干異なっているものもある。137は波状文の描き方と形状から、他の二重口縁壺の破片と異なり、一次口縁から下側へ垂下した部分にあたると思われるが、細片のため明らかでない。

138は壺と考えられる器形であるが、管見では他に類例を知らない。底部は剥離しているためか、中央部は孔があいた形状になっている。風化による磨滅が著しく、粘土接合面で剥離しているのかどうかの判断が困難であるため、本来の底部形状は不明であるものの、平底と考えられる点や胎土の様子などから、弥生土器に含めている。また、風化により器表面の調整も明らかでない。ただし、出土場所が26Z区と、縄文土器以外の土器の出土が少ない南部調査区で出土していることなどから、縄文時代晩期末のものである可能性もある。

139～189は、弥生土器の甕と考えられる破片である。139～143口縁端部突帯の下にもう1条の突帯をめぐらせる下城式系の土器であるが、139・143には突帯上に刻みを入れていない。突帯は141の口縁端部のものが隅丸の台形状であるが、ほかは三角形を呈する。これらの土器は、前期末～中期前葉頃のものであると考えられる。144は頭部下にヘラ描き沈線をめぐらせたもので、小型の鉢状を呈する。多条沈線はヘラ描きであるため、上記の下城式系の土器と同じ頃を含めているが、形態的には後期に下がる可能性がある。

145～169は逆「L」字～「く」字状の短い口縁をもつ甕で、145～150は中期前半、151～155は中期中頃、160～163は中期後半、164～169は中期末～後期初頭頃までと、中期の幅広い時期のものを含んでいる。172～174はこれらの甕の胴部と考えられる資料である。145～149は、底部から外側へ開き気味、上方へ真っ直ぐ気味にのびてきた胴部に断面三角形の口縁を貼り付けたもので、145のみ口縁部台形状を呈する。また、145と148はほかの個体に比べると、刻みの幅が若干狭い。147・148は口縁部がやや下がり気味である。口縁の貼付け方は、いずれも弱く、胴部との間にわずかな空隙が観察できる。なお、145は外面の下辺をナデているが、その他は押しつけるように貼り付けており、指頭の凹凸がみられるなどの違いがみられる。一方、胴部の突帯については、上辺・下辺ともにナデているが、口縁部と同様に、下辺については部分的にわずかな空隙が観察できる。突帯の貼付方については、古墳時代よりもしっかりしているものの、接合意識が弱い点などは古墳時代と共通しており興味深い。145と146は胎土等から、同一個体と考えられる。149・150も口縁部の貼付方や刻みの仕方、あるいは内面の口縁端部わずかに内側に突出する調整

の仕方がよく似ており、同一個体の可能性があるが、149は傾きがやや異なる。

151～155は胴部最大径から内側にのびてき胴部に台形状の口縁が貼り付けられたものである。口縁は153～155は太い。口縁および突帯上の刻目は151・155にみられるが、151の刻みは鋭利な工具によるようである。また、口縁端は、151・152はわずかに「M」字状に中央が凹んでおり、151はその上下に刻み入れるが、上下で別々に行っている。口縁および突帯の接合は、153・154は丁寧になでているが、その他の個体では、やはり下辺に空隙がみられるなど接合意識が弱い。このほか、153・154は調整の仕方により、内面口縁端部がわずかに内側に突出している。152の外面に

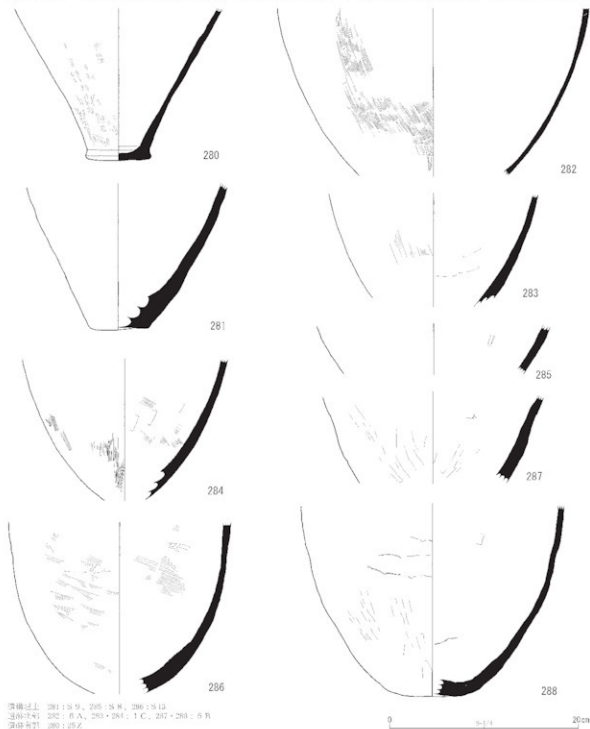


図 76 土器実測図 16 (弥生土器・土師器底部 1)

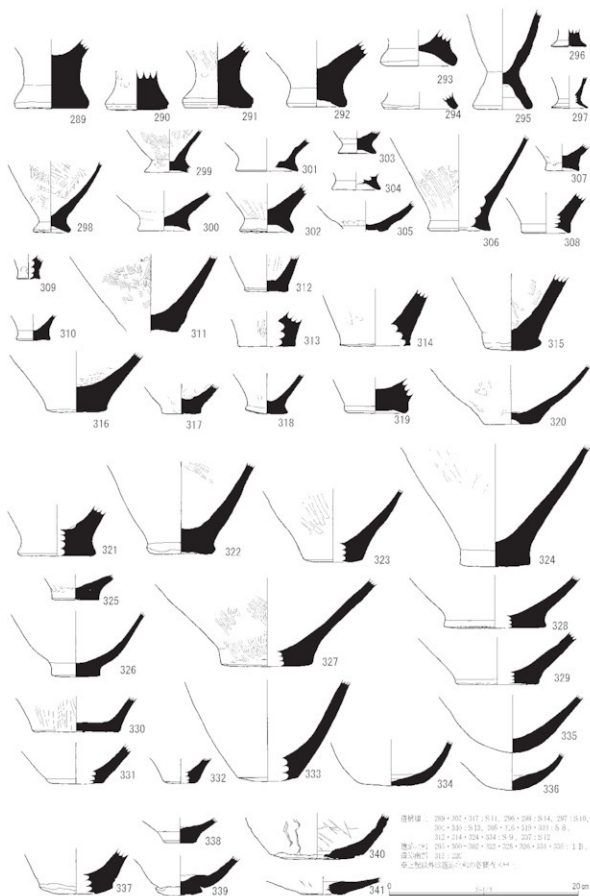


图 77 土器实测图 17 (弥生土器·土器器底部 2)

はススあるいはコゲ状の付着物が顕著である。156は胴部最大径付近から上方へのびてきた胴部にやや厚みの薄い口縁を貼り付けているが、下辺は丁寧になでられている。口縁端部はわずかに凹む。

160～163は貼付口縁の下辺の稜が不明瞭になったもので、156～159も小片ながら類似する形態と思われる。160と161、162と163はそれぞれ同一個体である可能性がある。160・161の口縁端部は浅く凹むが、162・163は不明瞭である。口縁・突帯の貼付は上下辺ナデているが、162・163については、貼り付けた口縁の剥落が著しく、剥離面の色調も器表面とあまり変わらない程度の焼成具合である。

164～169は「く」字状に上方へ屈曲する口縁をもつもので、頸部下の突帯にはややための刻みを施している。164～167は、胴部内面を斜方向のナデ、口縁部を横方向のナデで調整することによって明瞭な稜を作り出しているのに対して、168・169は横方向のナデが胴部まで及んでおり、その影響により内面の稜が不明瞭になりつつある。また、突帯の貼付も上下辺ともにナデているが、ナデが強いためか上辺あるいは下辺付近が若干凹むものもみられる。このほか、167は調整によって、口縁端部内面が上部へ突出している。166の突帯～口縁部にかけてススの付着が顕著である。170・171は他の土器に比べて薄手の作りで、口縁部端部付近が若干肥厚しており、端面はやや浅く凹むが、171はための沈線状を呈する。外来系土器の可能性はある。

179～185は、主に後期に属すると考えられる土器であるが、179は164～169と同じ中期末～後期初頃とやや古くなる。また、179は胴下部を一部欠失するが、ほぼ全形をうかがうことができる資料である。内面の稜は鋭いが、稜の下まで横方向のナデが及んでいる。口縁端部は浅く凹む。底部はわずかに上げ底気味である。このほか、使用による影響か、胴部最大径よりも下部では器表面の剥落が著しい。上でみた同じ時期の土器に突帯が付くのに対して、179は頸部下に突帯をもた

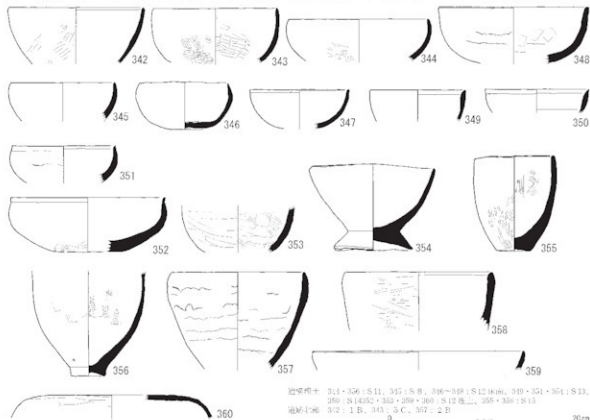


図78 土器実測図18(土師器6)

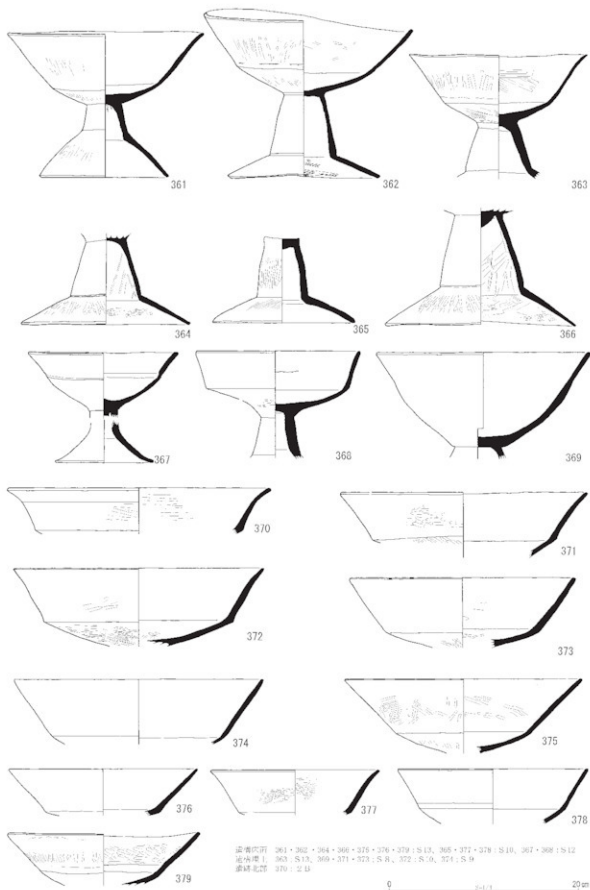


圖 79 土器実測図 19 (土師器 7)

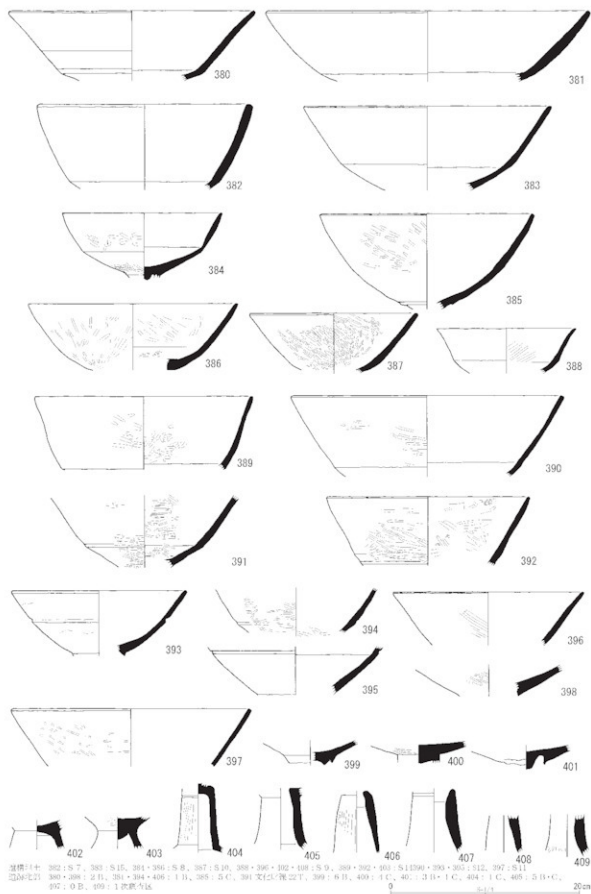


图 80 土器実測图 20 (土師器 8)

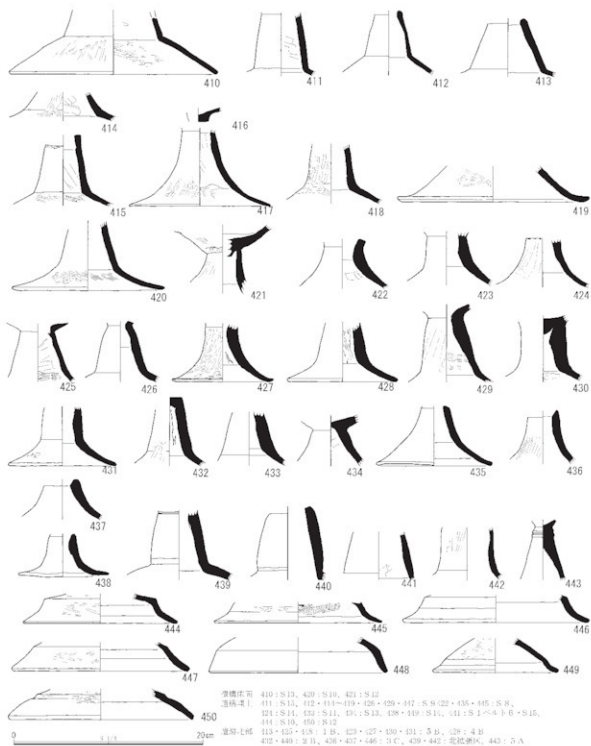


图 81 土器実測图 21 (土師器 9)

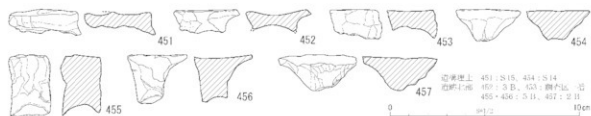
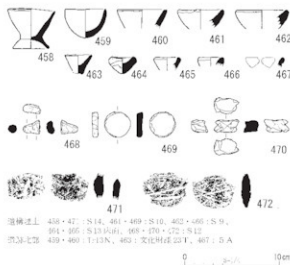


图 82 土器実測图 22 (土師器 10)



遺構上 458・47：S14、461・469・S10、462・466：S9、
 464・465：S13/S16、468・470・472：S12、
 沈下・L26 459・460：T13N、463：文化財23T、467：S A

図83 土器ミニチュア品・土製品実測図

の調整を施している。底部は179と同様にわずかに上げ底気味である。また、胴部最大径付近に吹きこぼれと思われるスガが薄くなった部位を確認することができる。

182～184は頸部の屈曲を縦方向のハケメによって作り出しているため、古墳時代に下る可能性があるが、形態やハケメを横方向のナデで消すなど弥生時代的な調整技法であるため、弥生時代に位置しておく。185は口縁部付近の1/4程を欠失するがほぼ全形をうかがうことができる資料である。頸部～口縁部と底部付近を強いナデによって整形している点の特徴である。183・184とは逆に、口縁部や底部付近を強い縦方向のイタナデで整形するなど、古墳時代の特徴がみられるが、形態的には弥生時代的である。底部は脚台状を呈する。

186～189は細片のため詳細な形態は不明であるが、弥生土器と思われる。186は緩く外側へ開いている。187は薄手の口縁部片で、口縁端部は若干肥厚し、端面は沈線状に浅く凹む。188は細片であるため、形状は不明であるが、突帯がついていることや胎土・色調などから弥生時代の土器と考えられる。ミニチュア品の可能性もある。189は胴部の細片で器種不明であるが、横方向の2条の沈線と縦方向の短い沈線が観察できる。胎土などから弥生土器と考えられる。

190～238は土師器壺と考えられる資料である。190～197は比較的残りが良くある程度全体をうかがうことができる資料である。190は口縁のみが欠損した資料で、胴部に穴が開いているが穿孔の可能性はある。198～200は短頸壺の破片で、外面はいずれもガキが顕著である。201～203は広口壺の口縁部片で、外面は縦方向の調整が顕著である。

204～209は内湾する小型の壺口縁で、204・205は塔の可能性もある。このうち205は破片の中央付近にヘラミガキを残してその上下はスリップ状のナデを施してミガキを消している。210～214は小型の壺の口縁である。212は粘土帯の接合線を顕著に残す。213・214は壺と思われるが型式は不明である。213の下端部は粘土の接合面で剝離しているようである。215～227は、球胴から胴部が張り大きい壺の胴部で小型のものが比較的大きい。口縁は204～211のようになるとと思われる。

229～232は大型の壺口縁で、228～230のような直口縁と、231・232のような二重口縁壺がある。小型の器種に比べると器壁が厚い点で区別される。223～238は中型～大型の壺胴部である。233・234のように外面にヘラミガキを施すものと、235～238のようにハケメを残すものがある。なお、

ない。180は胴部～頸部にかけての破片である。他のものがナデやハケメ調整が多いのに対して、内外面ともに縦方向のヘラミガキを施している。小片であり、全形は不明であるが、頸部の屈曲が弱いため、ここで図示している。181は頸部がしまった形態で、調整が不明瞭な部分が多いが、頸部～口縁部は横方向の調整を施している。胎土は他のものと異なり、礫を多く含む古墳時代的な胎土である。182は胴部の上半分ほどを欠失するが、全形をうかがうことができる資料である。頸部～口縁部にかけての屈曲が弱く口縁部と胴部最大径はほぼ同じである。胴部は斜方向の調整であるが、頸部以上は横方向



図 84 土製勾玉実測図

237・238 は同一個体の可能性がある。

239～279 は、土師器甕と考えられる破片である。239～253 は頸部で屈曲して口縁が外側へ開く形態のもので、胴部よりも口縁が広がる弥生時代的な形態を含むが、口縁部外面に縦方向のナデ・ハケメの調整によって頸部のくびれを強調しているものなどを土師器としている。248 は突帯の内面の形状から、249 のような形態を想定しているが、頸部はくびれない可能性もある。247 の底部は脚台状になるものと思われる。253 は形状や、内面の粘土帯の段などは壺に近い特徴であるが、頸部のくびれが弱いことから甕に分類した。

254～275 はいわゆる「成川式土器」で口縁部下に突帯をめぐらせているものが多いが、薩摩地域のように高台は付かず平底である。254・255 は突帯付近で若干くびれ、その後口縁が外側に開いており、この中では古手の形態である。調整等の作りも他のものに比べると丁寧で、県南内陸部の土師器甕に特徴的な粘土帯の接合線もみられない。また突帯も高くシャープで、刻みの間隔もそろっている。256～263 は胴部から直線的に口縁に達するもの、264～267 は突帯付近で一度くびれるもの、269～279 は口縁部が内側へ湾曲するものである。図示したような流れに対応するように、作りが雑になっているが、詳細な検討は次章で行っている。

280～341 は、弥生土器および土師器の胴部から底部の破片である。289 から 291 のように、弥生時代中期頃の甕底部とわかるものもあるが、「成川式土器」の甕は平底であり、胴部および底部片では弥生土器と土師器の区別が難しいものが多いことから、一緒に報告を行っている。多くが平底で、丸底は 235・236 と少ない。このほか、237～341 は底部が自重により若干潰れたような状態を呈している。340・341 は一見底部中央に孔があるようにみえるものであるが、おそらく粘土接合面で剥落したものと考えられる。

342～359 は土師器鉢と考えられる破片で、348～351 は口縁端部が短く外反している。355 はコップ形を呈する。357 は内外面の粘土帯接合線を残している。360 は器種が不明であるが、ヘラミガキの施し方等、調整の技法的には須恵器の蓋を模倣しているようにもみえるため、模倣杯の可能性もある。

361～450 は高坏と考えられる破片である。堅穴建物跡 5 から出土した個体は全形を知ることができる。これらは坏部の稜はやや鈍いが、脚柱と裾部の境の稜は明瞭で内面の稜は鋭い。また、脚柱部はエンタシス状にわずかに中央が広がっている。その他の高坏では、坏部は稜が鋭いものから稜を持たないものまで幅広い形態のもので出土している。脚部は裾に向かって「八」字状に広がるものが中心であるが、439～441 のように筒状の脚柱部に裾を接合したものや、444～450 のように坏部を反転したような形態のものもある。これらの中で 443 は脚柱上部付近を肥厚させ、そこに沈線状の線を廻らせている点が特徴的である。坏部が接合面で剥落したと考えているが、上下が逆であることや、高坏以外の器種である可能性もある。大年遺跡で出土している高坏の特徴として、巻頭図版 8-1 にみるように、焼成後にスリップ状の粘土を部分的に塗布しているものがある点を挙げることができる。土器がまとまって出土した堅穴建物跡 5 の高坏に顕著である。このほか、426 は高坏脚部を輪の羽口に転用しており、脚柱上部付近が溶融している。

451～457 は、高坏脚柱部あるいは坏底部に充填した粘土が剥離したものである。時間的・空間的に近い時期の遺跡である平峰遺跡でもこの部分は多く出土しており、製作技法的にこの部分が剥

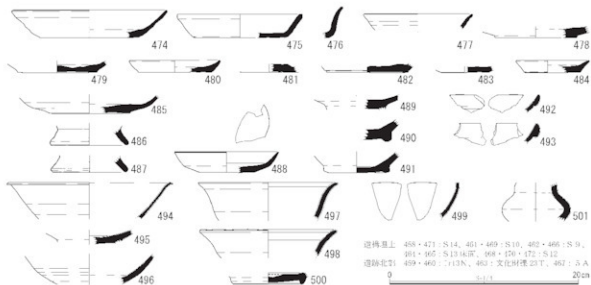


図85 土師質土器・磁器実測図

落しやすいためであったと考えられる。ただし、平峰遺跡では、457のように脚柱部内へ飛び出たものが多く、451や452のようなものは少ないため、時期的な違いを表している可能性もある。

ところで、高坏の製作に関しては、脚柱部や裾部、坏底部と口縁部、そしてこの充填部など、結節点となる部位は、割れたというよりも粘土の接合面で剥離したと思われる状態のものが多々みられる。そのため、甕の製作にも通じる点であるが、土器の製作において、各部位の製作段階の間には粘土が乾燥する程度の時間的間隙が存在していると想定される。

458～468はミニチュア品と考えられる小型の土器であるが、498が瓶の把手に類似しているほかは、何を模しているか不明である。469は土器片を円板状に加工した土製品である。破面は研磨を行うことによって面取りを行っている。470は土器片または土製品、あるいは焼成粘土塊と思われるが破片のため不明である。表面はナズられており土器の表面と類似した状態である。土器471・472は焼成粘土塊で、表面には混和剤と思われる植物の繊維痕がみとめられる。473は土製勾玉で、堅穴建物跡5(S13)床面においてミニチュア土器(464)の近くから出土している。

古代～中世の土器類

古代以降の土器・陶磁器は、近世にいたるものまで出土しているが、報告した遺構に伴うと考えられる遺物が少なく、また細片で図化に耐えないものが多いため、ここでは代表的なものについて図化を行った。474～487は土師質土器で、485～486が糸切り底であるほかはヘラ切底であると思われるが、小片のため明らかでないものが多い。488～493は白磁で、489～493のIV類を中心として、II類(488)・V類(494)・VI類(495)・VII類(496)と考えられるものがみられ、12世紀頃が中心となるようである。比較的時期がまとまっているため、この時期に遺跡利用の一つのピークが存在することが考えられる。497～499は龍泉窯系の青磁である。494は無文あるいは口縁外面に輪花を施すが不明瞭である。498は無文、499は簡略化した連弁文が施されている。501は青花の小瓶である。

(2) 石器

石器は包含層出土資料がほとんどであり、また、土器のように形状によって帰属時期を決定する

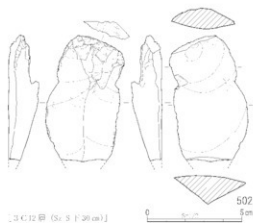


図 86 石器実測図 1 (旧石器)

部を折損している。図正面の基部付近は形状を整えるための剥離がみられるが、剥離は裏面には及んでいない。また、縁辺には部分的に細かな剥離がみられる。桜島薩摩火山灰 (Sz-S) を含む基本土層 11 層の下面から約 30 cm 下位、基本土層 12 層の中程から出土している。この他、図化していないが、黒曜石の剥片が基本土層 12 層から 1 点出土している。

縄文時代早期の石器としては、打製石鏃が 2 点 (図 87-509・538) 出土している。538 は桜島 11 テフラを含む基本土層 9 層下半、509 は桜島 11 テフラと桜島薩摩火山灰の間の基本土層 10 層から出土している。538 は姫島産黒曜石製である。この他、図化していないが、基本土層 10 層で黒曜石の剥片が 1 点出土している。

鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) 層～霧島御池軽石 (Kr-M) 層間の石器

縄文時代前期から中期に該当する時期である。基本土層 8 層上面付近で石鏃 (図 87-503) が 1 点出土している。基本土層 8 層は鬼界アカホヤ火山灰層であるため、前期のものと思われる。

霧島御池軽石 (Kr-M) 層上位の石器

およそ縄文時代後期から中世までの幅広い時期を含む層である。石器の多くは 4 層と 5 層から出土しており、出土している土器の様相からすれば、縄文時代晩期のものが多いと思われる。なお、図化していないが、次章で検討をおこなっているように、黒曜石の剥片類が遺跡の南北調査区を合わせて約 1 kg 出土している。その他にもチャートの剥片などが出土している。

503～566 は石鏃であるが、既述のように 503 は前期、509・538 は早期のものであるが形態的に大きく変わらないようである。503～511 は、平面三角形の凹基式石鏃で、基部の挟りは深い物から浅いものまでである。この形態の石材はチャート製品がほとんどであり、黒曜石製のものはみられない。512～520 までは、平面形が整った五角形の凹基式石鏃で、脚部先端は台形状を呈する。516 は姫島産黒曜石製であるが、その他はチャート製である。521～529 は平面不整五角形の挟りが浅い凹基式で、特に 524～528 は形が崩れている。529 は先端が欠損したのを修正してしたものと考えられ、本来は整った五角形状であったと思われる。この形態では 524・527・529 が黒曜石製である。530～532 は破片で全形が不明であるが、凹基式あるいは平面五角形状を呈すると考えられるものである。533 は、未成品の可能性がある資料である。534 も全形は不明であるが、平面五角形状を呈すると考えられるものである。533・534 は黒曜石製である。535～547 は、平面三角形状の平基式あるいは基部の挟りがごく浅いものである。543 の側辺は鋸歯状を意識したような凹凸が若干みられるほか、平面形態も五角形状に近いなどの特徴がみられる。これらの中では、535

ことが難しい。そのため、以下では鍵層となる火山灰を基準として区切り、その様相をみることにする。

鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) 層下位の石器

厳密に言えば、入戸火砕流二次堆積物～鬼界アカホヤ火山灰の間の層であるが、入戸火砕流二次堆積物層下位の調査は不可能であるため、ここでは鬼界アカホヤ火山灰層下位と表記している。鬼界アカホヤ火山灰層下位は、旧石器時代から縄文時代早期に該当する層位であり、旧石器の可能性のある剥片 1 点、縄文時代早期と考えられる石器が 2 点と、数は非常に少ない。旧石器は剥片 1 点 (図 86-502) のみであるが、先端部を折損している。

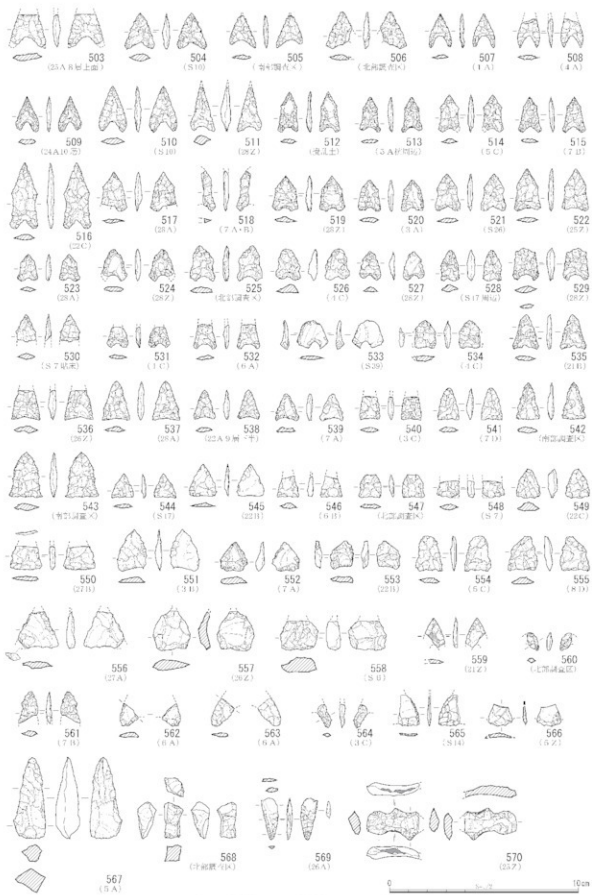


图 87 石器实测图 2 (打製石器·小型石器)

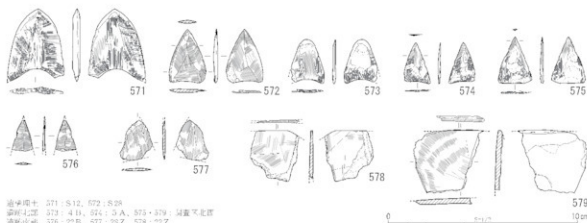


図 88 石器実測図 3 (磨製石鏃・磨製石器破片)

と早期の 538 が黒曜石製であるほか、安山岩系と思われる石材を使用が多い (541・543～546)。548～550 は基部が凸基気味を呈するものである。551～558 は未成品の可能性があるものである。551・552 は正面の剥離に対して、裏面の剥離が著しく少ない。553～558 は平面形が不整形で、厚みが成品に比べると厚い。559～566 は石鏃の破片と考えられるものである。

567～570 は小型の打製石器で、567 は尖頭器状の石器、538 は楔形石器、569 は石鏃、570 は異形石器である。569 の先端付近は使用によるためか摩耗した痕跡がみられる。570 は平面形において凹んだ部分 (図の網掛け部分) が、範囲は狭いものの摩耗が顕著である。このような位置やその摩耗の仕方から、この部分に紐などを掛けていたことが想定され、衣類の留め具やアクセサリとして日常的に使用されていた状況が想定できる。このような異形石器は鹿児島県内でもみられ、「単独で使われたとは考えにくく、(中略)衣類やヘアバンドなど身に付けるものに縫いこんであったのではないかと考えられている (鹿児島県教育委員会 2006 : p.267)。

571～577 は磨製石鏃、578・579 は磨製石器片である。571 は身部中央に凹みを作りだしたもので、銅鏃状の形態を呈する。厚さも他の磨製石鏃に比べると厚い。図正面右側の脚は端面に擦痕が確認できるため、意図的にこの形状を作り出していると考えられる。次章で簡単に検討しているが、弥生時代終わり頃のものであると思われる。572 も他の磨製石鏃に比べるとやや厚い。576・577 は磨製石鏃と考えられるが、破片のため詳細は不明である。578・579 も破片のため器種などは明らかでないが、579 は石庖丁の破片の可能性がある。

580～586 は打製石斧であるが、582～586 は刃部と基部をともに欠損している。580～581 はある程度形状をうかがうことができるが、形態はそれぞれ異なる。580 は袈裟を入れて肩部を作り出しているのに対して、581・582 は基部を細くして卓球のラケットのような形状となっている。肩の作りは左右対称ではなく、一方の肩の幅が大きくなっているが、その大きくなっている方の身部が短くなっている。この状況からすると、左右対称ではない形状と使用状況に関係性がある可能性もあるが、数が少ないため不明である。なお、580 は図示したように、袈裟付近に同心円状の擦痕が認められる。587 も打製石斧であると思われるが、他のものとは異なり、縁辺を打ち欠いて簡略に整形しており、自然面と思われる面を残す。また、図下部だけでなく、上部も刃部状を呈する。

588～593 は磨製石斧で、588 を除くと磨滅が著しかったり、破片であったりと詳細がわかるものが少ない。583 は幅の狭い肩部を作り出した磨製石斧であるが、基部側の研磨は顕著ではない。肩部の剥離は節理面と思われる線よりも上にあり、この節理面を意識しているようにもみえる。

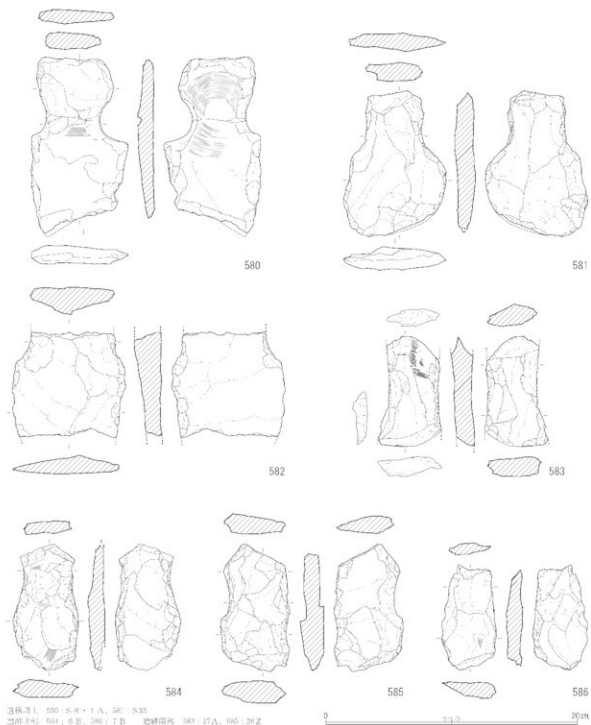
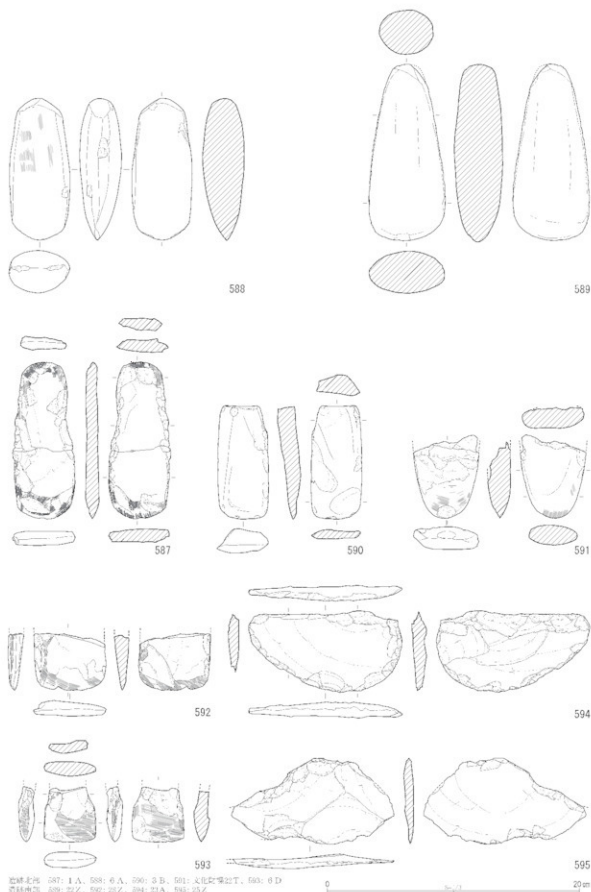


図 89 石器実測図 4 (打製石斧)

594・595は横刃形石器で、横長剥片状の剥片を利用して石器である。図下辺は刃部状を呈するが使用によると思われる細かな剥離は顕著ではない。スクレイパーあるいは打製石廂丁などの用途が考えられる。

596～599は小型の敲石である。596は上下の平らな面を若干残して、それ以外はほぼ全面に敲打痕状の潰れがみられる。大人が手に持って使用するには小さくて不便であるように思われる。側面の中央付近には比較的明瞭な稜がみられる。597は、側面全体に敲打痕状の潰れがみられるが、596・597のような顕著なものではない。598は側面全体に敲打痕状の潰れが認められるが、その範



岩峰北坡 587: 1.A, 588: 6.A, 590: 3.B, 591: 文化交塚22T, 593: 6.D
 西縁南25 589: 22.Z, 592: 25.Z, 594: 23.A, 595: 25.Z

图 90 石器实测图 5 (磨製石斧·横刃形石器)

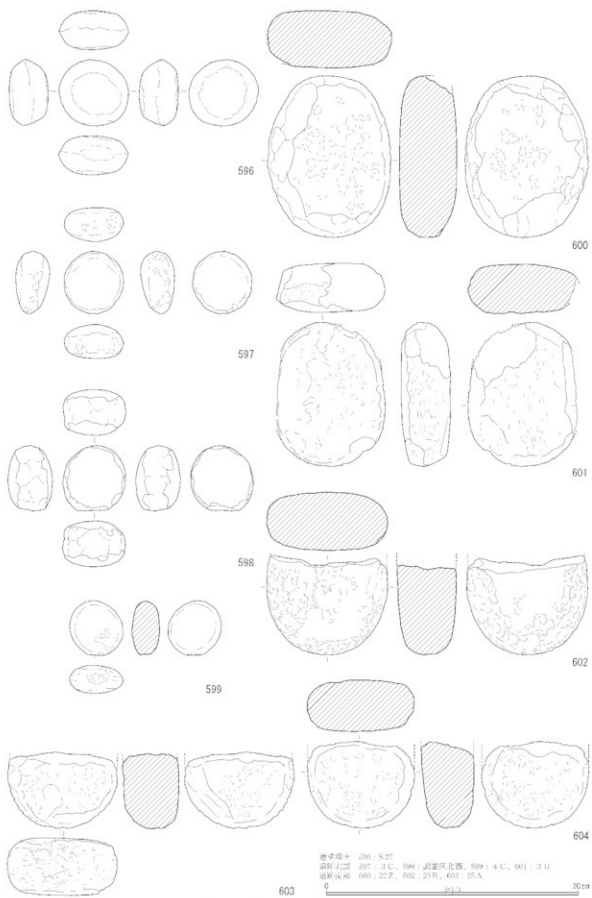


图 91 石器实测图 6 (磨石·敲石等 1)

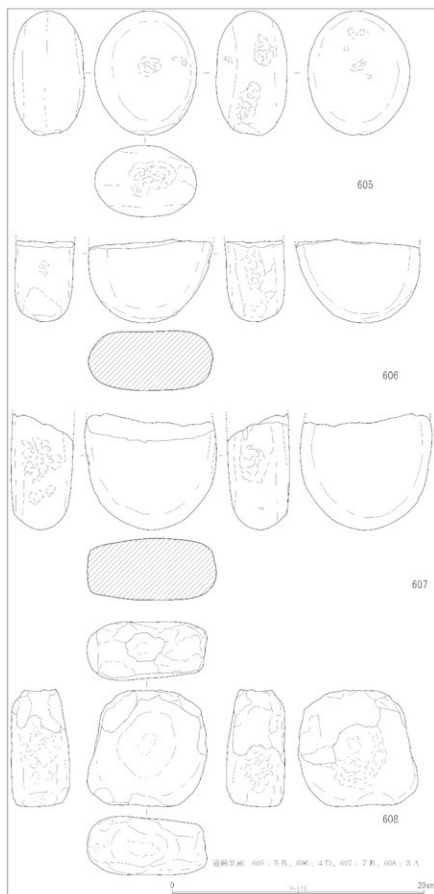


図 92 石器実測図 7 (磨石・敲石等 2)

図は 596 のように上下面にまでは及んでいない。599 は側面の一部に敲打痕状の潰れが集中している。

600～607 は磨・敲石である。形態的には上下の面が扁平なものが多い。機能としては、使用により上下面が平滑になっているとともに、側面に敲打痕状の潰れもみられるものがあり、磨石・敲石として多機能的に使用していたと考えられる。この中で、601・603 は日南層群で産出する大型有孔虫化石であるオバキュリナ・コンプラターナを含む特徴的な砂岩（宮崎地質研究会 2013）であり、沿岸部からもたらされた可能性がある点で特筆できる。

608 は凹石で、一部剥離して不明瞭な部分があるが、上下および各側面の 6 面全てを使用している点が特徴的である。これらの凹みは側面よりも上下面の方が深く凹んでいる。

609 は敲石の可能性のある鏝であるが、はっきりとした使用痕跡は認められない。また、全面が平滑で光沢があるものの、特に使用や

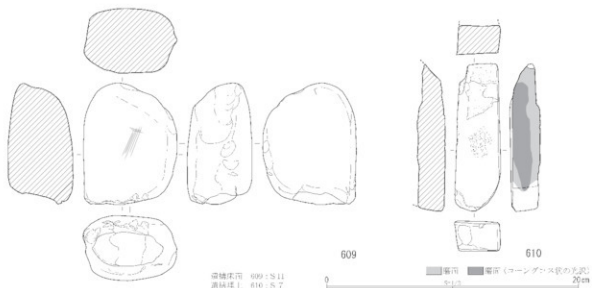


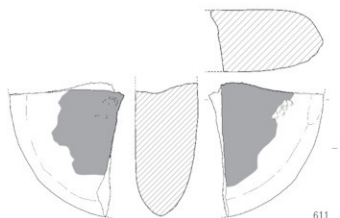
図 93 石器実測図 8 (磨石・敲石等 3)

加工によるものではないと思われる。

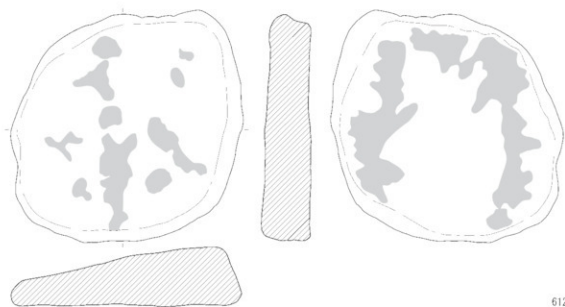
610はコーングロス状の光沢のある磨面をもった石器の破片である。図正面には敲打痕状の潰れも認められる。砥石の可能性もあるが、砥石ではコーングロス状の磨面は形成しないと思われる点や潰れが認められることから、台石あるいは磨石などの機能が想定される。

611～621は台石類である。磨面を形成しているものは台石として機能したことが考えられるが、中には特に加工が認められないものもみられる。これらの加工が認められない石器については、遺構内から出土しており、意図的に持ち込まれたと考えられるものについて図化を行った。また、被熱によるためか淡く赤化しているものも目立つ。611側面が被熱によるためか淡く赤化している。612は磨面や使用痕はみられないが、大型であり比較的平坦な面を有していることから、台石的な使用を目的として持ち込んだ可能性が考えられる。613は磨面を形成しているほか、一部に「V」字状の凹みが認められるため、砥石として使用した可能性も考えられる。614は一部磨面状の平滑な面を形成しているほか、被熱によるためか淡く赤化している。615は図化した面に磨面を形成しているが、それ以外の部分は剥落が顕著である。616は顕著な磨面を形成している。他の台石でみられたように被熱による淡い赤化が認められる他に、側面が黒く変色している。617は、図化した面が緩く湾曲しており、磨面状を呈するが顕著ではない。それ以外の面は剥落が顕著であり、若干赤化しているため、熱が加えられることが多かったのかもしれない。618は破片であるが、図示した二面に磨面を形成している。619は正面・裏面に明確な磨面を形成している。また、図正面には敲打痕状の潰れがみられるとともに、被熱によるためか赤化とともに黒く変色している箇所がみられる。620は図正面に二面の磨面を形成しているが、一面は被熱によると思われる赤化が顕著であるが、この赤化した面の方が古い使用面である。621は鉄錆の付着が著しい石器で、鉄器の製作に関連した機能が想定される。磨面の上に錆が付着しているため、台石などを転用している可能性があり。錆は角部分に多く付着しているため、この部分を利用した金床石と考えられるが、被熱した痕跡は乏しい。

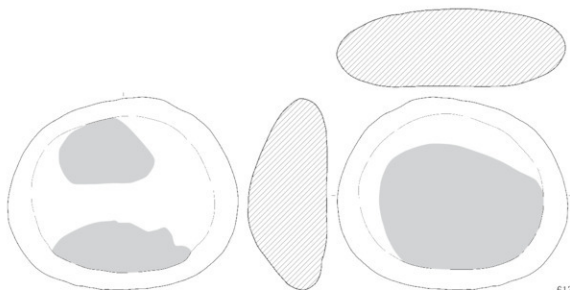
624～626は軽石加工品および大型の軽石であるが、表面の風化が著しい。624は上面の中央付近を浅く凹ませており、径1 cmほどの穿孔が施されている。用途は不明である。625・626は特に



611



612



613

遺構内出土記 612: S 7, 613: S 8 遺構内出 611: 19A
 ■ 断面もしくは凹み部分 ■ 断面 (コンクリート製の模型)

0 10 20 cm

図 94 石器実測図 9 (台石・大型磯等 1)

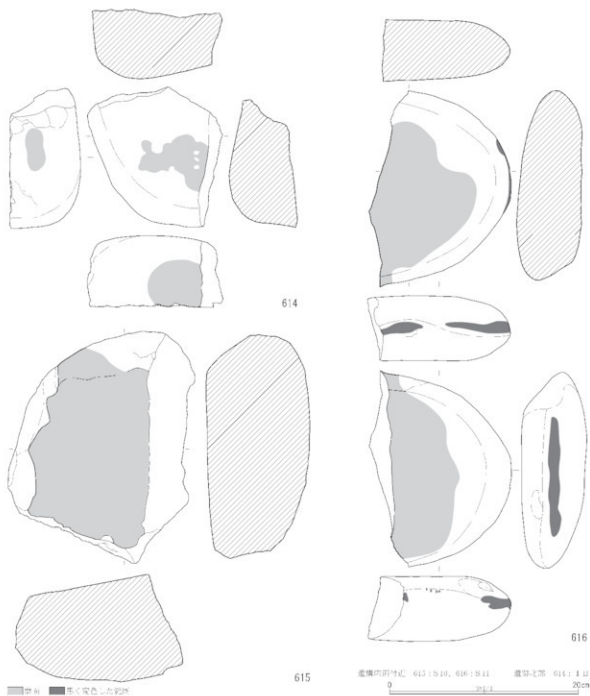


図 95 石器実測図 10 (台石・大型礫等 2)

加工はみられない自然のものと思われる大型の軽石である。624～626の軽石はいずれも基本土層 5 a 層からの出土であり、霧島御池軽石層の基本土層 6 層にもこのサイズの軽石はみられないため、何らかの理由で人為的に持ち込まれたものと思われる。

627～632は砥石で、出土層位から、627・628が中世、そのほかは古墳時代以前のもと思われる。627は図正面には断面「V」字状の溝が中央にみられる。628は使用による研ぎ減りが著しい。629は図下側面にも擦痕が認められる。各面ともに擦痕が認められるため、石製品の可能性もある。630は節理面での剥離が著しい。631・632も原形は不明であるが、正面・裏面および側面を使用している。

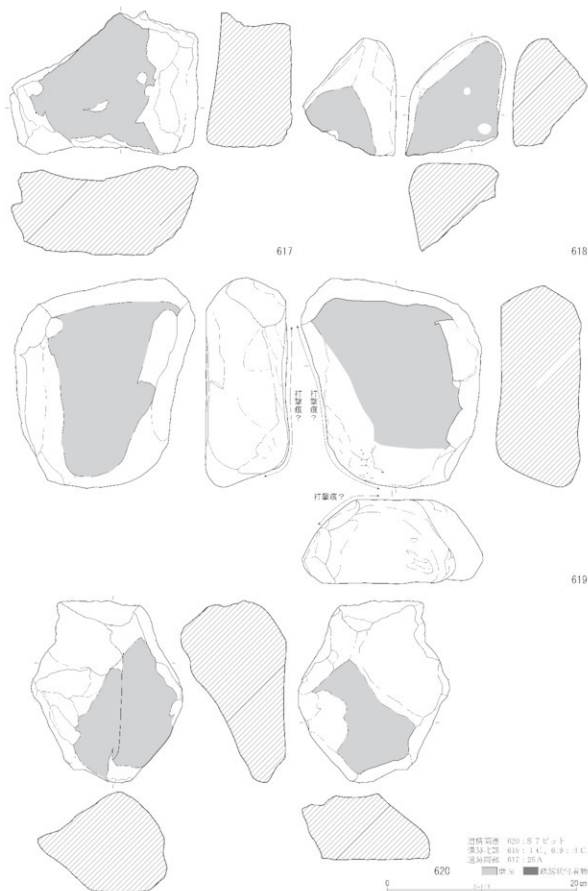


図96 石器実測図11 (台石・大型礫等3)

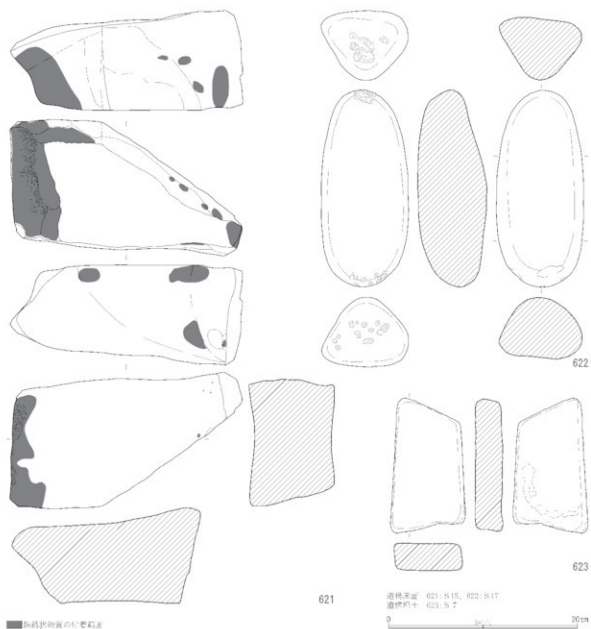


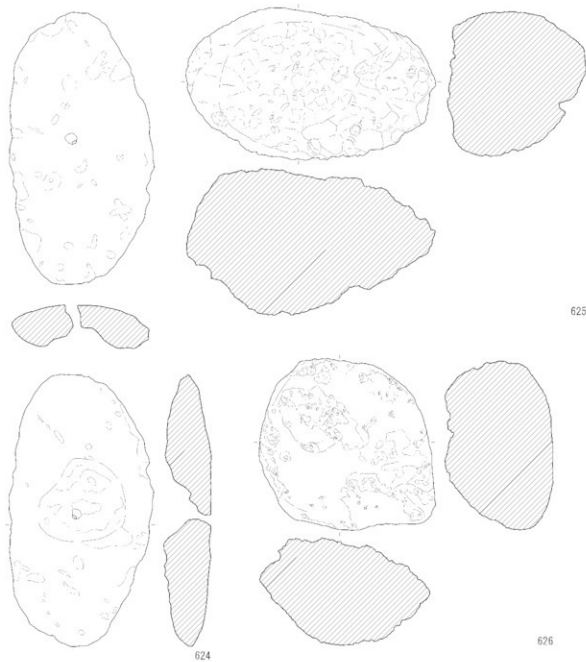
図 97 石器実測図 12 (台石・大型磯等 4)

633～636 は石製品で、633・634 は管玉、635～637 が滑石製石鍋の再加工品と破片、638 が石製の円板である。633 は翡翠製と考えられる。また、切斷しようとしたためか、浅い「V」字状の凹みが廻っている。635 は杓子状に再加工が行われている。杓子状の石鍋再加工品は筆無遺跡でも出土している。636 は石鍋の口縁部付近の破片で、口縁部下に断面台形状を呈すると思われる長めの鐙が付いており、木戸分類Ⅲ-a 類（木戸 2004）に該当し 12 世紀頃のものと考えられる。637 は石鍋片で、図下部の破面の一部に加工が認められる。

(3) 青銅器・鉄器

鉄器

639～644 は鉄鐵と考えられる破片であるが、全体の形状がわかるものは 639 のみである。642 は身部の両面中央に木質が透着している。646 は刀子あるいは刀剣類の刃部と考えられる破片である



資料名 624 : 2 C, 625 : 2 A, 626 : 2 A

図 98 石器実測図 13 (軽石類)

が、小片のため詳細は不明である。

647 は刀子と考えられる破片であるが、棟側が闊状を呈する。648 は鉦と考えられる鉄器で、全体を二つに折り曲げているほか、さらに中央付近で緩く屈曲している。刃部側は錆化により剥落しているが、刃部付近はわずかに残存している。刃部は、断面は浅い「U」字状を示すが、鋸状には広がらないようである。649～653 は明瞭な刃部を形成していない器種不明の鉄器である。649 は図右上隅を落ち曲げているようにみえるが、錆化によるはっきりしない。651 は楔、652 は釘状を呈する。

654～655 は器種不明の鉄片で、655 は縁辺を折り曲げるとともに、鉄板部分には若干の凹みが

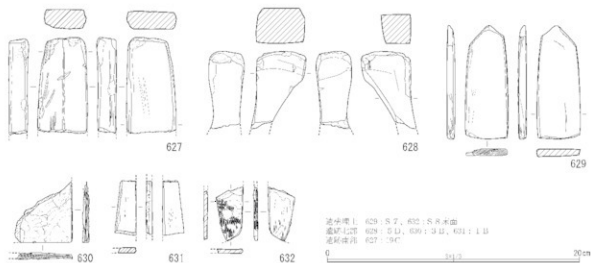


図 99 石器実測図 14 (砥石)

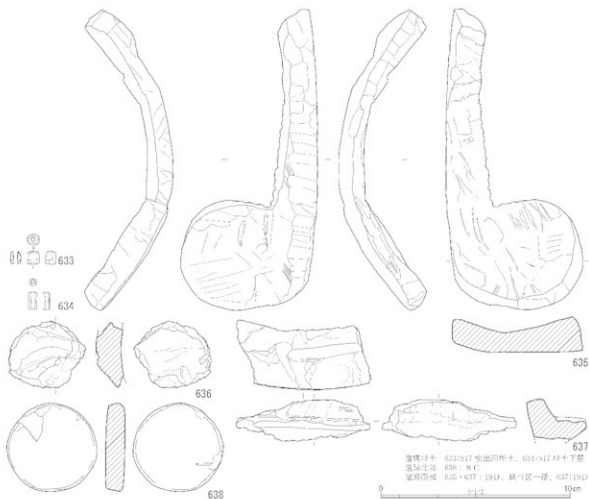
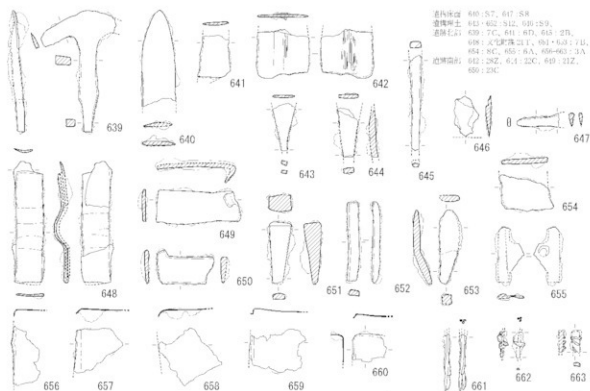


図 100 石器実測図 15 (石製品)

みられる。656～660は鉄片で、形態的に類似していることや、同一グリッド内から出土していることから同一個体である可能性が考えられるが、接合はできなかった。これらの鉄片は、縁辺を「L」字状に折り曲げている点に特徴がある。このような鉄片の縁を折り曲げたものは、古墳時代の祭祀遺跡などでみられるが、その関連性については不明である。



赤褐色の断面は復元的な。651・662の断面中の縦線は錆化による空隙を示す。

図 101 鉄器実測図

661は径1mm程度の針状の鉄器を3本束ねたものである。662・663は軸となる鉄器に径1mm程度針状の鉄器が巻き付いたような状態を呈するものである。いずれも用途は不明である。

青銅器

青銅器としては、キセルの煙管部（写真図版44-3-664）が出土している。

註

(1) 遺構の平面形の確認は検出面よりも下位になってしまったため、土層断面図の掘方上端と平面形における上端は一致していない部分がある。

引用・参考文献

- 今嵐屋敏行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器-宮崎平野部を中心として-」『第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料-古墳時代中・後期の土師器-その編年と地域性-』、pp.145-173
- 鹿児島県教育委員会 2006『先史・古代の鹿児島（通史編）』
- 木戸雅寿 2004「13. 石銅」『概説 中世の土器・陶磁器』（初版第六刷）、pp.511-521。
- 栗畑光博 2000「中溝式系土器の検討-宮崎県における弥生時代中期後半～後期前半にかけての土器編年にむけて-」『古文化談叢』第45号、pp.73-99
- 太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡XV』
- 中世土器研究会編 2004『概説 中世の土器・陶磁器』（初版第六刷）
- 中園 聡 1997「九集南部地域弥生土器編年」『人類学研究』第9号、pp.104-119
- 中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号、pp.57-76
- 中村直子 2002「薩摩・大隅」『第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料-古墳時代中・後期の土師器-その編年と地域性-』、pp.175-200
- 宮崎県地質調査所 2013『宮崎県の地質フィールドガイド』、コロナ社
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『筆無遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第166集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『平峰遺跡（3次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第219集

第4章 遺構と遺物の検討

第1節 旧石器時代～縄文時代早期の遺物について

1 旧石器について

今回の調査では、およそ12,800年前に降下したとされる桜島薩摩火山灰(Sz-S)を含む層(基本土層11層)よりも下位の層において、剥片が1点出土している。都城市域では、旧石器時代の層に達するには現地表下数mの掘削が必要であり、試掘や確認調査、あるいは小規模な発掘調査の場合、安全面の問題から掘削深度がそこまで及ばないことも多かったが、近年では調査件数も徐々に増加している。都城志布志道路関連では、本遺跡をはじめ、中床丸遺跡・笹ヶ崎遺跡⁽¹⁾でも確認のための調査を行っている。都城盆地全体をみると、現在までのところ、旧石器が出土した遺跡としては、大年遺跡以外には、表1のように、大岩田上村遺跡(大岩田町)・雀ヶ野遺跡・軍人原遺跡(高城町)・平松遺跡(高崎町)・池増遺跡(山田町)・王子山遺跡(山之口町)などの遺跡が知られている。これまでのところ、高城町や山之口町など主に都城盆地北部の地域で見つかっている遺跡が多くなっている。したがって、今回、都城盆地の南部で旧石器が出土したことによって、盆地内の広い範囲で人々が活動を行っていたということができるようになった。

旧石器が出土しているこれらの遺跡では、主に旧石器時代の終わり頃にみられる細石刃・細石核を中心とする遺物が出土している。その中で、大岩田上村遺跡では、細石器が出土した層の下の層からも石器が出土している。また、王子山遺跡では細石器と同じ層位であるが、剥片尖頭器も出土しており、より古い時期の遺物が存在する可能性を示している。その一方、王子原遺跡や雀ヶ野遺跡群では、旧石器時代末～縄文時代草創期までの資料が混在して出土しているような状況でもある。雀ヶ野遺跡群では、霧島小林軽石(Kr-kb)(約1万4千年前)と霧島牛のすねテフラ(Kr-US)の間の層で出土しており、一部不明瞭な部分もあるが、旧石器が出土するのはおよそ桜島薩摩火山灰(約12,800年前)を包含する層の直下付近でほぼ共通しているようである。また、雀ヶ野遺跡群や王子山遺跡の例から、桜島薩摩火山灰の包含層直下頃が旧石器時代から縄文時代への移行期にあたることが想定できる。それに対して、今回の大年遺跡の調査で出土した剥片は、桜島薩摩火山灰を含む層(基本土層11層)の下面から30cm程掘り下げたレベル(写真図版1-1)であり、桜島薩摩火山灰を含む層との間には若干の時間的な開きが存在する。他の遺物が出土していないため、断言は難しいが、都城盆地内でも最も古い石器の一つということができる。

ところで、旧石器が出土した基本土層12層は、厚さが50～60cmの層で、色調が上下でやや異なる。下部は明褐色、上部でやや黒みを帯びるが、その境界のレベルは一定せず、場所によっては大きな起伏がみられる。この色調を除けば、土層中に含まれる碎屑物等には大きな差がみられないようである。この12層中の細分線に比べると、本層の上下に位置する層との境界となる層界面の起伏や傾斜は小さく、水平堆積に近い状態(巻頭図版2-2、同5-1を参照)である。したがって、基本土層12層内の色調の違いは、構成物の違いが生じるような堆積要因の違い(＝異なる土層)というよりも堆積後の有機物等の影響といった環境的な要因が背景として考えられる。そのため、基本土層の項でも触れたが、今回の調査では12層の上下層を同一層として扱い、色調による区分は行っているが明確な分層を行っていない。また、第2章の地理的環境でも述べたが、土壌学的研究からは、基本土層12層に対応すると考えられる層は、湿潤な環境から次第に乾燥した環境へと次第

表1 都城市内の旧石器時代～縄文時代早期の主な遺跡

遺跡名	所在地	立地	内容	出土部位					文献	
				P14 下	P14 間	P11 下	牛	Aア 下		
旧石器時代										
大岩田上村遺跡	大岩田町	台地上	細石刀・細石核	○					P14下位層3期分	泉理文第77集
雀ヶ野遺跡群	高城町	丘陵上	細石核、槍先型尖頭器			○			牛ノすねと小林軽石の間層	高城町第18集
王子山遺跡	高城町	台地上	割片尖頭器、細石核			○			草創期包含層と同じ層	都城市第107集
平松遺跡(試掘)	高城町	台地縁辺?	詳細不明						-	都城市第110集
縄文時代草創期										
川原谷出水遺跡	梅北町	台地縁辺部	土器・石器	○					P14直下	都城市第112集
雀ヶ野遺跡群	高城町	丘陵上	有茎尖頭器			○			牛ノすねと小林軽石の間層	高城町第18集
王子山遺跡	山之口町	台地上	壺穴状遺構4、土灰10、伊穴30、集石6、配石8			○			早期包含層下位層	都城市第107集
縄文時代早期										
扇風谷遺跡	上水沢町	台地端部	円筒形・押型文			○			蒲生田スコリア下位層	都城市第17集
白山原遺跡	早水町	丹波地帯高地	集石28			○			P11とP14の間	都城市第57集
地島遺跡	早水町	丹波地帯高地	集石11			○			P11下位層	泉理文第84集
平田遺跡	南郷市町		集石1、土灰8							都城市第87集
加治原1遺跡	南郷市町	低位段丘面	集石19、土灰2			○			P11下位層	都城市第81集
田谷・尻枝遺跡	南郷市町	台地端部	陥とし穴、ビッド						蒲生田スコリア下位層	都城市第38集
平峰遺跡	平塚町	台地上	土灰2、集石1			○	○		P11～P14の間	泉理文第219集
鶴木木遺跡	五十町	台地上	土灰1、集石1			○	○		P11層移層～遺集層	泉理文第205集
王子原遺跡	安久町	陥状地	集石2			○	○		P11包含層～3層下まで	都城市第106集
天ヶ洞遺跡	安久町	低位段丘面	土灰、				○		P11包含層	都城市第32集
王子原第2遺跡	安久町	丘陵上	遺物						上部層	都城市第66集
下尾平野第4遺跡	安久町	台地上	土灰1、ビッド1				○	○	牛ノすね～P11下位層	都城市第115集
安久中原遺跡	安久町	丘陵斜面 ツラス部	土灰1、土器					○	アカホヤ直下～下位層	都城市第6集
梅北北原遺跡	梅北町	丹波地帯高地	集石10			○			P11下位層	都城市第83集
大年遺跡	梅北町	台地端部	土器片			○			P11下位層	本報告書
大年遺跡(布試掘)	梅北町	台地端部	円筒形土器破片						造成土中	都城市第93集
梅北佐土原遺跡	梅北町	台地縁辺部	陥とし穴1、集石2、土器・石器			○			P11下位層	都城市第76集
川原谷出水遺跡	梅北町	台地縁辺部	土灰1、集石3				○		P11包含層	都城市第112集
平松遺跡	高城町	台地縁辺部	壺穴状遺構2、土灰5、集石2				○	△	牛ノすね下位層～P11包含層	都城市第108集
高八重遺跡	高城町	丘陵南斜面	集石6、土灰3						治良大調軽石の上位層	都城市第90集
雀ヶ野遺跡群	高城町	丘陵上	集石遺構48						牛ノすねと小林軽石の間層	高城町第18集
王子山遺跡	山之口町	台地上	壺穴状遺構3、土灰11、集石8、伊穴6			○			P11下位層	都城市第107集
萩ヶ久保遺跡	山之口町	丘陵端部	集石19、土灰2			○			P11下位層	都城市第97集

※「P14下」= 桜島薩摩火山灰下位層、「P14」= 桜島薩摩火山灰包含層、「間」= 桜島薩摩火山灰と桜島11テフラの間層、「P11下」= 桜島11テフラ下位層、「P11」= 桜島11テフラ・蒲生田スコリア包含層、「牛」= 牛ノすね火山灰 (Ka-US) 包含層、「Aア」= アカホヤ下位層

に変化したことが指摘されており、下部では湿地的状況であったことが想定されている(井上ほか2001)。このように考えると、今回割片が出土したレベルは、12層の上部であり、乾燥化が進んだ段階の頃であるのかもしれない。

旧石器時代の遺物が出土した遺跡をみると、台地や丘陵上に立地しているものが多い。旧石器時代に属する遺跡の多くが台地や丘陵上にあるのは列島規模でみても共通していると思われるが、今後、このような立地の遺跡で、桜島薩摩火山灰下層までの調査が増えれば、旧石器時代の遺跡も徐々に増え、都城盆地内の旧石器時代の様相がより明らかになってくるものと思われる。

2 縄文時代早期について

今回の調査では、山形押型文と思われる押型文1点と、無文土器の小片が数点と少数であるが、縄文時代早期の遺物が出土した。残念ながら、それ以前の草創期の遺物・遺構については検出できなかった。また、今回の調査地から西へ100mほど離れた場所で2008年に都城市教育委員会が行った試掘調査でも、早期の土器片が出土している。この試掘調査は農業関連事業に伴って行われたが、この調査の際に造成土中からであるものの、「縄文時代早期の円筒形土器が出土」している（都城市教育委員会2009:p.20）。そのため、今回の調査では集落を構成するような遺構・遺物は検出できなかったが、調査区外の西側には当該時期の集落が存在する可能性がある。

ところで、周辺の中床丸遺跡や笹ヶ崎遺跡においても、旧石器だけでなく縄文時代早期の遺構・遺物が見つかっており、比較的早い時期からこの周辺で人々が生活を営んでいた状況をうかがうことができる。また、都城市内ではまだわずかであるが、縄文時代の草創期の遺跡もみつかっており、旧石器時代から引き続き人々が生活していたようであり、王子山遺跡では住居跡の可能性のある堅穴状遺構が4基検出されている。これらの草創期の頃の遺構・遺物検出レベルは、旧石器時代の遺物が検出されるレベルに近く、桜島薩摩火山の直下付近である。王子山遺跡では草創期の遺物包含層から旧石器も出土しており、それほど時間的な差がないのかもしれない。

旧石器時代、縄文時代草創期の遺跡は、都城市内に散在しているが、縄文時代早期では、表1のように、都城盆地の南部域に多いが、特に大年遺跡が位置する梅北町や、それに隣接する安久町に多く見つまっている。梅北町内の川原谷出水遺跡では、草創期の遺物も出土しており、今後の調査でも期待される。

これらの縄文時代早期の遺跡の立地についてみると、台地や丘陵上が多いが、中には白山原遺跡・王子原遺跡・梅北原遺跡のように低地で遺跡が見つかる例もあり、当時の人々が広い範囲で生活を営んでいたことを示している。旧石器時代や縄文時代の多くは丘陵や台地縁辺部を中心とした生活を送ったイメージがあるが、それ以外の生活スタイルもあったのかもしれない。また、早期の遺物が出土した層位をみると、その多くが桜島11テフラ（Sz-11）あるいは霧島蒲牟田スコリア（Kr-Km）を包含する層の下位層から出土していることがわかる。王子原遺跡では桜島11テフラ包含層から下位の3層まで早期の遺物包含層とされているように、この時期は前後の時期と異なり、人々の活動が活発であったようである。

第2節 縄文時代後期～晩期の遺構・遺物について

1 土器について

縄文時代後期～晩期の土器の中で、後期の土器は少量で、その多くは晩期のものである。後期の土器は市来式系や西平式系の土器など、複数型式がみられるが、調整に貝殻条痕を施す市来式系の土器がやや目立っている。周辺遺跡では、大年遺跡と同時期に調査を行った中床丸遺跡において、多量の市来式系の土器が出土している。中床丸遺跡とは谷を挟んでいるため、大年遺跡とは同一の遺跡と考えにくく、中床丸遺跡で生活を営んでいた人々が大年遺跡周辺に来ていたのか、同時期に大年遺跡でも人々が生活を営んでいたのかはあきらかでない。

一方、晩期の土器は多く出土している。特に黒川式と考えられる黒色磨研土器の浅鉢の出土量が多い。浅鉢の量に対して、深鉢と考えられる個体は少ないようである。浅鉢の口縁部には、直線的に長くのびるもの、屈曲して段を持つもの、段が沈線化したもの、屈曲部が退化したものなどバリ

エーションもみられる。浅鉢や深鉢にみられるリボン状突起もリボン状突起だけでなく、退化して単なる波状口縁状の突起になったようなものも存在する。このような複数の形態は、時間的な変遷過程を示していると考えられる。ところで、精製品を含む浅鉢にはコグあるいはススが附着したものが認められ、煮炊きに使用したことをうかがうことができる。大年遺跡の調査と同時期に調査を行った、都城盆地北部の大窪第1遺跡で出土した浅鉢にもススが附着した個体があるほか、筆無遺跡においても外面にコグ内面にススが附着した浅鉢の個体が出土しており（宮崎県埋蔵文化財センター 2008a）、浅鉢を煮炊きに使用する習慣があったようである。このような状況から、大年遺跡の縄文時代後期において一定期間連続して、あるいは断続的に調査地周辺で生活が営まれていた状況をうかがうことができる。

このように黒川式系の浅鉢で見慣れた土器が多い中であって、特に目を引く土器がある。それは79の土器で、器表面にヘラ描きによる縦方向の格子目状の沈線と並んだ沈線文を施している。今回の調査では晩期の鱗状の突起を有する深鉢が出土しており、遺跡内で出土しているその他の土器との形態的な類似性から、晩期の土器の中に位置付けた。しかし、形状や文様から、中期末～後期初頭頃の大平式系の土器ではないか、という指摘を当センター内で受けた。層位的には、基本土層5b層で包含層の中では比較的下位のレベルにあたる。ただし、観察表等にもみるように、4層～5b層付近まで複数時期の土器が出土している点と、中期末～後期初頭頃の土器が他に出土していないことから、晩期土器の中に位置付けたままとした。中期末から後期初頭に多い、凹線などを施した土器に伴伴する文様に類似することから、この時期まで遡る可能性があり、霧島御池軽石（Kr-M）降下以降までもなくして人々が生活を行っていた可能性もある。

以上のほか、縄文時代晩期後半の刻目突帯文と考えられる土器も若干出土している。その中には、赤色顔料を塗布したとみられる個体が存在しており、主に壺においてそのような資料がみられるようである。同様な時期で、このような顔料を塗布した土器は、黒土遺跡でも出土している。この黒土遺跡は大年遺跡に比較的近い大岩田町に位置しており、弥生時代早期の水田が見つかっている坂元A遺跡などが位置する横市川周辺と大年遺跡との中間付近に位置している。黒土遺跡の土器も弥生時代早期に位置付けられており、大年遺跡においても黒土遺跡と類似した特徴を持つ土器が出土していることから、この付近の地域内において一定の情報を共有していたものと考えられ、確認調査ではみつからなかったものの、遺跡周辺の低地部において縄文時代の晩期末には水田稲作を行っていた可能性がある。遺跡周辺の低地部は水はげが悪く、道路建設予定地では雨後には湿地状になっていることも多かった。また、確認調査時にはそれほど深くない掘削深度で水が湧いている。このような環境は、弥生初期の水田を行う環境には適していると思われる。しかし、今回の調査では、黒土遺跡などの弥生早期の遺跡でみられるような石庖丁や水田遺構など、水田稲作に関する痕跡を確認することはできなかった。そのため、ここでは縄文時代晩期として位置付けておくと、弥生時代早期に入っていた可能性も十分に考えられる。

2 黒曜石について

大年遺跡の発掘調査では、調査の初期段階から黒曜石の出土量の多さが目を引いていた。微細な剥片・砕片類（以下「剥片類」と省略）については、見逃したものもあると思われるが、今回の調査では遺跡北部を中心として、合計994.46gが出土している。成品についてはこれに含んでいないことと、見逃した微細な剥片類が存在することを考えれば、1kgを越える量の黒曜石が遺跡内で消

費されたと考えてよいであろう。これらの剥片類について、図 102 のように各グリッド別に出土量をみると、遺跡北部で約 500 グラム、遺跡南部で約 250g となっている。報告書中では記載していないが、それ以外のグリッドが確定できない約 250g についても、遺跡南部で約 30 g が出土しているほかは、遺跡北部で出土しているため、全体の 7 割近くが遺跡北部で出土しているということになる。このように、剥片類が多量に出土している一方で、成品は少なく、石鏃 13 点(うち姫島産 3 点)、異形石器 1 点程度である。

つづいて、これら黒曜石の剥片類について、各グリッド別に出土量を比較してみると、遺跡の北部調査区では調査区内の広い範囲で合計 10g 以上の剥片類が出土している。その中でも北半部の中央(Bグリッド列)では、50g 以上出土しているグリッドが 3 箇所あるように、集中度が高い。これに対して、北部調査区の南半部では、集中度は低いが、20g 以上しているグリッドが 5 箇所あるように広い範囲で平均的に出土しており、そのあり方に差がみられる。一方の南部調査区では、遺跡北部とは異なり、24～28 Zグリッドなどの一部に集中しており、特に 27 Zグリッドでは合計およそ 40g の剥片類が出土している。それ以外のグリッドでは、周辺にあたる 25 Aグリッドでおよそ 25g が出土しているほかは、10g 未満となっている。おそらく西側の調査区外にも広がっているものと思われる。この 28 Zグリッド周辺は石器の出土数が比較的多いことから、石器製作と

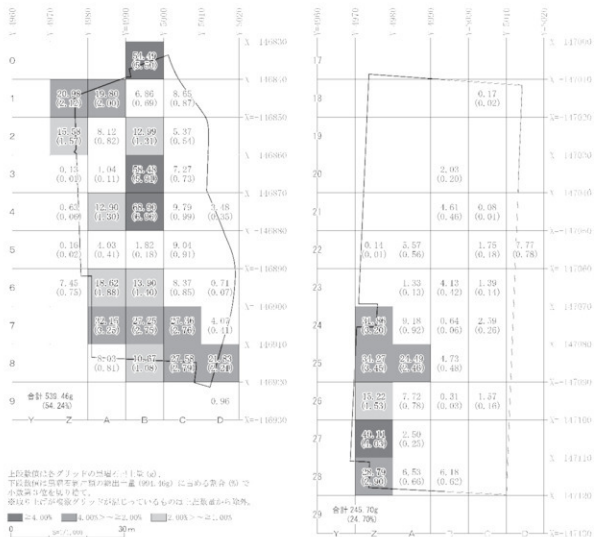


図 102 グリッド別にみた黒曜石剥片類の出土状況

表2 小林市教育委員会による黒曜石原産地分析の結果

遺跡名	時期	分析点数	姫島	淡路	腰岳群	白浜群	島ノ口群	白旗群	上野島群	竜ヶ水群	ほか	産地不明	文献
上島・千瀬野・大平遺跡	縄文早期	20	2				18						小林市第14集
谷ノ木遺跡	縄文早期	8	1				3	1			3		小林市第20集
高津佐遺跡	縄文早期	8			1		5	1			1		小林市第20集
山中遺跡	縄文中・後期	19	1	2	1	1	1	5	1	1		6	小林市新第4集
永野遺跡	縄文後期	13	4				4	5					小林市第17集
栗原野遺跡	縄文後期	33	4		14	1	5	3		3	3		小林市第15集
黒仁田遺跡	縄文後・晩期	15					10	3				2	小林市第18集

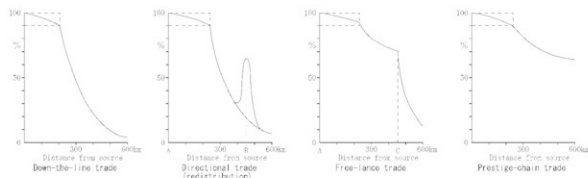


図103 Renfrewによる交易モデル (Renfrew 1984より改変再トレース)

関連したものである可能性が考えられる。

ところで、これらの剥片類について、肉眼観察で特徴が異なるものが見られたため、原産地を決定するために、それらを分類、選択し分析を行った。その結果、分析試料の全てが佐賀県腰岳周辺産（以下、「腰岳産」と省略）と考えられる結果が出ている（詳細については附編を参照）。出土している多くの剥片類は、分析に出した試料のいずれかに類似した特徴をもっているため、出土している黒曜石の大部分は腰岳産の可能性が高いと考えられる。気泡を多く含む特徴がみられる桑ノ木津留産と考えられるものも少数みられるが、全体としては腰岳産を意図的に選択していたものと考えられる状況である。なお、姫島産と考えられる乳白色の黒曜石の剥片類については、5Aグリッドと5Bグリッドで、合わせて1.13gを確認している。今回、報告書中で提示できなかったが、黒曜石以外の石材については、チャートの剥片が一定量出土している。また、大型の剥片もみられることや、チャート製の石鏃が多く出土していることから、石鏃についてはチャートが中心的使用されていたと考えられる。

このように、特定の地域の黒曜石が卓越している状況は非常に興味深い。縄文時代のように、首長制社会が発達する以前の社会では、通常、互酬の交換の割合が高く、交換を行う相手や集団はおよそ固定している場合が多い。このような交換の場合、使い古されたRenfrewの図（図103）に示されるように、原産地から離ればその量は次第に減少していく。一方、大年遺跡のように原産地から離れた場所にあつて、数量が卓越している場合には、直接的な交易や再分配などの交換が考えられるが、縄文的な社会構造でこのような交換が恒常的に発生するのかが今後大いに検討が必要である。今回の大年遺跡の調査の場合、可能性としては、大きな原石を1個入手して、それを分割して使用した可能性も無いことはない。しかし、自然面の状況などからすると、拳大程度の原石を複数使用していたと想定されるため、その可能性は考えにくい。

そこで、次に周辺の遺跡での状況と比較することによって、大年遺跡の状況が一般的であるのかどうか検討を行ってみる。しかし、管見の限りでは、都城市内の遺跡の調査報告書において、黒曜

石の原産地分析を行った例はほとんどないため、近隣の遺跡との比較は難しい。そのため、若干距離は離れるが、積極的に黒曜石の原産地分析を行っている小林市教育委員会が調査を行った遺跡との比較を行うこととする。小林市教育委員会が行った調査では、表2のように7遺跡の分析結果を確認することができた。小林市は都城から九州西部へ抜ける内陸部のルートにあたるので、これらの遺跡の分析によってある程度の傾向を推測できるのではないかと考えられる。この表をみる限り、縄文時代早期や後期といった時期的な違いはあるものの、比較的近い原産地である桑ノ木津留や日東周辺と推定される黒曜石が多くなっており、腰岳産は客体的で少ない。この中にあって、縄文後期後半を中心とする栗巢野遺跡では、分析試料のおよそ半分が腰岳産という結果がでており、割格的に突出している。このような状況からは2つの状況を推測することができる。一つは、前後する時期で腰岳産の黒曜石は少ないので、この縄文時代後期後半の時期だけに他地域産をしのぐほど、広く腰岳産の黒曜石が流通するようになった状況である。もう一つは、特定の遺跡のみで腰岳産黒曜石の比率が多くなっていることから、腰岳産黒曜石の流通ルートが決まっていた可能性であり、腰岳産黒曜石が特定の集団間でのみ交換が行われていた状況である。これ以上の推察は、より多くの分析結果を必要とするため、ここでは行うことは難しい。今後の課題としたい。

3 遺構について

これまでみてきたように、縄文時代の遺物は後期や晩期の土器のほか、黒曜石剥片類にみるように比較的多くの遺物が出土している。今回図示できなかった土器の小片や底部片なども含めると、数はさらに多くなる。このような豊富な遺物量に対して、今回の調査では、当該時期の明確な遺構は検出できなかった。土坑1・2がこの時期の遺構である可能性があるが、これらの遺構についても、底面からの出土遺物がないため、時期の確証を得ることはできない。このように、縄文時代後期・晩期の遺物が出土する遺跡では、遺物は出土するものの、明確な遺構を検出できない事例が多い印象がある。遺物の出土状況からすれば、層位的には基本土層4層下部から基本土層5a層にかけてのレベルに縄文時代後期・晩期の生活面が存在すると想定される。遺構が検出されにくい要因の一つには、この4層下部から5a層の土、特に5a層の黒色シルトは遺構埋土との区別が非常に難しい土であることが考えられる。古墳時代や弥生時代の遺構についても同様で、5a層内では遺構埋土と自然堆積の5a層の区分は困難である。その検出が可能となるのは、これらの遺構が霧島御池軽石を多く含む5b層から、ほぼ霧島御池軽石単層の基本土層6層、あるいはその下の基本土層7層の黒色シルト層まで遺構が掘りこまれているからである。このような状況を考えると、縄文時代後期・晩期の竪穴建物跡などの遺構が実際には存在しているが、検出できていないとすれば、遺構が5a層内で完結している可能性がある。この場合、竪穴建物跡の深さは、他の時期に比べると、非常に浅いものであったと解釈できる。逆に、遺構が存在していないとすれば、前後の時期とは異なり、遺物の分布と遺構の分布が重複しない生活スタイルであった可能性が考えられる。

南部九州地域において、縄文時代後期中頃までは平面形が方形をした住居跡がみられるが、それ以降は円形のもの基本となり、晩期も平面が円形となる住居が中心となる点是不変である(水ノ江2009)。県内においても、同様な傾向が指摘されている(宮崎県編1997)。都城市内においても、数は少ないものの、表3のような竪穴建物跡が検出されている。この中で、大岩田上村遺跡C区1号住居跡では、土層の堆積状況やピットの配列状況などから、平面楕円形を呈する住居跡が想定されている(図104)。報告書中では「第V a・b層での検出を試みたが、黒色土で

表3 都城市内の縄文時代後期・晩期の竪穴建物跡の諸例

遺跡名	所在地	立地	時期	検出面層位	遺構名	平面形状	検出面～床面 までの深さ (cm)	文献
上牧 第2遺跡	横市町	丘陵上	後期初頭	基本土層 5b層対応層	SA1	不定円形	65	県埋文第18集
					SA2	不定円形	65	
大岩田上村 遺跡	大岩多町	台地上	後期後葉	基本土層 5b層対応層	A区1号竪穴住居跡	楕円形	4～16	県埋文第77集
			晩期前葉		A区2号竪穴住居跡	隅丸方形	4～12	
					C区1号住居跡	楕円形	12～30	
野添遺跡	安久町	台地上	後期後葉	霧島御池 軽石層上面	1号竪穴住居跡	円形	12	県埋文第83集
			晩期前半		2号竪穴住居跡	円形	15～35	
					3号竪穴住居跡	円形	15～18	
					4号竪穴住居跡	円形	25～28	
					5号竪穴住居跡	円形	87	
					6号竪穴住居跡	円形	45	
					7号竪穴住居跡	円形	6～15	
横市中原 遺跡	横市町	台地上	後期 ～ 晩期	霧島御池 軽石層上面	1号竪穴住居跡	方形	8	県埋文85集
					2号竪穴住居跡	隅丸方形	20	
					3号竪穴住居跡	方形	18	
竪穴 遺跡	横市町	低位 段丘面	晩期末 ～ 弥生前期	霧島御池 軽石層上面	J-SA01	円形	10	都城市第50集
					J-SA02	円形	10～25	
					J-SA03	円形	20前後	
					J-SA04	円形	12	
					J-SA05	円形	10～30	
					J-SA06	円形	5～20	

※大岩田上村遺跡・竪穴遺跡の深さは柱穴の深さ



図104 大岩田上村遺跡の竪穴建物跡

の遺構検出は難しく、検出面は第VI層の御池軽石層まで下がってしまった。そのため、壁の立ち上がり等は確認できなかった」とされている。同様に柱穴のみの検出例は、竪穴遺跡でもみられる。また、同じ遺跡の中にある大岩田上村遺跡A区2の軒の住居跡も検出面からの深さは深くは15cm程度である。

これら縄文時代後期～晩期の住居跡について検出面から床面までの深さをみると、表3のように、霧島御池軽石層上面から深くは30cm程度で、10～20cmのものが多いようである。この中であって、後期初頭の上牧第2遺跡の住居跡

は、検出面が高いためか、検出面から床面までの深さが60cmと飛び抜けて深い。しかし、筆者が担当した平峰遺跡や大年遺跡の古墳時代の住居は霧島御池軽石層の下の黒色シルト層まで掘削しているものが多いのに比べると、全体的に住居の掘削深度は浅いようである。このようにしてみると、当時の人々は住居跡を残していたものの、構築する際の掘削深度が浅かったために残っている遺構が少ないということが考えられる。とすれば、建物の上屋構造も異なっていた可能性があるが、これも今後の課題である。今回も精査を行ったつもりであるが、縄文時代後期～晩期の遺物が多く出土する際には、十分な注意が必要であることを改めて認識することができた。

第3節 弥生時代～古墳時代の遺構・遺物について

1 土器について

弥生時代の遺物は、前期末～後期まで幅広い時期の土器が出土しており、古墳時代では、前期後半～中期前半頃と考えられる土器が出土している。このように、非常に幅広い時期の土器が出土し

ている。一方、器種については、全体的に壺は少なく、甕の出土が多くなっている。また、高坏については、弥生時代に属すると思われるものはみられない。編年については、後期前半頃までの編年については先行研究（中園 1997、菜畑 2000 など）があるため、編年的な位置付けは比較的行きやすい。問題となるのは後期後半～古墳時代にかけての土器である。今回、つたない知識を元に、弥生土器と土師器を便宜的に分けたが、形態的な特徴とともに、調整技法のあり方や胎土にも注意を払った。現状の編年は主に形態によるものであるが、古墳時代前期の資料がほとんどないのが大きな問題である。都城市域を含む、いわゆる成川式土器が分布する九州南部地域では、形態的な個体差が大きく住居内の供伴品でも形態的にやや異なる場合がある。例えば、堅穴建物跡 5 (S13) の床面出土資料は一括資料といってよい出土状況であるが、甕・高坏にしてもやや形態差が存在する。古墳時代にはり、時間が経つにつれて、土器に対する規範が弱くなっていったのではないかと考えられる。加えて、以前調査と整理を担当した平峰遺跡における土器の状況から、成川式土器の分布圏としてくられる薩摩地域の土器とも形態や変化の流れに若干の差異が存在する可能性が想定された。形態差の大きな点としては、都城盆地やえびの盆地で出土する成川式土器には脚台がつかない点や壺の胴部に文様を施さない点をあげることができる。一方、変化の差異は、甕と高坏の様式的な関係においてみられた。平峰遺跡では、甕は口縁が直線的にのびるものからやや内湾する形態であるが、高坏は坏部の稜が比較的明瞭で、口縁部が外反するなどやや古い形態のものが伴っていた。したがって、県南内陸部地域のように脚台がつかない地域の中での編年も必要であると感ずる。その中で、時期が近接している場合には、不安定な形態だけでなく、調整やその他の特徴を探る必要性があると考える。

詳細な変化を調べる能力は担当者にはないので、大きな時間軸で変化を追っていくと次のような変化があるといえる。甕は、口縁部の屈曲が弱くなるとともに、突帯の位置が屈曲部に徐々に移動していつている。また、突帯も弥生時代は断面三角形の小型で比較的シャープな形状であったものが、古墳時代では大型化して、そこに施される刻みの幅も太くなっており、刻みに布目痕がみられるようになる。突帯を付加する際の調整も、突帯上下を丁寧になでていたものが、古墳時代では上部のみをナデるようになり、さらに時代が下ると、上部のナデも行わないようになる。そのため、新しくなると甕本体と突帯の接合が弱いため、突帯が剥離している個体が多々みられ、中には焼成前にすでに剥がれ落ちてしまっていたと考えられるものもある。また、突帯の形状もナデにより断面三角形であったものが、押しつけるためか、断面が扁平な形状へと変化しているようである。

県南内陸部地域の土師器の特徴として、外面に粘土帯の接合線を明瞭に残す点をあげることができるが、堅穴建物跡 5 (S 13) から出土した土器にはその接合線はほとんどみられない。他の資料では、突帯の高さが高くシャープなものは接合ラインをナデ消している傾向にあり、突帯が低くにぶいものでは接合線を残すものが多いようである。しかし、接合線をナデ消している個体でも突帯部分には接合線を残しているようである。突帯が剥落した極わずかな部位の観察に止まるが、土器 255 は突帯接合部の中央付近に粘土の接合線と思われる空隙を認めることができる。このような観察から、突帯の接合位置の目安として、粘土帯の接合線が用いられていた可能性が考えられる。そこで両者の関係をみてみると、257・258・262・263 は接合面の中央に、265～268 が接合面の下辺に、270・274・275 は接合面の上辺に粘土の接合線が来ている、あるいはその可能性がある。同一個体と思われる資料もあるので、断定はできないが、粘土帯の接合線と突帯貼付位置には相関性があることを期待させるもので、時期的な目安になる可能性がある。ただし、大年遺跡の数少ない

資料でしか確認していないので、今後他の遺跡の資料を確認する必要がある。

このほか、古墳時代には、「カキアゲ」と呼ばれるハケメによって口縁部の屈曲を強調する技法がみられるようになる。東原式（中村 1987）や中村編年（中村 2002）の甕 A1 に該当すると考えられる調整技法で、古墳時代前期に特徴的な技法といえることができる。今回出土した土器の中にも、この「カキアゲ」状の調整を行ったものがみられるが、頸部から口縁部へのハケメを施した後に横方向のナデを行いハケメが部分的に消失している個体もみられた。他遺跡の資料と比較する必要があるが、古墳時代の土器ではハケメ後の横方向のナデはみられないようである。一方、弥生時代の中期や後期前半の土器は逆「L」字状や「く」字状に屈曲するには横方向のナデがみられる。このような前後の関係をみると、「カキアゲ」を施した後のナデを施す部位が次第に狭くなって、最終的に消失したのではないかと推測される。このような特徴から、「カキアゲ」後に横ナデを施さないものは土師器としている。この中で、弥生土器とした小型の甕 185 は、ハケメの後にナデを行っていないため古墳時代まで下がる可能性もあるが、例外的に形態的な特徴を優先して弥生時代に位置付けている。

次に、古墳時代にはいって、急激に出土量が増える高坏も調整技法などに特徴がみられる。今回の調査で出土した資料の中で、最も特徴的なのは高坏の形態的な区切りとなる部分、すなわち坏の口唇部、坏と脚の接合部、脚と脚柱の境界、脚裾の端部にスリップと呼べるような化粧土を土器の焼成後に塗布している点である。土器の焼成後にスリップを施していることは、巻頭図版 8-1 にも示したように、焼成時についた黒斑がスリップ部分では薄くなっていることによつてうかがうことができる。仮に、焼成前にスリップをかけていれば、スリップ部にも同じ濃さの黒斑が生じるはずである。焼成後に塗布した状態でそのまま遺存するかは非常に疑問であり、土器の洗浄中に剥がれていないため、塗布後になんらかの熱処理を加えている可能性は考えられる。このスリップは、水で溶いた粘土を横方向のナデによって薄く塗布しているため、黒半がなければ、焼成後のものかどうかはわからない。このようなスリップを施したものの、あるいはスリップではなく単にナデ消したものは平峰遺跡でも出土している。平峰遺跡の高坏を改めて検討した際には、器表面全体にミガキがはいるものと、端部にミガキがおよばないものが減少し、スリップを施したもののあるいはミガキをナデ消したものが増加するという时期的な変化の傾向を指摘した（加藤 2016 予定）。これを参考に、古墳時代の住居跡跡と考えられる堅穴建物跡 5・6・7 から出土した高坏の調整技法について比較を行った。その結果、堅穴建物跡 5 では全個体に、堅穴建物跡 6 では半数にスリップもしくはスリップ状のナデを施していたが、堅穴建物跡 7 では確実にスリップ施したものはみられず、前 2 軒と時間的な差があることをうかがうことができる。甕は出土していないため明らかでないが、高坏の形態や、鉢が多く出ている器種構成から新しい時期と考えられる。また、床面付近から出土している鉢の中には、口縁端部がわずかに外反するような形態をとるものがあることから、今塩谷・松永編年（今塩谷・松永 2002）の 6 期後半から 7 期にかかる頃の時期が想定されるため、年代としては 6 世紀中葉頃の時期が考えられる。床面から出土した炭の放射性炭素年代測定を行った結果の年代 [cal AD422-543 (95.4%)] にも近い。堅穴建物跡 5・6 出土の高坏は、脚柱部中程が若干膨らみ、脚柱と裾部の屈曲が明瞭で、裾部は大きく開く形態から、今塩谷・松永編年の Ba1 類に近い形態であることから、今塩谷・松永編年の 2 期、すなわち 4 世紀後半頃のものと考えられる。このような形態の高坏と、甕 255・256 が伴伴している点から、甕の突帯部の屈曲の消失は、4 世紀の終わりから 5 世紀初め頃に進んだのではないかと考えられる。

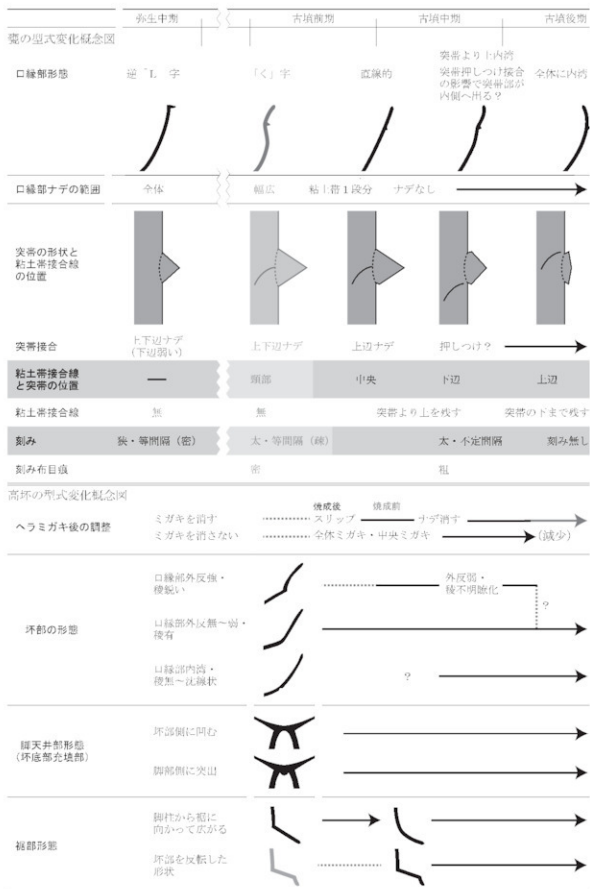


図 105 平峰遺跡・大年遺跡の土器からみた土師器諸要素の変遷想定図

以上、土師器の形態や調整技法から時間軸への位置付けを試みたが、平峰遺跡との比較から課題も残る。主に高坏に関してであるが、坏口縁部の外反の仕方、坏部外面の稜、脚部形態、脚柱内面天井部の形態、そして調整技法である。坏口縁部の外反の仕方および外面の稜については、平峰遺跡で出土している高坏の中には372のように、外反度が大きく、稜もシャープなものが比較的多くみられる。形態的には古く位置付けたくなる形態である。次に、坏部形態については、444～450のように坏部を反転させたような型式との関係である。平峰遺跡では、この形態とともに、通常の「八」字状に裾部も出土している例があるが、今回の調査では坏部を逆転させた脚部をもつ高坏はわずかである。脚柱部内面の天井部の形態は、坏部側に凹むものが多いが、その中に混じって365・366のように脚部側に突出するものがある。平峰遺跡の調査でも、凹むもの（平峰遺跡での分類a類）が91点出土しているのに対して、突出するもの（b類）は15点に止まる。大年遺跡では、堅穴建物跡5の一括遺物で両者が出土していることから、同時期に存在したことは間違いない。調整の仕方や形態は両者でほとんど変わらないため、同一集団内の異なる製作者や製作後の経路を考える必要がある。図83に示すように、高坏の製作において、脚柱天井部（坏底部）の充填部にもいくつかの形態が存在する。ところで、脚部の製作や坏部の製作には時間的な間隔を置いていたようである。そのことは、出土する充填部の形態は様々であるが、坏部や脚部との剥離面が割れておらず、擬口縁状を呈して、器表面のような状態となっていることから推測される。他にも各種細かな製作技法の違いがみられるが、大年遺跡の資料からは言及が難しいので省略したい。

以上のように、大年遺跡出土の土師器を中心とした土師器の特徴からその時期や特徴などを考えてきた。大年遺跡出土の土師器は、高坏は宮崎平野部に類似し、甕は薩摩半島の成川式土器に類似するなど、両地域の土器が混在した独特の器構成をしている。特に堅穴建物跡5の一括出土資料は、時間軸における定点として両地域における古墳時代社会の関係を考える上で貴重な資料といえることができる。

2 堅穴建物跡について

今回の調査では、一般的にみられる平面方形の堅穴建物跡とともに、南部九州地域に特徴的な間仕切付建物跡、いわゆる「花弁状住居」を3基検出した。先行研究（石川1991、北郷1989・2011など）を参考とすると、間仕切付建物跡は、南部九州地域では弥生時代中期後半から古墳時代初頭頃までみられる。形態的には円形を基調としたものが先行し、それほど遅れることなく方形を基調としたものが出てくるが、およそ中期後半に定型化し、後期に定着普及することが指摘されている。ただし、円形基調の建物跡と方形基調の建物は排他的ではなく、同時期に併存しているようである。また、長津氏や北郷氏が行ったような細かな型式分類（長津1985、北郷1989）に対応するような編年は現状では難しいようである。その中であって、大まかには時間的な変化は柱穴関係にみられるようであり、当初は建物の壁の径や柱穴と相関関係があった突出壁であるが、次第にその関係がくずれてくるのが指摘されている。この点からすれば、形態によってのみ時期を形態することは難しく、間仕切付建物の編年は現状ではまだ検討する余地があることをうかがうことができる。

大年遺跡で検出した間仕切付建物跡は、平面形が円形を基調とするものが2軒〔堅穴建物跡1・2（S7・9）〕、方形を基調とするものが1軒〔堅穴建物跡4（S16）〕である。堅穴建物跡1は中央から北側に4箇所、堅穴建物2は東側のものが不明瞭であるが全体に7箇所、堅穴建物跡4は南東部に3箇所の突出壁を有する。柱穴は3軒の建物ともに主柱穴は4本と考えられ、堅穴建物

跡1・2は、中央の一段回んだ場所のおよそ四隅に位置している点で共通している。柱穴と突出壁の関係では、突出壁が多い堅穴建物跡2は全ての柱穴が突出壁の前面に位置し、堅穴建物跡1・4は突出壁がある箇所はその全面に位置しているが、堅穴建物跡4の南西部の柱穴は突出壁との距離が短い。石川氏によれば、堅穴建物跡全体の傾向として、円形基調の堅穴建物跡では後期前半の主柱は5本以上で、後期後半になって主柱が2本、4本のものが出現し、方形基調の堅穴建物跡では、後期前半は2本が主流で、後期後半以降に4本柱が増加するとされる(石川1991)。したがって、大年遺跡の間仕切付建物跡は、4本柱であることから、後期後半以降の時期が考えられる。

このほか、間仕切付建物跡がみつかっている遺跡の各報告書にあたることはできなかったが、先行研究をみた範囲では、類似した形態として、熊野原遺跡(宮崎県教育委員会1988)の間仕切付建物跡(図106)をあげることができる。図示した熊野原遺跡の2軒の建物跡は、間仕切りや柱穴の位置などが大年遺跡の建物跡と類似している。主軸と間仕切りがつく位置は異なるが、方形基調のSA2の中央の突出壁に柱穴に近い点も類似している。大年遺跡の調査ではこれらの間仕切付建物跡に伴う土器がないため、確実な時期の位置付けが難しいが、上記のように柱の数や熊野原遺跡との類似点から、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃の時期に位置付けておく。なお、堅穴建物跡4(S16)の貼床中で多くの炭がみられたため、放射性炭素年代測定を行ったが、その結果は確率2 σ の範囲でcal AD76-215(95.4%)、1 σ の範囲でcal AD 80-138(65.3%)の値が出ており、想定した時期よりも若干古くなっている。

ところで、先行研究で既に指摘されている点ではあるが、間仕切部には屋内を区切る何らかの構造物が存在したことが想定される。今回の調査では、偶然の産物であるが、建物の構築面よりも上位で遺構を検出しており、建物が予想される範囲の掘削には壁面の検出を含めてかなり注意を払って行ったものの、霧島御池軽石を含む間仕切部の上部には、少なくとも土で構築された構造物は検出できなかった。また、堅穴建物跡1・2の間仕切部については、霧島御池軽石を多く含む土であるが、自然堆積層とは異なる雰囲気であったため、部分的に断ち割って堆積状況の確認を行った。その結果、掘方掘削後に構築している可能性が高い土の堆積の状況であった。間仕切部は霧島御池軽石を多く含むため、ピットや溝などの痕跡があればわかりやすいと思われるが、そのような痕跡も確認することはできなかった。このように、今回の調査では、間仕切り部にピットや溝などを掘

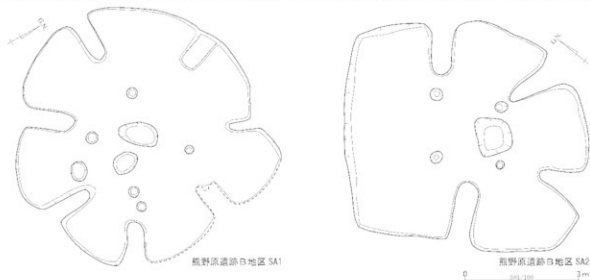


図106 熊野原遺跡の間仕切付建物跡(報告書より改変再トレース)

って構築するような構造物の類いはなかったものと考えられ、あったとしても間仕切を掘りこまない痕跡を残さない構造のものであったのだろう。

ところで、床面から土器が出土している建物跡については、その帰属時期を決めることは難しいが、土器が出土していない堅穴建物跡8・9・10（S14・15・8）については、その時期を決めることが難しい。この中で、構造的にみると、堅穴建物跡9・10はともに柱穴と思われるピットをもつが、他の建物のように定型的位置にはない。一方、堅穴建物跡8は小型で、柱穴と思われるピットを検出することはできていない。また、床面の構造をみても、堅穴建物跡9・10は全体的に貼床をもつが、堅穴建物跡8は部分的にのみ貼床を貼っているという違いも存在する。このような違いをみると、堅穴建物跡9・10が比較的近い時期で、堅穴建物跡8はこれらと離れた時期のものである可能性が考えられる。

そこで次に埋土の堆積の仕方を見ると、堅穴建物跡8・9は4層が埋土の上面全体を覆っており、堅穴建物跡5・6（S13・10）、あるいはそれ以前の古い建物の埋土のあり方により近い。特に堅穴建物跡8は、他の建物跡ではみられない、基本土層5a層が埋土に流れ込んでいる状況から、最も古い建物跡となる可能性も考えられる。それに対して、堅穴建物跡10は4層が中央に向かって流れ込むような状況であり、堅穴建物跡7（S12）に近い。さらに掘方をみると、堅穴建物跡9は掘削の際に住居縁辺部は基本土層6層の霧島御池軽石層を掘り残しているという特徴がみられる。このような掘削の仕方は、大年遺跡内では堅穴建物跡1・2のみ、すなわち間仕切付建物跡にのみ確認できた掘方である。また、基本土層6層の掘り込みも浅く、形状の把握が難しかった点も堅穴建物2に似ている。堅穴建物跡9は西側に不明瞭であるが突出堅状の部分があり、調査時に間仕切付建物跡の可能性を考えたが形状が不明瞭であったため、判断がつかなかった。このような状況を考えると、堅穴建物跡9は間仕切付建物の形が崩れた形態であるも解釈できる。

このように考えると、平面形などでは堅穴建物跡9・10と堅穴建物跡8という違いに見えるが、実際には堅穴建物跡8・9が近い時期で古く、堅穴建物跡10が新しいということになる。土器が出土していないため、判断としないが、堅穴建物跡8は弥生時代後期項、堅穴建物跡9は古墳時代前期前半項、堅穴建物跡10は古墳時代後期の6世紀頃の年代が推定される。

ところで、堅穴建物跡9の床面からは、台石などを転用した金床石と思われる鉄錆の付着が顕著な石器が出土しており、本建物跡が鍛冶に関連した建物跡であった可能性がある。遺跡内からは、高坏脚部を転用した羽口が1点のみであるが、遺物が多く出土した堅穴建物跡2の埋土上層（基本土層3層対応層）から出土している。このことを考えると、堅穴建物跡9は、5世紀代に県南内陸部でよくみられる高坏を転用した羽口を用いた鍛冶作業との関連性も考えられる。平峰遺跡でも転用羽口は多く出土しており、また、鍛造製片が出土するものの、被熱が著しい鍛冶炉と思われる炉はほとんどみつからない建物も存在するため、堅穴建物跡9において炉が検出されていないことは問題ないように思われる。判断が難しいところであるが、埋土の堆積状況や、形は崩れているが、間仕切付建物跡と同様な構築方法を行っていることから、古墳時代前期前半項の可能性を選択しておく。このように解釈すると堅穴建物跡9は、間仕切付建物の最終段階



図107 大年遺跡の堅穴建物跡における埋土堆積状況模式図

とともに、古墳時代の前期前半の鍛冶に関連した建物として貴重な資料であると考えられる。

3 炭化種実の集中と層位について

今回の調査では、遺跡北部において、弥生時代から古墳時代の生活面と考えられる基本土層4層中から、炭化したイチイガシが集中した状態で出土している(図31・32)。北側の1B～2Cグリッド付近において70点以上、中央付近の4C～5Cグリッドにおいて190点以上が出土している。出土層位から弥生時代あるいは古墳時代のものである可能性と、生活面としての時期を推定するために放射性炭素年代測定を行ったところ、cal AD69～174(91.1%)の結果が出ており、年代としては、弥生時代の中期後半から後期にかけてのものと考えられ、出土している遺物などとも矛盾しない。

このような炭化種実の集中部は、都城市内の平田遺跡(宮崎県埋蔵文化財センター2002)でも2箇所で見つかっており、炭化種実集中部1は「約8.4m×約6.7mの範囲で出土し、中でも中央約3.2m×約1.7mの範囲が特に集中」している。もう一つの炭化種実集中部2は「約3.2mの範囲で出土し、中でも西側約1.5mの範囲に集中」しており、両者ともにほとんどがイチイガシとされている。これらの炭化種子についても放射性炭素年代測定が行われており、cal AD70の結果がでている。若干散布の仕方は異なるが、狭い範囲に密集するものと、広範囲で出土している出土の仕方、年代、イチイガシという内容ともに類似している。なお、大年遺跡では、北側の集中部からカキの炭化種実も出土している。大年遺跡と平田遺跡の炭化したイチイガシの集中は、単なる空気の可能性もあるが、近い時期に同じような遺物を残すような行動規範が存在した可能性も考えられる点で興味深い。

4 竪穴建物跡7(S12)出土の磨製石鏃について

竪穴建物跡7では、流れ込みであるものの、特徴的な形態の磨製石鏃(571)が出土している。出土状況だけでなく、竪穴建物跡は既述のように6世紀代の建物跡と考えられるため、本建物跡に伴うものではない。しかし、特徴的な形態からは、今後の調査においてある程度時期を決定できる要素となりえるため、ここではその類例について若干の検討を行ってみる。

大年遺跡から出土した磨製石鏃には、図89-572～575のように通常みられる平面三角形で厚さ2mm程度の石鏃が出土しているが、今回取りあげる石鏃はこれらの石鏃よりも一回り大きく、そして形態的には一見銅鏃を連想される形態を呈している。加えて、身の厚さが4mmと他の磨製石鏃の2倍程度厚いのも特徴である。そして、最も特徴的なのは、身の中央には根挟み装着用と考えられる浅い凹みを意図的に作り出している点である。一般的な磨製石鏃の身部は全体的に横や斜め方向の研磨により平坦に作られているのに対して、本石鏃の凹み部分は縦方向に研磨することにより製作されており、さらに平坦部の研磨方向を横あるいは斜方向に行い平坦部を作り出している。このように身部に凹みがあるものは断面図などで判別できるため、都城市内での類例を探したところ、表4および図108にみるように、いくつかの類例をみつけることができた。また、偶然みつけた範囲内であるが、宮崎平野部(宮崎市下那珂遺跡)や鹿児島県側(志布志市稲荷迫遺跡、指宿市南摺ヶ浜遺跡)でも同様に身部に凹みをもつ形態の磨製石鏃を確認することができた。これらの石鏃を比較すると、身部に凹みを有する磨製石鏃には二つのタイプがあることがわかる。一つは長幅比が1:1に近い幅広のもの(図108-1、4～6、以下便宜的に「大年タイプ」とする)で、大年遺跡出土例はこれにあたる。もう一方は、幅に対して長さが長いもの(図108-11～13、以下便宜的

表4 身部に凹みを有する磨製石鏃の諸例

No.	遺跡名	所在地	出土位置	大きさ (cm)			重量 (g)	文献
				長	幅	厚		
1	下那珂遺跡	宮崎市佐土原町	95号竪穴建物跡	3.1	2.2	0.3	2.5	県理文第90集
2	祝吉遺跡	祝吉町	Y-2号住居跡	3.6	2.2	0.4	-	都城市第1集
3	箕原遺跡	箕原町	包含層	3.7	2.2	0.4	3.4	県理文第42集
3	大年遺跡	梅北町	住居埋土上層	3.8	3.0	0.4	-	本報告書
4	楠畑遺跡	梅北町	分布調査採集	-	-	-	-	都城市第6集
5	坂元B遺跡	南横市	竪穴住居跡SA1	-	-	-	-	都城市第71集
6	祝吉遺跡	祝吉町	Y-3号住居跡	4.1	2.0	0.4	-	都城市第1集
7	駄穴遺跡	横市町	包含層	-	-	-	-	都城市第50集
8	平田遺跡	南横市町	SA27	4.7	2.6	0.4	-	都城市第87集
9	加治畑B遺跡	南横市町	包含層	4.9	2.9	0.3	5.9	都城市第81集
10	稲荷迫遺跡	鹿児島県志布志市	包含層	4.8	2.5	0.5	6.5	鹿児島県理文169
11	南摺ヶ浜遺跡	鹿児島県指宿市	35号土壌墓周辺	6.8	2.8	0.4	9.3	鹿児島県理文144
12	中尾山・馬渡遺跡	箕原町	包含層	-	-	-	-	都城市第5集

※「No.」は図108の番号に対応。「-」は破片あるいは報告書に計測値の記載がないことを示す。

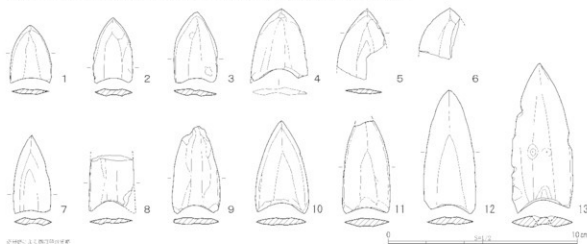


図108 身部に凹みを持つ磨製石鏃の諸例 (各報告書から変更再トレース)

に「南摺ヶ浜タイプ」とする)で、こちらのタイプは長さ5cmを越える大型のものが多い形態である。詳細な検討が必要であるが、鹿児島県側南摺ヶ浜遺跡で図108-11や12のタイプのものが複数出土している点からすると、鹿児島県側では南摺ヶ浜タイプ、宮崎県側では大年タイプが主流になる可能性がある。都城市は両者が混在しているのは、両方の文化が交わる地域であったことを示しているのかもしれない。

ところで、南摺ヶ浜遺跡は古墳時代の遺物が多いが、図示した石鏃も35号土壌墓周辺の遺物として南摺ヶ浜遺跡「IV期」の遺物と報告されている。そして、南摺ヶ浜遺跡では大年タイプは少なく、南摺ヶ浜タイプが多いことから、上で考察したような空間的差異ではなく、時期的差異によるものである可能性も排除できない。そこでこれらの磨製石鏃が出土した時期についてみてみたいが、残念ながら13点中7点が包含層など時期決定の難しい場所で見つかっている。特に南摺ヶ浜タイプは包含層からの出土が多い。表中には記していないが、それ以外の住居跡から出土しているものは、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃の時期に集まっている。石鏃を確認した報告書が少ないが、今のところ、これを測る例は管見ではみつけない。鉄器の普及が遅れる宮崎県でも、後期後半頃は平野部では鉄鏃が急速に普及してきている時期であるが、都城市内ではこの時期の出土例はそれほど多くない(加藤2017予定)。とはいえ、次第に鉄鏃が普及していくことは間違いないと思われるため、その時期に新しい形態の石鏃が作られている点は興味深い。

この形態変化の要因については、一つは対人武器的性格、もう一つは儀器的性格としての変化を挙げることができる。対人武器としては、佐原眞氏が弥生時代の中期後半における凸基式打製石鏃の大型化や重量の増加の原因を対人武器としての機能の変化を指摘している（佐原 2005）。旧石器時代から縄文時代への変化において、尖頭器が石鏃へと変化しように、対象が変化すればそれに応じて変化するし、縄文時代や弥生時代を通して変化がなければ、石鏃にも大きな変化はみられない。そこで、どの程度重量に差があるかをみってみる。大年遺跡の中で比較すると、身部に凹みを有する571が5.61gで、他の磨製石鏃は572が1.66g、573が0.97g、574が0.51g、575が0.90gである。最も重い572と比較して約3.3倍、最も軽い574と比較して約10.7倍の重さがある。形態的にはそれほど大型化したとはいえないため、厚さが増加したことが最大の原因と考えられる。一方、図108の諸例で比較すると、最も小型の部類に入る下那珂遺跡を基準とすると、大年遺跡・加治屋B遺跡例はそれぞれ約2.2倍、2.3倍、南摺ヶ浜遺跡例では3.7倍になる。南摺ヶ浜遺跡例は、大年遺跡の磨製石鏃572を基準とすれば、5.7倍の重量となる。ただし、この場合、対象が変化したと考えると、対人用として問題となるのは数であり、それなりの数が必要になってくると思われるが、各遺跡の出土数は少ない。その点からすると、対人的な要素は低いということができる。

一方、儀器的性格では、弥生時代の武器形青銅器や銅鐸に端的にみるように、大型化・非実用化として考えられる。武器形青銅器が非実用的な形態へ変化するのに対して、身部に凹みをもつ石鏃には明確な非実用的な形態への変化はみられない。ただし、磨製石鏃が多く出土している下那珂遺跡では、石鏃の中に刃部を形成していないものが数例みられるし、実見していないもの図109の平田遺跡例でも図左側は刃部が形成されていないようである。今後の検討が必要であるが、ここでは儀器的性格を考えておきたい。

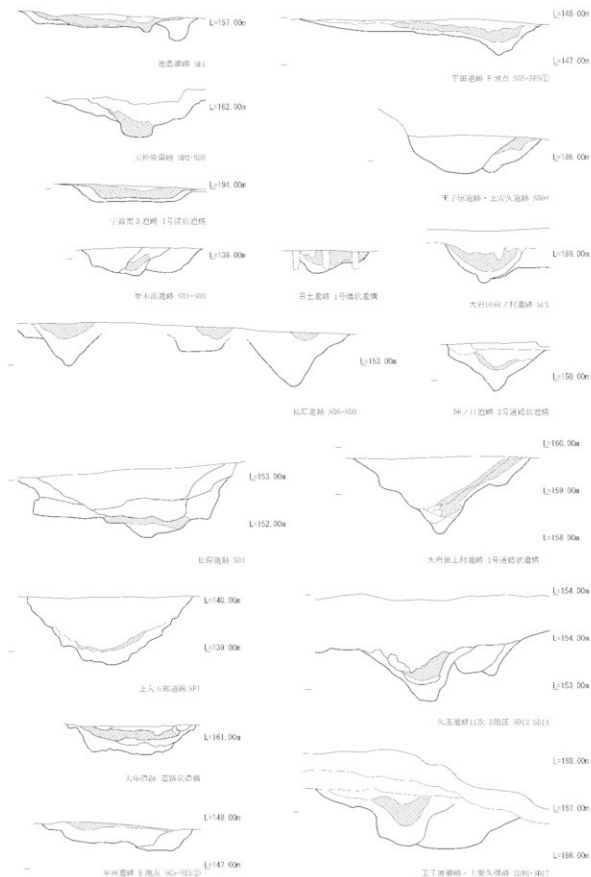
第4節 古代～中世の遺構について

1 道路状遺構について

今回の調査において、桜島3テフラ（Sz-3）（基本土層2層）の下において、掘立柱建物跡、畦状遺構や道路状遺構、そして溝状遺構などの遺構を検出した。これらの遺構に対して、溝や道路、畑といった遺構の性格上、遺物は多く出土しておらず、また、破片や細片が多い。

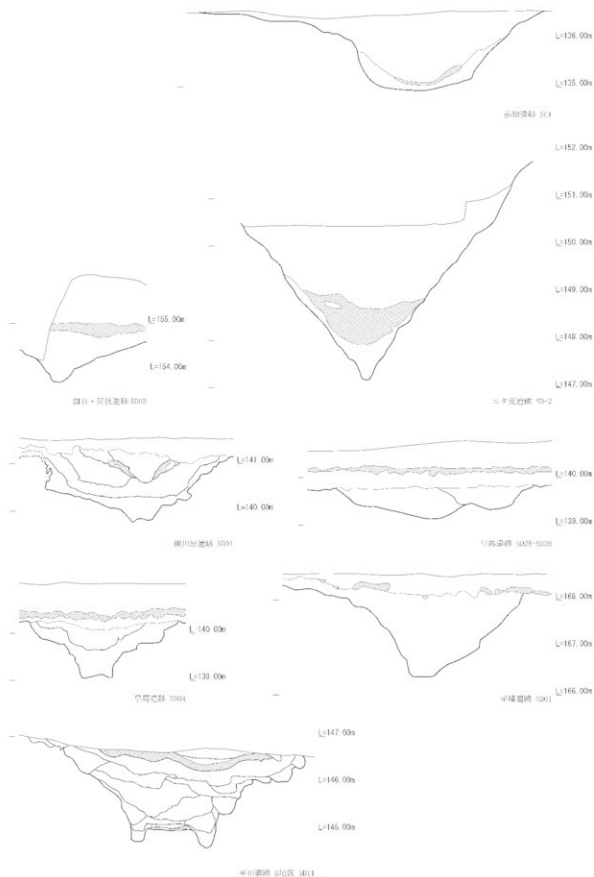
この中で、道路状遺構については、桜島3テフラ降下以前に利用されていただけでなく、桜島3テフラ上に硬化面が形成されていることから、降下後も引き続き道路として利用されていたと考えられる。また、この道路状遺構の西側には、近世あるいは近代のものと思われる、新しい道路状遺構が平行的な位置に存在している（巻頭図版4・附図2）。さらに、地元の方の話によれば、昭和初期までは同様な道が存在したようであり、桜島3テフラ降下以降だけでもおよそ500年という長い間、ほぼ同じ位置に道路があったということが明らかとなった。

この道路状遺構については、前章で詳しく触れているため、ここでは簡単にまとめておく。遺構の埋土は大きく上下2層に分けることができ、土層断面でみると、同じ黒色シルト層であるが、下層が霧島御池軽石を多く含むのに対して、上層は霧島御池軽石をほとんど含まない層として区別できる。この上層の埋土は、基本土層3層に類似しており、下層の埋土は堅穴建物跡などの埋土に類似している。土層断面では明瞭に区別できることから、下層の埋土堆積時期と上層の埋土堆積時期には時間的な開きが大きいと考えられる。また、上層埋土底面⁽¹⁾には硬化面が形成されており、土層の観察から、この時点で一度掘り直されている可能性が高い。南部調査区で検出している複数の溝



宇留島3テフラの堆積状況に関する分層線以外の細かい分層線は消去している。

図 109 桜島3テフラが堆積する溝状遺構等の諸例1 (各報告書より改変再トレース)



糸川遺跡 3D1
大テラ遺跡 3D-2
四谷・原田遺跡 3D03
柳川加遺跡 3D01
竹岡遺跡 3D04
平川遺跡 3D05-3D06
平塚遺跡 3D01
平川遺跡 3D11

糸川 3テフラの堆積状況に関する分層線以外の細かい分層線は消去している。 ■ 糸川 3テフラ

0 50.00 100.00 3m

図 110 桜島 3テフラが堆積する溝状遺構等の諸例 2 (各報告書より改変再トレース)

表5 桜島3テフラが堆積した溝状遺構等の諸例

遺跡名	所在地	立地	遺構名	時期	遺物 (桜島3テフラ降下前)	文献
宇都第3遺跡	北諸県郡 三岐町	丘陵裾	1号溝状遺構	不明	なし	県理文第85集
上大五郎遺跡	丸谷町	低位段丘上	SE1	14世紀～15世紀	青磁?、青磁、土師質 土器、東播系須恵器	郡城市第31集
前畑遺跡	丸谷町	低位段丘上	SE1	15世紀後半	青磁、青花、土師質土 器、備前焼	郡城市第34集
陣ノ口遺跡	上水説町	台地上	2号道路状遺構	不明	なし	県理文第222集
並木浜遺跡	高木町	扇状地	SD1～3	SD1:13世紀代、 SD2:(15世紀半(中)) SD3:(16世紀代)	SD1:白磁・青磁・土 師質土器 SD2:白磁・青磁・陶器	郡城市第24集
久玉遺跡 11次	郡元町	段丘面上	D地区 SD13・SD14	(記載無)	SD14:土師質土器、 SD13:青磁・東播系須 恵器	郡城市第51集
松原遺跡第IV遺跡	郡元町	段丘面上	SD6～9	中世前期	青磁、東播系須恵器、 高津焼	郡城市第51集
			SD1	15世紀後半前後以降	上層:白磁・青磁・国 産陶器	
池島遺跡	早水町	沖積地 微高地	SE1	不明	なし	県理文第84集
天神原遺跡 第1調査区南平部	早水町	扇状地	SD2・SD6	14世紀後半～15世紀前半	なし	郡城市第23集
早馬遺跡	南横町市	低位段丘上	SD04	12世紀中頃～13世紀前半	白磁、土師質土器、東 播系須恵器	郡城市第84集
			SD25・SD26	(13世紀後半)	龍泉窯系、土師質土器、 東播系須恵器	
田谷・枝尻遺跡	南横町市	台地上	B地区東側 SD03	14世紀代	なし	郡城市第38集
平田遺跡	南横町市	段丘面上	B地点 SD11	(記載なし) (10回以上掘り直し)	青磁、東播系須恵器、 備前焼、瓦質土器	郡城市代87集
			E地点 SES・SG5①	SES:古代? SG5:14世紀中頃～15世紀?	SES:なし? SG群:白磁、青磁、備 前	県理文第160集
			E地点 SES・SG5②			
ニタ元遺跡	志比田町	台地上	SD-2	14世紀後半～15世紀前半	白磁、青磁、櫻輪陶器、 備前焼、薩摩焼	郡城市第29集
柳川原遺跡2次調査	天神町	扇状地	D地区 SD01	不明	土師質土器(へつ切り 底)	郡城市第43集
大岩田上村遺跡	大岩田町	台地上	1号道路状遺構	不明	なし?	県理文第77集
大岩田前ノ村遺跡	大岩田町	台地上	SF1	不明	磁器、土師質土器、須 恵器(古代)、東播系 須恵器	郡城市第14集
黒土遺跡	大岩田町	扇状地	1号溝状以降	不明	青磁、土師質土器	郡城市第28集
平峰遺跡	平塚町	台地上	SD01	14世紀代	青磁、土師質土器、東 播系須恵器、備前焼	郡城市第36集
大年遺跡	梅北町	台地上	道路状以降(S27)	8世紀後半?	白磁	本報告書
王子原遺跡	安久町	丘陵裾部	SD03・04	SD3:13～15世紀代 SD4:15世紀末～16世紀代	SD03:青磁、土師質土 器、瀬戸系天日 輪、瓦質土器	郡城市第103集
			SD16・SD17	SD17:不明(S16より古い) SD16:14世紀前半代	SD17:(青磁陶、土師 質土器)、東播系 須恵器 SD16:土師質土器	

※時期は各報告書による。また、遺構名は図中で切り合っている遺構を含んでいる。

※早馬遺跡 SD25・SD26 の時期は埋没しきった時期である。

も、埋土の様相からおそらくこの時期に掘削されたと考えられる。上層埋土底面以外に埋土中では明瞭な硬化面は検出していないが、土層の観察からすると、複数回掘り直されていることが想定される。この硬化面上付近で、白磁Ⅳ類（図 85-491）が出土しており、これよりも新しい時期に掘削が行われているということが出来る。道路状遺構の埋土では、その他に目立った遺物がないことや、基本土層 3 層に対応すると思われる上層埋土から、この白磁Ⅳ類が上層埋土底面の硬化面が形成した時期、つまり掘削の時期に近い時期を示しているのではないかとと思われる。したがって、下層上部の掘削時期は 12 世紀前後の頃と考えておきたい。

一方、道路状遺構の最初の掘削に関する情報は非常に少ない。その中であって、唯一手がかりとなるのが、道路状遺構の底面にわずかながら堆積していた砂状の堆積物である。火山灰を含む可能性が高いため、サンプルを採取して当たセンターの赤崎主幹に観察をお願いしたところ、その一つで霧島御鉢高原スコリア（Kr-Th）あるいは霧島御鉢延暦スコリア（Kr-OhE）に類似する暗褐色スコリアと、桜島 4 テフラ（Sz-4）の可能性のある白色多孔質な軽石が確認されている（結果は附編を参照）。霧島御鉢延暦スコリアと桜島 4 テフラは比較的近い時期なので、この時期を採用すれば 8 世紀後半頃の可能性がある。上層の掘削時期が 12 世紀頃とすれば、約 400 年程度の時期差がある。下層埋土の厚さはそれほど厚くない点で不安もあるが、上層埋土と下層埋土の違いが明瞭である点を考えてと納得する面もあり、上層掘削の段階で道路状遺構は埋没が進んでいたと解釈したい。

ところで、河川を挟んで北側台地上に位置する笹ヶ崎遺跡では、桜島 3 テフラ降下前に大規模に造成された状況が確認されている。詳細は報告書に譲るが、笹ヶ崎遺跡では桜島 3 テフラの下にあまり間層をおかず霧島御鉢軽石が堆積しており、大年遺跡でみられたような黒色土等（基本土層 3～5 層）の堆積はほとんどみられない。周辺遺跡の基本土層をみても、桜島 3 テフラの直下に霧島御鉢軽石層が堆積していることはほぼないので、中世のある時期に厚さにして 50～60 cm の層が、造成により削られたのではないかと考えられる。また、笹ヶ崎遺跡の 3 次調査の際には、石帯が出土している。中世の造成で削られているが、古代にもそれなりの施設が存在していた可能性を想定させる。このように考えると、河川を挟んで向かい合った位置にある大年遺跡においても、上で想定したような古代の道路状遺構が存在してもよいのではないかと考える。

次に、都城市内を中心とした他の遺跡の状況と比較を行ってみる。溝あるいは道路状遺構（以下ではまとめて、「溝」と表記）の断面図について、桜島 3 テフラを手がかりにその埋没状況（図 109・110）をみると、桜島 3 テフラの位置によって、大きくは 3 つのタイプに分けることができるようである。1 つは池島遺跡のように、溝のほぼ底付近に桜島 3 テフラが堆積しているもの。2 つ目は、大年遺跡のように、埋土の中層付近に桜島 3 テフラが堆積しているもの。3 つ目は早馬遺跡のように溝の埋没後に堆積しているものである。また、溝の多くで、同じ場所あるいは若干ずれた場所に掘削し直しているものが多い。時期については、桜島 3 テフラを基準に埋没段階は決定できるものの、掘削時期については、遺物が少なかったり、小片が多いことから、時期決定が困難なことが多いようである。その中で、柳川原遺跡 SD01 や平田遺跡 B 地区 SD11 の用に複数回の掘削が繰り返されている状況では、掘削時期はかなり古いように思われる。ただし、立地が影響している可能性もあり、洪水などが頻発する場所に立地する場合には埋没も早く、その度の掘削も必要になるものと思われる。そのため、安易な比較は難しい。時期的には、平田遺跡 E 地点 SE5 は桜島 3 テフラ下の埋土が少ないため、報告書で言及されているように SG5 に伴う可能性もあり判断が難しい

が、その他の遺跡では、完全に埋没している早馬遺跡で12世紀中頃の時期が最も古く位置づけられる。多くは13世紀～15世紀頃と考えられており、上で推定した大年遺跡の道路状遺構よりもかなり新しい。

以上のように、都城市内等における板島3テフラが堆積した溝状遺構や道路状遺構は、13～15世紀頃と想定されるものが多いが、掘削時期は不明なものが多い。再び図110で示した大年遺跡道路状遺構の断面(図54-断面8)をみると、板島3テフラから掘方底面までの厚さは薄い、他の溝と同様に新しいように思われる。しかし、図55の断面12・13・15をみると、板島3テフラ降下前に埋没しきっている。さらに断面15をみると、道路状遺構が埋没した後に掘削されている溝5も板島3テフラ軽石降下前に埋没しているため、道路状遺構の最初の掘削から板島3テフラ堆積までの時間的な空隙は、他の土層断面で観察されるものよりも実際にはかなり大きいといえる。このことを考えると、当初想定したように、道路状遺構の掘削は8世紀代で、埋土下層を掘り込む次の大規模な掘削を12世紀頃と考えておく。また、埋土上層の厚さもそれほど厚くないことから、板島3テフラ降下前にさらに掘り直しが行われているのではないかと想定される。その背景には、北側の笹ヶ崎遺跡における人々の活動と連動した動きがあったのではないかとと思われる。

以上のように古代から中世にかけて埋没と掘り直しを繰り返しており、古代から中世においてはこの付近の幹線道路として機能していた可能性もある。しかし、18世紀末～19世紀前半にかけて編さんされた『庄内地理志』に掲載されている「益貫村絵図」(『都城市史』史料編: pp. 260-261)には、若干ルートが現在とは異なるものの果道109号線に相当すると思われる道路の線はみられるが、今回の調査で検出した道路に該当する線はみられない。『庄内地理志』が編さんされる頃には幹線道路としての機能は現在の果道に相当する位置に移っていたのかもしれない。

注

- (1) 両遺跡ともに今年度(平成27年度)中に報告書刊行の予定である。
- (2) このほかに該当する時代の遺跡があるが、報告書等で詳細が確認できたもののみ掲載している。
- (3) 名称は「花卉状住居」をはじめさまざまな呼び名があるが、ここでは「間仕切り建物跡」としておく。北郷氏の「間仕切り土壁住居」(北郷1989: p.30)が表現上妥当であると思われるが、溝や柱穴によって区切られていることが想定できるものよりも、建物の平面形において直接的に建物内部の空間を区画する意識が明確に確認できるため、および独断的であるが語感的な面から「土壁」を取り除いても良いと思われる。また、「土壁」をつけた北郷泰道氏も現在は「花卉状間仕切り住居」と呼称している(北郷2011: p.277)ことから問題ないと思われる。ただ、現在使用されている「花卉状間仕切り住居」を採用しないのは、必ずしも形態が「花卉状」とはならず、その対象範囲を狭くしてしまうからである。なお、拡張を行ったものとは住居を建てた人間の意識が全くことなるので当然区別される。
- (4) このことは、北郷泰道氏の「各型式の構造上の差異や理論的展開は必ずしも、出現の年代順と編年を示す」ものではなく、「地域性・地域差」の問題を整理しつつ、「各型式の個々の住居について年代を決定」する必要がある(北郷1989: P.39、北郷2011: p.280)という言葉によく表れているように思われる。
- (5) 本文中でも述べているが、下層埋土は堆積後に掘削されているため、本来の下層埋土上面は削平されており存在していない。したがって、本来の下層埋土上面が不明であることから、ここでは上層埋土底面と表現している。

引用・参考文献

- 石川悦雄 1991「宮崎における弥生時代竪穴式住居の展開」『宮崎県史研究』第5号、pp.11-46。
井上 弦・米山忠克・杉山真二・岡田英樹・長友由隆 2002「都城盆地の累積性黒ボク土における炭素・窒素安定同位体自然存在比の変遷-植物珪酸体による植生変遷との対応-」『第四紀研究』第40巻第4号、pp.307-308
今嵐屋敏行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器-宮崎平野部を中心として-」『第

5 回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 古墳時代中・後期の土師器 - その編年と地域性 - 』、pp. 145-173。

- 奥野 充 2002 「南九州に分布する最近約3万年間のテフラの年代学的研究」『第四紀研究』第41巻第4層、pp. 225-236
- 加藤 徹 2016 (予定) 「都城市平峰遺跡出土高坏の検討試論」『広島大学考古学研究室解説 50周年記念論集(仮称)』、広島大学考古学研究室。
- 加藤 徹 2017年度 (予定) 「宮崎県における弥生時代の鉄器文化」『たたら研究会創立60周年記念論集(仮称)』、たたら研究会。
- 栗畑光弘 2000 「中溝式系土器の検討 - 宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年に向けて - 」『古文化談叢』第45号、pp. 73-99。
- 佐原 真 2005 「1 石製武器の発達」『佐原真の仕事4 戦争の考古学』、岩波書店、pp. 14-35 (初出は、香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会 1964『紫雲出』)。
- 中園 聡 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号、pp. 104-119。
- 中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号、pp. 57-76。
- 中村直子 2002 「薩摩・大隅」『第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 古墳時代中・後期の土師器 - その編年と地域性 - 』、pp. 175-200。
- 北郷泰道 1989 「南九州における間仕切土壁住居の成立と終焉」『宮崎県史研究』第3号、pp. 29-52。
- 北郷泰道 2011 「花弁状間仕切り住居」調査研究の現状と課題」『西寒水四木柳遺跡2-5区 西寒水四木柳遺跡6区』みやき町文化財調査報告書第5集・みやき町文化財調査報告書第6集、みやき町教育委員会、pp. 277-284。
- 水ノ江和同 2009 「Ⅷ 九州地方の縄文集落と「縄文文化」」『縄文集落の多様性Ⅰ 集落の変遷と地域性』、雄山閣、pp. 259-293。
- 都城市史編さん室編 2002 『都城市史』資料編考古
- 都城市史編さん室編 2004 『都城市史』史料編 近世4
- 宮崎県編 1997 『宮崎県史 通史編 原始・古代Ⅰ』
- 吉本正典 2012 「黒川式土器の歴史的的位置」『九州考古学』第87号、pp. 1-22

引用・参考報告書

- 小林市教育委員会 2004 『黒仁田遺跡』小林市文化財調査報告書第18集
- 小林市教育委員会 2010 『山中遺跡』小林市文化財調査報告書第4集
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009 『南摺ヶ浜遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(144)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012 『稲荷迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(169)
- 小林市教育委員会 2002 『上箇・平瀬野・大平遺跡』小林市文化財調査報告書第14集
- 小林市教育委員会 2003 『栗果野遺跡』小林市文化財調査報告書第15集
- 小林市教育委員会 2004 『永野遺跡』小林市文化財調査報告書第17集
- 小林市教育委員会 2004 『黒仁田遺跡』小林市文化財調査報告書第18集
- 小林市教育委員会 2005 『湊永原遺跡 谷ノ木原遺跡 高津佐遺跡』小林市文化財調査報告書第20集
- 小林市教育委員会 2010 『山中遺跡』小林市文化財調査報告書第4集
- 高城町教育委員会 2005 『雀ヶ野遺跡群』高城町文化財調査報告書第18集
- 都城市教育委員会 1982 『祝吉遺跡』都城市文化財調査報告書第1集
- 都城市教育委員会 1987 『都城市遺跡詳細分布調査報告書(市内南部)』都城市文化財調査報告書第6集
- 都城市教育委員会 1992 『屏風谷第1遺跡』都城市文化財調査報告書第17集
- 都城市教育委員会 1992 『瀬戸ノ上遺跡』都城市文化財調査報告書第18集
- 都城市教育委員会 1993 『天神原遺跡』都城市文化財調査報告書第23集
- 都城市教育委員会 1993 『並木添遺跡』都城市文化財調査報告書第24集
- 都城市教育委員会 1994 『黒土遺跡』都城市文化財調査報告書第28集
- 都城市教育委員会 1994 『ニタ元遺跡』都城市文化財調査報告書第29集
- 都城市教育委員会 1995 『丸谷地区遺跡群 上大五郎遺跡』都城市文化財調査報告書第31集
- 都城市教育委員会 1996 『天ヶ洞遺跡』都城市文化財調査報告書第33集
- 都城市教育委員会 1996 『丸谷地区遺跡群(2)』都城市文化財調査報告書第34集
- 都城市教育委員会 1995 『平峰遺跡』都城市文化財調査報告書第36集
- 都城市教育委員会 1997 『田谷・尻枝遺跡』都城市文化財調査報告書第38集

- 都城市教育委員会 1998『中央東部地区遺跡群』都城市文化財調査報告書第43集
 都城市教育委員会 2000『都元地区遺跡群』都城市文化財調査報告書第51集
 都城市教育委員会 2002『白山原遺跡』都城市文化財調査報告書第57集
 都城市教育委員会 2004『王子原第2遺跡』都城市文化財調査報告書第66集
 都城市教育委員会 2007『梅北佐土原遺跡』都城市文化財調査報告書第76集
 都城市教育委員会 2007『加治屋B遺跡(縄文時代・弥生時代編)』都城市文化財調査報告書第81集
 都城市教育委員会 2007『梅北北原遺跡』都城市文化財調査報告書第83集
 都城市教育委員会 2008『早馬遺跡』都城市文化財調査報告書第84集
 都城市教育委員会 2008『平田遺跡 A地点・B地点・C地点』都城市文化財調査報告書第87集
 都城市教育委員会 2009『高八重遺跡』都城市文化財調査報告書第90集
 都城市教育委員会 2009『市内遺跡2』都城市文化財調査報告書第93集
 都城市教育委員会 2010『萩ヶ久保第1遺跡』都城市文化財調査報告書第97集
 都城市教育委員会 2012『王子原遺跡(第4次調査)』都城市文化財調査報告書第106集
 都城市教育委員会 2012『王子山遺跡』都城市文化財調査報告書第107集
 都城市教育委員会 2013『都城市内遺跡6』都城市文化財調査報告書第110集
 都城市教育委員会 2014『川原谷出水遺跡』都城市文化財調査報告書第112集
 都城市教育委員会 2015『下尾平野第4遺跡』都城市文化財調査報告書第115集
 宮崎県教育委員会 1988『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『豊満大谷遺跡 野添遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第83集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『宇都第3遺跡 横市中原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『下那珂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第90集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2002『平田遺跡 D地点・E地点』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第160集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2008a『筆無遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第166集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2008b『尾立第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第169集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『平峰遺跡(3次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第219集
 Renfrew, Colin 1984 Approaches to Social Archaeology. Edinburgh University Press.

第5章 総括

1 旧石器時代～縄文時代早期について

今回の調査で、桜島薩摩火山灰 (Sz-S) を含む基本土層 11 層よりも 30 cm 下位のレベルから、剥片が 1 点出土した。1 点のみの出土であるが、層位的な位置から、細石刃文化期よりも古い可能性があることが考えられる。また、土壌学的な研究の成果を参考にすれば、湿地的な環境が乾燥化してそれほど時期を待たずに、人々が既に活動を行っていたのではないかと想定できる。そのため、基本土層 12 層下部に対応する層では難しいと思われるが、上層ではより古い時期の石器が出土する可能性がある。

次に、縄文時代草創期の遺物・遺構は確認できなかったが、桜島 11 テフラ (Sz-11) を含む基本土層 9 層下位の 10 層において、山形押型文土器が出土した。図示できなかったが、ほかにも無文土器の細片も出土している。都城市教育委員会が付近で行った試掘調査では円筒形土器の破片が出土しており、周辺に縄文時代早期の集落等があることが予想される。前章でみたように、大年遺跡が位置する梅北町や隣接する安久町では桜島 11 テフラ下位層から早期の遺物・遺構が検出される例が多く、この時期に盆地北部地域において活発な人の活動があり、大年遺跡もそれと連動して形成されたものと考えられる。

このほか、鬼界アカホヤ火山灰下層の確認トレンチでは、黒曜石の剥片も数点程度であるが出土しており、集落を形成するほどではないにしても、断片的ながら人々の生活の痕跡を確認することができた。

2 縄文時代後期・晩期について

縄文時代晩期の土器を中心として、後期の土器が若干出土しているほか、中期末～後期初頭頃の可能性がある土器も 1 点出土している。また、黒曜石の剥片・破片類については、遺跡全体で 1 kg 程度出土するなど量が多い点の特徴である。さらに、分析試料 10 点のうち 10 点が腰岳産と推定されるなど、腰岳産の割合が非常に高い。小林市内の遺跡における黒曜石の原産地推定結果と合わせると、腰岳産の黒曜石が縄文時代後期頃に多く流通した可能性と、腰岳産黒曜石が流通する特定のルートが存在した可能性が考えられる。

このほか、縄文時代晩期後半の刻目突帯文も少数であるが出土している。中には表面に赤色顔料を塗布した壺と思われる破片も含まれている。このような器種構成は、弥生時代早期の遺物が出土している黒土遺跡と内容が近いものがある。弥生時代早期の特徴を示す遺物・遺構はみつからないが、大年遺跡周辺でも水田稲作の情報が伝わっていた可能性がある。

一方、残念ながら当該時期の確実な遺構は検出できなかったが、石器の製作は行っていたようであるため、集落は付近に存在していたと考えられる。遺構が検出できなかった背景には、遺構の掘削面が浅いことも要因として考えられる。

3 弥生時代～古墳時代について

大年遺跡の中心となる時期であり、弥生時代前期末～古墳時代を通して多くの土器が出土している。その中で、弥生時代中期以前の確実な遺構は検出できなかったが、堅穴状遺構 1 が弥生時代中

期中葉頃の可能性がある。そのほかの遺構については、出土している土器や間仕切付建物跡といった形態から、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃、古墳時代前期後半～中期前半、古墳時代後期前半頃の3つの時期に分かれている。弥生時代後期後半～古墳時代初頭に堅穴建物跡1・2・3・4（S7・9・11・16）、古墳時代前期後半～中期前半に堅穴建物跡5・6（S13・10）、古墳時代後期前半頃に堅穴建物跡7（S12）が建てられている。このほかの堅穴建物跡では遺構に伴う遺物がないため、時期の決定が難しいものの、埋土の堆積状況から、堅穴建物跡8（S14）が弥生時代後期、堅穴建物跡9（S15）が弥生時代後期後半～古墳時代前期前半頃、堅穴建物跡10（S8）が古墳時代後期前半頃のものと考えられる。今回の調査範囲では、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃が中心となるが、弥生時代中期や古墳時代の中期以降と思われる土器も多いため、周辺に当該時期の集落が広がっている可能性がある。

これらの堅穴建物跡の中で、特筆すべき点は、堅穴建物跡9（S15）でみつがっている金床石と考えられる石器である。鉄錆が厚く付着している部分があり、鍛冶作業に使用されたと考えられる。上で述べたように、堅穴建物跡9の時期は明らかでないが、遺構の特徴から古墳時代前期前半頃の遺構と推定しており、平峰遺跡にみるような転用羽口による鍛冶作業が活発に行われる段階よりも古い時期にあたり、この時期から鍛冶作業が発展していった可能性がある。また、堅穴建物跡4（S16）も一軒のみ離れて位置しており、遺物は出土していないが、鍛冶作業を行っていた可能性もある。想像の域をでないが、弥生時代には金属器に対する忌避意識的な様相がみられた社会構造が、古墳時代に入る頃に積極的に鉄器を導入する構造へと変化していったのかもかもしれない。

4 古代～中世について

大年遺跡が形成された中心となる時期の一つで、道路状遺構や溝状遺構、畦状遺構など多くの遺構がみつがっている。畦状遺構については、桜島3テフラ（Sz-3）の直下で検出しているため、15世紀後半の年代をあたえることができる。また、今回検出した畦状遺構は、畠の端と考えられる部分を検出することができたほか、付属する小道や、道路に隣接している状況など、構造的に把握することができる良い資料といえる。

また、道路状遺構は掘削時期が古代にさかのぼる可能性がある。今回の報告書では調査対象となる時期の遺構ではないため詳細には述べていないが、この道路状遺構とほぼ平行に走る道路状の遺構も検出しており、1,000年以上もほぼ同じ場所に道路があったことが明らかとなった。18世紀末から19世紀前半にかけて編さんされた『庄内地理志』には、残念ながら今回検出した道路に対応する線は描かれていない。しかし、古代から桜島3テフラ降下前まで何度か掘り直しながら使用されているところをみると、古代～中世前半期においては幹線道路の一つとしての役割があったのではないかと推定される。

5 結語

前節までみてきたように、今回の調査ではおよそ1万5千年以上前から、この地域で人々が生活を営んできた痕跡を確認することができた。その後、弥生時代～古墳時代、中世を中心として断続的ながらも生活やさまざまな活動が行われてきたことを明らかにすることができた。梅北地区では、これまで調査が少なかったため、歴史的に明らかでない部分もあった。今回の調査ではそれぞれ一部分ではあるものの、その様相を明らかにすることができたといえる。

附編 自然科学分析結果

第1節 自然科学分析について

大年遺跡の発掘調査に伴って、平成25年度の第2次調査に植物珪酸体および花粉分析、平成26年度の整理作業に炭化種実同定、放射性炭素年代測定、蛍光X線分析（黒曜石産地推定）に関する科学分析の業務委託を行った。目的と経緯については、第1章の調査の経緯に述べた通りである。また、業務委託以外に、溝状遺構底面において砂状の堆積物がみられたため、年代を考える手がかりとなる火山灰である可能性を考えて、当センターの赤崎広志主幹に観察をしていただいた。なお、放射性炭素年代測定については、委託する際に出土遺構や層位、遺構から出土した土器や、遺跡の時期など時期や年代に関する情報の提供を行わないようにした。

なお、文化庁監修の『発掘調査のてびき』では、「自然科学分析の成果」は、ほかの考古学的な成果とともに、遺跡の総理解に寄与する。そのため、これらは報告書の最後に「付編」や「自然科学分析編」として別扱いするのではなく、本文で記述すべき項目である」とされている（文化庁文化財部記念物課2010：p180）。分析結果の解釈と意味については、本文中で随時述べているため、ここではあくまで分析の科学的根拠を第三者に示す意味で附編として扱っていることを断っておく。

第2節 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山1984）。

2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

3. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表6および図111に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

表6 植物珪酸体分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)		地点・試料		21C グリッド				S27(道路遺構)	
学名	分類群 和名	1	2	3	4	1	2		
Gramineae									
	イネ科								
<i>Oryza sativa</i>	イネ	19				6			
<i>Oryza sativa</i> (husk Phytolith)	イネ籾殻(穎の表皮細胞)					6			
<i>Triticum-Bordeum</i> (husk Phytolith)	ムギ類(穎の表皮細胞)	6							
<i>Phragmites</i>	ヨシ属							7	
<i>Zoysia</i> type	シバ属型	6							
<i>Panicum</i> type	キビ族型	13	13	18	13	18	20		
<i>Miscanthus</i> type	ススキ属型	58	32	31	33	31	14		
Andropogoneae A type	ウシクサ族A	160	90	80	47	110	68		
Andropogoneae B type	ウシクサ族B		6			7	6	14	
Bambusoideae									
	タケ亜科								
<i>Pleioloblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	メダケ節型	90	109	98	127	134	88		
<i>Pleioloblastus</i> sect. <i>Sezana</i>	ネザサ節型	757	539	558	528	648	510		
<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	チマキザサ節型	19	19	37	40	43	27		
<i>Sasa</i> sect. <i>Crazinodi</i>	ミヤコザサ節型					27	12		
Others	未分類等	250	327	300	287	464	469		
Others									
	その他のイネ科								
Husk hair origin	表皮毛起源	26	13	12	7	24	7		
Rodshaped	棒状珪酸体	205	218	196	227	202	272		
Stem origin	茎部起源	6							
Others	未分類等	186	135	104	87	55	75		
Arboreal									
	樹木起源								
Lauraceae	クスノキ科	13			7		7		
Others	その他	13	6	6	7	6	14		
Total	植物珪酸体総数	1829	1508	1441	1543	1766	1591		

おもな分類群の推定生産量(単位: kg / m² · cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

<i>Oryza sativa</i>	イネ	0.57				0.18			
<i>Phragmites</i>	ヨシ属							0.43	
<i>Miscanthus</i> type	ススキ属型	0.72	0.40	0.38	0.41	0.38	0.17		
<i>Pleioloblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	メダケ節型	1.04	1.27	1.14	1.47	1.56	1.03		
<i>Pleioloblastus</i> sect. <i>Sezana</i>	ネザサ節型	3.64	2.59	2.68	2.53	3.11	2.45		
<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	チマキザサ節型	0.14	0.14	0.28	0.30	0.32	0.20		
<i>Sasa</i> sect. <i>Crazinodi</i>	ミヤコザサ節型					0.08	0.04		
タケ亜科の比率(%)									
<i>Pleioloblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	メダケ節型	22	32	28	34	31	28		
<i>Pleioloblastus</i> sect. <i>Sezana</i>	ネザサ節型	75	65	65	58	62	67		
<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	チマキザサ節型	3	4	7	7	6	6		
<i>Sasa</i> sect. <i>Crazinodi</i>	ミヤコザサ節型					2	1		
Medake ratio	メダケ率	97	96	93	91	93	94		

〔イネ科〕

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヨシ属、シバ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）

〔イネ科-タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

クスノキ科、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

21 Cグリッド

下位の4層(試料3、4)では、ネザサ節型が多量に検出され、メダケ節型も比較的多く検出された。また、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、ウシクサ族B、チマキザサ節型、および樹木起源のクスノキ科なども認められた。3層(試料1、2)でも、おおむね同様の結果であるが、桜島文明軽石直下の試料1ではネザサ節型が増加し、イネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、シバ属型が出現している。イネの密度は1,900個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/g(状況により3,000個/gとする場合もある)を下回っている。ムギ類(穎の表皮細胞)の密度は600個/gと低い値であるが、穎(穀殻)が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。おもな分類群の推定生産量によると、各層準ともネザサ節型が卓越しており、メダケ節型も多くなっている。

道路状遺構1(S27)

埋土下部(試料2)では、ネザサ節型が多量に検出され、メダケ節型も比較的多く検出された。また、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、ウシクサ族B、チマキザサ節型、および樹木起源のクスノキ科なども認められた。桜島文明軽石直下(試料1)では、ネザサ節型が増加し、イネ、イネの穀殻(穎の表皮細胞)が出現している。イネの密度は600個/gと低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、各層準ともネザサ節型が卓越しており、メダケ節型も多くなっている。

4. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

21 Cグリッド

4層(古墳時代以前)から3層(中世~古代)にかけては、メダケ属(メダケ節やネザサ節)を主体としてススキ属やウシクサ族(チガヤ属など)、キビ族なども生育する草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木が生育していたと推定される。

これらのイネ科植物は陽当たりの悪い林床では生育が困難であり、ススキ属やチガヤ属の草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れ(焼き払い)が必要である(堀田, 1991, 近藤, 1995)。このことから、当時は火入れなど人間による植生干渉が行われていた可能性が考えられる。また、このような植生環境下で土壤中に多量の有機物が供給され、炭素含量の高い黒色土壌(黒ボク土)が形成されたと推定される(杉山ほか, 2002)。

桜島文明軽石 (Sz-3, 1471 年) 直下の 3 層上部では、少量ながらイネやムギ類 (穎の表皮細胞) が検出され、調査地点もしくはその周辺でイネやムギ類の栽培が行われていた可能性が認められた。遺跡の立地や周辺の植生などから、ここで行われた稲作は畑作の系統 (陸稲) であった可能性が考えられる。

道路状遺構 1 (S 27)

道路遺構の埋土では、21C グリッドの 3 層 (中世～古代) とおおむね同様の結果であり、メダケ属 (メダケ節やネザサ節) を主体としてススキ属やウシクサ族 (チガヤ属など)、キビ族なども生育する草原的な環境で、遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木が生育していたと推定される。

桜島 3 テフラ (Sz-3, 1471 年) 直下では、少量ながらイネやイネの籾殻 (穎の表皮細胞) に由来する植物珪酸体が検出され、調査地点もしくはその周辺でイネの栽培が行われていた可能性が認められた。なお、道路遺構の埋土であることから、ここで検出されたイネについては、何らかの形で利用された稲藁に由来する可能性も考えられる。稲藁の利用としては、建物の屋根材や壁材、敷物、履物、俵、縄など多様な用途が想定される。

第 3 節 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの有機質遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 方法

花粉の分離抽出は、中村 (1967) の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm³ を秤量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム (12 水) 溶液を加えて 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で糞などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎) を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉 (1973) および中村 (1980) をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (-) で結んで示した。

3. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 23、樹木花粉と草本花粉を含むもの 6、草本花粉 16、シダ植物胞

表7 花粉分析結果

学名	分類群	和名	21C グリッド				S27(前掲遺構)	
			1	2	3	4	1	2
Arboreal pollen		樹木花粉						
Podocarpus		マキ属	1					
Abies		モミ属	2	1	1			
Tsuga		ツガ属	1	2		1		
Pinus subgen. Diploxylon		マツ属複雑管束亜属	4	5	5		2	4
Cryptomeria japonica		スギ				1	1	2
Sciadopitys verticillata		コウヤマキ						1
Pterocarya rhoifolia		サウグルミ			1	1		
Alnus		ハンノキ属	1	1	1			
Carpinus-Ostrya japonica		クマシダ属-アオダ	1					1
Castanea crenata		クリ	2	3	5	3	9	9
Castanopsis-Panania		シイ属-マタバシ属	13	7	27	4	14	17
Fagus		ブナ属	1		1			
Quercus subgen. Lepidobalanus		コナラ属コナラ亜属	5	5	8	12	7	5
Quercus subgen. Cyclobalanopsis		コナラ属アカガシ亜属	51	43	116	40	31	61
Illicium		シキミ属						1
Zanthoxylum		サンシユウ属	2		23	68	1	2
Ilex		モチノキ属			1			
Acer		カエデ属		1	1		1	1
Vitis		ブドウ属	1				1	
Ampelopsis brevipedunculata		ノブドウ				5		3
Parthenocissus tricuspidata		ツタ				2		
Symplocos		ハイノキ属			1	1		1
Distylium		イスノキ属						1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉						
Moraceae-Fruticaceae		クワ科-イラクサ科	2		2		3	4
Saxifragaceae		ユキノシタ科	1				1	
Bosaceae		バラ科	1		2	2		1
Leguminosae		マメ科	3	4	23	1		8
Araliaceae		ウコギ科	1	1	22	78	2	1
Scrophulariaceae		ゴマノハダ科			1	1		
Nonarboreal pollen		草本花粉						
Gramineae		イネ科	265	171	170	68	130	185
Oryza type		イネ属型	2	1				
Cyperaceae		カヤツリグサ科	3		3		7	3
Polygonum		タデ属						1
Polygonum sect. Persicaria		タデ属サナエタデ節			1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒコ科					1	
Ranunculus		キンボク属	1	7	6	3	3	9
Cruciferae		アブラナ科	2		1	3		
Haloragis-Myriophyllum		アリノトウグサ属-フサモ属	8	2			2	2
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科	14	2			2	1
Apioidae		セリ亜科	4	1	7	5	3	3
Solanaceae		ナス科			1			
Valerianaceae		オミナエシ科	3		4			1
Lactucoideae		タンポポ科	19	16	14	61	29	39
Asteroidae		キク亜科	7	6	3	1	4	13
Artemisia		ヨモギ属	121	98	22	4	140	168
Fern spore		シダ植物胞子						
Monolate type spore		単葉溝胞子	11	5	23	24	48	53
Trilate type spore		三葉溝胞子	15	6	10	11	10	7
Arboreal pollen		樹木花粉	85	68	192	138	67	110
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	8	5	50	82	6	14
Nonarboreal pollen		草本花粉	449	304	232	145	321	425
Total pollen		花粉総数	542	377	474	365	394	549
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	2.4	1.5	2.9	1.0	7.6	1.9
			$\times 10^7$	$\times 10^7$	$\times 10^7$	$\times 10^7$	$\times 10^7$	$\times 10^7$
Unknown pollen		未同定花粉	9	7	16	12	12	11
Fern spore		シダ植物胞子	26	11	33	35	58	60
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell		石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains		明らかでない残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・wood fragments		微細炭化物・微細木片	(++)	(++)	(++)	(++)	(++)	(++)

21 Cグリッド

4層下部(試料4)では、樹木花粉と草本花粉の占める割合が同様で、樹木・草本花粉が約20%となっている。樹木花粉では、サンショウ属、コナラ属アカガシ亜属が優勢で、コナラ属コナラ亜属、ノブドウ、シイ属-マテバシイ属、クリなどが伴われる。草本花粉では、イネ科、タンポポ亜科が優勢で、セリ亜科、ヨモギ属などが伴われる。また、樹木・草本花粉のウコギ科が特徴的に多く検出された。4層上部(試料3)では、草本花粉ではイネ科が増加し、タンポポ亜科は減少している。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が増加し、サンショウ属は減少している。また、樹木・草本花粉のウコギ科が減少し、マメ科(ダイズ属-ウマゴヤシ属型)が増加している。3層(試料1、2)では、草本花粉が約80%を占める。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)、ヨモギ属が優勢で、タンポポ亜科、キク亜科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が優勢で、シイ属-マテバシイ属、クリ、マツ属複雑管束亜属などが伴われる。樹木・草本花粉のマメ科(ダイズ属-ウマゴヤシ属型)は減少している。

道路状遺構1(S27)

遺構埋土(試料1、2)では、草本花粉の占める割合が約70%と高い。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が優勢で、タンポポ亜科、キク亜科などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が優勢で、シイ属-マテバシイ属、クリなどが伴われる。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

21 Cグリッド

4層(古墳時代以前)の堆積当時は、イネ科、タンポポ亜科、ヨモギ属などの草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であり、周辺の林縁付近などにはサンショウ属、ウコギ科、マメ科(ダイズ属-ウマゴヤシ属型)、ノブドウなどの人為の影響のある植生が分布していたと考えられる。サンショウ属には食用や香料になるものがあり、ウコギ科には食用になるウド、タラノキ、ウコギなど、マメ科(ダイズ属-ウマゴヤシ属型)には食用のダイズなどが含まれる。また、遺跡周辺にはカシ類(コナラ属アカガシ亜属)やシイ類(シイ属-マテバシイ属)などの照葉樹林をはじめ、二次林とみられるナラ類(コナラ属コナラ亜属)やクリなどが分布していたと推定される。

3層(中世-古代)では、イネ科、ヨモギ属の草本類が増加し、何らかの原因でサンショウ属、ウコギ科、マメ科(ダイズ属-ウマゴヤシ属型)はあまり見られなくなったと考えられる。イネ科には少量ながらイネ属型が含まれることから、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

なお、花粉分析では植物珪酸体分析で多く検出されたメダケ属(メダケ節やネザサ節)などのタケ亜科が把握されていないが、これは竹笹類が数十年に一度しか開花しないことや、花粉ではイネ科の細分が困難なことに起因している。

道路状遺構1(S27)

道路遺構の埋土の堆積当時は、イネ科、ヨモギ属、タンポポ亜科などの草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であり、遺跡周辺にはカシ類やシイ類などの照葉樹林をはじめ、二次林とみられるナラ類やクリなどが分布していたと推定される。

表8 種実同定結果

	出土位置・遺構名		分類群		部位	個数	備考
			学名	和名			
1C Gr	4層	No.1844	Diospyros	カキノキ属	種子	1	
2C Gr	4層		Quercus gilva Blume	イチイガシ	子葉	3	
			Quercus	コナラ属	子葉(破片)	10	
			Fagaceae	ブナ科	子葉	1	
2C Gr	5a層		Quercus gilva Blume	イチイガシ	子葉	11	
			Quercus	コナラ属	子葉(破片)	3	
4C・5C Gr	4層		Castanea crenata S. et Z.	クリ	子葉(破片)	3	炭化材片2
			Quercus	コナラ属	子葉(破片)	1	
5C Gr	4層		Quercus gilva Blume	イチイガシ	子葉	13	芽1
					(破片)	7	炭化材片1
S14	SE先行Tr		Quercus sect. Aegilops	コナラ属クスギ節	子葉(破片)	3	

第4節 炭化種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内などに残存している場合がある。堆積物や遺構埋土などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、大年遺跡から採取された選別済みの炭化種実類である。

3. 方法

種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

(1) 分類群

分析結果を表8に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載し、主要な分類群について写真を示す。

[樹木]

クリ *Castanea crenata* S. et Z. 子葉(破片) ブナ科

種子は黒褐色で広楕円形を呈し、下端に広い付き部がある。断面は楕円～半円形である。

コナラ属クスギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* 子葉(破片) ブナ科

基部は明灰褐色、上部は濃褐色で表面には縦線が密に並ぶ。花柱基部の伏毛は淡褐色。光沢は弱い。

イチイガシ *Quercus gilva* Blume 子葉(完形・破片) ブナ科

炭化して黒色で、楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。長さ×幅：13.13 mm × 10.10 mm, 13.13 mm × 8.56 mm, 11.31 mm × 9.17 mm, 12.93 mm × 8.85 mm, 11.23 mm × 9.41 mm

コナラ属 *Quercus* 子葉(破片) ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。殻斗が欠落しているため、属

レベルの同定である。

ブナ科 Fagaceae 子葉

黒褐色で楕円形を呈し、表面は平滑である。つき部、殻斗が欠落し破片のため、科レベルの同定である。

カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. 種子 カキノキ科

黒褐色で非対称的広倒卵形を呈し偏平である。直線状の腹面は稜をなす。長さ×幅：14.06 mm×8.64 mm

(2) 種実群集の特徴

1) 1 C グリッド 4 層 (No.1844)

樹木種実のカキノキ属 1 が認められた。

2) 2 C グリッド 4 層

樹木種実のイチイガシ 3、コナラ属片 10、ブナ科 1 が認められた。

3) 2 C グリッド 5a 層

樹木種実のイチイガシ 11、コナラ属片 3 が認められた。

4) 4 C・5 C グリッド 4 層

樹木種実のクリ片 3、コナラ属片 1 が認められた。

5) 5 C グリッド 4 層

樹木種実のイチイガシ 13、破片 7 が認められた。

6) 堅穴建物跡 8 (S 14) 南東先行トレンチ

樹木種実のコナラ属クヌギ節片 3 が認められた。

5. 所見

種実同定の結果、樹木種実のクリ、コナラ属クヌギ節、イチイガシ、コナラ属、ブナ科、カキノキ属が認められた。最も多いのはイチイガシであり、2 C グリッド 4 層、2 C グリッド 5 a 層、5 C グリッド 4 層で認められた。イチイガシの果実は、アクがなく食用として有用である。堅穴建物跡 8 (S 14) 南東先行トレンチで認められたコナラ属クヌギ節は、二次林に多い種類である。1 C グリッド 4 層 (No.1844) で認められたカキノキ属は、果実が食用となる。いずれも食用になるものや二次林に多く人為性の高い種実である。

第 5 節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (14 C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約 5 万年前までの年代測定が可能である (中村, 2003)。

2. 試料と方法

次表に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

3. 測定結果

加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。次表にこれらの結果を示し、図 113 に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。なお、No.1 については 1950 年の大気の ^{14}C 濃度を 1.0 として計算した試料の ^{14}C 濃度を表す pMC 値 (%) を示した。統計誤差 (\pm) は 1σ (68.2% 確率) である。 ^{14}C 年代値は下 1 桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下 1 桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。なお、No.1 については pMC 値が 100% 以上であり、AD1950 年以降の試料であることを示している。

表 9 放射性炭素年代測定試料一覧

資料 No.	採取箇所	種別	前処理・調整法	測定法
No.1	1号掘立柱建物跡 (S18)	伊勢 炭化物 (タケ葺科)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.2	壱穴建物跡3 (S11)	床面 炭化材 (環孔材)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.3	壱穴建物跡7 (S12)	床面付近 炭化材 (環孔材)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.4	壱穴建物跡4 (S16)	床面・船床 炭化材 (環孔材)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.5	1C 6r 4層 (包含層)	炭化種実	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

表 10 放射性炭素年代測定結果

試料 No.	測定 No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代: BP (暦年較正用) pMC 値 (%)	暦年代 (較正年代): cal-	
				1 σ (68.2% 確率)	2 σ (95.4% 確率)
No.1	27878	-29.41 \pm 0.24	-1150 \pm 15	AD 1990 - 1991 (61.2%)	AD 1958 - 1958 (9.7%)
			(-1149 \pm 16)	AD 1991 - 1991 (7.0%)	AD 1989 - 1991 (85.7%)
			115.39 \pm 0.24	(Post-bomb NH2 2013)	(Post-bomb NH2 2013)
No.2	27879	-30.97 \pm 0.21	1930 \pm 20	AD 53 - 87 (55.4%)	AD 27 - 40 (8.0%)
			(1929 \pm 19)	AD 106 - 120 (12.8%)	AD 48 - 125 (87.4%)
			78.65 \pm 0.19		
No.3	27880	-26.90 \pm 0.32	1570 \pm 25	AD 429 - 475 (39.6%)	
			(1572 \pm 23)	AD 484 - 495 (8.9%)	AD 422 - 543 (95.4%)
			82.22 \pm 0.24	AD 508 - 522 (11.9%)	
				AD 527 - 536 (7.7%)	
No.4	27881	-24.36 \pm 0.21	1875 \pm 20	AD 80 - 138 (65.2%)	
			(1875 \pm 20)	AD 200 - 205 (2.9%)	AD 76 - 215 (95.4%)
			79.17 \pm 0.20		
No.5	27882	-23.73 \pm 0.25	1885 \pm 20		AD 69 - 174 (91.1%)
			(1884 \pm 19)	AD 84 - 130 (68.2%)	AD 192 - 211 (4.3%)
			79.09 \pm 0.19		

pMC: percentage of Modern Carbon, BP: Before Physics (Present), cal: calibrated, AD: 西暦

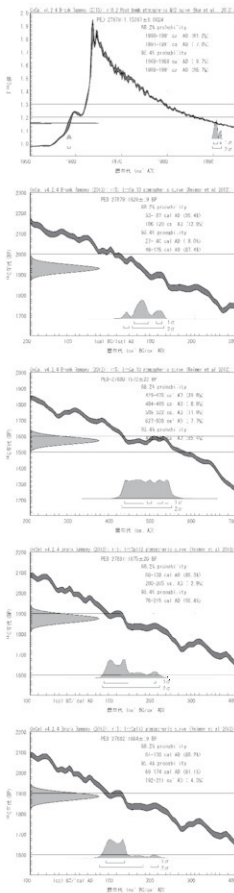


図 113 暦年校正結果

(3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを校正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代校正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。校正曲線のデータは IntCal 13、校正プログラムは OxCal 4.2 である。なお、1950 年以降の試料については Post-bomb atmospheric NH_2 (核実験後の北半球における校正曲線データ) を使用した。暦年代 (校正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により 1 (68.2% 確率) と 2σ (95.4% 確率) で示した。校正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。() 内の % 表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No.1 では -1150 ± 15 年 BP (pMC 値は $115.39 \pm 0.24\%$, 2σ の暦年代で AD 1958, 1989 ~ 1991 年)、No.2 では 130 ± 20 年 BP (AD 27 ~ 40, 48 ~ 125 年)、No.3 では 1570 ± 25 年 BP (AD 422 ~ 543 年)、No.4 では 1875 ± 20 年 BP (AD 76 ~ 215 年)、No.5 では 1885 ± 20 年 BP (AD 69 ~ 174, 192 ~ 211 年) の年代値が得られた。No.1 は、AD1950 年以降の試料と考えられる。

第 6 節 蛍光 X 線分析 (黒曜石の産地推定)

1. はじめに

物質に X 線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー (蛍光 X 線) が放出され、この蛍光 X 線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。この方法を用いて、指標となる特定の元素の検出パターンの比較から石器 (黒曜石など) の産地推定や土器 (須恵器など) の産地推定が行われている。この方法は、石器や土器などの貴重な考古遺物を非破壊で分析する

表 11 黒曜石蛍光X線分析結果

No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn/100 Fe	Sr分率	log $\frac{Fe}{k}$	判別群	エリア
1	304.5	86.7	2009.2	967.7	284.4	377.2	634.1	42.75	4.31	12.57	0.82	駿岳	伊万里
2	239.3	66.8	1578.2	780.9	232.6	305.0	506.2	42.80	4.23	12.75	0.82	駿岳	伊万里
3	292.1	86.6	1867.0	971.9	288.5	392.9	660.0	42.01	4.64	12.47	0.81	駿岳	伊万里
4	244.6	67.9	1578.8	807.6	231.7	319.4	528.2	42.80	4.30	12.28	0.81	駿岳	伊万里
5	337.0	93.8	2028.1	1017.9	302.8	402.5	677.8	42.40	4.62	12.61	0.78	駿岳	伊万里
6	311.7	91.0	1952.7	1001.2	298.9	400.9	675.4	42.13	4.66	12.58	0.80	駿岳	伊万里
7	286.8	89.5	1980.3	999.9	300.3	400.8	675.8	42.07	4.52	12.63	0.84	駿岳	伊万里
8	317.1	65.6	1484.8	863.6	245.1	337.0	558.4	43.09	4.42	12.23	0.67	駿岳?	伊万里?
9	302.0	90.5	1913.3	984.9	298.4	395.2	672.5	41.89	4.73	12.69	0.80	駿岳	伊万里
10	322.9	94.4	2078.9	992.1	297.7	391.9	661.7	42.33	4.54	12.71	0.81	駿岳	伊万里

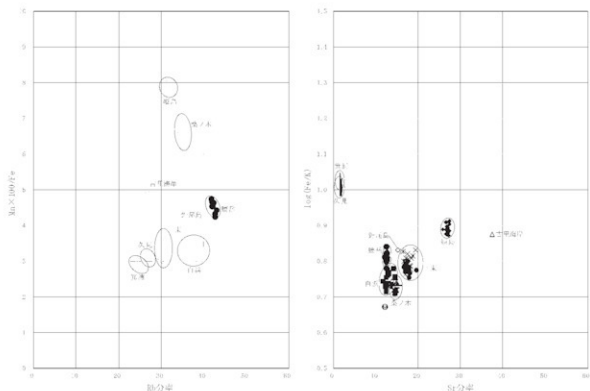


図 114 黒曜石産地推定判別図

ことができるが、表面が汚れたものや風化したものは正確な測定ができない。

2. 試料

試料は、大年遺跡から出土した黒曜石 10 点 (No. 1 ~ No. 10) である。

3. 分析方法

試料を超音波洗浄器で洗浄した後、エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (SII ナノテクノロジー社製, SEA1200VX) を用いて測定を行った。測定の条件は、測定時間 100 秒、照射径 8mm、管電圧 50kV、電流 1000 μ A、試料室内真空である。

産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法 (望月, 2004 など) を用いた。蛍光X線分析結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジ

ウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の7元素のX線強度 (cps; count per second) について、以下に示す指標値を計算した。

- 1) Rb 分率 = Rb 強度 × 100 / (Rb 強度 + Sr 強度 + Y 強度 + Zr 強度)
- 2) Sr 分率 = Sr 強度 × 100 / (Rb 強度 + Sr 強度 + Y 強度 + Zr 強度)
- 3) Mn 強度 × 100 / Fe 強度
- 4) log (Fe 強度 / K 強度)

図114の左図は横軸にRb分率、縦軸にMn強度×100/Fe強度、右図は横軸にSr分率、縦軸にlog(Fe強度/K強度)をプロットしたものである。なお、視覚的にわかりやすくするため各判別群を楕円で取り囲んである。西日本の原石データと石器のデータを照合して産地推定を行った。

4. 結果および考察

大年遺跡から出土した黒曜石10点 (No.1 ~ No.10) について、蛍光X線分析による産地推定を行った。その結果、図2の左図ではすべての試料、右図ではNo.8を除く9試料が伊万里エリア腰岳群の範囲にプロットされた。No.8は、右図では腰岳群の範囲の下方にプロットされたが、これは遺物の風化による影響と考えられ (望月1999)、No.8についても腰岳群に属する可能性がある。したがって、No.1 ~ No.10の黒曜石はいずれも腰岳産と推定される。

第7節 溝状遺構底面に堆積した鉱物粒についての観察

遺構埋土に含まれる鉱物粒を観察し、その量比を概観した。定量表示ではなく観察者の主観による量比表示である。すべてのサンプルが複数の起源を持つ鉱物粒を多く含み、混在の著しいものであるが、肉眼観察でもその色調の違いを区別することができるものもあり、優勢な鉱物粒に相違が見られる。これは、サンプリング地点へ流入する雨水の流路や堆積硬化する時期の周辺の表土露出状況に左右されるものだと考えられる。

観察結果と聞き取りの結果を総合して、推察しうる鉱物粒の起源を考察してみた。

聞き取りによれば、現在の発掘調査区周辺には鬼界アカホヤ火山灰以前のテフラの露出がなく、霧島御池軽石は掘削面より下位に分布、桜島3 (Sz-3) 文明軽石は周辺の露出がないという状況である。遺構の推定時期は中世とのことであり、1700年代のテフラは考慮していない。

都城地方の遺跡土層において有効な指標テフラは霧島系、桜島系、始良カルデラ系が考えられる

表12 溝状遺構底面堆積物の顕微鏡観察結果

		S27 底面 分岐点付近	S27 底面 分岐点付近 No. 3219	S27 (2187) 底面砂質土 No. 2841	比較資料 No. 2408	鉱物粒の 推定起源
白色軽石	多孔質	+++	+++	*	++++	Sz系
橙色軽石	多孔質	+	+	*	**	Kr-M
暗灰色軽石	多孔質黒色結晶含	**	+++	-	+++	Kr-Th・OIE
暗褐色スコリア	発泡不良	++++	+++	*	+	Kr-Th・OIE
輝石	長柱状結晶	+	+++	+++	*	Kr系共通
透明石英	結晶面あり	+	+	++	+	Kr・AT共通
透明火山ガラス	IR型	+	++	-	-	AT
暗色火山ガラス	IR型	-	+	-	-	K-Ah
黒色岩片	片状	+++	+	++	++	頁岩系
黒色岩片	塊状	**	**	++++	*	堆積岩系
白色石英		**	**	+++	*	堆積岩系
赤色岩片		+	*	*	+	安山岩系

が、立地から考えて霧島系の卓越は当然であるし、指標テフラとならない小規模噴火は頻繁に起こっていたと考えるべきであろう。つまり霧島系の鉱物組み合わせを含む土壌であるからといってすぐに Kr-Th・OhE などの霧島系の指標テフラと直結させることは短絡的であることを断っておきたい。

表 13 テフラ略号一覧

桜島 3 (文明)	Sz-3	543 年前	AD1471
霧島御鉢高原	Kr-Th	779 年前	AD1235
霧島御鉢延野	Kr-OhE	1226 年前	AD788
桜島 4 (天平)	Sz-4	1250 年前	AD764
霧島御池	Kr-M	4600 年前	
鬼界アカホヤ	K-Ah	7300 年前	
始良 T n	AT	28000 年前	

1) 道路状遺構 1 (S 27) 底面分岐点付近サンプル

発泡不良の暗褐色スコリアが優勢で、これは俗にフィールドで高原スコリアとしているものに似ている。これが、Kr-Th 由来か Kr-OhE 由来かは推察できない。次に多いのが桜島系の軽石を思わせる白色多孔質なものである。これは、約 8000 年前の桜島 11 (Sz-11) でも似たような軽石が見られるが、鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) がほとんど混入しないことを考えると、桜島 4 (Sz-4) 由来と考える方ことも可能かもしれない。

2) 道路状遺構 1 (S 27) 底面分岐点付近 No. 3219 サンプル

複雑に混在し、優勢といえる鉱物粒が特定しにくい、前述の鉱物粒に加え、輝石、火山ガラス、堆積岩起源の砂粒などもあり、2 mm を越える白色軽石が他の粒子より際だって大きい。これは水簾(すいひ=水による比重選鉱のこと)による混入の可能性を少なくする情報であり、人為的なコンタミネーションが著しい堆積物と考えられる。

3) 道路状遺構 1 [S27(21 B グリッド)] 底面砂質土 No. 2841 サンプル

軽石粒がほとんど存在せず、堆積岩系の岩片や火山放出物の中でも輝石などの重鉱物だけが濃集している。水簾によって多孔質な密度の低い鉱物粒が除去された水成堆積物であり、淘汰の良さから現地で水簾され堆積した砂層と考えられる。

4) 比較資料壺 (190) 内堆積土

目視でも白色粒が多く、桜島系を思わせる混じりけのない白色軽石優勢の構成である。

桜島 3 (Sz-3) 文明軽石の噴出年代が遺跡の性格上、適合しにくいという消極的な理由で桜島 4 (Sz-4) 由来の軽石ではないかと考えられる。他の鉱物粒も多数混入していることから、この土壌が Sz-4 の堆積時期に形成されたわけではなく、Sz-4 降灰後に混入したと考える方が自然である。

参考文献

- 笠原安夫 1985 『日本雑草図説』養賢堂、494 頁
 金原正明 1993 『花粉分析法による古環境復原』『新版 古代の日本』第 10 巻古代資料研究の方法、角川書店、248 ~ 262 頁
 近藤謙三 1995 『日本における植物珪酸体研究とその応用』『近堂祐弘教授退官記念論文集刊行会』、31 ~ 56 頁
 島倉巳三郎 1973 『日本植物の花弁形態』『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第 5 集、60 頁
 杉山真二・藤原宏志 1986 『機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-』『考古学と自然科学』19、69 ~ 84 頁
 杉山真二 1999 『植物珪酸体分析からみた九州南部の黒葉樹林発達史』『第四紀研究』第 38 巻第 2 号、pp. 109-123
 杉山真二 2000 『植物珪酸体 (プラント・オーバー)』『考古学と植物学』、同成社、pp. 189-213
 杉山真二・渡邊眞紀子・山元希里 2002 『最終氷期以降の九州南部における黒ボク土発達史』『第四紀研究』第 41 巻第 5 号、pp. 361-373
 中村 純 1967 『花粉分析』、古今書院、pp. 82-110

- 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集、p.91
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の14C年代』、日本第四紀学会、pp.3-20
- 中村俊夫 2003 「放射性炭素年代測定法と暦年代較正」『環境考古学マニュアル』、同成社、pp.301-322
- 南木睦彦 1993 「葉・果実・種子」『第四紀試料分析法』、東京大学出版会、pp.276-283
- 文化庁文化財部記念物課監修 『発掘調査のてびき-整理・報告書編-』、同成社
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-」『考古学と自然科学』9、pp.15-29
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-」『考古学と自然科学』17、pp.73-85
- 堀田満 1991 『日本列島の植物。カラー自然ガイドⅡ』、保育社、pp.68-69
- 町田洋・新井房夫 2003 『新編 火山灰アトラス-日本列島とその周辺-』、東京大学出版会、p.336
- 望月明彦 1999 「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2-上和田城山遺跡編-』、pp.172-179
- 望月明彦 2002 「黒曜石分析科学の現状と展望」『黒曜石文化研究』創刊号、明治大学人文科学研究所、pp.95-102
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), pp.337-360.
- Hua, Q., Barbetti, M. Rakowski, A.Z. 2013 Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2010. *Radiocarbon*, 55(4), pp.1-14.
- Paula J Reimer et al., 2013 IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.

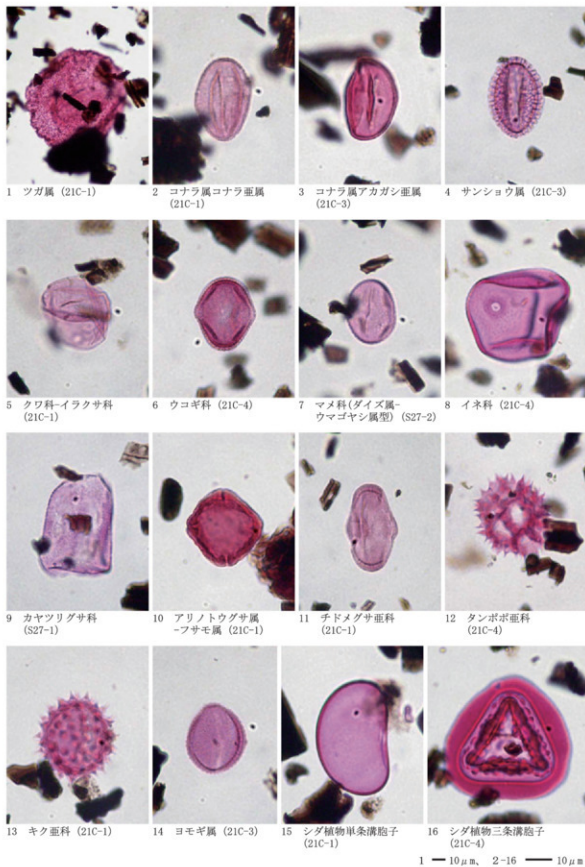
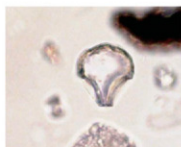
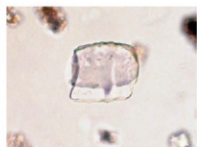


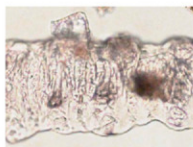
写真2 植物珣酸体写真



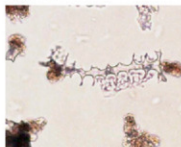
イネ
21C Gr 1



イネ (側面)
21C Gr 1



イネの粉殻 (穎の表皮細胞)
S27 1



ムギ類 (穎の表皮細胞)
21C Gr 1



キビ族型
21C Gr 4



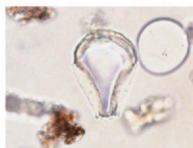
キビ族型
21C Gr 4



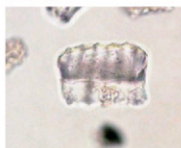
ススキ属型
21C Gr 4



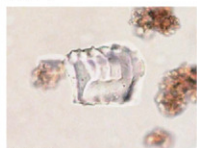
ウシクサ属 B
21C Gr 4



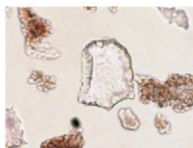
メダケ節型
S27 1



ネザサ節型
21C Gr 4



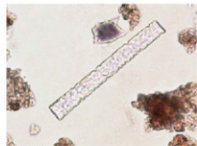
ネザサ節型
S27 1



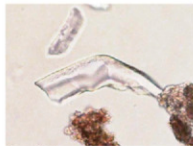
チャマキザサ節型
21C Gr 4



表皮毛起源
21C Gr 4



棒状珪酸体
21C Gr 4



タスノキ科
21C Gr 1

50 μm

写真3 花粉写真

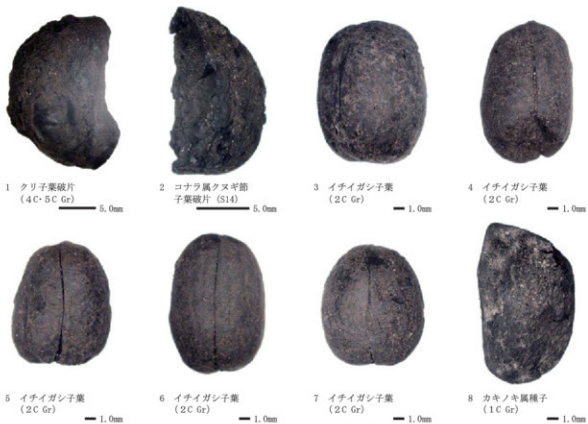
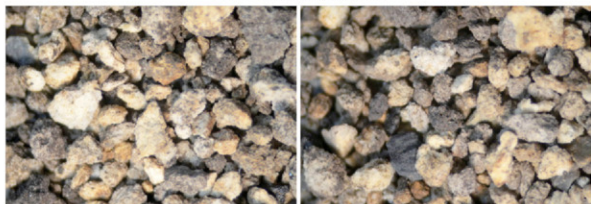


写真4 炭化種実同定試料写真



1 道路状遺構底面分岐点付近サンプル写真

2 道路状遺構底面分岐点付近 No. 3219 サンプル写真



3 道路状遺構底面砂質土 No. 2841 サンプル写真

4 比較資料壺 (109) 内堆積土サンプル写真

写真5 道路状遺構底面堆積物サンプル写真

176: 7.0102/(1)黒、粘性弱・しまり弱、白色輝石(3mm)40-50%	254: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり弱・有、褐色輝石(1mm以下)10-15%
177: 10104/(1)黄灰、粘性弱・しまり有、白色輝石(1mm)20%, 153・156・171に対応	255: 10102/(1)黒、粘性弱・しまり有、褐色輝石(1mm未満)5-7%
178: 10104/2(灰黄緑)、粘性弱・しまり有、白色輝石(3mm以下)・火山灰 50%以上、173に対応	256: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり弱、褐色輝石(2mm以下)15-20%
179: 粘性弱・しまり有・強、白色輝石(1-2mm)50%以上	257: 10102/(1)黒、粘性弱・しまり有・強、褐色輝石(3mm以下)30-40%
180: 白色輝石(1mm以下)・火山灰量 100・175に対応。aは粘性弱・しまりとても強、明褐色(7.5)50/50主と灰色(10)0/4が互層状、bはaに比し~0.5を呈し互層状	258: 10102/(1)黒、粘性弱・しまり弱、褐色輝石(2mm以下)20-25%
181: 7.0102/(1)黒、粘性弱・しまり弱、白色輝石(1-2mm)5-7%	259: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり有、褐色輝石(1mm以下)25-30%
182: 10105/(1)黒弱、粘性弱・しまり有、白色輝石(1-3mm)50%以上	260: 10103/(2)黒弱、粘性弱・しまり有、白色輝石(2mm以下)20-40%
183: 粘性弱・しまり有、白色輝石(1mm以下)・火山灰	261: 10108/(4)灰黄緑、粘性弱・しまり弱、白色輝石(1-3mm)40-50%
184: 基本土層2層に対応	262: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり弱・有、白色輝石(5-10mm)20-30%
185: 7.0102/(1)黒、粘性弱・しまり弱、白色輝石(3mm)7-10%	263: 10108/(4)灰黄緑、粘性弱・しまり弱、白色輝石(3-5mm)40-50%、鉄分による非晶化あり
186: 7.0102/(1)黒、粘性弱・しまり弱、白色輝石(1-3mm)5-7%(部分的に20%、185に対応)	264: 10104/(2)灰黄緑、粘性弱・しまり弱・有、白色輝石(3-5mm)7-10%
187: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり有、白色輝石(1.3-3mm)15-20%、鉄質の耕作土か	265: 10107/(4)にぶら黄橙、粘性弱・しまり弱、白色輝石(2-3mm)5-7%
188: 10106/6(明褐色)、粘性弱・しまり弱、白色輝石(1mm以下)・火山灰	266: 10102/(1)黒、粘性弱・しまり有、褐色輝石(1mm未満)3-7%
189: 7.0107/4(黄橙)、粘性弱・しまり弱、白色輝石(1mm以下)・火山灰	267: 10102/(1)黒、粘性弱・しまり有、褐色輝石(1mm以下)15-20%
190: 粘性弱・しまりとても強、火山灰量、下部に鉄分沈着層(7.0106/6)	268: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり弱・有、褐色輝石(1mm未満)5-10%
191: 粘性弱・しまり弱、白色輝石(10mm以下)弱、基本土層2層に対応	269: 10102/(1)黒、粘性弱・しまり弱、褐色輝石(1mm以下)20-25%、一部酸化、鉄分により一部非晶化
192: 7.0102/(1)黒、粘性弱・しまり弱・有、白色輝石(3mm)25-30%	270: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり弱・とても強、褐色輝石(1mm以下)10-15%、鉄分による非晶化あり
243: 10104/2(灰黄緑)、粘性弱・しまり弱、白色輝石(2-3mm)20%	271: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり有、褐色輝石(2mm以下)10-15%、鉄分による非晶化あり
244: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり弱、白色輝石(5-7mm)40%	272: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり有・強、褐色輝石(3mm以下)20-25%、全体に酸化、鉄分による非晶化あり
245: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり弱、白色輝石(2-3mm)30-40%	273: 10102/(1)黒、粘性弱・しまり弱・有、褐色輝石(1mm以下)17-10%、鉄分による非晶化あり
246: 10108/4(黄黄緑)、粘性弱・しまり弱、白色輝石(3-5mm)20-25%	274: 10102/(1)黒、粘性弱・しまり弱・有、褐色輝石(1mm未満)10-15%
247: 10106/6(黄)、粘性弱・しまりとても強、白色輝石(3mm)3-7%、酸化	275: 10102/(1)黒、粘性弱・しまり有、褐色輝石(2mm以下)10-15%
248: 10102/2(1)黒弱、粘性弱・しまり弱・有、白色輝石(5-7mm)30-30%	276: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり有、褐色輝石(2mm以下)20-25%
249: 10102/1(黒)、粘性弱・しまり弱・有、褐色輝石(1mm)3-5%	277: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり有・強、褐色輝石(1mm以下)30%
250: 10102/2(1)黒、粘性弱・しまり有、褐色輝石(1mm以下)7-10%	278: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり有・強、褐色輝石(2mm以下)25-30%、やが酸化、鉄分による非晶化あり
251: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり有、褐色輝石(1mm以下)10-15%	279: 10102/(1)黒、粘性弱・しまり有・強、褐色輝石(1mm)25-30%、部分的に鉄分による非晶化あり
252: 10102/2(1)黒、粘性弱・しまり有、褐色輝石(1mm以下)2-3%	
253: 10103/(1)黒弱、粘性弱・しまり弱、褐色輝石(2mm以下)17-10%	

附表2 観察表凡例

共通	
出土位置	結合した各土層片の注記内容を示す。通常出土層片の記載は1つであるが、採集個体を提示することによって、第三者が採集・遺棄した土層の動きを追うことを可能にすると考え。 同じ遺構内のものは、遺構番号の後に括弧にしてまとめて表記している。 また、記号のため、注記番号で記載している。
出土番号	データベースアソシオンで3次元位置情報を記録した際の番号。附表2に対応するが、実測図のみのものは附表2には記載していない。
粘土層・土層	
色	①録あるいは実測の色、多くは湿度による無定色。
残存率	①録や実測の残存状況で、損失した全量に対する割合を「〇/100」で示す。 なお「1/5」は1/5未満を示す。
	方向はそれぞれ、「横」=横方向、「縦」=縦方向、「斜」=斜方向、「多」=多方向を示す。 (-)は調整の前後関係を示し、「古」-「新」を意味する。 (+)の調整は風化・剥離等により調整が不明なことを示す。
	調整技法の名称と内容
調整	(1+) 器壁の厚さを調整する目的で粘土を削り取った痕跡をもつもの。砂粒の動きを伴うものが多い。器壁内の数値は1mm以下の単位値(cm)を示す。 (1+) 器壁の厚さを調整、あるいは器表面を平滑にする目的で、なでつけたような痕跡をもつもの。器壁に明確な条線が残るものが多い。器壁内の数値は単位値(条線幅/単位長さ)と条線数を示す。なお、単位値が「cm」のみのものは単位不明なもので、1cm以下の条線幅を示す。 (1+) 器表面を平滑にする目的で、なでつけたような痕跡をもつもの。器壁の条線は不明なものが多い。木口顔料が露出されたものは「1+」+顔料工によるものを「顔料」+指によるものを「指+」と表記。1mm以下の単位値は単位不明なものを「1+」+と表記。「1+」+と区別が難しいものがあるが、調整の段階を考慮して判断している。器壁内の数値は単位値(cm)を示す。なお、単位値0.3cm程度の単位値のものの中には、ミガキを磨いたものがあると思われる。 (1+) 器表面の光沢を持たせる目的で、磨いた痕跡をもつもの。0.3cm前後のものが多い。器壁内の数値は単位値(cm)を示す。 ①器壁 器壁面に示す。
	中測器名の後に記載がないものは、単位が不明でわからないものである。
備考	上記の項では表現できない事項を記載。「胎土マルパル状」は胎土に異なる色調のものマルパル状に混じったものを示す。また、「スリッパ」あるいは「スリッパ状」は、器壁内にみられる胎土を散布したような横ナマがみられることを示す。
石器・鉄器	
状態	(1)形: 完全な形状を保持しているもの。 (1)形: 調査以前の段階で折れていたと思われる。新断面に風化等がみられるもの。実測図では外形と同じ大きさの線で表現しているもの。 (1)形: 調査時に欠陥があったと思われる新断面に風化がみられないもの。実測図では外形より1段階縮小線で表現しているもの。 (1)実: 製作途中の半成品とみなされるもの。
石材	(1)カ: カケラ。①色: 実測色。①a: 磨面山肌。①b: 磨面。①c: 調整層。①d: 非カルシウム系。①e: 磨面。①f: 磨面。①g: 非磨面。 石材の判別は担当者による肉眼観察による。希薄土層の露出を受けて行ったり、誤りがあれば担当者も認めよむ不承しによるものである。

附表3 縄文土器出土位置および接合関係一覧

発掘 番号	出土位置 (埋合関係)	取上番号	備考	発掘 番号	出土位置 (埋合関係)	取上番号	備考
1	3110 層	2502		58	474 層	2160	
2	2305a 層	2903		59	北西壇土、北西3層+2C3層	-	
3	1次調査北北東区4層	-		60	2C4-5a層+S11_2F+4A4層+8南 西壇土	-	
4	23C5a層+23C7a層	2064, 2007		61	6B4層+6C4-5a層	-	
5	23D5a層+2B	-		62	2674層	3112	
6	175a層	-		63	6C4-5a層	-	
7	2A4層	-		64	1層	-	
8	4A4層	-		65	7B4-5a層	-	
9	26A	-		66	6A5a層	-	
10	S13F	-		67	2次調査27F+2次調査29F	-	
11	1A4層+17A層	-		68	20A4層+2774層	284	
12	2A5b層	-		69	17A層+S7(北東壇土)層、北西 0-10cm、床面付近)	1646, 2301	
13	1A4層+10A層	-		70	2304層	-	
14	2A1層下面+2A4層+S7(北東4層 +南東検出面)	113		71	25A4層下部+25A4層+26A4層 +242, 3222, 3223	-	
15	2A4層	2313, 2315		72	6A4-5a層+6C4層+8A4層+6D5a 層+7D4-5層	2366	
16	12D5層+17A層+125a層+S21層	2613		73	3B4-5a層+3B4層	2374	
17	4B5a-5b層	2542		74	7A-5a層	1375	
18	20B5a層	-		75	1C4層	2077, 2016, 2017	
19	22B4層	-		76	5A4層	-	
20	25A4a層	-		77	2524層	2732	
21	27A4層	-		78	2524層	2768	
22	18A4-5層	-		79	325b層	2475	
23	20C3層	-		80	25A4層	-	
24	2124層	-		81	25A4層	3131	
25	20A4層	-		82	2624層	2750	
26	調査区-括?	-		83	2524層	2717	
27	4B4-5a層	2388		84	2614層	2690	
28	21B	-		85	2624層+27A4層+2775a層	3092	
29	2B4-5a層+2B4層+3B4-5a層+3B4 層	1937, 2337, 2360		86	7D5a層	-	
30	7A1層下面	153		87	1A1層下面+17A層+1A4層	71, 1747, 2016	
31	7B4-5a層	-		88	S7(22)西北壇切中敷中、10-20cm、 北西壇土層、へら下、	1643, 2506	
32	7B5a層	-		89	8D	2635	
33	8D5a層	2037		90	4D-4-5a層	2489	
34	7B4層	2232		91	8A-1層下面	5	
35	7B4層	866, 2240		92	225層+274層+275a層+S13F+S7 南西検出面	2319, 2610	
36	3C4層+3C4-5a層+4C4層	2100, 2437		93	25A4層+25A2-4層+2574層+26A4 層	-	
37	4C4層	2386		94	4B4層	-	
38	2B4層	-		95	2524層+S33(25A)へら下、	2676, 2715, 2765, 2771, 2785	
39	4B4-5a層+4B5a層+4B4層+4C4 層	2392, 2393		96	2524層	2732	
40	474層	-		97	23B4層	2795	
41	S8(南西3層、南西北東4層、南 西壇土)+2B4-5a層+2B4層+2C5a 層	1197, 2335, 2342, 2479, 3239	42と同一点	98	7C4層	-	
42	2C4-5a層+2B4層+4C4-5a層	2478	41と同一点	99	23B4層	3011	
43	7B4層+7B4-5a層+7B1層下面	6, 869, 2229, 2232, 2234		100	5C5a層	2590	
44	7B4層	2230, 2233		101	5C4-5a層	-	
45	1C4層	1781		102	調査区-括	-	
46	2B4層+2B4-5a層	2296, 2350		103	18B-C3層	-	
47	4C4層	2399		104	S17-括	-	
48	2B4層	2329		105	S2, S17壇土+524層	2590, 2581	
49	2B4-5a層+2A4層+2B4層	2038, 2509, 2334		106	5A4層	682	
50	1A4層	2306, 2307		107	1次調査区1層下面	-	
51	4B4-5a層+4B4層	2376		108	4A4層	-	
52	4B4-5a層+4A4層	2380		109	4A4層+S11へら土壇土下層	-	
53	4A4層+4B4層+4C4層	-		110	23C4層	2938	
54	4A4層	-		111	28C5a層	3216	
55	671層S17南+S25a層	2606		112	7A3層	-	
56	6A1層下面+S11-1付近	2		113	2624層	-	
57	8B4層+8C4層	1734					
土製瓦							
468	S12南西壇土	-		471	S14北西	-	
469	S19西へら下	-	土割瓦	472	S12南東53層	1607	
470	S12南へら下	-	焼成粘土塊?	473	S13南東床面	1964	
土師器土器・磁器							
474	S1へら下7西T+9C3層	-		479	S29(200)3-4層	-	
475	S37(23A)壇土上層(底面上10cm)	3021		480	19B4層	-	
476	S37(23A)壇土上層(底面上10cm)	3021		481	S30南東	-	
477	S37(23A)底面上10cm	3020		482	21B3層	-	
478	20B4層	-		483	7C4層	671	

404	S29-S29 南東	-			404	S29 南東	-	青磁
405	6C3 層 (S3 上面)	-			405	調査坑一底	-	青磁
408	204 層	-		白磁	408	21C3 層	-	青磁
409	S28 下層	-		白磁	409	200 層	-	青磁
400	2 次調査 2 中	-		白磁	400	21B 清掃土	-	青磁
491	S27(21B) 上層	2993, 2995, 2996		白磁	499	S5, 4 層	-	青磁
492	S29(18D)	-		白磁	500	20A3 層	-	青磁
493	18-20-B-D	-		白磁	501	S28	-	青花

附表 4 弥生土器・土師器観察表

図記番号	出土位置 (接合関係)	取上番号	大きさ		調整 (外底/内底)	備考
			口径	残存率		
115	4D4-5a 層 + 04 層 + 4C4 層	2258, 2451	26.8	4/8	横切 (0.6-0.7 cm) → 1/3 (0.2 cm) / 横切 → 1/3	
116	201 層下面	108	-	1/8	横切 → 1/3 (0.2-0.3 cm) / 横切	
117	7C3 層	-	19.4	1/8	横切 → 1/3 (0.2 cm) + 丁切 / 横切 (0.15 cm)	
118	084 層	-	23.3	1/8	横切 (0.15-0.2 cm) / 横切 (0.15 cm)	
119	S10 南東検出面 + 3C4 層	-	10.6	1/8	(多量沈澱で不明) / 多切 横切 (0.5 cm / cm) → 横切 (0.7 cm) / 横切 (0.5-0.6 cm) + 把頭	多量へう組沈澱 多量へう組沈澱
120	201 層下面 + 204 層 + 04 層	115	-	-	丁切 + 横切 / 斜 + 横切	
121	204 層	-	18.7	1/8	横切 (0.2-0.8 cm) / 斜 + 横切	
122	104 層	1787, 2047	15.2	3/8	横切 / 横切 (0.7 cm) / (切 (幅 0.8 cm) →) 横切 (0.5 cm)	
123	201 層下面	99	14.4	1/8	横切 / 横切	
124	14-4 層	-	13.5	2/8	横切 (横切 (0.9-1.1) / 横切 (0.8 cm)	
125	S10 床土	-	12.2	2/8	横切 / 横切 (0.7 cm + 0.3 cm) / 丁切	
126	S8(床土)	-	11.4	1/8	横切 / 多切	
127	S14	-	11.2	1/8	横切 / 横切	
128	20-4 層 (+20-5a 層)	1961, 1788 1791, 2032, 2054	10.2 / 5.3	5/8 (8/8)	横切 → 横切 → 切 (6本 0.9 cm) / 多切 (0.7-0.8 cm)	
129	204 層	-	23.5	1/8	(不明) / (不明)	
130	204 層	-	26.9	1/8	切 → 丁切 / 切	
131	083 層	-	-	1/8	横切 / 横切	
132	083 層	-	-	1/8	風化調査	
133	083 層	-	-	1/8	横切 / 横切	
134	083 層	-	-	1/8	(横切) / 横切	
135	083 層	-	-	1/8	横切 / 横切	
136	084 層	-	-	1/8	(横切) / 横切	
137	S1-2T	-	-	1/8	横切 / 横切	内面二次焼結
138	207a 層	3114	6.6, 6.6, 9	1/8 (5/8)	(切 → 切) / (切)	風化調査
139	14-4 層	2014	15.4	2/8	横切 (0.4 cm) + 多切 (0.25-0.3 cm) / 横切 (0.4 cm) + 横切 (0.3 cm)	
140	5C4 層	-	20.7	1/8	横切 / 横切	
141	204 層	2036	18.0	1/8	横切 / 横切	
142	S9 北西 3 層	1902	31.0	1/8	横切 + 横切 (0.2 cm) / (切 →) 横切 (0.6 cm)	
143	084 層	-	-	-	横切 (0.6 cm) + 横切 (0.6 cm) / 斜切 (0.6 cm) → 横切	
144	084 層	-	7.9	1/8	横切 / 丁切 + 横切 (0.5 cm)	多量へのう組沈澱
145	201 層 + 04 層 + 204 層 + 3C4 層 + 204 層 + 201 層下面 + 04 層 + 207a 層 + 4C4 層 + 04 層	92, 1564, 2031, 2032, 2034, 2037, 2038, 2096, 2130, 2206, 2206	28.0	4/8	横切 / 斜切 (7本 / 1.0 cm) + 斜 + 横切 (0.3-0.2-0.3 cm) / 横切 / 斜切 (1.2 cm) → 丁切	
146	2C4 層 + 204 層 + 204 層 + 04 層 + 07a 層	2963, 2089	-	-	斜切 (6本 1.5 cm) → 横切 (0.2-0.3 cm) / 横切 (0.8 cm) → 横切 (0.2-0.3)	
147	084 層	2503, 2504	26.0	1/8	斜切 (4本 0.8 cm) → 横切 / 切	
148	304 層 + 204 層 + 12T	2102	35.9	1/8	横切 (0.5 cm + 0.4-0.5 cm) → 横切 (0.3 cm) / 横切 (0.5 cm) + 丁切	
149	084 層	584, 2256	32.0	1/8	横切 (7本 / cm) → 横切 / 斜切 + 横切 / 横切	
150	3C4 層	2098	34.6	1/8	横切 (0.6-0.7 cm) + 丁切 / 横切 (0.6 cm) + 斜切	
151	1C4 層 + 204 層 + 203 層 + 04 層	1729, 2056, 2075	29.8	-	横切 / 切	
152	S17 床土 15 cm	2600	32.0	1/8	横切 / 斜切 (0.8 cm) / 横切 → 斜切 (7本 / 1.1 cm) → 丁切	
153	204 層 + 204 層 + 09-06-1	-	32.5	1/8	横切 / 横切	
154	104 層	-	26.6	1/8	横切 / 斜切 (6本 / cm) → 横切 (0.5-0.6)	
155	6A3 層	-	-	1/8	横切 / 横切	
156	S17 床土 上層	1331, 1332	26.5	3/8	横切 (0.6 cm), 横切 → 横切 (0.5 cm) / 横切	
157	S17c	-	27.7	1/8	横切 (0.6-0.7 cm) / 横切 (0.6-0.7 cm)	
158	084 層 + T21, 3 層	487	28.8	2/8	横切 (7本 / 0.9-1.0 cm) → 横切 / 横切 (0.9 cm) / 横切 (0.6-0.7 cm)	
159	1C4 層	1284	22.1	1/8	横切 / 横切 (0.5 cm)	
160	011 層下面 + 111-057-0 頂土下層	12	23.7	1/8	横切 (0.3-0.6 cm) / 横切 (0.3-0.6 cm), (横切 →) 横切	
161	S11(床土 1.0 cm, 床土 3 cm, 南西床土)	1805, 1811	27.3	1/8	横切 / (斜切 →) 横切 (0.6 cm) / 横切 / 切 → 切	
162	08-4 層 (+08-1 層下面 + 08-3 層 + 08-4 層)	413, 446, 763, 765	25.2	2/8	横切 / 多切	
163	084 層 + 083 層	-	25.5	1/8	横切 / 切	

164	244層+144層+241層下面+141層下面	93,116,1796,2029	31.9	2/8	横切(0.9×0.9cm)、縦切(0.6cm/cm)→横切/縦切・斜切	
165	4C4層+4B4層	-	25.2	3/8	横切(0.7cm)/縦切(0.8cm)	
166	4C4層	2114	25.8	1/8	横切(0.8cm)/縦切(1.1cm)・横切・斜切(0.9cm)	
167	1B4層	2046,2057	24.1	1/8	(縦切)→横切(0.7cm)/縦切(1.1cm)	
168	1B4層+144層+4B3層+1B3層	197,1747,2042,2051	26.65	4/8	縦切(0.6cm/cm)→縦切(0.7×0.8cm)/横切(1.0cm)・縦切(1.0cm)	
169	1層	-	29.1	1/8	横切、斜切(日本1.1cm)→横切(1.0)→横切、縦切(日本0.8cm)	
170	2C4層+4B4層	1531	28.9	1/8	横切(0.6×0.7cm)/縦切(0.6cm)	
171	5C4層+5C3層+5B4層	-	28.2	1/8	横切(0.7cm)/縦切(0.7cm)	口縁埋込沈没状
172	244層+184層+2B4層	1550,1792,2035,2044,2070,2071	-	2/8	横切(0.6cm)、斜切(0.6cm/1.1cm)→T字/横切(0.6cm/1.0cm)・T字(1)	
173	2B4層	2025,2037	-	1/8	横切→横切(0.2×0.2.3cm)/T字	
174	1B4層+144層+1B3層+2B4層	1764,2041	-	-	横切(0.6cm)、(斜切)→横切(1.1cm)・斜切(1.1cm/1.2cm)→T字	
175	1B4層	2291	-	1/8	斜切→横切(1.1)	
176	5D4層	-	-	-	-	
177	7A3層+7A5層	-	-	-	横切/T字	
178	2次調査2B	-	-	1/8	横切/横切(1.1)	
179	2B+4層(2B+4層)	1792,1799,1933-1935,1938,1941-1944,1979,1985-1990,1992,1994,1995,	20.9	3/8	多方向、横切(0.8cm/1.3cm)/斜切(0.8cm/1.3cm)→縦切、横切(0.8cm)	
180	4D+4層	-	-	-	縦切(0.2×0.2cm×0.4cm)/縦切(0.3×0.3cm)	
181	6B+4層	2640	16.0	2/8	(0.9)T字/0.9(0.5cm/cm)→T字	
182	2D+4層(4D+4層+515南東現土+515南東3層)	2135-2137	16.7	3/8	横切・斜切(1.0cm)/斜切(0.6cm/1.0cm)→T字(1.1cm)	
183	3C+4層	614,615	25.2	1/8	T字/横切(0.6cm/cm)→T字	
184	4B+4層	-	27.0	1/8	横切、斜切(15本/0.7cm)/多(0.3×0.4cm)	
185	S11東上	1806	11.0	5/8	(0.9)→T字・縦切(0.8cm)/T字	
186	S13南+5cト	-	13.1	1/8	横切(0.3cm)/縦切(0.5×0.6cm)	
187	6B+5層	-	22.6	4/8	縦切(0.3×0.2×0.3cm)/縦切(0.2×0.3cm)	
188	S7(西+5cト、南西接合面)	-	-	(2/8)	横切/T字(1/8)	
189	1次調査区-括	-	-	-	横切(0.3cm)/(1/8)	沈没による変位か
190	S25	2408	-	8/8	(0.9)T字→T字(0.4cm)/T字	
191	4C4層+9C4層+S10	2126,2127,2129	(24.0)	4/8	多方向(0.6cm/1.65cm)/多方向(0.8×1.0cm)・間取	
191	4B4層+4C4層+5C4層+S15	572,1524,1526,1301	6.5	6/8	縦切(4.0cm)・斜切(0.65cm)/縦切(1.0cm)	
192	3B(3層)(2B+4層)	924,926,930,933,936,945,946,955,959,964,973,977,979,987,991,994,997,1521,	3.8	6/8	T字/T字	
193	S1306南+3層(埋土)	1629,1631,1634,1635	15.7	-	多方向(0.9)→T字(0.5cm)/多方向(1.2cm)	
194	2B+4層+2B1層下面	89	18.4	1/8	横切(0.6cm/1.0cm)/縦切(0.6cm/1.0cm)	
195	2B+4層	1772	-	1/8	横切、縦切→横切(0.5cm)/縦切(日本1.5cm)、横切(0.5cm)	頭露状
196	1B+4層	307,310,311	-	2/8	横切(0.7cm)/(横切)→横切	頭露状
197	1B+4層	496,500,502,506,511,514,520,521,523,530	-	8/8	多方向(日本1.4cm)/縦切(日本1.4cm)→横切(1.0cm)	
198	S8(埋土+3層)	-	15.5	1/8	縦切(0.6cm/cm)→T字/縦切(0.9)・T字(0.45cm)	
199	S8(埋土)	-	15.4	1/8	斜切(0.4cm)・T字/縦切→横切、斜切(0.6cm/cm)	
200	4B4層(+5C+4B層)	-	9.9	1/8	横切→多方向(0.4cm)→斜切(0.3cm)/T字・T字(0.4cm)	
201	4C4層	590	10.3	1/8	縦切(0.4cm)/多T字	
202	4C4層	2124	10.4	1/8	斜切・縦切(0.6cm/cm)/斜切	
203	4C4層(+4C3層下面)	547,2124	10.6	2/8	縦切(0.6cm/cm)・横切/斜切	
204	S12(北東5層、北東20-30cm西+5cト、5cト10-20cm)	1365	8.05	6/8	横切→縦切(0.2×0.3cm)→横切(0.6×0.7cm)	
205	S17F	-	-	-	縦切→斜切(0.3cm)→横切/縦切(0.5cm)	スリップ状
206	S15埋土	1322,1324	8.3	8/8	T字/T字・横切	
207	1B+4層	2043	13.0	1/8	横切/縦切→横切	
208	S9(埋土)	-	9.6	1/8	多方向・横切→横切/斜切→T字、3(4面)T字	
209	S81埋土上面	469	10.5	1/8	多方向→T字/多T字→多T字	
210	S84層	-	7.9	1/8	横切T字/T字	
211	T+DIN+I38	-	5.8	3/8	T字/横切	
212	S12(床土5cm、-括)	1931	-	(3/8)	横切→斜切(0.3cm)→斜切(0.2cm)/横切・斜切(0.7cm)・T字	
213	S11(埋土+埋土)	-	-	2/8	多方向(横切)	
214	S10(床土、南東10-20cm)	-	-	-	T字/T字	筋土マーブル状
215	S13(南西床土3cm、南西床土5cm、床土、西+5cト3層)	2169,2170	-	(8/8)	T字/T字・多方向(0.7cm)	
216	S12(北西10-20、床土5cm)	1879	-	-	T字/横切	
217	S12(床土5cm、北西10-20cm)	1879	-	(3/8)	横切(0.5cm)→T字/横切(0.6cm)	
218	S12(床土5cm、北西10-20cm)	1879	-	(2/8)	斜切(0.2×0.3cm)/横切(0.6cm)	
219	S13(+5cト、+5cト3層)	-	-	(1/8)	横切/斜切(0.6cm)	
220	3C4層	-	-	-	横切(0.6cm)/横切→斜切	
221	S8(北西埋土)	-	-	-	(斜切)→横切(0.2cm)/横切→斜切(0.6cm)・縦切(0.6cm)	
222	S9(南西3層、南東3層)	1099	-	-	T字/横切・斜切(0.5cm)	

223	S12(北東5層,北東10-20cm,南東20-30cm)	1504	-	(2)0	横-鉛(7.1×0.2cm)→横竹/横竹・横竹(7.1×0.2cm)
224	6B1層下床	420	-	1/8	(横竹)ノ葺紙
225	6B1層下床	420,469	-	4/8	葺紙/横竹→丁竹
226	6B1層下床(5G3層)	463	5.2	2/8	丁竹/多竹
227	204層	2274,2275	21.1	2/8	多竹(3.5×0.3cm)/丁竹
228	S9-3層	1231	19.2	2/8	横竹(0.6cm/cm)/横竹
229	S8(3層・埋土)	989	13.3	8/8	横竹/(横竹→)多竹(0.9cm)
230	S9(3層・埋土)	1026,1045	15.6	3/8	横竹、丁竹/横竹
231	201層下床+S9埋土	57	14.3	3/8	横竹、横竹(0.6cm)→横竹/横竹、横竹(0.6cm)→竹・丁竹
232	S9(3層・埋土)(+30)	1251,1272	15.8	3/8	横竹/横・鉛竹
233	201層(+調査区北西1層下床)	2051,2055	-	1/8	縦→3.5×0.3×0.35cm/縦竹(0.9cm)
234	S10(床・床土0.5cm)	1434,1496,1498,1500,1505,1507,1509	-	-	-
235	S9(3層・埋土)	1009,1113,1118	-	-	鉛竹(12本/1.6cm)、竹/縦竹(12本/1.6cm)
236	SC4層(+SC4-5a層+S15-3層)	2128,2129,2254,2255	30.0	1/8	鉛竹(0.7cm/cm)/縦竹/縦竹
237	S9(3層・埋土)	1063,1065,1102,1114,1299	-	-	鉛竹(0.6cm/0.9cm)→竹(0.9cm)/多竹(0.6cm/1.2cm+1.4本/1.7cm)→竹
238	S9(3層)	1091,1094,1103,1104,1115,1171,1282	-	3/8	鉛竹(0.6cm/0.8cm+5本/0.4cm)→竹/多竹(0.6cm/1.1cm+6本/0.6cm)→竹
239	6B-1層下床	33	23.6	1/8	縦竹(1.4本/1.0cm)→多竹/多竹
240	3A-4層	2111	19.0	2/8	縦竹(1.1cm)/多竹(1.1cm)
241	3A-4層	1534	22.0	1/8	竹(2.0cm)/多竹(1.6cm/cm)→竹(0.9cm)
242	1A-4層(+2B-4層)	1754	25.8	1/8	縦竹(1.4cm)・多竹/横竹(0.7cm)・竹(1.0cm)→竹
243	2C-4層	2083	25.0	0.1/8	(竹)(0.9cm)・丁竹/(竹)(0.9cm)
244	8C-4層(+2C-4層)	2083,2084	30.9	1/8	横竹(1.0cm)/横竹(0.9cm)・丁竹
245	3A-3層	895,898	20.9	2/8	鉛竹(0.6cm/1.0cm)・丁竹/葺紙
246	3A-4層	-	19.6	1/8	縦竹(1.0cm/1.0cm)→縦竹(0.7cm)、縦竹(7.1×0.5cm)/横竹(0.5cm)・横竹(0.35cm)
247	1B-4層(+1C-4層+1B-3層)	302,304,305,308,315,317,318,408,409,490,491,1728	13.7	8/8	鉛竹(0.6cm/cm)→竹/横竹(0.8cm)
248	S14(T→西→L→ト)	-	28.1	1/8	横竹(0.8cm)/横竹(0.7cm)
249	20C-3層下床(+20C-3a層+20C-4層+21C-3-4層)	2842-2845,2849-2854,2856,2999	25.0	2/8	鉛竹(9-10本/1.7cm)・横竹(4本/cm)/鉛竹(6本/cm)→竹(0.9cm)
250	1C-4層(+1C-15層+2C-4層)	-	28.4	2/8	縦竹(0.4cm)→3.5×0.3cm/横竹(1.0×1.5×0.7)
251	1C-4層	2079,2080	-	2/8	鉛竹(1.0×1.5×0.3cm)/横竹
252	2A-4層	903	15.6	1/8	(縦竹→)横竹/横竹
		1434,1436,1437,1438,1439,1441,1428,1440			
253	S10(南西床土5cm+南西床土+北東床土5cm+南西10-20cm+北西埋土+北東埋土)	1444,1436,1672-1676,1678-1680,1682-1688,1690,1691	14.35 (6.85)	8/8	横竹(0.9cm)・横竹(0.2cm)・多根竹(0.6cm)・縦竹(0.6cm)・丁竹/横竹(0.9cm)、鉛竹→横竹(0.8×0.9cm)
254	S13(南東埋土、北東土、南東土10cm、南東土、南東床土2cm、南東床土)	1845-1848,1967,1970,1971,2164,2197-2199	29.4	8/8	横-鉛竹(7本/1.3cm+6本/1.6cm)→竹(0.7cm)/鉛竹(7本/1.3cm)
		1945,1946,1948-1956,1958-1960,1966,1975,2165,2166,2170,2173,2181-2184,2186,2187,2189-2195,2519,2566,2567,2569-2572,2574-2578			
255	S13(北東床土3cm、北東床土+北東床土5cm、床土)	-	30.9	8/8	横竹(0.5cm+1.0cm)・多竹(0.5cm)・鉛竹(0.5cm+0.8cm)/横竹(0.6cm)
256	埋(+30-4層)+10北東線出面(+2C-3層下床+2C-4層)	961,2530	29.2	1/8	竹(0.8cm+1.0cm)/横竹(0.9cm)・丁竹
257	S15-3層(+15-3-4層)	-	36.0	2/8	多竹→横竹(0.5cm)/横竹・丁竹
258	30-4層(+30-4層+S9-3層+30-4層+10埋土+15-3層)	1011,1527,1562,1800	27.3	1/8	竹(0.9cm)/丁竹(0.9cm)(+3×3)
259	S13(北東6a層,Tr)	1628	-	1/8	横竹(0.5cm/cm)→横竹
260	S8(北西-3層)	928	28.2	1/8	横竹・横竹(0.6cm/cm→9本/cm)・横竹(0.2cm)/横竹(0.9cm)、横竹(0.6cm/cm)→竹
261	30-4層(1Tr)	168	25.6	1/8	横竹(0.6cm/cm)→横竹、縦竹(0.5cm)/横竹(11×0.9/1.4cm)
262	S14(埋土)1(+5A-4層)	-	37.6	1/8	横竹(→3.2×5)/横竹→縦竹
263	S10(南西床中+南東床土+南西床土南西床土5cm+南東3層)	1447,1499,1502,1504,1667,1668,2533	25.0	8/8	横竹・多竹(1.0cm+0.8cm)
264	1B-3層	221,226	25.4	1/8	鉛竹→横竹/横竹(1.6cm)
265	S15-92層+15-3層	1480	-	1/8	丁竹/丁竹
266	30-3層(+30埋土)	1249,1269	31.7	1/8	丁竹(0.8cm)・横竹(0.3cm)/丁竹
267	S8(北西-3層)	950,951	31.4	1/8	多竹(0.9cm)/横竹(0.9cm)
268	S9(南西-3層(+南→L→3層))	1088,1095,1278	25.2	1/8	鉛竹(0.9cm)・丁竹/鉛竹→丁竹(0.8cm)
269	30-3層(+30-4層)	702	28.9	1/8	横竹/丁竹
270	S9(西→L→3層+南西3層)	1032,1270	28.6	2/8	横竹/横竹(0.7cm)
271	6B-1層下床(+6B-3層)	434	31.6	1/8	横竹(0.6cm)/横竹(0.6cm)
272	6B-1層下床+6B-1層下床	437,447,449	32.0	1/8	(横竹(10本/cm)→)横竹/横竹、丁竹
273	6B-1層下床(+6B-3層+6B-1層下床)	407,417,437,440,441,448	7.6	3/8	縦-鉛竹(7(1.3cm)→竹(0.2cm)/丁竹
273	6B-1層下床+6B-1層下床(+6B-3層+6B-4層)	435,436,439,464,466	32.4	1/8	→竹(1.0cm)→竹/横竹・丁竹

274	30-3層	-	29.3	1/80	丁字ノ横ノ丁ノ横ノ丁
275	30-3層	-	29.5	1/80	丁字ノ横ノ丁
276	S10(北西床土+北西10-20cm+北西+5cm+北東+床土)	1415,1445	22.9	1/80	縦ノ丁(0.5cm)/横ノ斜ノ丁(0.8cm+0.6cm)
277	30-3層下層	-	25.2	1/80	丁字ノ丁字
278	S9-3層(+S9床土)	1004,1030,1116,1118,1121	23.2	4/8	丁字ノ多ノ丁ノ丁(0.9cm)+横ノ丁(0.5cm)
279	S9(西+6下3層+北西床土)	1275	24.4	1/80	丁字ノ斜ノ丁ノ横ノ斜ノ丁(0.6cm)
280	252	3066,3069,3070	6.9	2/8	斜ノ丁(0.7cm)→縦ノ丁(0.2cm)、横ノ丁(0.8cm)/斜ノ丁(1.2cm)
281	S9(北西3層、北西床土、+6下3層)	1017,1020,1022,1024,1203,1219	6.25	-	多ノ丁(0.4cm)+丁字ノ横ノ丁+多ノ丁
282	6A-4層(+10-4層)	1767,2039	-	-	縦ノ丁(0.8cm+0.9cm)/丁字
283	10-4層(+10-3層下部)	1782,1783	-	1/8	縦ノ丁(0.8cm+1.4cm)→丁(0.4cm)/縦ノ丁(2.3cm?)
284	10-4層(+10-3層下部)	1782	-	2/8	縦ノ丁(0.8cm+1.1cm)→丁(0.7cm)/斜ノ丁(1.8cm)→丁(1.1cm)
285	S8-3層	1579,1590	-	4/8	縦ノ丁(0.4cm)/縦ノ丁(1.1cm)多ノ丁(1.2cm)+横ノ丁(0.2cm)
286	S13(床土+6層)	1624,1625,1947,2172,2177	-	2/8	多ノ丁+丁ノ斜ノ丁+丁
287	30-4層	705,718	-	2/8	縦ノ丁+横ノ丁(0.8cm)/丁(1.1cm)→丁
288	30-4層(+30-2層+30-3層+30-3層下)	703,704,706,707,712,715-718	-	2/8	丁字ノ横ノ丁(0.9cm)/丁(1.1cm)
289	S11(床土10cm+床土+ベルト床土下層)	1812	8.0	8/8	(不明)/(不明)
290	S21層下層	18	6.8	8/8	横ノ丁→縦ノ丁(0.7cm)→横ノ丁(不明)
291	20A層	2026	7.2	2/8	横ノ丁(0.6+0.7cm)→縦ノ丁+横ノ丁(0.9cm)→縦ノ丁+横ノ丁
292	10A層	2004	6.4	5/8	横ノ丁(0.6cm)/(丁)
293	3C3層下層+3C4層	-	8.2	5/8	(横ノ丁)/(横ノ丁)
294	3C4層+3C3層	-	8.2	8/8	横ノ丁ノ丁
295	10-4層	303	6.4	5/8	横ノ丁ノ横ノ丁
296	S14(床土)	-	3.8	4/8	斜ノ丁(0.4cm)/(不明)
297	S10北西3層	-	3.9	1/8	縦ノ丁ノ横ノ丁ノ横ノ丁
298	S14(床土、北東床土、+ベルト)+51(一括)	-	4.0	7/80	縦ノ丁(0.8cm+0.8cm)→丁(0.5cm)、多ノ丁(0.7cm)/斜ノ丁(0.4cm)→縦ノ丁(0.4cm)
299	4A-4層	649	5.0	7/8	縦ノ丁(0.15+0.2cm)+丁ノ縦ノ丁(0.2cm)
300	10A層	338	5.6	3/8	丁字ノ丁字ノ丁
301	10-4層	319	6.8	2/8	縦ノ丁ノ横ノ丁(0.8cm+0.6cm)/不明
302	10A層	325	5.75	8/8	多ノ丁(1.3cm)/縦ノ丁(1.1cm)→丁
303	40A層	630	4.1	2/8	横ノ丁(0.45cm)/斜ノ丁→縦ノ丁(0.4cm)
304	S13北+ベルト3層	-	5.1	4/8	丁字ノ横ノ丁(+多ノ丁)丁
305	S8(北西3層、北西床土)	-	-	-	(横ノ丁)→丁(1.1cm)/丁
306	10-4層(+S3+10-4層+S15)+南東3層+南東下層+南西3層	1329,2262,2263	6.7	4/8	斜ノ丁(0.7cm)→斜ノ丁(0.6cm)→横ノ丁(0.7cm)+多ノ丁(0.7cm)
307	S11北東床土	-	3.7	8/8	斜ノ丁ノ丁字ノ横ノ丁(0.7cm)
308	10-3層	2625	5.2	5/8	丁字ノ横ノ丁
309	1次調査区北西1層下層	-	2.5	2/8	横ノ丁(不明)
310	1次調査区北西1層下層	-	3.6	4/8	横ノ丁ノ横ノ丁
311	1A-4層	1753,2010	-	8/8	縦ノ丁(0.7cm)/縦ノ丁ノ横ノ丁(0.7cm)→丁
312	S9南西床土	1300	4.7	8/8	丁字ノ横ノ丁(2.0cm)
313	10-4層	-	5.9	2/8	縦ノ丁+多ノ丁ノ丁
314	S9(北東3層+北東床土)	1070	7.3	3/8	横ノ丁(0.6cm)→丁
315	22C-3層(+21C-5a層+21C-3'4'層+22C-5a層+22C4層)	-	3.8	4/8	斜ノ丁ノ横ノ丁(0.7cm)+縦ノ丁(1.2cm)
316	S8(一括+北西3層+南西3層+西+6下3層+北西床土+南西3層)	960,1102,1120,1167	6.5	4/8	丁字ノ横ノ丁(1.0.7cm)→縦ノ丁(1.1cm)
317	S11南東床土	-	4.20	4/8	横ノ丁ノ横ノ丁(1.3cm)/横ノ丁(1.3cm)
318	20-1層下層+1層	54	4.50	6/8	(縦ノ丁)→丁ノ多ノ丁
319	S8(一括+西+ベルト3層)	1375,1641	6.7	6/8	多ノ丁ノ多ノ丁
320	20A層+20-1層下層	106	5.8	5/8	(縦ノ丁(0.6cm)/多ノ丁(1.0cm+0.4cm)+横ノ丁)
321	10-4層	2259	8.3	4/8	丁字ノ丁
322	10-4層	494,496	-	8/8	-
323	28-4層(+28-1層下層)	111	6.1	3/8	丁字ノ横ノ丁(0.6cm)/縦ノ丁(0.7cm)+丁
324	S9(北西3層+南東床土+南東3層+6下3層)	1006,1007,1052,1062,1130,1143,1147,1152,1208,1220,1227,1292	7.4	5/8	縦ノ丁ノ丁字ノ横ノ丁(0.6cm)/横ノ丁(1.5cm)
325	10A層	375	5.1	7/8	縦ノ丁(0.6cm)/丁
326	10-4層	2020	5.2	8/8	(横ノ丁)/(横ノ丁)
327	20A層(+10A層+04A層+04層)	541,2078,2091,2105,2108	9.7	4/8	縦ノ丁(12本/1.5cm)→縦ノ丁(0.2cm)/(丁)
328	1A-4層	2000,2010,2011	10.9	4/8	多ノ丁(1.0cm)/(丁)
329	70-5a層	-	8.8	3/8	横ノ丁
330	47-1層下層	25	9.3	2/8	縦ノ丁(0.5)/横ノ丁
331	10-4層+10-3層	179,1751	5.8	2/8	斜ノ丁(0.10cm)/多ノ丁ノ横ノ丁ノ丁
333	S8(ベルト3層、北西3層)+30(1層下層+10A層)	136,383,1574,1578	6.4	4/8	横ノ丁(0.4cm)/縦ノ丁
334	S9(一括+南東3層+ベルト)	1067,1161	7.2	6/8	丁字ノ横ノ丁(0.5cm)→丁

高層部中央付定回

内部に鋼構造物の圧載有

外部に布目有?

335	10-3層+10-4層	241,348,553,554,	-	7.8	(77) / (縦77)		
336	60-1層下床	452	-	8.9	77 / 横77 (1.1 cm)		
337	S12床土	1863,1864		7.8	4/8 斜77→77 / 縦77 (1.2 cm) → 77		
338	5A-1層下床	139		3.6	2/8 斜77 (0.9 cm) / 縦77 (0.7 cm) → 77		
339	5A-4層 (+S14F)	693		4.65	5/8 縦77 / 多77 (0.7 cm)		
341	5A-1層下床	8		5.1	2/8 横77 / 多77 (0.6 cm)		
342	104層	321,322		14.2	2/8 斜→77 (77)		
343	9C3層 (S3)	-		15.0	1/8 多→77 (0.3 cm) / 横77 → 多→77 (0.4 cm)		
344	S11 南東3層	1449,1450		14.8	1/8 横77 (0.6 cm)・横→斜→77 (0.2 cm) / 横77 (0.3 cm)・77 (0.5 cm)	鉛土精瓦	
345	S8(西ベルト, 北西現土, 一括)	-		11.0	1/8 横77・斜→77 (0.2 cm) / 横77 (0.8 cm)	鉛土精瓦	
346	S12床土	1890		9.4	8/8 横77 (0.6-0.7 cm)・多77 / 横77 (1.1 cm)		
347	S12床土	1924		10.5	1/8 横77 (0.6 cm) / 横77・77		
348	S12(床土3 cm, 床土, ベルト)	1918-1920,1926,1932		16.0	1/8 多77 (0.9 cm) / 横77 (0.8-0.9 cm)・多77 (1.3 cm)	鉛土精瓦	
349	S13-3層 (+1次調査区北東1層下床)	-		9.7	2/8 77・→77 (0.3 cm) / 斜77	内面に断面 (V) 字状の溝・工具痕あり	
349	S14F	-		6.1	1/8 横77 (0.8 cm) (・斜→77 (77) / 横77 (0.7 cm)	鉛土精瓦	
350	S14 北西現土	-		11.1	1/8 (不明) / (不明)		
351	S12F	-		11.0	1/8 横77 / 横77 (0.7-0.8 cm)	鉛土精瓦	
352	S12床土10 cm	1858,1860		16.4	1/8 横77 (0.5 cm)・→77 (0.0, 2-0.3 cm) / 横→斜77 (0.5-0.6 cm) → 77		
353	S12 南西54層	1612,1613		-	1/8 横77 (57×77 (0.9-1.0 cm) / 斜→77 (0.8 (0.9-1.0 cm) → 77, 77 77)	鉛土精瓦	
354	S13(西床土, 南現土, 床土, 南ベルト3層)	1853		13.4	8/8 横77 (0.8 cm)・斜→77 (0.9-1.0 cm) / 斜77		
355	S13(床土20 cm, 床土5 cm, 南東現土1+6C3層)	2138,2536		8.55 (6/8)	2/8 横77→縦77 (0.2 cm) / 多77 (3-4本 / cm)→縦77 (1.0 cm)		
356	S13(床土3 cm, 北東床土, 北東現土)	1807-1809		3.6	8/8 縦77 (0.6 cm)・多77 / 縦77 (10-4本 / 1.2 cm) → 77 (0.7 cm)		
357	2B-5a層 (+2B-4層)	2404,2,2405		13.9	2/8 横77 (0.8-0.9 cm)・77 / 横77 (0.8 cm)・77		
358	S15-3層	1316		15.4	2/8 斜→77 (5本 / cm) / 斜77		
359	S12(北東, 北東20-30 cm)	-		22.6	1/8 横77 (0.6 cm) / 横77 (0.6 cm)		
360	S12(南西51層, 南西現土, 南西床土2, 北東10-20 cm)	1618		-	2/8 77 (横→77 (0.4 cm) → 0.6 cm, 0.9 cm) / 横77 (0.5 cm) → 横→77 (0.5 cm)	蓋?	
361	S13(北西床土3 cm, 南東土10 cm, 北東床土5 cm, 床土) (+S12)	1806, 1972-1974,1965, 2173,2196		20.5 (13.3)	8/8 縦→77 (0.3-0.4) → 横77 (0.7 cm, 0.8-0.9 cm) / 横77 (0.8-0.9 cm)・→77	スリップ有り, 鉛土内面天井部に工具痕, 鉛土精瓦	
362	S13(西床土, 北西床土)	1849,1876,1977,2170, 2173,2196		22.2 (16.2)	8/8 横77・→77 (77 (0.2-0.3 cm) → 横77, 77, 斜→77 (5本 / cm) → 77 / 斜77 (0.8-0.9 cm) → 斜→77 (3 (0.2-0.3 cm)・77) / 斜→77, 横→77 (6本 / 0.5 cm)	スリップ状ただし, 鉛土内面は斜→77状	
363	S13(南東土+20 cm, 床土, 南3層)	1854,1855		18.9	7/8 横77→縦→斜→77 (0.4 cm) → 横77 (0.9 cm), 斜→77 (5本 / cm), 77 / 横→斜→77 (3本 / cm) → 横77 (0.9-1.0 cm), 横77 (1.3 cm), 横→77 (横77)	スリップ	
364	S13 西床土	1852		17.95 (0/8)	77→横77 (0.6 cm), (縦77→) 縦→77 (0.3 cm) → (増成後→) 横77 (0.5-0.6 cm) / 斜→77 (77→77, 横→77 (5本 / cm) → 77 (0.9 cm)	スリップ	
365	S10(南東床土, 南東床中)	1494,1495		15.1 (4/8)	(縦77→) 縦→77 (0.3 cm)・斜→77 (0.4 cm) → 横77・77 / (横→77) 多77 (0.7-0.8 cm) → 横77		
366	S13 西床土	1851		20.2 (0/8)	横→77 (6本 / cm) → 77 → 横77, 縦→77 (0.3-0.35 cm) → 横77 (0.7-0.8 cm) / 斜→縦→77 (10.7 cm)・横→77 (1.1 cm) → 77	鉛土内面天井部に工具痕, スリップ状	
367	S12床土5 cm	1891		15.9	8/8 横77→横→77 (0.3 cm), →77 (77 (0.77) → 77 (0.3 cm)) / (不明)		
367	S12(床土3 cm, 床土5 cm, 北ベルト)	1892,1894		10.4	3/8 多→77 (0.3 cm) / 縦77 (77 (77) → 77 (0.3 cm))		
368	S01 南ベルト3層, 南西3層, 南東現土)	1135,1234		17.2	4/8 横→77 (0.3 cm)・横77 (0.7 cm) / 横77 (0.6 cm)		
369	S8(北西3層, 北東3層)	932,938,939,941-944		22.8	2/8 横→斜77・縦77 (0.3 cm, 0.5 cm), 77 / 横77 (0.2-0.3 cm)・8 cm)・→77 (0.2-0.3 cm)	スリップ?	
370	204層	-		28.0	-	横77→横→77 (0.4 cm) / 横77→横→77 (0.4 cm) / 横→77 (0.3 cm)・縦→斜→77 (0.3 cm) → 横77 (0.5-0.6 cm)・5 cm) / →77 (77→) (0.5-0.4)・77	
371	S8(西ベルト3層, 南西3層, 北西3層) (+203層+204層)	923,928,949,993, 1000,1573,		26.25	4/8 横77・斜→77 (0.3 cm)・多→77 (0.3 cm) → 横77 / 横77→横→77 (0.4 cm) / 横77→横→77 (0.4 cm) / 横→77 (0.3 cm)・多→77 (0.3 cm) → 横77 (0.5-0.6 cm)・5 cm) / →77 (77→) (0.5-0.4)・77		
372	S10(北西床土, 南西現土)	1424,1425,1427		26.3	4/8 横77 / 横77→横→77 (0.4 cm) / 横77→横→77 (0.4 cm) / 横→77 (0.3 cm) → 横77 (0.5-0.6 cm)・5 cm) / →77 (77→) (0.5-0.4)・77	スリップ	
373	S8 (西ベルト3層)	1501,1503,1504		24.0	1/8 横77・77 / 縦→77 (0.3 cm) / 横→77 (0.4 cm) / 斜→77 (0.4 cm) → 横77		
374	S9(南東3層, ベルト, 一括)	1149,1170,1219		26.4	1/8 (不明) / (不明)	風化顕著	
375	S13(北西床土2 cm, 北西床土)	1978-1983,2172		25.2	4/8 横77 (5本 / 1.0 cm) → 縦→77 (0.3-0.4 cm) → 横77 / 横77 (一括→横→77 (0.3-0.4 cm))	スリップ状	
376	S12(南西床土2 cm, 一括)	2168		29.0	3/8 縦→77 (0.3 cm) → 横77 (0.8 cm) / 横77	スリップ状	
377	S10 南東床中	2527		18.0	1/8 横77→横→77 (0.2-0.3 cm) / 横77 → 0.2-0.3 cm)		
378	S10 南東床中	2532		20.2	1/8 (不明) / 横77→横→77 (0.3 cm)・横77		
379	S13 西床土	1830		20.4	8/8 横77→縦→77 (0.2-0.3 cm) → 横77 (0.7-0.8 cm) / 横77 (0.8 cm) → 横→77 (0.3 cm) → 横→77 (0.6 cm・1.0 cm)	スリップ状	
380	204層	2066,2067,2068		26.2	2/8 横77 (0.7 cm) (→斜77 (0.3 cm) / 横77 (1.0 cm)		
381	104層	1761		34.4	1/8 (不明) / (不明)		

382	S7(北東3層, 南西3層)	887	22.9	1/8	(横切) / (横切 + 斜切)	
383	S15(北西3層下部)	1311-1314	26.4	2/8	横切(0.6-0.7cm) → 丁字 / 横切(0.6-0.7cm) → 斜切	
384	S8(北西3層)	934, 935	16.5	1/8	横切(0.6cm/0.9-1.0cm) → 斜一横切(0.2-0.3cm) → 丁字 / 横切(1.0cm)・丁字切	
385	S4(層下面・S4層・S3層・S2層)	127, 609	22.8	4/8	横切(0.3×0.2-0.3cm)・横切 → 丁字	
386	S8(北西3層)	1568, 1569	22.2	1/8	横切 → 縦一横切(0.2-0.3cm) / 横切 → 横切(0.2-0.3cm)	
387	S10(北西床土, 北西床土5cm, 北西10-20cm, 北西埋土)	1407-1409, 1669	18.0	8/8	横切 → 横切(0.2×0.2-0.3cm) / 横切 → 多(0.3×0.3cm)	鉛土積立
388	S9(北西3層, 南西3層, 一括)	1041, 1083	14.8	4/8	横切 → 丁字・斜切(0.3×0.3cm) / 横切 → 斜切(0.8cm) → 横切(0.3cm) / 横切(0.3×0.3cm)	
389	S14(北東埋土)	-	22.9	1/8	横切 → 横切(0.2×0.3cm) → 横切(0.8cm) / (横切 → 横切) / 斜切(0.2×0.2-0.3cm) / (横切)	
390	S12(床土, 床土5cm, 床土10cm)	1806-1808, 2434	29.0	2/8	横切 → 横切(0.2×0.2-0.2cm) → 横切(0.7-0.8cm)	
391	2次調査2区	-	-	1/8	(丁字 → 斜切) / 横切(4本, 0.8cm) → 丁字 → 斜切(0.2cm × 0.3cm)	内面に設置したガラス状物付着
392	S14(北東埋土, T)	-	21.6	-	斜切 → 横切 → 横切 → 斜切(0.3×0.3) / (丁字) / 横切 → 横切 → 斜切(0.3×0.3cm) × 横切	
393	S12(南西54層, 床土10cm, 南東19-20cm, 南東3層, 南東1617, 1619, 1927埋土)	-	18.4	2/8	(横切) → 横切(0.3×0.3) / (横切) (0.8cm)	磨滅
394	104層(1次調査区北西1層下面)	1551	-	-	横切(0.3×0.2-0.3cm) → 丁字 / 横切 → 斜切(0.2-0.3cm)	
395	S12(床土, 床中)	1874, 1875	-	-	(横切) × 横切(0.3×0.2-0.3cm) / (横切)	
396	S9(南西埋土, 南西3層, 南西埋土, 東・S6ト)	1132	20.0	1/8	横切 → 斜切(0.3×0.3-0.4cm) / 横切(0.7cm) / (斜切) / 横切(0.2-0.8cm) → 丁字	
397	S11(南東3層)	1448	25.5	1/8	横切(0.7cm) → 横切 → 斜切(0.2-0.2cm) → 横切(0.5cm) / 横切	
398	S24層	551	-	2/8	斜切(0.3×0.3cm) / 横切 → 丁字切	
399	401層下面	461	-	4/8	横切 → 斜切 / (不明)	
400	4C4層・104層	585	-	-	横切 → 斜切(0.3×0.5cm) / 丁字	
401	304層・1C3層	-	-	4/8	(斜切) × 横切(0.7cm) → 横切(0.3×0.2-0.3cm) / 縦 → 斜切 → 横切	
402	S9(南西3層)	1081	-	(8/8)	(不明) / 丁字(0.6-0.7cm)	
403	S14(床)	-	-	(6/8)	(横切) → 斜切(0.3×0.3cm), 多(丁字) / (0.3×0.4cm) × 丁字	
404	1C4層	1780	-	(7/8)	(横切) → 縦 → 斜切(0.2-0.3cm) → 横切(0.3cm) / 縦 → 斜切(丁字) / 横切(0.3cm)	
405	101層下面・S4層	409, 781	-	(4/8)	横切 → 丁字 / 横切(0.7cm) / 縦切(0.5-0.8cm)	
406	104層	2288	-	-	横切 → 縦 → 斜切(0.3×0.3cm) / (斜切) / (0.9cm) → 横切	
407	003層	2628	-	(4/8)	(丁字) / 丁字	
408	S9(北・S6ト)	-	-	1/8	横切 / 横切 → 斜切	
409	1次調査区北西1層下面・1次調査区北東1層下面	-	-	(4/8)	横切 × 縦 → 斜切(0.4cm) / 縦切 × 横切	
410	S13(北東床土2cm, 東・S6ト)	1962, 2188	22.2	(3/8)	丁字切, (横切) → 縦 → 斜切 → 横切 / 横切(0.6cm), 横切 → 横切(0.3cm)	スリップ状
411	S13(南東・S6ト) 90層, 南東埋土)	1483, 1484	-	(8/8)	丁字切 × 横切 / 横切(0.8-0.9cm) → 丁字 × 横切	
412	S9(東・S6ト) 3層, 北東3層, 北東埋土)	1046, 1218	-	(1/8)	(丁字) × (斜切) / (横切) → 横切 × 丁字	
413	104層・103層	379, 486	-	(4/8)	横切 / 横切	風化顕著
414	S9(北東3層, 東・S6ト)	1058	-	1/8	縦 → 斜切(0.3×0.3cm) / 斜切(0.8cm) × 横切	
415	S9(南東3層, 北西埋土, 南西3層) (・100層・104層)	1180	-	(6/8)	横切 × 丁字, 丁字 → 斜切(0.2cm) / (斜切) (0.8cm) / 丁字(4本, 1.0cm) → 横切	鉛土上に沈着(非結合の日印)
416	S9 - 一括	-	-	-	-	
417	S9(北東3層, 南・S6ト) 3層, 南東埋土, 北東埋土) (S8 - 一括)	1048, 1069, 1259,	15.05	(3/8)	縦切(0.3×0.3) → 横切(0.4-0.5cm) / 多(取付) 0.5-0.6cm, 横切(0.6本, 1.2cm) → 横切(0.6cm)	
418	S9(北東3層, 南東3層)	1072, 1076, 1173	-	-	縦切(0.3×0.2-0.3cm/0.3cm), 縦切(0.3×0.3cm) → 横切 → 斜切(0.2-0.3cm)	
419	S9(北東3層, 北東埋土, 北・S6ト)	1046, 1068	26.4	1/8	横切 → 横切(0.8cm) / 横切 → 斜切(0.3×0.3cm) / 横切(0.8cm)	
420	S10(南東床中, 南東床土, 南東床土20cm) (・S9(北西埋土, S6ト) 3層)	1487, 1263, 1506, 2518, 2517, 2522	16.2	(6/8)	(斜切) × (横切) (0.6cm), 横切(0.2×0.2cm) → 横切(0.5cm)	スリップ状
421	S12(床土, 床土8cm, 床土3cm)	1857, 1876, 1887	-	-	横切 → 縦 → 斜切(0.3×0.3cm × 0.3-0.4cm) / 横切(0.8cm)	
422	S8(北西3層)	980	-	(4/8)	(縦 → 斜切) / (横切) (0.8cm), 横切 → 斜切(0.3cm) / (0.9cm) → 横切(0.6-0.7cm)	鉛土内面全体色黒化呈する
423	101層下面・102層	415	-	(8/8)	(丁字) × (斜切) (0.3cm) / (縦切) → (丁字), 横切	
424	S14(南西3層)	1620	-	-	縦切(0.3×0.4cm) → 丁字, 横切(0.3×0.3) / (丁字) → 多(丁字) → 横切(0.5cm)	
425	104層	2049	-	(8/8)	横切(0.6cm), 縦切(0.2cm) → 横切 / 横切 → 斜切(0.8cm) → 横切 → 斜切(0.9cm) (→ 丁字)	
426	S9(北東3層)	1043, 1056, 1066	-	(8/8)	(斜切) × (横切) / (丁字)	転用引口
427	101層下面	403	10.8	(7/8)	丁字 → 縦切(0.2-0.3cm) → 横切(0.3×0.2-0.3cm)	
428	404層	629	11.8	(2/8)	(横切) / (縦切) (0.6cm), 丁字 → (斜切) (0.3cm)	

429	S9(南西3層,北β-ト3層,南東3層,北東埋土)	1096,1206	-	-	縦\rightarrow13'x0.6cm</math>/ $\rightarrow</math>11'x1, \rightarrow13'x\rightarrow横1' / 横\rightarrow1'x本\rightarrow0.7cm</math>/\rightarrow</math>1'$	掘上階は引取部を内 壁へ広げて坪に接合
430	303層	-	-	(4/8)	縦\rightarrow13'x\rightarrow横1', (縦\rightarrow1') 横\rightarrow13'x/(\rightarrow13'x\rightarrow) 1', 横\rightarrow13'x\rightarrow横1'	
431	304層\rightarrow302層\rightarrow303層下面	721	11.45	(2/8)	縦\rightarrow11', 横\rightarrow13'x0.2cm</math>/ $\rightarrow</math>横1' / 縦8根11'x\rightarrow11'$	
432	204層\rightarrow99南西3層	1119	-	(6/8)	横11', 縦\rightarrow13'x0.3x0.4cm</math>/ $\rightarrow</math>11', 縦$\rightarrow$13'x0.3x0.4, 縦11' / 0.4cm</math>/\rightarrow</math>11'$	
433	S11北西3-4層	1454	-	(1/8)	縦\rightarrow13'x0.4cm</math>/ $\rightarrow</math>横$\rightarrow$11' / 横1'$	
434	S13(北西60層,北β-ト3層)	1632	-	8/8	11'x / 横1', (\rightarrow13'x\rightarrow) 11' / (1.0cm)	
435	S8\rightarrowC\rightarrowト中央3層	1642	6.4	(4/8)	(\rightarrow13'x\rightarrow横1') / (11')	
436	304層\rightarrow303層\rightarrow302層下面	-	-	(4/8)	横1'\rightarrow縦\rightarrow13'x0.3cm</math>/ (縦\rightarrow13'x\rightarrow) 11'	
437	304層\rightarrow303層	-	-	(4/8)	(不明) / (不明)	
438	S14(北東,東β-ト,Tr)	-	8.6	(4/8)	(不明) / (不明)	
439	1次調査区北北東区3層	-	-	(4/8)	11'x / 横1' / 縦1' \rightarrow横1'	
440	204層\rightarrow104層	1760	-	(4/8)	(横\rightarrow11'\rightarrow) 11' / (\rightarrow13'x\rightarrow) 横1'	
441	S1β-ト6北Tr+S15(北西3層1層,北西3層)	1319	-	(4/8)	縦\rightarrow13'x\rightarrow横1' / (0.5cm) / 縦\rightarrow13'x / (0.6cm) \rightarrow 11', (\rightarrow13'x)	
442	1次北北東区4層\rightarrow1次北北東区1-2層	-	-	(4/8)	縦\rightarrow13'x0.3cm</math>/ 縦\rightarrow11'	
443	S41層下面	140	-	(8/8)	(11'x) / 垂1' / 0.2cm	
444	S10南西4層	-	16.4	1/8	斜\rightarrow13'x0.3cm</math>/ $\rightarrow</math>横1'$\rightarrow$斜$\rightarrow$13'x$\rightarrow$横1' / 横1'1' / (0.6cm) \rightarrow横\rightarrow1' / 0.6cm</math>/\rightarrow</math>横1'$	
445	S8(南東3層,一括)	-	17.8	2/8	(縦\rightarrow11') 横1' \rightarrow13'x0.2cm</math>/ 横\rightarrow1' / 0.本 \rightarrow0.7cm</math>/ $\rightarrow</math>横1'$	粘土積立
446	304層	538	19.0	1/8	横1' \rightarrow13'x / (\rightarrow13'x\rightarrow) 横1' / 0.5cm	
447	S9(北東3層,北東埋土,北β-ルト)	1041	18.9	1/8	横\rightarrow13'x0.2cm</math>/ $\rightarrow</math>横1' / (0.45cm) / (\rightarrow13'x\rightarrow1') 横1'$	スリップ状
448	104層	-	19.0	1/8	横1' / (0.8cm) \rightarrow11'x / 横1' / (0.8cm)	
449	S14(北東埋土,南β-ト,東β-ト)	-	13.4	1/8	(横1' \rightarrow) 横\rightarrow13'x, 横1' / (0.8cm) / 横1' \rightarrow11'	
450	S12床上7cm	1839	19.7	-	斜1' \rightarrow13'x0.2cm</math>/ 横1' (\rightarrow13'x\rightarrow横\rightarrow13' x0.2x0.3cm)	
451	S15北東3層	-	-	-	-	
452	303層	-	-	-	-	
453	1次調査区1層下面	-	-	-	-	
454	S14東β-ト3層	1622	-	-	-	
455	303層	-	-	-	-	
456	304層	-	-	-	-	
457	204層	-	-	-	-	
458	S14Tr	-	5.05	8/8	11'x / 11'x	
459	Tr13N	-	4.5	8/8	(11'x) / 11'x (1.1cm)	
460	Tr13N	-	5.3	1/8	11'x / 横1'	
461	S10(南東Tr,南東19-20cm)	-	4.6	3/8	11'x / 11'x	
462	S9北東埋土	-	5.7	1/8	11'x / 11'x	
463	2次調査2階	-	2.9	8/8	11'x / 11'x	
464	S13北東床上5cm	1965	3.0	8/8	11'x / 11'x	
465	S12南東床上5cm	2215	2.9	1/8	11'x / 11'x	
466	S9北東埋土	-	2.4	3/8	11'x / 11'x	
467	S44層	-	-	1/8	11'x / 横1'	

附表5 石器・石製品観察表

標記番号	器種	出土位置	状態	大きさ (cm)			重量 (g)	石材	取上番号	備考
				長	幅	厚				
502	削片	3C12層	折損	6.67	3.83	1.69	35.72	ry	2591	
503	行梨石鏃	25A層上面	折損	1.67	1.88	0.37	1.15	an	3226	アラス買安山岩か
504	行梨石鏃	S10一括	定形	1.94	1.96	0.39	0.82	ch	-	
505	行梨石鏃	南調査区一括	折損	1.76	1.41	0.25	0.47	ch	-	失敗品か
506	行梨石鏃	北調査区一括	折損	1.95	1.35	0.32	0.69	ch	-	失敗品か
507	行梨石鏃	1A4層	定形	1.82	1.19	0.21	0.23	ch	1554	
508	行梨石鏃	444-5a層	折損	1.55	1.21	0.28	0.45	ch	2373	琵琶貝岩か
509	行梨石鏃	24A10層	定形	1.86	1.23	0.24	0.47	ch	3230	
510	行梨石鏃	S10一括	定形	2.43	1.46	0.34	0.94	ch	-	
511	行梨石鏃	287A層	折損	2.38	1.30	0.60	1.23	an	-	
512	行梨石鏃	横土土	定形	2.15	1.10	0.29	0.58	ch	-	
513	行梨石鏃	5A 杖周辺	定形	1.86	1.18	0.31	0.55	ch	-	横断面が褐色着色物あり
514	行梨石鏃	5C5a層	欠損	2.00	1.14	0.32	0.65	ch	2497	
515	行梨石鏃	7B4層	定形	1.89	1.24	0.27	0.60	ch	868	
516	行梨石鏃	22C4層	定形	3.47	1.46	0.39	1.59	ch	-	断片産原礫石
517	行梨石鏃	28A4層	折損	2.10	1.38	0.36	0.93	ch	-	
518	行梨石鏃	7A-B 清掃土	折損	2.13	0.77	0.29	0.37	ch	-	
519	行梨石鏃	287 清掃土	定形	1.91	1.37	0.31	0.78	ch	-	
520	行梨石鏃	3A4層	定形	1.66	1.21	0.27	0.61	ch	2325	
521	行梨石鏃	S26 埋土	欠損	1.94	1.33	0.30	0.70	ch	2644	
522	行梨石鏃	257 清掃土	定形	2.23	1.42	0.39	0.95	ch	-	
523	行梨石鏃	28A4層	定形	1.44	1.10	0.30	0.44	ch	-	
524	行梨石鏃	2872-4層	欠損	1.72	1.31	0.29	0.67	ch	-	
525	行梨石鏃	北調査区一括	折損	1.88	1.35	0.37	1.04	ch	-	折損を修正か
526	行梨石鏃	4C4層	定形	1.63	1.31	0.46	0.98	ch	-	
527	行梨石鏃	287A層	定形	1.55	1.15	0.32	0.47	ch	-	
528	行梨石鏃	S17 周辺一括	定形	1.65	0.99	0.43	0.75	ch	-	
529	行梨石鏃	287A層	定形	1.72	1.38	0.42	0.93	ch	-	折れを修正か
530	行梨石鏃	S7 北西臥床	折損	1.98	1.06	0.36	0.44	ch	-	
531	行梨石鏃	1C4層	折損	1.69	1.15	0.24	0.33	ch	2163	使用による折れか
532	行梨石鏃	6A4層	折損	1.31	1.20	0.29	0.46	ch	-	
533	行梨石鏃	S39(27) 埋土	定形	1.89	1.66	0.42	0.72	ch	-	未成良品か
534	行梨石鏃	6C5a層	折損	1.47	1.11	0.35	0.28	ch	-	
535	行梨石鏃	315a 下面	定形	1.83	1.38	0.39	0.69	ch	3218	
536	行梨石鏃	287一括	折損	1.55	1.51	0.42	1.01	ch	-	
537	行梨石鏃	28A4層	定形	2.07	1.46	0.37	0.98	ch	-	
538	行梨石鏃	22A9 埋土下	定形	1.53	1.17	0.32	0.43	ch	-	断片産原礫石
539	行梨石鏃	7A3層	未成?	1.42	1.24	0.33	0.52	ch	-	
540	行梨石鏃	3C4層	折損	1.23	1.09	0.32	0.58	ch	-	
541	行梨石鏃	295a 埋土下	定形	1.79	1.12	0.39	0.64	an	2645	
542	行梨石鏃	南調査区一括	定形	1.97	1.25	0.36	0.81	ch	-	
543	行梨石鏃	南調査区前面清掃土	定形	2.48	1.77	0.39	1.45	an	-	横断は調査時を意図か?
544	行梨石鏃	S17-5c-1	定形	1.28	1.19	0.25	0.32	an	-	
545	行梨石鏃	27B4層	定形	1.73	1.45	0.23	0.49	an	-	
546	行梨石鏃	6B4層	折損	1.11	1.15	0.32	0.39	an	-	
547	行梨石鏃	調査区一括	折損	1.21	1.20	0.30	0.48	an	-	
548	行梨石鏃	S7 北東縁出面	折損	0.91	1.19	0.38	0.48	ch	-	
549	行梨石鏃	22C4層	定形	1.96	1.27	0.48	0.92	ch?	-	
550	行梨石鏃	27B4層	折損	1.25	1.71	0.30	0.82	an	-	
551	行梨石鏃	3B4層	未成	2.21	1.55	0.35	0.94	an	-	
552	行梨石鏃	7A1 埋土下面	未成	1.53	1.47	0.39	0.78	ch	-	
553	行梨石鏃	2255a層	定形	1.51	1.25	0.35	0.69	ch	-	
554	行梨石鏃	5C5a層	未成	1.86	1.42	0.34	0.90	an	2191	
555	行梨石鏃	80A-8層	未成	1.84	1.54	0.43	1.15	ch	-	
556	行梨石鏃	27A4層	欠損	1.96	2.18	0.43	1.69	ch	-	未成良品か
557	行梨石鏃	287 清掃土	欠損?	2.13	1.99	0.36	2.26	ch	-	未成良品か
558	行梨石鏃	5b	未成	1.94	1.97	0.77	3.13	ch	-	
559	行梨石鏃	2175a層	折損	1.72	-	0.36	0.45	an?	2899	磨製石鏃か用品か
560	行梨石鏃	北調査区一括	折損	0.93	0.62	0.30	0.19	ch	-	
561	行梨石鏃	7B4層	1.66	-	0.31	0.35	ch	-		
562	行梨石鏃	6A4層	折損	1.21	-	0.25	0.34	ch	-	
563	行梨石鏃	6A4層	欠損	1.51	-	0.23	0.33	an	-	
564	行梨石鏃	3C4層	折損	1.27	-	0.36	0.20	ch	-	断片産原礫石
565	行梨石鏃	S18 南東埋土	欠損	1.62	1.14	0.19	0.44	ch?	-	琵琶貝岩か
566	行梨石鏃	57A層	折損	1.17	1.30	0.28	0.45	ch	-	失敗品か
567	五頭型石鏃	5A1層	定形	4.28	1.71	1.05	7.29	an	677	折れは調査時のものか?
568	彫形石鏃	調査区一括	定形	1.89	1.05	0.85	1.85	ch	-	
569	石鏃?	26A4層	折損?	2.24	0.87	0.32	0.68	ch	-	跡付近一型厚形
570	彫形石鏃	232A層	欠損	2.80	1.70	0.55	2.91	ch	-	中央付近の後縁部
571	磨製石鏃	S12 北東埋土 床上 S1 中	折損	3.84	3.02	0.42	5.61	ch	1386	
572	磨製石鏃	S28 東埋土	定形	2.86	1.99	0.25	1.66	ch	-	

573	磨製石鏃	484層	折衝	2.34	1.78	0.20	0.97	sh	-
574	磨製石鏃	514層	折衝	2.21	1.36	0.13	0.51	sh	675
575	磨製石鏃	北園書区北西部 1b層下層	完形	2.47	1.80	0.18	0.90	sh	-
576	磨製石鏃	2204層	折衝	1.65	1.13	0.17	0.32	sh	-
577	磨製石鏃?	287 清浄土	折衝	2.14	1.73	0.18	0.77	sh	-
578	磨製石鏃	2274層	折衝	2.72	2.58	0.25	3.00	-	器種不明
579	磨製石鏃	北園書区北西部 1b層下層	折衝	3.35	3.65	0.35	7.94	ss	- 器種不明
580	打製石片	58 北東3層・184層	折衝	4.10	7.75	1.43	198.0	bf	918・1741 全体に磨滅、腰部に同心円状の磨痕
581	打製石片	S33 底上15cm	折衝	11.66	8.20	1.57	176.6	bf	2683 刀鋒行直線状なし
582	打製石片	36一筋	折衝	8.45	9.65	2.20	183.5	an	- 両端石安山岩
583	打製石片	274層	折衝	8.85	5.10	1.86	101.1	bf	3211 - 鉄線痕あり
584	打製石片	48一筋	折衝	10.60	5.28	1.51	97.1	bf	-
585	打製石片?	2874層下	折衝	10.65	5.35	1.98	137.4	bf	2829
586	打製石片	784層	折衝	8.43	4.45	1.34	61.9	bf	-
587	打製石片	184層	完形	12.50	5.20	1.20	119.2	bf	2304・2305 刀鋒表面で逆方向の磨痕
588	磨製石片	814層	完形	11.30	4.85	3.42	288.5	bf	783
589	磨製石片?	2275a層	完形	14.10	5.10	3.90	474.8	bf	2789 表面風化顕著
590	磨製石片	384層	折衝	9.18	4.10	1.62	90.1	bf	2104 表面の風化顕著
591	磨製石片	文化財館 22 トレンチ	折衝	6.60	5.25	1.84	76.5	bf	-
592	磨製石片?	2874層	折衝	4.60	5.75	1.20	44.0	bf	3194 研磨後の剥離あり
593	磨製石片	684層	折衝	4.35	4.18	1.27	35.7	bf	- 未使用か
594	楕円形石鏃	2344層	完形	12.23	6.55	1.24	114.6	bf	2943
595	楕円形石鏃	2324層	折衝	12.95	6.75	0.81	80.4	bf	2722
596	磨石?	S27 黒色土 (底上10cm)	完形	5.33	5.37	3.17	128.4	ss	2840
597	磨石	207a層	完形	5.00	4.74	2.70	82.3	ss	2430
598	磨石	北園書区北西部 1b層下層		5.26	4.98	3.71	157.2	bf	-
599	磨石	474層	完形	4.28	4.25	2.28	88.3	ss	2117
600	磨石	2275a層	完形	12.79	9.88	4.58	920	ss	2757
601	磨石	287a層	完形	11.63	8.78	3.93	830	ss	2438 日本海群産出の有孔虫化石を含む砂岩
602	磨・磨石	2284層	折衝	8.08	9.36	4.82	560	ss	-
603	磨石?	2544層	折衝	6.15	8.80	4.60	230	ss	2141 日本海群産出の有孔虫化石を含む砂岩
604	磨石	475a層	折衝	6.94	8.54	4.21	380	gr	2440 雲母を多量に含む
605	磨石	385a層	完形	10.00	8.28	5.70	640	ss	-
606	磨石	485a層	折衝	6.70	9.95	4.60	495	ss	1322
607	磨石	784層	折衝	9.35	10.58	5.00	725	ss	2247
608	磨石	514層	完形	9.32	9.62	4.70	645	ss	2196 全面が使用により凹凸
609	磨・磨石?	S11 北西床土	完形	9.68	7.53	5.13	650	nd	2218 自然磨の可能性がある
610	磨石	S7 埋土上層	折衝	11.8	3.6	2.34	184	ss	1802 コーンガラス状の突起あり
611	磨石	1845a層	折衝	14.3	12.7	6.7	1445	ss	2760
612	磨石	S7 北東床土10cm	完形	24.7	25.8	6.4	5550	ss	2206
613	磨石	S8 北西床土3cm	完形	24.4	28.5	8.3	5950	ss	2292
614	磨石	185a層	折衝	14.9	14.4	7.6	2190	ss	3240
615	磨石	S10 北東床土10cm	折衝	24.6	19.8	11.5	6950	ss	2213
616	磨石	S11 北東床土5cm	折衝	15.2	20.8	7.0	2850	ss	2214
617	磨石	254 清浄土	折衝	20.2	15.3	9.6	3900	ss	-
618	磨石	784層	折衝	12.7	10.7	9.3	1300	ss	2333
619	磨石	874層	完形	22.2	19.1	9.0	5780	ss	2122
620	磨石・幾線	S7p15 埋土	折衝	19.4	16.1	10.6	3200	ss	-
621	私用金床石	S15 北東床土2cm	折衝	25.7	14.5	10.6	4900	ss	2216 鉄線が厚く付着
622	自然磨?	S17 北東床土5cm	完形	21.0	45.3	7.2	1800	ss	2217
623	自然磨?	S7 埋土上層	完形	14.4	8.0	3.0	650	ss	1803 磨に加工した認められない
624	軽石加工品	207a層	完形	43.1	24.1	7.6	1400	-	1996 風化顕著
625	軽石	275a層	完形	27.4	28.1	18.3	2350	-	2462
626	軽石	287a層	完形	38.3	24.1	22.4	4100	-	3233
627	砥石	199C層	折衝	7.65	4.00	1.61	91.2	ss	2665
628	砥石	807 埋土層	折衝	6.20	3.90	2.83	88.7	ss	1781
629	砥石	S7 南西埋土	折衝?	9.05	3.50	0.69	41.5	ss	802
630	砥石?	385a層	折衝	4.82	4.58	0.55	12.0	ss	2389 磨理面が剥離
631	砥石	185a層	折衝	4.36	1.75	0.50	7.1	ss	-
632	砥石	59 埋土層	折衝	4.30	2.17	0.97	5.9	ss	-
633	磨玉	S17 輸出面付	完形	0.68	0.57-0.62	0.47	磨痕	1813	直径0.2cm
634	磨玉	S17 埋土下層(床土20cm)	完形	0.80	0.41-0.43	0.24	磨玉	2399	直径0.2cm
635	石鏃再加工品	1804層、1901層下層	完形	15.95	6.92	1.59	162.2	-	2672 出土時は折衝
637	石鏃片	1804層	折衝	2.00	2.08	-	50.0	-	- 臼線面付石鏃片、厚さは最大値
638	石鏃片	南西調査区一筋	折衝	-	4.11	1.60	30.5	-	-
639	円板形石製品	875a層	完形	4.70	1.05	40.0	ss	-	-

附表6 鉄器・青銅器観察表

標記番号	器種	出土位置	状態	大きさ (cm)			取上番号	備考
				長さ	幅	高さ		
639	鉄鏃	7C1層	折損	6.40	3.97	0.40-0.50	-	
640	鉄鏃	57 北西床面	欠損	5.08	1.79	0.20	2277	
641	鉄鏃?	60+5a 層	欠損	2.24	1.75	0.20	-	
642	鉄鏃	2874 層	欠損	2.57	2.28	0.20	-	折れの一部は調査用のもの。
643	鉄鏃	512 北西 51 層相当	欠損	2.52	1.23	0.26	1599	
644	鉄鏃?	2255 層	欠損	2.61	1.06	0.25-0.30	-	錆化で変形化。
645	鉄鏃?	384 層	欠損	5.03	0.63	0.40	1798	
646	鉄刀+鉄鏃?	59 南西境土	欠損	1.31	0.13	0.30	-	
647	刀子	58 床面	欠損	2.24	0.72	0.20	-	
648	鏃?	文化財課 21T	折損	6.45	1.42	0.15-0.20	-	「U」字状に折れ曲り、本葉は12~13cm程度の長さか。
649	板状鉄片	2174 層	完整	4.50	1.71	0.30-0.25	-	刃部なし。
650	鉄片	23C1 層	完整	1.85	3.00	0.18-0.35	-	刃部なし。
651	器種不明	784 層	完整	3.23	1.21	0.85	-	鏃?
652	棒状鉄器	536 南西境土	完整	4.20	0.56	0.30	-	
653	器種不明	784 層	完整	3.92	1.23	0.35	-	
654	鉄片	8C1 層	折損	1.96	2.91	0.20-0.25	-	
655	鉄片	644 層	完整?	3.13	1.42	0.15-0.25	-	端部折れ面か。一部凹み?
656	板状鉄片	344 層	欠損	3.18	1.44	0.10	-	
657	板状鉄片	344 層	欠損	2.30	2.47	0.10	-	
658	板状鉄片	344 層	欠損	3.05	3.37	0.10	3327	同一個体か。縁辺に折れ曲り。
659	板状鉄片	344 層	欠損	2.30	2.97	0.10	-	
660	板状鉄片	344 層	欠損	1.63	1.25	0.10	-	
661	針状鉄器	343 層	折損	3.06		0.12前後	-	3本の針状の鉄器を束ねたもの。
662	器種不明	343 層	欠損	1.49		0.19-0.20	-	細い鉄器が巻き付く
663	器種不明	343 層	欠損	1.19		0.36-0.23	-	細い鉄器が巻き付く
664	清管	261 区	折損	8.94	0.84	0.00	-	

附表7 本報告関係の遺物取り上げ座標一覧

取上番号	X座標	Y座標	Z座標	種類	取上番号	X座標	Y座標	Z座標	種類	取上番号	X座標	Y座標	Z座標	種類
2	-16099.669	4961.921	161.896	土器	311	-16045.936	4994.509	161.279	土器	463	-16080.936	4992.693	161.781	土器
5	-16013.645	4908.181	161.801	土器	315	-16045.846	4995.735	161.230	土器	470	-16090.127	4992.596	161.733	土器
6	-16099.116	4903.247	161.760	土器	317	-16045.892	4995.861	161.241	土器	486	-16046.619	4999.796	161.294	土器
8	-16096.401	4908.478	161.738	土器	318	-16045.265	4995.949	161.249	土器	487	-16046.133	4996.249	161.235	土器
12	-16075.754	4909.167	161.799	土器	319	-16044.763	4996.396	161.229	土器	488	-16045.957	4995.423	161.241	土器
18	-16085.887	4978.975	161.874	土器	321	-16044.809	4996.899	161.258	土器	489	-16045.816	4995.205	161.249	土器
25	-16077.263	4979.656	161.913	土器	322	-16044.869	4996.923	161.219	土器	490	-16045.614	4994.874	161.284	土器
33	-16074.485	4994.521	161.140	土器	325	-16043.968	4997.616	161.168	土器	491	-16045.498	4995.099	161.251	土器
54	-16067.358	4993.218	161.492	土器	338	-16042.924	4996.862	161.174	土器	494	-16045.305	4994.963	161.278	土器
57	-16067.347	4996.114	161.495	土器	338	-16042.924	4996.862	161.174	土器	496	-16045.245	4994.902	161.276	土器
71	-16049.552	4985.246	161.294	土器	348	-16040.329	4996.489	161.171	土器	497	-16045.284	4994.717	161.280	土器
89	-16061.102	4990.280	161.442	土器	353	-16040.696	4995.328	161.170	土器	498	-16045.320	4994.774	161.257	土器
92	-16062.587	4990.111	161.466	土器	354	-16040.570	4995.297	161.172	土器	499	-16045.248	4994.756	161.254	土器
93	-16061.987	4988.832	161.475	土器	375	-16043.606	4999.353	161.227	土器	500	-16045.391	4994.703	161.249	土器
99	-16060.297	4987.388	161.411	土器	379	-16046.583	4999.831	161.303	土器	502	-16045.366	4994.826	161.232	土器
106	-16066.988	4997.874	161.447	土器	383	-16047.521	5000.505	161.339	土器	503	-16045.298	4994.838	161.227	土器
108	-16066.197	4991.632	161.473	土器	403	-16048.398	4992.860	161.704	土器	504	-16045.254	4994.823	161.236	土器
111	-16068.104	4984.884	161.612	土器	407	-16048.328	4994.098	161.744	土器	505	-16045.290	4994.755	161.245	土器
113	-16065.967	4985.354	161.568	土器	409	-16048.921	4993.824	161.755	土器	506	-16045.354	4994.739	161.237	土器
115	-16060.782	4992.486	161.426	土器	413	-16048.861	4993.974	161.741	土器	511	-16045.249	4994.645	161.271	土器
116	-16049.612	4989.239	161.332	土器	415	-16048.148	4994.061	161.744	土器	514	-16045.083	4994.596	161.264	土器
127	-16061.632	5000.990	161.551	土器	417	-16049.736	4993.056	161.771	土器	520	-16045.251	4994.736	161.254	土器
136	-16062.241	4995.641	161.588	土器	420	-16049.966	4992.626	161.801	土器	521	-16045.302	4994.683	161.244	土器
139	-16060.262	4982.831	161.806	土器	434	-16049.348	4996.814	161.724	土器	523	-16045.229	4994.762	161.221	土器
140	-16060.253	4982.831	161.806	土器	435	-16049.586	4996.794	161.726	土器	524	-16045.297	4994.747	161.218	土器
153	-16063.941	4989.763	161.796	土器	436	-16049.796	4996.118	161.741	土器	525	-16045.391	4994.771	161.233	土器
166	-16065.792	5010.371	161.289	土器	437	-16049.983	4996.234	161.736	土器	526	-16045.281	4994.816	161.230	土器
179	-16042.223	4991.747	161.297	土器	439	-16049.888	4995.963	161.743	土器	527	-16045.412	4994.728	161.249	土器
197	-16042.282	4992.944	161.292	土器	440	-16049.708	4995.773	161.772	土器	528	-16045.265	4994.612	161.253	土器
221	-16041.351	4995.691	161.191	土器	441	-16049.876	4995.697	161.734	土器	529	-16045.335	4994.630	161.256	土器
226	-16042.015	4995.345	161.216	土器	443	-16049.695	4995.699	161.748	土器	530	-16045.281	4994.738	161.290	土器
241	-16040.729	4996.469	161.192	土器	446	-16049.081	4995.978	161.714	土器	541	-16045.861	5008.765	161.279	土器
284	-16044.982	4999.126	161.192	土器	447	-16049.231	4996.401	161.735	土器	558	-16046.805	5008.966	161.307	土器
302	-16046.695	4995.769	161.247	土器	448	-16049.633	4996.911	161.717	土器	561	-16049.347	5005.645	161.322	土器
303	-16046.406	4996.249	161.220	土器	449	-16049.375	4996.325	161.738	土器	572	-16077.779	5011.303	161.438	土器
304	-16046.319	4995.960	161.259	土器	452	-16049.392	4995.662	161.715	土器	584	-16078.307	5013.033	161.343	土器
305	-16046.207	4995.837	161.247	土器	461	-160491.964	4990.949	161.755	土器	585	-16078.223	5007.014	161.429	土器
307	-16046.295	4995.008	161.272	土器	463	-160491.497	4992.420	161.789	土器	587	-16079.175	5007.502	161.417	土器
308	-16045.961	4995.444	161.254	土器	464	-160490.805	4996.333	161.704	土器	590	-16078.690	5007.864	161.407	土器
310	-16046.233	4994.363	161.316	土器	466	-160490.666	4995.964	161.706	土器	609	-16081.374	5001.301	161.539	土器

614	-148982.837	5001.815	161.517	522	1011	-148980.620	5002.738	161.120	522	1272	-148981.234	5003.316	161.081	522
615	-148982.582	5001.905	161.588	522	1011	-148980.307	5003.054	161.115	522	1275	-148981.259	5003.165	161.059	522
620	-148971.749	4994.900	161.501	522	1018	-148980.216	5003.189	161.112	522	1279	-148981.196	5003.151	161.059	522
629	-148976.989	4995.454	161.621	522	1019	-148979.780	5003.962	161.140	522	1282	-148981.079	5003.432	161.136	522
645	-148975.943	4995.764	161.659	522	1020	-148979.817	5003.358	161.147	522	1292	-148981.265	5004.029	161.051	522
649	-148981.932	4992.406	161.708	522	1022	-148979.977	5003.625	161.124	522	1299	-148981.271	5004.732	161.037	522
677	-148984.997	4995.313	161.771	522	1024	-148980.028	5003.413	161.132	522	1300	-148981.693	5003.414	160.726	522
682	-148989.471	4992.491	161.832	522	1026	-148980.222	5003.734	161.975	522	1301	-148982.313	5002.164	160.908	522
693	-148983.297	4993.960	161.875	522	1030	-148980.669	5003.522	161.971	522	1311	-148982.174	5009.376	161.144	522
698	-148985.574	4995.691	161.709	522	1032	-148980.657	5003.426	161.893	522	1312	-148982.198	5009.306	161.152	522
703	-148987.967	4997.374	161.797	522	1041	-148979.770	5003.732	161.254	522	1313	-148982.237	5009.346	161.139	522
704	-148987.836	4997.403	161.795	522	1043	-148979.672	5005.831	161.283	522	1314	-148982.272	5009.254	161.151	522
705	-148987.922	4997.399	161.722	522	1044	-148980.114	5005.252	161.147	522	1316	-148982.732	5010.799	160.953	522
706	-148987.923	4997.364	161.720	522	1045	-148980.380	5005.406	161.173	522	1319	-148981.962	5010.768	160.971	522
707	-148987.969	4997.407	161.723	522	1046	-148980.403	5005.669	161.189	522	1322	-148979.782	5012.410	161.132	522
712	-148988.290	4997.471	161.714	522	1048	-148980.919	5006.178	161.198	522	1323	-148981.522	5011.733	161.014	522
715	-148987.891	4997.433	161.696	522	1052	-148981.358	5005.613	161.290	522	1324	-148981.541	5011.831	161.021	522
716	-148987.970	4997.435	161.711	522	1056	-148980.538	5005.249	161.210	522	1329	-148981.649	5008.517	161.232	522
717	-148987.923	4997.471	161.697	522	1058	-148980.524	5004.900	161.093	522	1331	-148980.997	4978.875	161.876	522
718	-148988.074	4997.414	161.690	522	1062	-148981.003	5005.133	161.113	522	1332	-148980.797	4978.864	161.845	522
721	-148987.327	4998.655	161.678	522	1066	-148981.154	5004.850	161.147	522	1375	-148992.331	4982.483	161.702	522
723	-148990.892	4993.828	161.673	522	1067	-148981.136	5004.760	161.112	522	1407	-148980.624	4991.473	161.049	522
765	-148990.685	4994.051	161.686	522	1068	-148981.156	5004.646	161.085	522	1408	-148981.471	4991.424	161.003	522
781	-148988.563	5002.205	161.596	522	1069	-148981.055	5004.488	161.079	522	1409	-148980.620	4991.844	160.936	522
793	-148986.947	4992.000	161.829	522	1070	-148981.012	5004.375	161.058	522	1414	-148980.485	4995.109	160.946	522
860	-148988.428	4993.046	161.740	522	1072	-148981.069	5004.398	161.043	522	1415	-148980.121	4995.133	160.938	522
866	-148987.109	4995.846	161.647	522	1076	-148981.177	5004.556	161.077	522	1416	-148980.181	4995.030	160.938	522
868	-148986.709	4998.151	161.739	522	1081	-148981.681	5003.212	161.074	522	1417	-148980.255	4995.265	160.872	522
871	-148985.651	5001.853	161.715	522	1083	-148981.782	5002.960	161.098	522	1418	-148980.216	4995.298	160.851	522
887	-148980.843	4981.890	161.233	522	1085	-148982.170	5002.721	161.135	522	1421	-148980.255	4995.468	160.833	522
892	-148984.016	4980.157	161.345	522	1086	-148982.215	5002.816	161.117	522	1423	-148980.134	4995.657	160.884	522
895	-148989.361	4988.875	161.668	522	1088	-148982.114	5002.842	161.113	522	1424	-148980.249	4995.602	160.893	522
898	-148989.900	4988.863	161.646	522	1091	-148981.859	5002.513	161.120	522	1425	-148980.239	4995.666	160.790	522
903	-148989.116	4987.879	161.567	522	1094	-148981.619	5002.820	161.124	522	1426	-148980.486	4995.725	160.815	522
913	-148981.291	5001.701	161.185	522	1095	-148981.575	5002.881	161.110	522	1429	-148980.422	4995.436	160.897	522
918	-148982.496	4998.551	161.019	522	1099	-148982.350	5002.543	161.159	522	1430	-148980.403	4995.454	160.913	522
924	-148982.960	4998.127	161.079	522	1102	-148982.051	5002.460	161.143	522	1431	-148980.266	4995.456	160.910	522
926	-148982.708	4998.984	161.059	522	1103	-148981.900	5002.417	161.089	522	1432	-148980.218	4995.463	160.906	522
927	-148982.454	4998.050	161.119	522	1104	-148981.911	5002.414	161.098	522	1437	-148980.778	4995.995	160.784	522
928	-148982.279	4998.077	161.097	522	1110	-148981.875	5002.158	161.228	522	1438	-148980.981	4996.023	160.786	522
930	-148982.238	4997.928	161.139	522	1113	-148981.978	5002.160	161.146	522	1440	-148980.198	4996.198	160.763	522
933	-148982.302	4997.851	161.149	522	1115	-148981.549	5002.264	161.168	522	1444	-148980.126	4996.273	160.837	522
924	-148982.161	4997.719	161.177	522	1116	-148981.470	5002.244	161.148	522	1445	-148980.089	4996.168	160.808	522
925	-148982.120	4997.653	161.179	522	1118	-148981.417	5001.931	161.164	522	1446	-148980.636	4996.178	160.797	522
926	-148982.011	4997.419	161.186	522	1119	-148981.429	5002.072	161.159	522	1447	-148979.826	4997.297	160.792	522
928	-148982.136	4997.187	161.297	522	1120	-148981.578	5002.004	161.163	522	1448	-148978.291	4998.116	161.522	522
939	-148982.151	4997.138	161.296	522	1121	-148981.513	5001.849	161.191	522	1449	-148978.672	4998.046	161.574	522
941	-148982.182	4997.065	161.303	522	1132	-148982.550	5002.522	161.177	522	1450	-148978.611	4998.055	161.575	522
942	-148982.290	4997.041	161.297	522	1135	-148983.096	5002.561	161.259	522	1454	-148978.118	4998.824	161.472	522
943	-148982.296	4997.028	161.311	522	1139	-148982.441	5005.481	161.259	522	1480	-148982.726	5011.444	161.028	522
944	-148982.098	4996.634	161.305	522	1140	-148982.393	5005.387	161.293	522	1483	-148983.765	5012.775	160.927	522
945	-148982.496	4996.847	161.306	522	1143	-148982.399	5005.143	161.180	522	1484	-148983.844	5012.691	160.918	522
946	-148982.649	4996.828	161.322	522	1147	-148982.676	5004.929	161.215	522	1487	-148978.142	4998.847	161.024	522
949	-148982.710	4996.937	161.308	522	1149	-148982.603	5004.548	161.182	522	1494	-148978.802	4997.633	160.787	522
950	-148982.728	4996.983	161.305	522	1152	-148982.624	5004.634	161.151	522	1495	-148978.845	4997.572	160.787	522
951	-148982.776	4996.949	161.306	522	1161	-148982.471	5004.452	161.187	522	1496	-148978.634	4997.533	160.817	522
955	-148982.853	4997.034	161.273	522	1170	-148982.294	5003.936	161.112	522	1497	-148978.417	4997.282	160.774	522
959	-148982.886	4997.186	161.225	522	1171	-148982.307	5004.003	161.109	522	1498	-148978.394	4997.444	160.777	522
960	-148983.274	4996.839	161.327	522	1173	-148982.441	5004.043	161.144	522	1499	-148978.302	4997.393	160.792	522
964	-148983.182	4996.591	161.305	522	1197	-148983.619	4997.943	161.208	522	1500	-148978.310	4997.479	160.787	522
973	-148983.064	4997.449	161.195	522	1203	-148980.491	5004.158	161.064	522	1502	-148978.171	4997.426	160.786	522
977	-148983.261	4997.321	161.279	522	1206	-148980.681	5004.077	161.055	522	1504	-148978.017	4997.125	160.799	522
979	-148983.212	4997.313	161.186	522	1208	-148980.521	5004.310	161.055	522	1505	-148980.881	4997.289	160.798	522
980	-148983.074	4997.374	161.169	522	1218	-148981.249	5004.567	161.101	522	1506	-148980.895	4997.300	160.777	522
987	-148983.706	4999.572	161.625	522	1219	-148981.306	5004.691	161.070	522	1507	-148980.763	4997.325	160.746	522
989	-148984.221	4998.952	161.086	522	1220	-148981.450	5004.909	161.065	522	1509	-148980.763	4997.878	160.897	522
991	-148984.010	4998.665	161.072	522	1227	-148981.623	5004.620	161.049	522	1524	-148980.801	5009.136	161.365	522
993	-148983.685	4998.978	161.037	522	1231	-148981.551	5005.546	161.164	522	1526	-148980.437	5007.037	161.425	522
994	-148983.712	4999.020	161.037	522	1234	-148982.829	5003.588	161.126	522	1531	-148980.907	5001.410	161.901	522
997	-148983.416	4999.490	160.969	522	1239	-148982.894	5003.413	161.138	522	1534	-148980.789	4998.515	161.694	522
1000	-148982.296	4998.842	161.915	522	1249	-148982.323	5003.590							

1564	-10086.843	5901.374	161.477	1.20	1782	-10048.911	5994.893	161.218	1.20	1962	-10057.593	5990.263	161.401	1.20
1567	-10085.392	4997.245	161.219	1.20	1783	-10048.180	5995.296	161.210	1.20	1965	-10058.951	4979.875	161.096	1.20
1568	-10085.274	4997.390	161.194	1.20	1784	-10047.841	5995.949	161.211	1.20	1966	-10059.672	4980.992	161.043	1.20
1569	-10085.140	4997.301	161.208	1.20	1787	-10049.585	4993.932	161.300	1.20	1967	-10059.292	4980.969	161.049	1.20
1571	-10085.388	4997.422	161.189	1.20	1788	-10051.404	4991.997	161.359	1.20	1970	-10058.111	4981.095	161.062	1.20
1573	-10085.397	4997.636	161.129	1.20	1789	-10051.979	4992.227	161.363	1.20	1971	-10058.190	4980.914	161.052	1.20
1574	-10085.111	4998.563	161.030	1.20	1790	-10052.591	4992.215	161.367	1.20	1972	-10060.530	4979.584	161.082	1.20
1575	-10085.159	4998.612	161.013	1.20	1791	-10052.991	4992.025	161.379	1.20	1973	-10060.537	4979.538	161.072	1.20
1578	-10085.090	4998.905	161.005	1.20	1792	-10054.460	4996.363	161.424	1.20	1974	-10060.427	4979.474	161.089	1.20
1579	-100852.906	4999.773	160.985	1.20	1797	-10059.967	4998.877	161.428	1.20	1975	-10060.696	4979.173	161.079	1.20
1580	-100852.483	5000.576	161.036	1.20	1798	-10062.493	4996.185	161.476	1.20	1976	-10058.633	4977.503	161.097	1.20
1581	-100852.510	5000.523	161.039	1.20	1799	-10063.668	4995.903	161.485	1.20	1977	-10058.627	4977.516	161.097	1.20
1583	-100852.478	4999.848	161.035	1.20	1800	-10064.161	4995.590	161.502	1.20	1978	-10058.723	4977.393	161.105	1.20
1584	-100852.538	4999.966	161.030	1.20	1802	-10065.655	4991.665	160.879	1.20	1979	-10058.790	4977.356	161.102	1.20
1586	-10086.142	4982.083	161.496	1.20	1803	-10069.492	4990.355	160.997	1.20	1980	-10058.798	4977.383	161.105	1.20
1594	-10086.876	4982.438	161.307	1.20	1805	-10074.590	4985.713	161.392	1.20	1981	-10058.772	4977.218	161.072	1.20
1595	-10086.286	4981.433	161.277	1.20	1806	-10074.911	4986.319	161.244	1.20	1982	-10058.776	4977.254	161.096	1.20
1599	-10086.822	4978.038	161.590	1.20	1807	-10073.316	4987.992	161.265	1.20	1983	-10058.796	4977.210	161.085	1.20
1607	-10089.833	4981.087	161.215	1.20	1808	-10073.315	4988.181	161.264	1.20	2000	-10064.748	4986.787	161.086	1.20
1612	-10089.327	4982.495	161.323	1.20	1809	-10073.306	4988.257	161.270	1.20	2004	-10064.521	4988.335	161.215	1.20
1613	-10089.334	4982.660	161.314	1.20	1811	-10075.706	4987.315	161.219	1.20	2010	-10064.528	4988.056	161.181	1.20
1617	-10089.149	4982.714	161.255	1.20	1812	-10076.744	4985.908	161.361	1.20	2011	-10064.567	4988.133	161.157	1.20
1618	-10089.389	4978.819	161.393	1.20	1813	-10086.452	4979.731	161.578	1.20	2014	-10064.133	4980.424	161.203	1.20
1619	-10089.437	4978.888	161.361	1.20	1845	-10059.167	4981.376	161.060	1.20	2016	-10064.567	4977.354	161.239	1.20
1620	-10089.111	4988.985	161.584	1.20	1846	-10059.239	4981.118	161.056	1.20	2020	-10064.533	4990.576	161.219	1.20
1622	-100894.320	4989.376	161.639	1.20	1847	-10059.236	4980.872	161.056	1.20	2025	-10065.537	4985.573	161.341	1.20
1624	-10089.624	4978.245	161.371	1.20	1848	-10059.682	4980.859	161.075	1.20	2026	-10065.377	4988.897	161.330	1.20
1625	-10089.626	4978.252	161.351	1.20	1849	-10058.814	4977.577	161.107	1.20	2029	-10065.537	4988.991	161.277	1.20
1628	-10089.383	4978.485	161.328	1.20	1850	-10058.632	4977.514	161.102	1.20	2031	-10065.375	4988.812	161.354	1.20
1629	-10089.442	4978.660	161.345	1.20	1851	-10058.423	4977.427	161.133	1.20	2032	-10065.982	4988.795	161.349	1.20
1631	-10089.154	4979.233	161.357	1.20	1852	-10058.775	4977.302	161.085	1.20	2034	-10064.662	4988.810	161.426	1.20
1632	-10089.927	4979.241	161.406	1.20	1853	-10058.309	4977.280	161.097	1.20	2035	-10065.019	4987.287	161.440	1.20
1634	-10089.471	4979.427	161.365	1.20	1854	-10066.648	4979.195	161.166	1.20	2036	-10064.521	4986.866	161.408	1.20
1635	-10089.898	4979.379	161.371	1.20	1855	-10066.453	4979.405	161.174	1.20	2037	-10068.817	4986.470	161.364	1.20
1641	-10085.155	4998.986	160.994	1.20	1856	-10066.501	4979.367	161.086	1.20	2038	-10068.711	4985.820	161.471	1.20
1642	-100852.849	5000.969	160.987	1.20	1857	-10068.197	4981.850	161.080	1.20	2039	-10068.111	4990.235	161.292	1.20
1643	-100851.737	4979.282	161.153	1.20	1858	-10068.790	4981.322	161.051	1.20	2041	-10062.290	4992.690	161.159	1.20
1646	-10084.645	4981.343	161.239	1.20	1859	-10068.393	4981.357	161.024	1.20	2042	-10061.969	4993.038	161.162	1.20
1647	-100854.864	4983.447	161.313	1.20	1860	-10068.279	4981.217	161.046	1.20	2043	-10063.177	4993.841	161.182	1.20
1667	-100870.817	4998.433	160.811	1.20	1863	-10065.275	4979.953	161.018	1.20	2044	-10062.876	4992.969	161.251	1.20
1668	-100870.388	4997.119	160.765	1.20	1864	-10065.490	4980.147	161.002	1.20	2046	-10067.303	4996.830	161.051	1.20
1669	-100868.534	4994.620	160.968	1.20	1874	-10067.081	4977.823	161.066	1.20	2047	-10068.719	4996.442	161.253	1.20
1672	-100868.302	4995.202	160.890	1.20	1875	-10067.143	4977.829	161.065	1.20	2049	-10067.454	4995.150	161.150	1.20
1673	-100868.316	4995.287	160.835	1.20	1876	-10067.080	4977.392	161.056	1.20	2051	-100651.399	4991.515	161.346	1.20
1674	-100868.372	4995.360	160.861	1.20	1879	-10066.448	4979.350	161.931	1.20	2054	-100651.508	4992.915	161.319	1.20
1675	-100868.315	4995.379	160.866	1.20	1887	-10066.067	4982.083	161.936	1.20	2055	-100652.154	4992.337	161.344	1.20
1676	-100868.273	4995.435	160.843	1.20	1890	-10066.430	4982.566	160.997	1.20	2056	-100655.325	4994.227	161.355	1.20
1678	-100868.285	4995.496	160.834	1.20	1891	-10068.275	4981.773	161.049	1.20	2057	-100653.629	4990.565	161.289	1.20
1679	-100868.260	4995.534	160.830	1.20	1892	-10068.107	4981.096	161.043	1.20	2058	-100652.624	4990.001	161.292	1.20
1680	-100868.238	4995.592	160.837	1.20	1894	-10068.653	4980.874	161.048	1.20	2063	-10066.461	4990.902	161.371	1.20
1682	-100868.392	4995.451	160.883	1.20	1896	-10067.816	4980.550	161.072	1.20	2066	-10068.448	4994.523	161.448	1.20
1683	-100868.388	4995.457	160.821	1.20	1897	-10067.907	4980.425	161.000	1.20	2067	-10068.649	4994.593	161.463	1.20
1684	-100868.448	4995.561	160.836	1.20	1898	-10067.847	4980.547	161.012	1.20	2068	-10068.636	4994.554	161.460	1.20
1685	-100868.170	4995.510	160.878	1.20	1918	-10070.238	4979.911	161.057	1.20	2070	-10066.636	4996.055	161.319	1.20
1686	-100868.629	4995.456	160.841	1.20	1919	-10070.099	4980.084	161.059	1.20	2071	-100657.158	4995.053	161.359	1.20
1687	-100868.396	4995.392	160.834	1.20	1920	-10070.111	4980.046	161.064	1.20	2075	-100645.363	5001.127	161.051	1.20
1688	-100868.273	4995.492	160.836	1.20	1924	-10069.911	4981.488	161.923	1.20	2077	-100641.763	5002.396	161.026	1.20
1690	-100868.329	4995.431	160.839	1.20	1926	-10069.796	4981.722	161.025	1.20	2078	-100648.012	5002.892	161.206	1.20
1691	-100868.279	4995.389	160.818	1.20	1927	-10069.106	4981.957	161.123	1.20	2079	-100648.363	5008.457	161.168	1.20
1701	-10089.562	5018.397	161.591	1.20	1931	-10068.972	4982.754	161.050	1.20	2080	-10068.350	5008.368	161.223	1.20
1734	-100913.800	4998.363	161.599	1.20	1932	-10070.182	4980.089	161.061	1.20	2081	-100651.437	5007.670	161.221	1.20
1741	-100841.942	4985.127	161.120	1.20	1945	-10059.254	4980.260	161.071	1.20	2083	-100652.868	5007.885	161.235	1.20
1747	-100842.094	4988.942	161.141	1.20	1946	-10059.231	4980.239	161.066	1.20	2084	-100652.476	5008.409	161.208	1.20
1751	-100842.585	4992.079	161.212	1.20	1947	-10059.687	4980.233	161.067	1.20	2089	-100657.428	5007.177	161.279	1.20
1753	-100844.944	4989.667	161.238	1.20	1948	-10059.864	4980.071	161.072	1.20	2096	-100661.459	5009.224	161.264	1.20
1754	-100845.609	4989.228	161.293	1.20	1949	-10059.439	4980.027	161.076	1.20	2098	-100662.130	5008.262	161.287	1.20
1756	-100846.689	4984.012	161.292	1.20	1950	-10059.436	4980.091	161.073	1.20	2100	-100667.184	5008.327	161.244	1.20
1760	-100846.791	4990.876	161.324	1.20	1951	-10059.271	4979.941	161.067	1.20	2102	-100662.437	4999.296	161.357	1.20
1761	-100846.830	4991.165	161.313	1.20	1952	-10059.227	4979.953	161.062	1.20	2104	-100662.298	4990.276	161.318	1.20
1764	-100848.712	4988.410	161.283	1.20	1953	-10059.569	4979.763	161.069	1.20	2105	-100665.723			

2124	-140878.417	9007.990	161.274	±22	2309	-140852.126	1407.030	161.390	±22	2616	-140811.199	5004.213	160.914	±22
2126	-140879.829	9006.974	161.301	±22	2313	-140854.729	1408.674	161.233	±22	2617	-140811.268	5004.289	160.906	±22
2127	-140879.910	9007.210	161.300	±22	2315	-140854.705	1408.969	161.277	±22	2625	-140839.303	4996.786	161.131	±22
2128	-140880.242	9006.712	161.406	±22	2319	-140855.806	1409.280	161.432	±22	2628	-140839.728	4996.476	161.188	±22
2129	-140880.685	9007.832	161.424	±22	2325	-140863.739	1406.616	161.429	±22	2631	-140837.900	4993.412	161.115	±22
2135	-140880.775	9015.107	161.277	±22	2326	-140865.284	1406.867	161.558	±22	2635	-140811.475	5012.946	161.434	±22
2136	-140881.180	9015.918	161.285	±22	2327	-140865.791	1407.967	161.411	±22	2637	-140813.391	5012.669	161.439	±22
2137	-140881.898	9016.147	161.248	±22	2328	-140866.637	1408.115	161.292	±22	2640	-140839.339	4996.917	161.057	±22
2138	-140894.634	9013.721	160.893	±22	2333	-140843.891	5008.243	161.814	±22	2644	-140894.689	5004.307	161.178	±22
2139	-140896.671	9012.330	161.209	±22	2334	-140856.777	4995.801	161.160	±22	2645	-140898.501	5011.433	161.284	±22
2140	-140879.412	9078.119	161.829	±22	2335	-140856.869	4996.125	161.243	±22	2665	-147098.154	5098.053	161.222	±22
2163	-140846.255	9005.649	161.129	±22	2342	-140858.205	4994.687	161.245	±22	2676	-147087.113	4973.138	161.552	±22
2164	-140859.157	9088.904	161.053	±22	2350	-140856.777	4998.735	161.290	±22	2680	-147098.526	4969.695	161.599	±22
2165	-140859.499	9080.294	161.039	±22	2356	-140860.030	4997.698	161.298	±22	2683	-147086.122	4974.006	161.359	±22
2166	-140859.528	9079.706	161.097	±22	2357	-140860.412	4997.900	161.213	±22	2712	-147084.967	4972.003	161.557	±22
2168	-140860.512	9078.330	161.135	±22	2360	-140860.617	4997.146	161.236	±22	2715	-147084.757	4971.389	161.461	±22
2169	-140860.191	9078.437	161.099	±22	2369	-140861.783	4998.080	161.287	±22	2717	-147084.934	4972.906	161.499	±22
2170	-140859.957	9078.642	161.096	±22	2373	-140870.665	4987.560	161.512	±22	2722	-147084.504	4974.964	161.514	±22
2172	-140858.822	9077.292	161.086	±22	2374	-140867.631	4990.055	161.372	±22	2732	-147096.778	4973.932	161.489	±22
2173	-140858.598	9077.597	161.055	±22	2375	-140870.873	4991.173	161.473	±22	2750	-147096.072	4972.300	161.567	±22
2174	-140858.907	9077.694	161.105	±22	2388	-140877.678	4987.457	161.332	±22	2757	-147059.947	4984.955	161.430	±22
2175	-140858.940	9077.784	161.104	±22	2389	-140875.374	4988.654	161.347	±22	2760	-147017.974	4986.666	161.187	±22
2177	-140858.882	9077.886	161.098	±22	2392	-140872.455	4989.230	161.281	±22	2765	-147085.081	4971.076	161.566	±22
2178	-140858.713	9077.790	161.099	±22	2393	-140872.466	4989.151	161.294	±22	2768	-147084.676	4971.464	161.554	±22
2179	-140858.149	9079.229	161.968	±22	2398	-140874.353	5001.380	161.306	±22	2771	-147084.504	4972.163	161.552	±22
2179	-140858.317	9079.306	161.974	±22	2399	-140874.075	5001.499	161.302	±22	2785	-147083.699	4972.663	161.559	±22
2180	-140858.322	9079.580	161.968	±22	2402-2	-140871.211	5001.315	161.358	±22	2789	-147089.604	4978.308	161.530	±22
2181	-140858.691	9079.900	161.977	±22	2404	-140862.901	4994.519	161.152	±22	2795	-147082.671	4990.360	161.525	±22
2182	-140858.865	9079.959	161.972	±22	2405	-140852.816	4994.601	161.153	±22	2829	-147117.253	4997.784	161.648	±22
2183	-140858.869	9080.037	161.978	±22	2408	-140852.837	4994.716	161.173	±22	2840	-147096.382	4992.784	161.146	±22
2184	-140858.949	9080.211	161.974	±22	2434	-140867.810	4989.245	161.616	±22	2842	-147097.639	5005.744	161.143	±22
2186	-140857.817	9080.496	161.194	±22	2437	-140868.099	5004.346	161.294	±22	2843	-147087.734	5005.690	161.194	±22
2187	-140858.292	9080.529	161.037	±22	2439	-140869.866	5007.043	161.151	±22	2844	-147087.306	5005.543	161.195	±22
2188	-140858.209	9080.742	161.046	±22	2440	-140871.515	5005.049	161.175	±22	2845	-147088.035	5005.453	161.943	±22
2189	-140857.885	9080.885	161.099	±22	2441	-140873.784	5011.227	161.144	±22	2849	-147087.820	5004.826	161.177	±22
2190	-140857.951	9080.945	161.099	±22	2451	-140874.149	5011.207	161.297	±22	2850	-147087.665	5004.782	161.183	±22
2191	-140857.865	9080.989	161.077	±22	2458	-140878.799	4999.271	161.385	±22	2851	-147087.953	5004.267	161.128	±22
2192	-140857.919	9080.939	161.029	±22	2462	-140876.354	4978.437	161.869	±22	2852	-147087.907	5004.471	161.131	±22
2193	-140857.943	9081.086	161.028	±22	2475	-140861.646	4979.461	161.413	±22	2853	-147087.825	5004.573	161.123	±22
2194	-140858.063	9081.133	161.029	±22	2478	-140857.084	5004.421	161.195	±22	2854	-147087.697	5003.901	161.171	±22
2195	-140858.135	9081.354	161.088	±22	2479	-140855.879	5005.239	161.187	±22	2856	-147088.427	5003.434	161.168	±22
2196	-140858.632	9077.616	161.058	±22	2491	-140860.111	5005.729	161.296	±22	2899	-147084.773	4977.923	161.898	±22
2197	-140858.067	9080.941	161.055	±22	2497	-140862.507	5003.240	161.328	±22	2943	-147083.268	4989.987	161.454	±22
2198	-140858.186	9080.987	161.055	±22	2500	-140862.076	5007.152	161.292	±22	2951	-147085.167	4997.981	161.397	±22
2199	-140858.132	9080.971	161.053	±22	2503	-140860.655	5011.246	161.371	±22	2958	-147088.232	5002.818	161.467	±22
2200	-140851.985	9080.830	160.735	±22	2504	-140860.639	5010.907	161.284	±22	2964	-147089.413	5003.422	161.290	±22
2202	-140858.280	9082.417	161.011	±22	2517	-140871.245	4999.723	160.785	±22	2993	-147086.437	4994.697	160.984	±22
2213	-140867.845	9096.589	160.773	±22	2518	-140871.271	4999.782	160.789	±22	2995	-147086.065	4994.771	160.992	±22
2214	-140876.688	9088.478	161.297	±22	2519	-140871.387	4999.805	160.825	±22	2996	-147084.812	4994.700	160.986	±22
2215	-140868.118	9081.828	161.054	±22	2522	-140871.237	4999.911	160.893	±22	2999	-147087.735	5006.166	161.153	±22
2216	-140862.168	9011.232	160.792	±22	2527	-140871.442	4999.874	160.861	±22	3007	-147088.000	5004.108	160.952	±22
2217	-140867.207	9079.990	161.324	±22	2530	-140864.648	4994.545	161.827	±22	3011	-147087.726	4995.065	161.897	±22
2218	-140863.909	9088.430	161.339	±22	2532	-140869.355	4994.541	160.829	±22	3020	-147087.092	4998.267	161.432	±22
2219	-140868.899	8993.533	161.690	±22	2533	-140872.048	4995.193	160.768	±22	3021	-147089.965	4998.236	161.445	±22
2220	-140868.970	8993.163	161.672	±22	2536	-140868.574	5013.719	160.891	±22	3066	-147085.258	4979.472	161.570	±22
2221	-140869.035	8993.428	161.672	±22	2567	-140857.763	4981.112	161.836	±22	3069	-147085.214	4979.283	161.530	±22
2232	-140869.667	8993.401	161.636	±22	2568	-140857.803	4981.060	161.813	±22	3070	-147084.998	4979.396	161.519	±22
2234	-140869.957	8993.652	161.679	±22	2569	-140857.797	4981.150	161.847	±22	3092	-147089.716	4976.579	161.602	±22
2237	-140869.908	8996.975	161.724	±22	2570	-140857.914	4981.142	161.813	±22	3112	-147089.788	4978.942	161.505	±22
2240	-140869.492	8996.016	161.616	±22	2571	-140857.920	4981.118	161.813	±22	3114	-147092.636	4979.124	161.493	±22
2247	-140893.536	8997.935	161.545	±22	2572	-140858.020	4981.200	161.049	±22	3131	-147089.885	4981.896	161.446	±22
2254	-140869.504	9006.835	161.805	±22	2574	-140857.744	4981.090	161.050	±22	3141	-147087.942	4982.988	161.515	±22
2255	-140869.667	9006.977	161.413	±22	2575	-140857.846	4981.105	161.030	±22	3142	-147087.937	4983.125	161.458	±22
2256	-140879.574	9011.005	161.203	±22	2576	-140857.832	4981.163	161.034	±22	3194	-147115.242	4979.259	161.640	±22
2258	-140878.163	9014.380	161.243	±22	2577	-140857.934	4981.157	161.036	±22	3211	-147085.709	4983.398	161.967	±22
2259	-140878.527	9015.211	161.209	±22	2578	-140857.942	4981.140	161.021	±22	3216	-147115.872	4990.327	160.963	±22
2262	-140887.116	9011.057	161.317	±22	2580	-140865.838	4979.574	161.761	±22	3218	-147085.577	4999.535	160.940	±22
2263	-140887.336	9011.027	161.307	±22	2581	-140865.839	4979.590	161.760	±22	3222	-147087.792	4983.048	161.486	±22
2266	-140896.014	9003.039	161.389	±22	2586	-140852.264	4979.164	160.843	±22	3223	-147087.791	4983.101	161.444	±22
2277	-140851.904	8980.179	160.821	±22	2591	-140866.934	5002.355	159.130	±22	3226	-147086.961	4981.005	160.576	±22
2288	-140846.562													

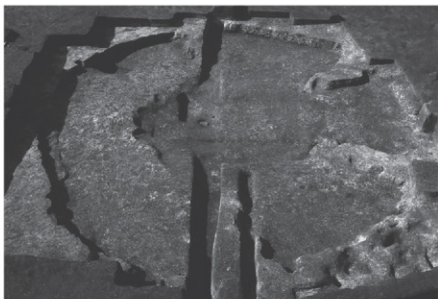
写 真 图 版



1 旧石器剥片出土状況



2 竪穴建物跡1検出状況
(平面形確定段階)



3 竪穴建物跡1
床面検出状況

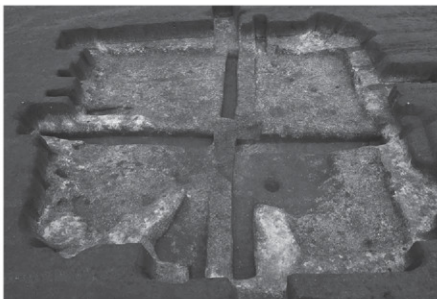
1 竪穴建物跡 2
床面検出状況



2 竪穴建物跡 3
床面検出状況



3 竪穴建物跡 4
床面検出状況



1 堅穴建物跡 5
床面検出状況



2 堅穴建物跡 6
床面検出状況



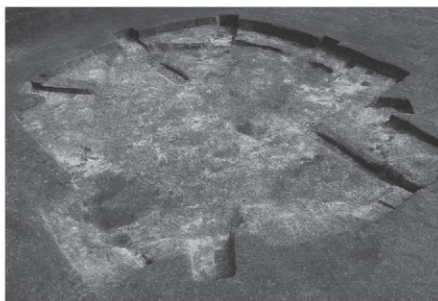
3 堅穴建物跡 7
床面検出状況



1 竪穴建物跡 8
床面検出状況



2 竪穴建物跡 8
床面検出状況



3 竪穴建物跡 10
床面検出状況



1 竪穴状遺構 1
床面検出状況

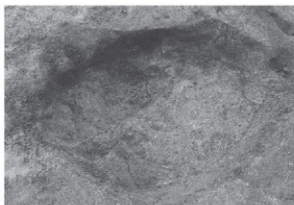


2 竪穴状遺構 2
床面検出状況



3 土坑 2 内壺出土状況
(写真奥は竪穴建物跡 10)





1 土坑 1 完掘状況



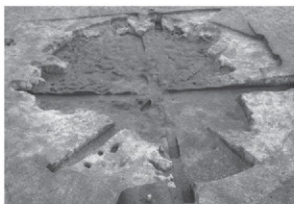
2 竪穴建物跡 1 突出壁内土器出土状況



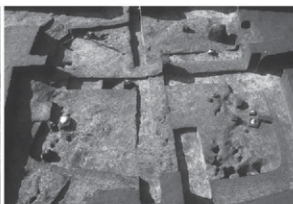
3 竪穴建物跡 1 ビット上礫出土状況



4 竪穴建物跡 1 完掘状況



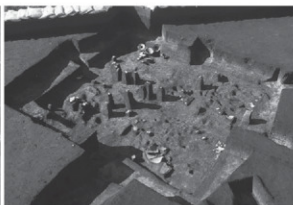
5 竪穴建物跡 2 完掘状況



6 竪穴建物跡 3 遺物出土状況



7 竪穴建物跡 4 完掘状況



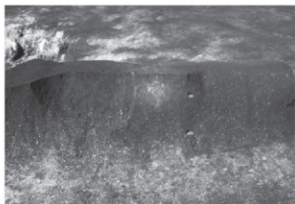
8 竪穴建物跡 5 遺物出土状況



1 竪穴建物跡5北西部遺物出土状況



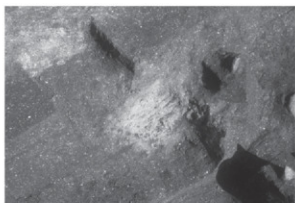
2 竪穴建物跡5完掘状況



3 竪穴建物跡5東側灰状物質堆積状況



4 竪穴建物跡6遺物出土状況



5 竪穴建物跡6灰色粘土検出状況



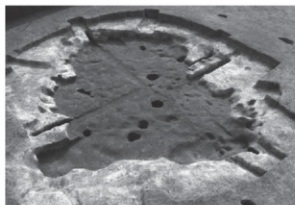
6 竪穴建物跡6完掘状況



7 竪穴建物跡8遺物出土状況



8 竪穴建物跡8完掘状況



1 竪穴建物跡 9 完掘状況



2 竪穴建物跡 10 埋土中遺物出土状況



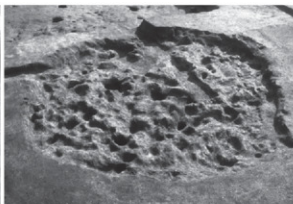
3 竪穴建物跡 10 完掘状況



4 竪穴状遺構 1 遺物出土状況



5 竪穴状遺構 1 完掘状況



6 竪穴状遺構 2 完掘状況



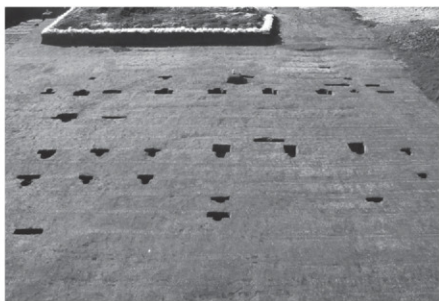
7 土坑 3 内壺 (190) 出土状況



8 土坑 3 完掘状況



1 遺跡北部
桜島3テフラ検出状況



2 掘立柱建物跡1
柱穴完掘状況

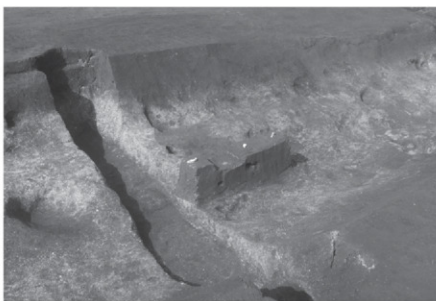


3 畦状遺構1
北端部掘削状況

1 道路状遺構1・
畦状遺構2掘削状況

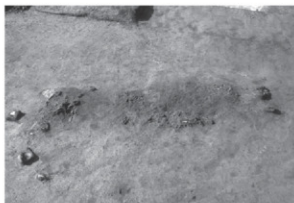


2 道路状遺構1内
白磁(491)出土状況



3 道路状遺構1底面
「波状凹凸面」
完掘状況

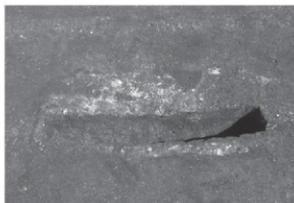




1 炭集中土坑検出状況



2 炭集中土坑断面



3 掘立柱建物跡1炉跡断面



4 掘立柱建物跡1柱穴断面



5 畦状遺構1調査風景



6 溝状遺構5完掘状況



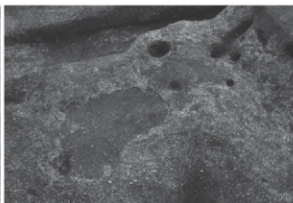
1 小溝列完掘状況



2 道路状遺構1北西部の土橋状部掘削状況



3 道路状遺構1硬化面検出状況



4 「波板状凹凸面」検出状況



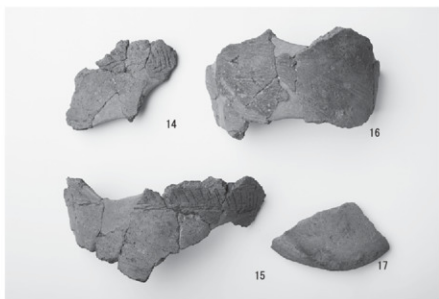
5 道路状遺構1検出状況



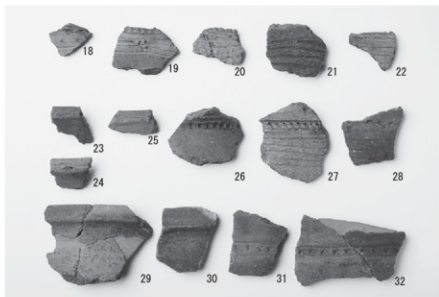
6 道路状遺構1完掘状況



1 縄文土器 1



2 縄文土器 2

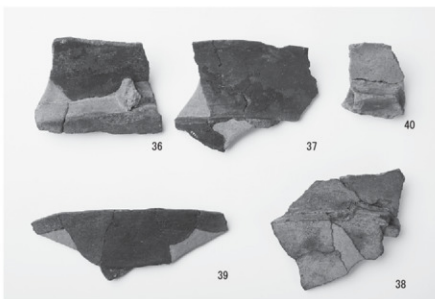


3 縄文土器 3

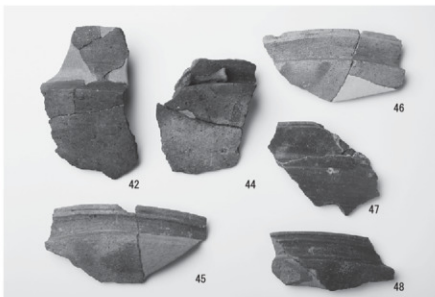
1 縄文土器 4



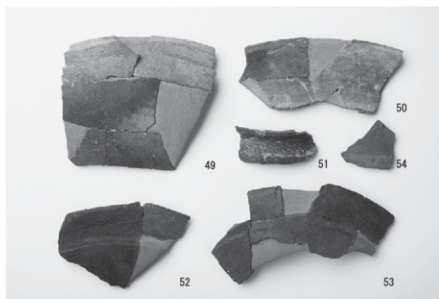
2 縄文土器 5



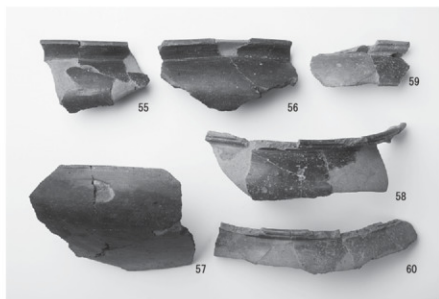
3 縄文土器 6



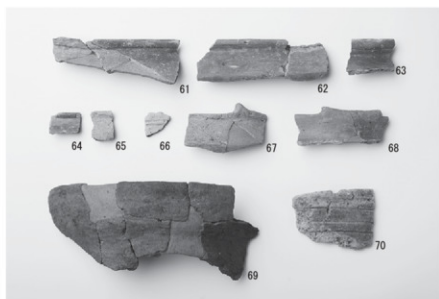
1 縄文土器 7



2 縄文土器 8



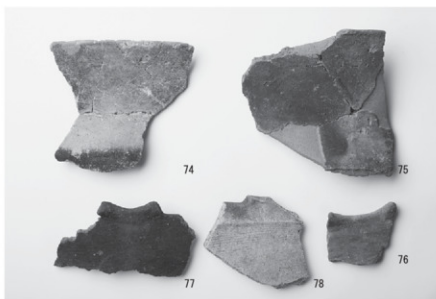
3 縄文土器 9



1 縄文土器 10

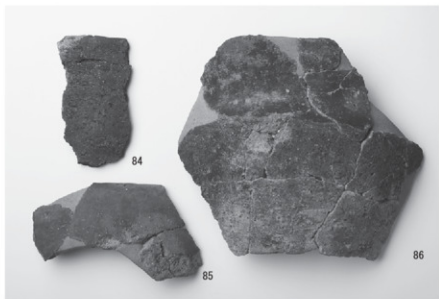


2 縄文土器 11



3 縄文土器 12

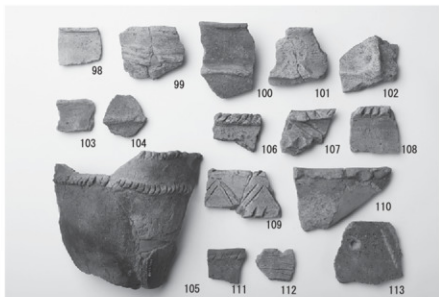




1 縄文土器 13



2 縄文土器 14



3 縄文土器 15

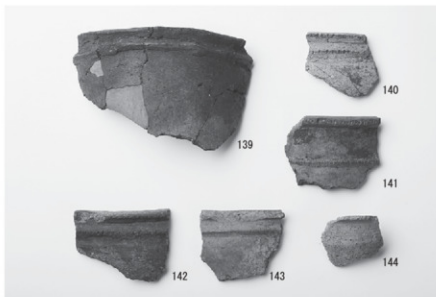
1 弥生土器 1

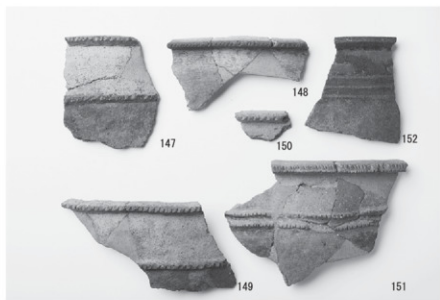


2 弥生土器 2



3 弥生土器 3





1 弥生土器 4

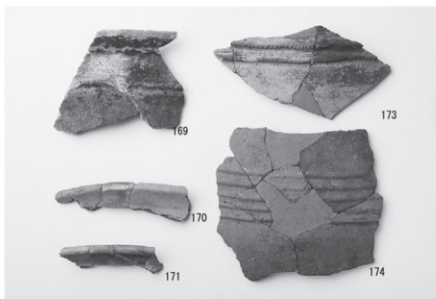


2 弥生土器 5



3 弥生土器 6

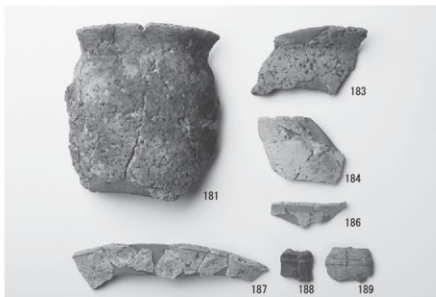
1 弥生土器 7



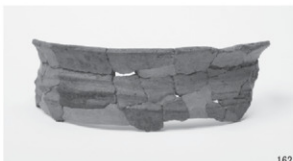
2 弥生土器 8



3 弥生土器 9







162



164



165



168



182



185



179

190







273



295



273



306



281



311



324





363



367



364



369



365



371



366



372



375



368



410



379



412



384



413



385



415



387



418



417



424



419



425



420



426



421



427



423



428



429



434



430



435



431



437



432



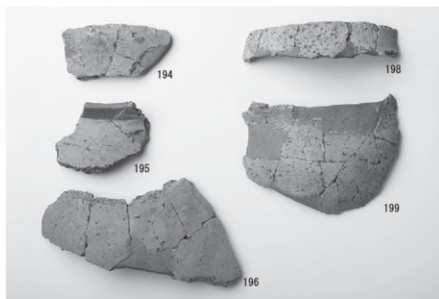
438



433



440



1 土師器 10



2 土師器 11

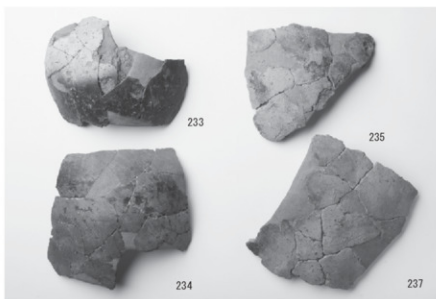


3 土師器 12

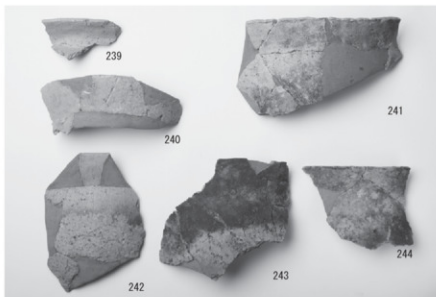
1 土師器13



2 土師器14



3 土師器15



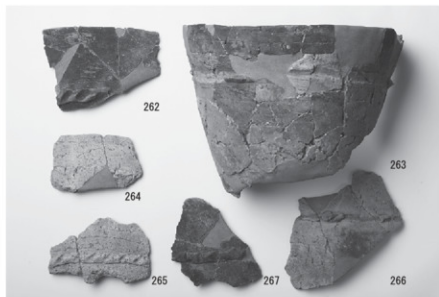
1 土師器 16



2 土師器 17



3 土師器 18



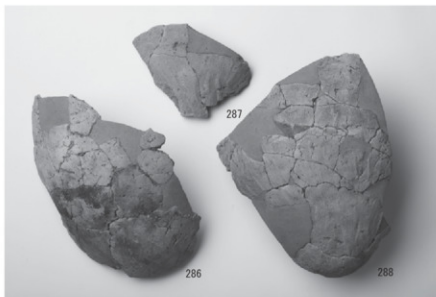
1 土師器19



2 土師器20

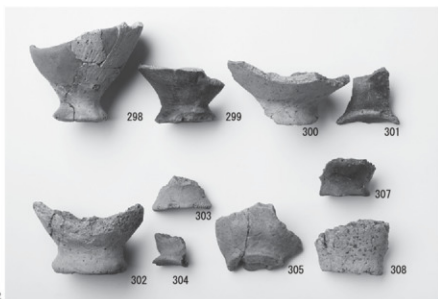


3 土師器21

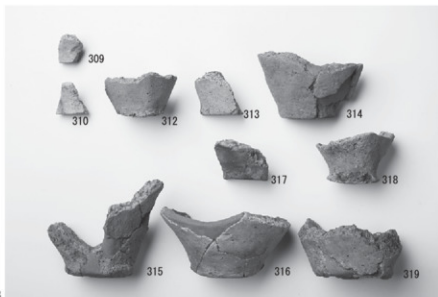




1 弥生土器・土師器底部 1



2 弥生土器・土師器底部 2



3 弥生土器・土師器底部 3

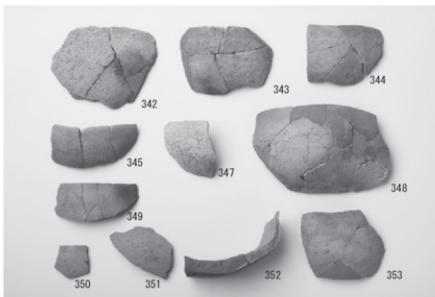
1 弥生土器・土師器底部 4



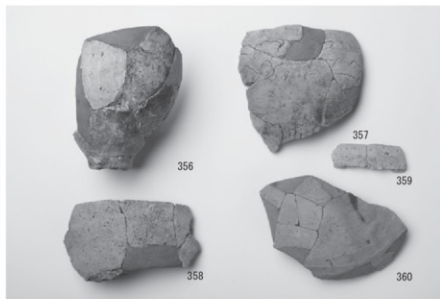
2 弥生土器・土師器底部 5



3 土師器22



1 土師器23



2 土師器24



3 土師器25



1 土師器26

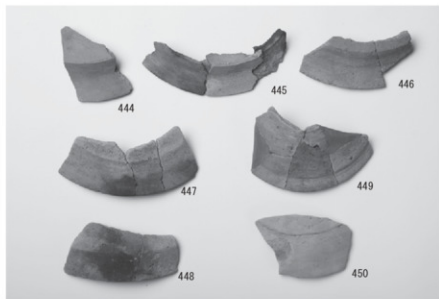


2 土師器27

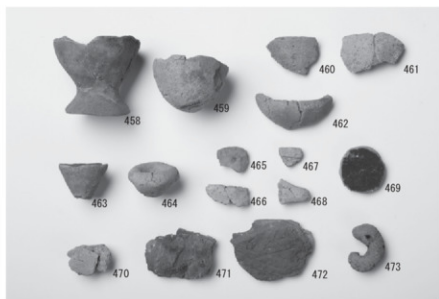


3 土師器28





1 土師器29

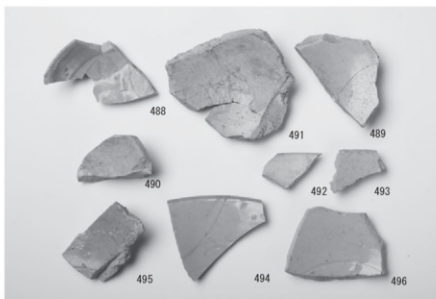


2 土器ミニチュア品
・土製品



3 土師質土器 (底部外面)

1 白磁 1 (内面)

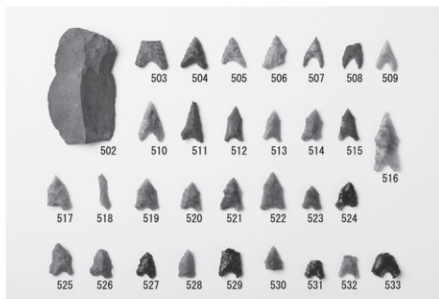


2 白磁 2 (外面)



3 青磁・青花





1 石器 1



2 石器 2



3 石器 3

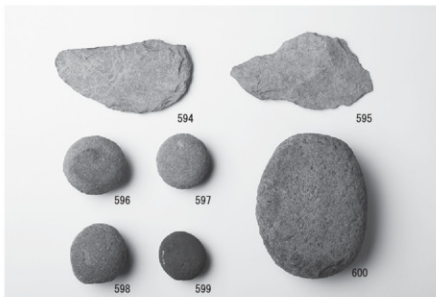
1 石器4

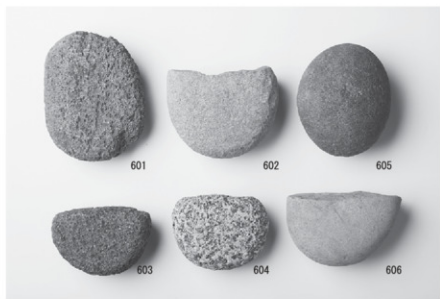


2 石器5



3 石器6





1 石器 7

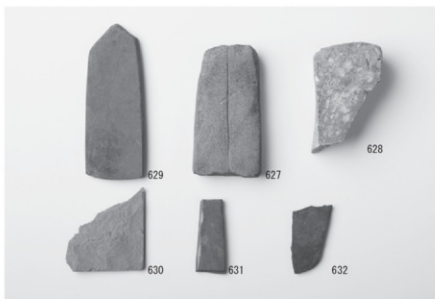


2 石器 8



3 石器 9

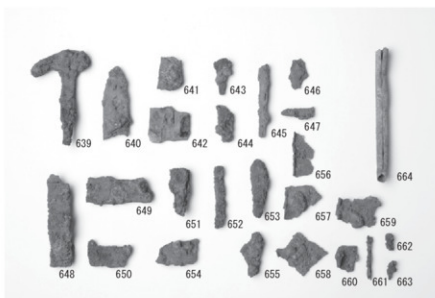
1 石器10



2 石製品



3 鉄器・青銅器





611



614



612



615



613



616



619



617



620



618



624



620



623



625

報告書抄録

ふりがな	おおとしいせき							
書名	大年遺跡							
副書名	県道飯野松山郡城線(郡城志布志道路)梅北工区道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第237集							
編著者名	加藤 徹							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地							
発行年月日	2016年 3月 18日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおとしいせき 大年遺跡	宮崎県都市 梅北町 4019番地	452025	7031	31度 40分 29秒 付近	131度 03分 09秒 付近	第1次調査 2012. 9. 12～ 2012. 3. 22 第2次調査 2013. 5. 7～ 2014. 1. 29	約7,400㎡	県道飯野松山 郡城線(郡城 志布志道路) 道路整備工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大年遺跡	集落・ 散布地	旧石器時代 縄文時代 早期 後期・晩期 弥生時代～ 古墳時代 (古代～) 中世	土坑 竪穴建物跡 竪穴状遺構 土坑	2基 10軒 2基 2基	割片 縄文土器・石器 弥生土器・土師器・ 石器・石製品・鉄器 陶磁器・鉄器・石製品	桜島薩摩火山灰から 30cm下で旧石器時代の 割片が出土した。 弥生時代～古墳時代 の、間仕切建物跡を 含む建物跡を10軒検出 した。 古代に遡る可能性の ある道路状遺構を検出 した。		
要約	<p>大年遺跡は、旧石器時代以降の各時代の遺物が出土しており、人々が断続的にこの場所で生活を営んでいたことが明らかとなった。その中で、旧石器時代の割片は、約12,800年前に噴火した桜島薩摩火山灰の下約30cmから出土しており、郡城地域の中でも古手の石器と考えられる。縄文時代後期～晩期の土器も一定量出しているが、建物跡は検出していない。遺跡の中心となる時期の一つである弥生時代～古墳時代においては、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代前期後半～中期前半、古墳時代後期前半頃と、断続的に営まれた10軒の竪穴建物跡が見つかった。遺跡が形成されたもう一つの中心的時期である中世では、道路状遺構や溝状遺構、そして畦状遺構など多くの遺構が見つかった。これらの遺構から、当時の土地利用について知ることができた。また、道路状遺構は、ほぼ同じ位置で近・現代まで使用されている。さらに、古代まで遡る可能性があり、1000年以上にわたって道路として、遺跡の場所が利用されていた可能性があることが明らかとなった。</p>							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 237 集

大年遺跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）道路整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

2016 年 3 月

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
TEL. 0985 (36) 1172 FAX. 0985 (72) 0660

印 刷 株式会社 宮崎南印刷
〒880-0911 宮崎市大字田吉 350-1
TEL. 0985 (51) 2745 FAX. 0985 (52) 2682

Miyakonojo City

OTOSHI Site

The Excavational Investigation Report of Miyazaki Prefectural Archaeological Center
vol.237

2016

Miyazaki Prefectural Archaeological Center